

# 千葉東南部ニュータウン28

—千葉市今台遺跡—

平成16年3月

都 市 基 盤 整 備 公 団  
財団法人 千葉県文化財センター

# 千葉東南部ニュータウン28

—千葉市今台遺跡—



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第466集として、都市基盤整備公団の千葉東南部地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市今台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器が出土したほか、古墳時代から平安時代にかけての集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

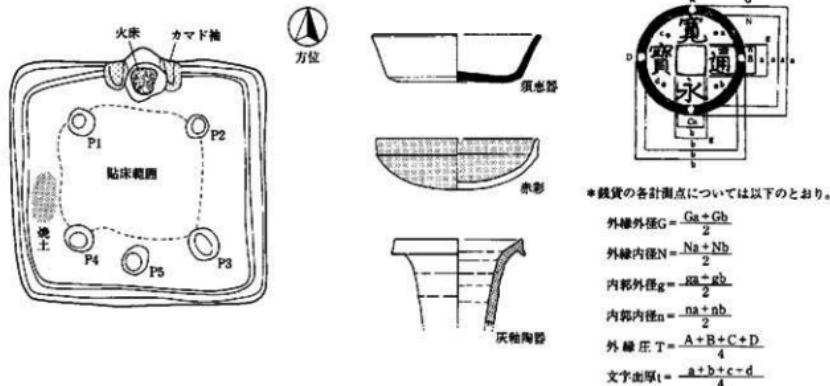
平成16年3月

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水新次

## 凡　例

- 1 本書は、都市基盤整備公団千葉地域支社による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉市緑区おゆみ野南3丁目24番地他（旧千葉市緑区椎名崎町686他）に所在する今台遺跡（遺跡コード 201-043, 201-118）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、都市基盤整備公団千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の編集は、第2章を島立・桂、第4章第7節を西野雅人、それ以外を関口達彦が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、都市基盤整備公団千葉地域支社、千葉市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した周辺航空写真は、京葉測量株式会社が昭和47年に撮影したものを使用した。
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。座標系は、日本測地系を使用した。
- 9 本書の遺構及び遺物の縮尺は、以下を基準とするが、作図の都合で統一されなかったものもある。

旧石器時代ブロック・竪穴住居跡・掘立柱建物跡	1/80						
陥穴・炉穴・土坑	1/60	小鍛冶遺構	1/40・1/20	溝状遺構	1/200		
土器・支脚	1/4	石器・石製品	2/3・1/3	拓影	1/3	金属製品・玉類	1/2
- 10 本書の挿図の用例は、次のとおりである。住居跡の基本的な柱穴等の符号は以下のとおりであるが、これ以外の配列については挿図中に示した。



## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	2
第3節 調査の方法と経過 .....	5
第2章 旧石器時代 .....	10
第1節 調査の概要 .....	10
第2節 基本土層 .....	10
第3節 石器群の分布と出土遺物 .....	12
第3章 縄文時代 .....	30
第1節 陥穴 .....	30
第2節 炉穴 .....	32
第3節 遺構外出土遺物 .....	32
第4章 古墳時代以降 .....	39
第1節 壴穴住居跡 .....	39
第2節 掘立柱建物跡 .....	111
第3節 土坑 .....	116
第4節 溝状造構 .....	121
第5節 塚 .....	127
第6節 遺構外出土遺物 .....	127
第7節 遺構内貝層の分析結果 .....	129
第5章 まとめ .....	130
報告書抄録 .....	

## 挿図目次

第1図 千葉東南部地区事業範囲位置図 .....	3
第2図 千葉東南部地区遺跡分布図 .....	4
第3図 調査区及び周辺地形図 .....	6
第4図 遺跡全体図 .....	8
第5図 遺構配置図 .....	9
第6図 旧石器時代調査概要図 .....	11
第7図 基本土層図 .....	12
第8図 第1ブロック石器別分布図 · 出土遺物実測図 .....	13
第9図 第2ブロック石器別分布図 .....	15
第10図 第1・2ブロック母岩別分布図 .....	16
第11図 第1・2ブロック垂直分布図 .....	17
第12図 第2ブロック出土遺物実測図(1) .....	20
第13図 第2ブロック出土遺物実測図(2) .....	21
第14図 第2ブロック出土遺物実測図(3) .....	22
第15図 第2ブロック出土遺物実測図(4) .....	23
第16図 第3ブロック石器別分布図 · 出土遺物実測図 .....	28
第17図 第4ブロック石器別分布図 · 出土遺物実測図 .....	28
第18図 陥穴 .....	31
第19図 炉穴及び出土遺物 .....	33

第20図	遺構外出土縄文土器(1) .....	34	第57図	044号住居跡及び出土遺物 .....	78
第21図	遺構外出土縄文土器(2) .....	36	第58図	047号住居跡及び出土遺物 .....	79
第22図	遺構外出土縄文石器 .....	37	第59図	048号住居跡及び出土遺物 .....	81
第23図	玦状耳飾 .....	38	第60図	049号住居跡 .....	82
第24図	008・009号住居跡及び出土遺物 .....	40	第61図	049号住居跡出土遺物 .....	83
第25図	021・030号住居跡及び出土遺物 .....	41	第62図	051号住居跡及び出土遺物 .....	84
第26図	032・035号住居跡及び出土遺物 .....	43	第63図	055号住居跡及び出土遺物 .....	85
第27図	036号住居跡及び出土遺物 .....	44	第64図	057号住居跡及び出土遺物 .....	87
第28図	041号住居跡及び出土遺物 .....	45	第65図	060号住居跡及び出土遺物 .....	88
第29図	043号住居跡及び出土遺物 .....	46	第66図	062号住居跡及び出土遺物 .....	89
第30図	045号住居跡 .....	47	第67図	064号住居跡及び出土遺物 .....	90
第31図	045号住居跡出土遺物 .....	48	第68図	064号住居跡出土梳形溝 .....	91
第32図	046号住居跡及び出土遺物(1) .....	49	第69図	066号住居跡及び出土遺物 .....	92
第33図	046号住居跡出土遺物(2) .....	50	第70図	068号住居跡及び出土遺物 .....	94
第34図	054号住居跡及び出土遺物 .....	51	第71図	069・070号住居跡及び出土遺物 .....	95
第35図	058号住居跡及び出土遺物(1) .....	52	第72図	072号住居跡及び出土遺物 .....	96
第36図	058号住居跡出土遺物(2) .....	53	第73図	073号住居跡及び出土遺物(1) .....	98
第37図	059号住居跡及び出土遺物(1) .....	55	第74図	073号住居跡出土遺物(2) .....	99
第38図	059号住居跡出土遺物(2) .....	56	第75図	110・111・112・119号住居跡及び 出土遺物 .....	100
第39図	101号住居跡及び出土遺物 .....	57	第76図	117・118・125号住居跡及び 出土遺物 .....	102
第40図	115・116号住居跡及び出土遺物 .....	58	第77図	122・123号住居跡及び122号 出土遺物 .....	104
第41図	002・007号住居跡及び出土遺物 .....	59	第78図	123号住居跡出土遺物 .....	105
第42図	010号住居跡及び出土遺物 .....	60	第79図	128・129・131号住居跡及び 出土遺物 .....	106
第43図	016号住居跡 .....	61	第80図	住居跡出土金屬製品(1) .....	108
第44図	017号住居跡及び出土遺物 .....	62	第81図	住居跡出土金屬製品(2) .....	109
第45図	019号住居跡及び出土遺物 .....	63	第82図	H-01・02 .....	112
第46図	020・022号住居跡及び出土遺物 .....	64	第83図	H-03・04 .....	113
第47図	023号住居跡及び出土遺物 .....	65	第84図	H-09・10 .....	114
第48図	024号住居跡及び出土遺物 .....	67	第85図	H-13及び掘立柱建物跡出土遺物 .....	115
第49図	025号住居跡及び出土遺物 .....	68	第86図	土坑(1) .....	117
第50図	026号住居跡及び出土遺物 .....	70	第87図	土坑(2) .....	118
第51図	027号住居跡及び出土遺物 .....	71	第88図	土坑(3)及び出土遺物 .....	119
第52図	028号住居跡及び出土遺物 .....	72	第89図	001・003・011・012・109号溝 .....	122
第53図	031・034号住居跡及び出土遺物 .....	73			
第54図	037・038号住居跡及び出土遺物 .....	74			
第55図	039・040号住居跡及び出土遺物 .....	75			
第56図	042号住居跡及び出土遺物 .....	77			

第90図	004号溝	123
第91図	005・006号溝	124
第92図	溝出土遺物	125
第93図	塚全体図	126
第94図	遺構外出土遺物	128
第95図	貝種組成	129
第96図	貝類計測値分布	129
第97図	時期別分布図(6世紀から7世紀代)	130
第98図	時期別分布図(8世紀代, 9世紀代)	132
第99図	墨書・線刻土器	134

## 表 目 次

第1表	第1ブロック出土遺物属性表	13
第2表	第1ブロック出土遺物組成表	13
第3表	第2ブロック出土遺物属性表(1)~(4)	24
第4表	第2ブロック出土遺物組成表	27
第5表	第3ブロック出土遺物属性表	28
第6表	第4ブロック出土遺物属性表	29
第7表	陥穴一覧	30
第8表	石器計測表	38
第9表	玉類計測表	54
第10表	楕円形鍛冶津計測表	91
第11表	瓦軒用品計測表	93
第12表	刀子計測表	110
第13表	鉄鎌計測表	110
第14表	紡錘車計測表	110
第15表	掘立柱建物跡一覧	116
第16表	土坑一覧	120
第17表	錢貨計測表	125
第18表	砥石計測表	127
第19表	貝種組成	129
第20表	貝類計測値分布	129
第21表	墨書・線刻土器一覧	133
第22表	古墳時代陥穴住居跡一覧	135
第23表	奈良・平安時代陥穴住居跡一覧	136
第24表	土器観察表(1)~(20)	137

## 図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真	
図版2	遺跡全景・平成9年度(南から)	
	遺跡全景・平成9年度(北東から)	
図版3	遺跡北側・平成9年度(北から)	
	遺跡中央・平成9年度(北から)	
図版4	遺跡近景	
図版5	旧石器時代基本土層	
	第1~第3ブロック遺物出土状況(1)	
	第1~第3ブロック遺物出土状況(2)	
図版6	第1~第3ブロック遺物出土状況(3)	
	第4ブロック遺物出土状況(1)	
	第4ブロック遺物出土状況(2)	
図版7	029号・103号・104号・105号・106号・107号・108号・120号陥穴	
図版8	127号・133号・135号・136号・137号陥穴・063号・065号炉穴	
図版9	008号・009号・021号・030号・032号住居跡	
図版10	035号・036号・041号・043号・045号住居跡	
図版11	045号・046号住居跡	
図版12	054号・058号・059号住居跡	
図版13	101号・115号・116号・002号・007号住居跡	
図版14	010号・016号・017号・019号・020号・022号住居跡	
図版15	022号・023号・024号住居跡	
図版16	025号・026号・027号住居跡	

- 図版17 028号・031号・034号・037号住居跡
- 図版18 037号・038号・039号住居跡
- 図版19 040号・042号・044号住居跡
- 図版20 044号・047号・048号・049号住居跡
- 図版21 049号・051号・055号・057号・060号・062号住居跡
- 図版22 064号住居跡
- 図版23 064号・066号・068号住居跡
- 図版24 068号・069号・070号・072号住居跡
- 図版25 073号・110号・111号・112号住居跡
- 図版26 112号・117号・118号・119号・122号・123号住居跡
- 図版27 122号・123号・125号・128号・129号・131号住居跡
- 図版28 H-01・H-02・H-03・H-04・H-09・H-10・H-13, 013号・014号土坑
- 図版29 015号・018号・033号・052号・053号・056号・061号・067号土坑
- 図版30 071号・074号土坑, 001号・003号・004号・005号・006号・011号溝
- 図版31 塚（調査前）,（調査後）
- 図版32 第2ブロック出土石器(1)
- 図版33 第2ブロック出土石器(2)
- 図版34 第2ブロック出土石器(3)
- 第1・第3・第4ブロック出土石器
- 図版35 繩文土器(1)
- 図版36 繩文土器(2), 石器, 瓣状耳飾
- 図版37 古墳時代出土土器(1)
- 図版38 古墳時代出土土器(2)
- 図版39 古墳時代出土土器(3)
- 図版40 古墳時代出土土器(4)
- 図版41 奈良・平安時代出土土器(1)
- 図版42 奈良・平安時代出土土器(2)
- 図版43 奈良・平安時代出土土器(3)
- 図版44 奈良・平安時代出土土器(4)
- 図版45 奈良・平安時代出土土器(5)
- 図版46 奈良・平安時代出土土器(6)
- 図版47 奈良・平安時代出土土器(7)
- 図版48 奈良・平安時代出土土器(8)
- 図版49 据立柱建物跡・土坑・溝・遺構外出出土土器
- 図版50 金属製品(1)
- 図版51 金属製品(2)
- 図版52 瓦, 塚, 瓦軒用品
- 図版53 玉類, 羽口, 砥石, 錢貨

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

住宅・都市整備公団(現 都市基盤整備公団)は、首都圏の人口増加に対応するため、千葉東南部地区土地区画整理事業として大規模な宅地造成を計画した。このため、千葉県教育委員会では昭和46年に実施した事業地内の遺跡分布調査の結果に基づき、所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議を重ねてきた。その結果、可能な限り公園や緑地として現状保存をはかる一方、やむを得ず現状保存が困難な遺跡については記録保存の措置を講ずることとなり、財團法人千葉県文化財センターが住宅・都市整備公団から委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

今回報告する今台遺跡は、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、22,200m<sup>2</sup>を対象に当文化財センターが平成3・8・9年度の3次にわたって発掘調査を実施した遺跡である。調査の結果、旧石器時代の石器集中地点2か所、縄文時代の陥穴13基・炉穴2基、古墳時代後期の竪穴住居跡17軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡49軒・掘立柱建物跡7棟・小鍛冶遺構1基、溝状遺構8条、塚1基などの遺構を検出した。なかでも、台地全体に展開する古墳時代後期から平安時代の集落の様相を明らかにすることができたことは、大きな成果といえよう。

平成10年度からは本格的な整理作業が開始され、平成15年度をもって報告書刊行の運びとなった。発掘調査及び整理作業の各年度の実施期間、組織及び作業内容は下記のとおりである。

### 発掘調査

#### 平成3年度

期 間	平成3年4月1日から平成4年3月6日
組 織	班長 三浦和信
	担当職員 班長代理 雨宮龍太郎 技師 四柳 隆
内 容	確認調査 上層1,740m <sup>2</sup> 下層640m <sup>2</sup> 本調査 上層11,850m <sup>2</sup> 下層0m <sup>2</sup>

#### 平成8年度

期 間	平成9年2月3日から平成9年3月26日
組 織	中央調査事務所長 藤崎芳樹
	担当職員 主任技師 福田 誠
内 容	確認調査 上層 - m <sup>2</sup> 下層16m <sup>2</sup> 本調査 上層500m <sup>2</sup> 下層0m <sup>2</sup>

#### 平成9年度

期 間	平成9年4月3日から平成9年5月30日
組 織	中央調査事務所長 藤崎芳樹
	担当職員 技師 吉野健一
内 容	確認調査 上層 - m <sup>2</sup> 下層156m <sup>2</sup> 本調査 上層3,350m <sup>2</sup> 下層170m <sup>2</sup>

### 整理作業

#### 平成10年度

期 間	平成11年1月4日から平成11年2月25日
組 織	中央調査事務所長 石田廣美

担当職員 研究員 鈴木良征

内 容 分類選別、復元の一部

(重点遺跡整理促進事業)

期 間 平成11年2月1日から平成11年3月31日

組 織 整理課長 佐久間豊

担当職員 主任技師 渡邊修一 整理技術員 木島桂子

内 容 実測・トレース・写真撮影の一部

平成11年度

(重点遺跡整理促進事業)

期 間 平成11年5月1日から平成11年5月15日

組 織 整理課長 古内 茂

担当職員 研究員 渡邊修一 整理技術員 木島桂子

内 容 実測・トレースの一部

平成12年度

期 間 平成12年10月1日～平成12年11月30日

組 織 中央調査事務所長 三浦和信

担当職員 研究員 黒沢 崇

内 容 挿図の一部

平成15年度

期 間 平成15年6月1日から平成15年9月30日

組 織 中央調査事務所長 谷 旬

担当職員 上席研究員 関口達彦

内 容 挿図・図版作成の一部から報告書刊行

(重点遺跡整理促進事業)

期 間 平成15年5月1日から平成15年5月31日

組 織 整理課長 深澤克友

担当職員 上席研究員 渡邊修一 整理技術員 大久保奈奈

内 容 実測・トレースの一部

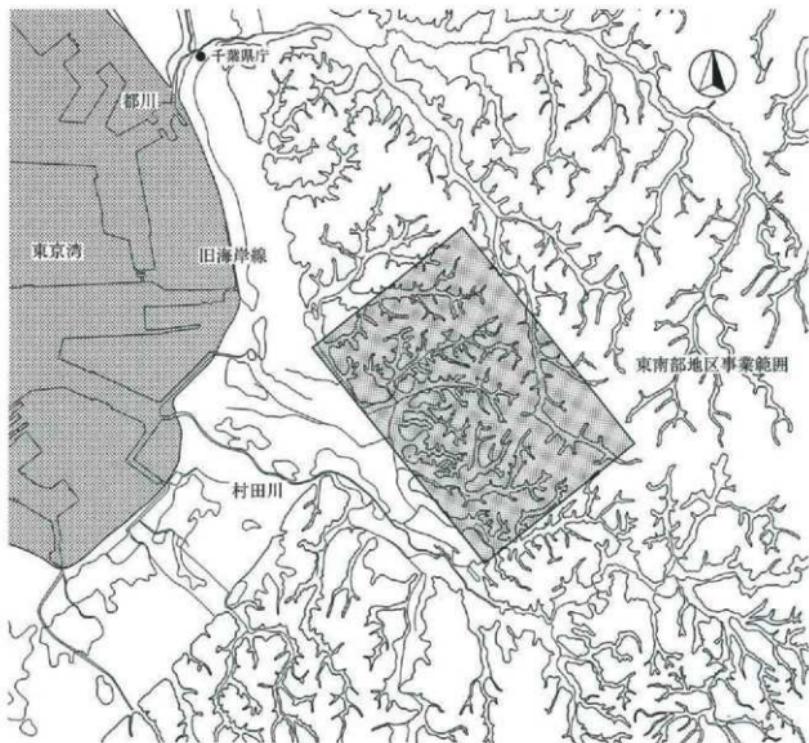
## 第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

### 1 遺跡の位置（第1図）

今台遺跡は、千葉市緑区おゆみ野南3丁目24番地他に所在する。

緑区は千葉市の東南部に位置し、南は村田川を境として市原市と接し、JR外房線や千葉東金道路、千葉外房有料道路などが通っている。本遺跡の所在する千葉東南部地区は、JR外房線鎌取駅の南側に広がり、現在も「おゆみ野」として新しい街づくりが展開している地域である。

千葉市は千葉県の北東部に位置し、東京湾を西に臨み、内陸には房総半島の北部一帯を占める広大な下総台地が展開している。この台地は無数の小支谷によって開析され、東京湾岸には海岸平野、三角州など



第1図 千葉東南部地区事業範囲位置図(1/80,000)

の沖積低地が形成されている。千葉東南部地区は、千葉市と市原市の境を流れ東京湾に流入する村田川の下流域右岸に位置し、台地はこの村田川に注ぎ込む支谷によって樹枝状に複雑に開析されている。

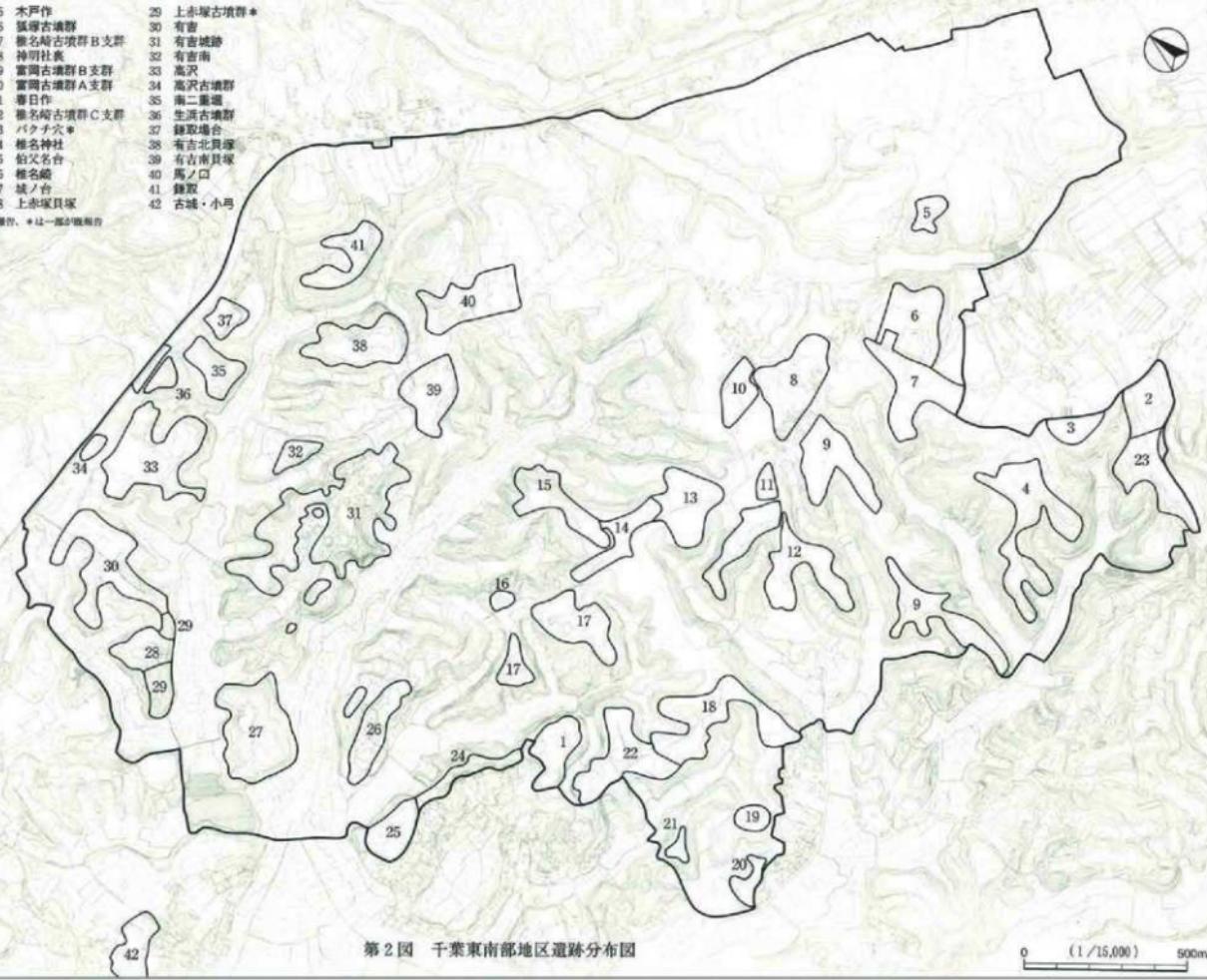
今台遺跡は、このような支谷の一つである通称泉谷支谷から分岐した小支谷に南面する台地上に位置している。台地は東西150m、南北120mの広さをもち、南西部が舌状に張り出した形状である。台地上の標高は32m~34m、谷部との高低差は約15mである。遺跡の西側の細尾根には、古墳時代前期と奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した椎名神社南遺跡が連なっている。さらに、谷津を挟んだ南側の台地上には後期の円墳を中心とした大規模な椎名崎古墳群C支群が展開している。

## 2 周辺の遺跡（第2図）

千葉東南部地区内の遺跡の多くは、旧石器時代から中・近世までの遺構・遺物を複合的に伴っており、特定の時期に限られた単純遺跡はきわめて少ない。なかでも、縄文時代の大型貝塚や古墳時代後期の集落跡や古墳群、奈良・平安時代の集落跡などが密集しているのが特徴的である。

- 1 今台  
 2 大崩野南貝塚  
 3 大崩野北  
 4 太田社跡  
 5 白島台  
 6 六通神社南  
 7 六通山  
 8 六通貝塚  
 9 ムコアラク\*  
 10 六通  
 11 小金沢古墳群\*  
 12 鶴巣台  
 13 小金沢貝塚  
 14 推名崎古墳群A支群  
 15 木戸作  
 16 狐塚古墳群  
 17 推名崎古墳群B支群  
 18 神明社裏  
 19 富岡古墳群B支群  
 20 富岡古墳群A支群  
 21 春日作  
 22 推名崎古墳群C支群  
 23 バクチ穴\*  
 24 椎名神社  
 25 伯父名台  
 26 椎名台  
 27 城ノ台  
 28 上赤塚貝塚  
 29 上赤塚古墳群\*  
 30 有吉  
 31 有吉城跡  
 32 有吉南  
 33 高沢  
 34 高沢古墳群  
 35 南二重堤  
 36 生涯古墳群  
 37 錦町場合  
 38 有吉北貝塚  
 39 有吉南貝塚  
 40 馬ノ口  
 41 錦双  
 42 古崎・小馬

土字は底盤作、\*は一部が底盤作



第2図 千葉東南部地区遺跡分布図

0 (1/15,000) 500m

旧石器時代の遺物は、地区内で調査されたほとんどの遺跡から出土している。規模が比較的大きなものとしては、有吉城跡、太田法師遺跡、椎名崎古墳群B支群、神明社裏遺跡などがあげられる。なかでも神明社裏遺跡からは、ナイフ形石器・搔器・石核・尖頭器・剥片などが多量に出土している。

縄文時代には中期から晩期の大型貝塚の他にも、各時期にわたって各種の遺構や遺物が数多く検出されている。早期の炉穴は御塚台遺跡など、多数の遺跡から検出されている。前期では地区内の北西に位置する南二重堀遺跡、鎌取遺跡、有吉城跡で竪穴住居跡が若干検出されている。中期にはほとんどの遺跡に遺物の散布がみられ、特に上赤塚貝塚、有吉北貝塚、有吉南貝塚など大規模な貝塚が集中しており、多数の竪穴住居跡や土坑群を伴う大集落が形成されている。後期には木戸作貝塚、小金沢貝塚、六通貝塚等、引き続き大規模貝塚が形成されているが、中期ほどの厖大な遺構を伴う大集落は形成されなくなる。晩期には遺跡数は激減するが、六通貝塚などで良好な遺物包含層等が検出されている。また、高沢遺跡では遺構は確認されなかったが、晩期終末の荒海式土器がまとまって検出されており注目される。

弥生時代には地区内の遺跡が極端に少なくなる。有吉遺跡やバクチ穴遺跡などで遺構が検出されているにすぎず、遺物の出土も極めて少ない。草刈遺跡などの大規模集落群に、周辺地域の小集落が集約されることもその原因の一つと考えられる。また、村田川下流域の海岸平野の低地一帯に集落が展開している可能性も考慮される。

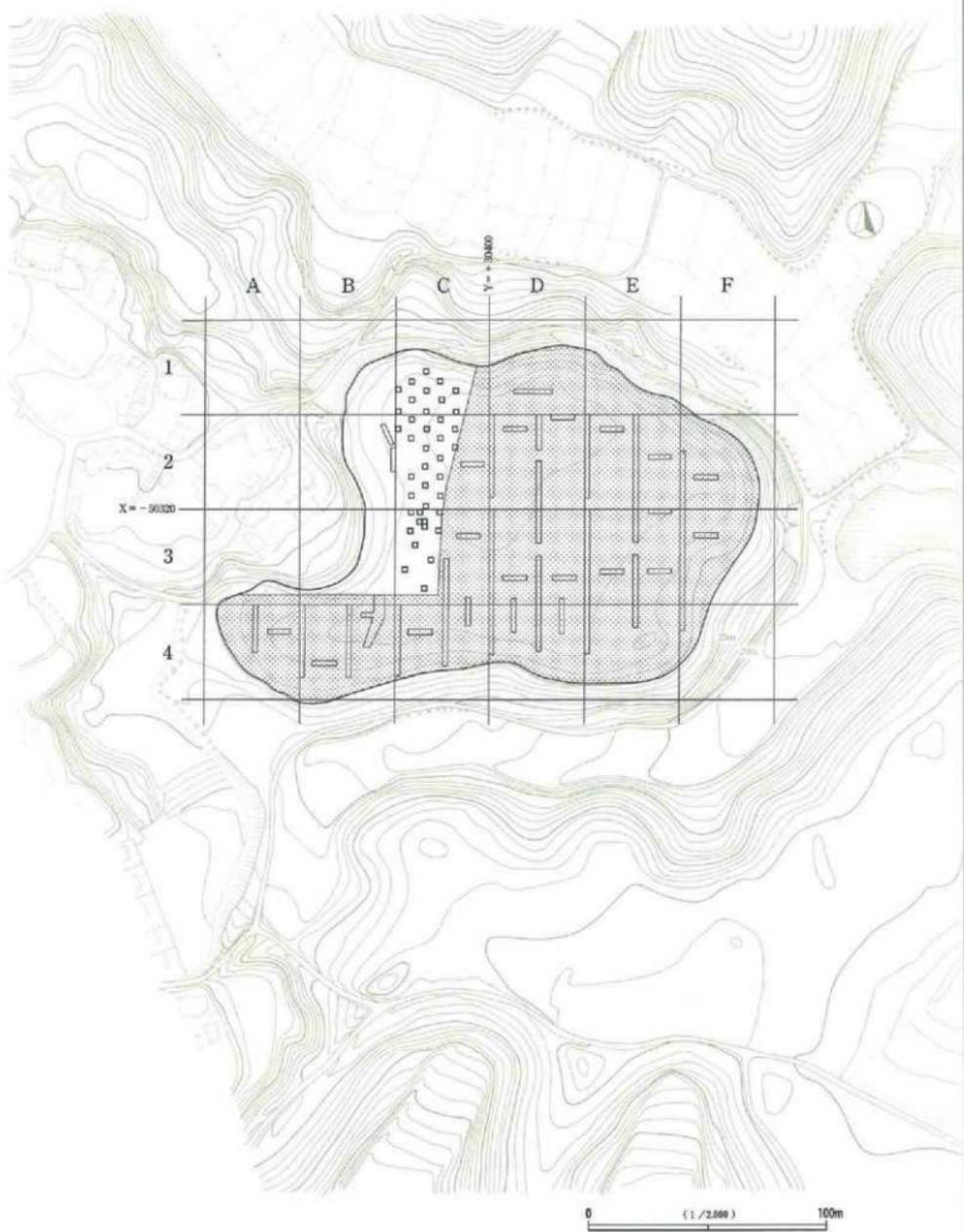
古墳時代に入ると新たな集落跡が展開する。前期から中期の遺跡は、地区北西側に集中していることが特徴的である。なかでも南二重堀遺跡、城ノ台遺跡、鎌取遺跡、馬ノ口遺跡などで竪穴住居跡が検出されている。後期では有吉遺跡、高沢遺跡、有吉北貝塚、城ノ台遺跡で多くの竪穴住居跡が検出されるなど、大規模集落が展開するようになる。古墳は地区内において約290基が確認されている。前・中期の古墳では石枕などが出土した上赤塚1号墳や、馬ノ口遺跡の方墳と椎名崎古墳群C支群の円墳などが検出されている。後期になると上赤塚古墳群及び有吉遺跡、生浜古墳群、南二重堀遺跡などでは、有吉遺跡と高沢遺跡の大集落と重複せずに、明らかな墓域として大規模古墳群が営まれる。さらに、椎名崎古墳群のように人形塚古墳をはじめとする、地区内で最も大規模な古墳群が造営されるようになる。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期から連続する大規模な集落が多い。特に地区北西部に位置する有吉遺跡、高沢遺跡、椎名崎遺跡では、古墳時代より集落の規模は大きくなる。鉄製品の保有率も高く、それぞれの遺跡に特徴的な墨書き土器なども出土している。また、大金沢支谷の太田法師遺跡では、砂鉄などの原料に恵まれた立地条件のため、鍛冶関連遺構が多数検出されている。今台遺跡の周辺では、有吉城跡、伯父名台遺跡など、小鍛冶遺構を伴う遺跡もわずかながら存在している。

中世以降では有吉城や城ノ台遺跡、有吉北貝塚、伯父名台遺跡などから、台地整形区画・土坑墓・火葬墓・地下式坑などが検出されている。周辺には小弓城などもあり、中世では軍事、交通の上で要衝の地域であったことが窺える。

### 第3節 調査の方法と経過（第3回）

発掘調査に先行して、公共座標（第IX系）を基準に調査対象範囲全域に40m×40mの方眼網を設定し、基準点測量を行った。これを大グリッドとし、北西に起点を置いて、東西のX軸は西から順にA、B、…F、南北のY軸は北から順に1、2、3、4と付した。さらに、この大グリッドを4m×4mの小グリッド100区画に分割し、北西隅を起点に00、01と順に付し南東隅を99とした。従って小グリッドの呼称は、



第3図 調査区及び周辺地形図

例えばC 2-25などとなる。

平成3年度は16,000m<sup>2</sup>を対象に、上層の確認調査を平成3年4月1日から6月14日まで行った。対象面積の約10%について、幅2mの確認トレーニングを設定し重機による表土除去を行った後、遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果、調査区中央部を中心に、古墳時代後期から平安時代の堅穴住居跡や溝状遺構、塚などが確認された。本調査は遺構の検出されなかった北側と南側の斜面を除く11,850m<sup>2</sup>を対象に引き続き実施し、平成4年3月6日に終了した。下層の確認調査は平成4年1月7日から3月6日まで行った。対象面積の4%について、調査区域全域に2m×2mのグリッドを設定し、立川ローム層下部まで人力で掘削し、石器等の有無を確認した。その結果、遺物の出土はなかった。

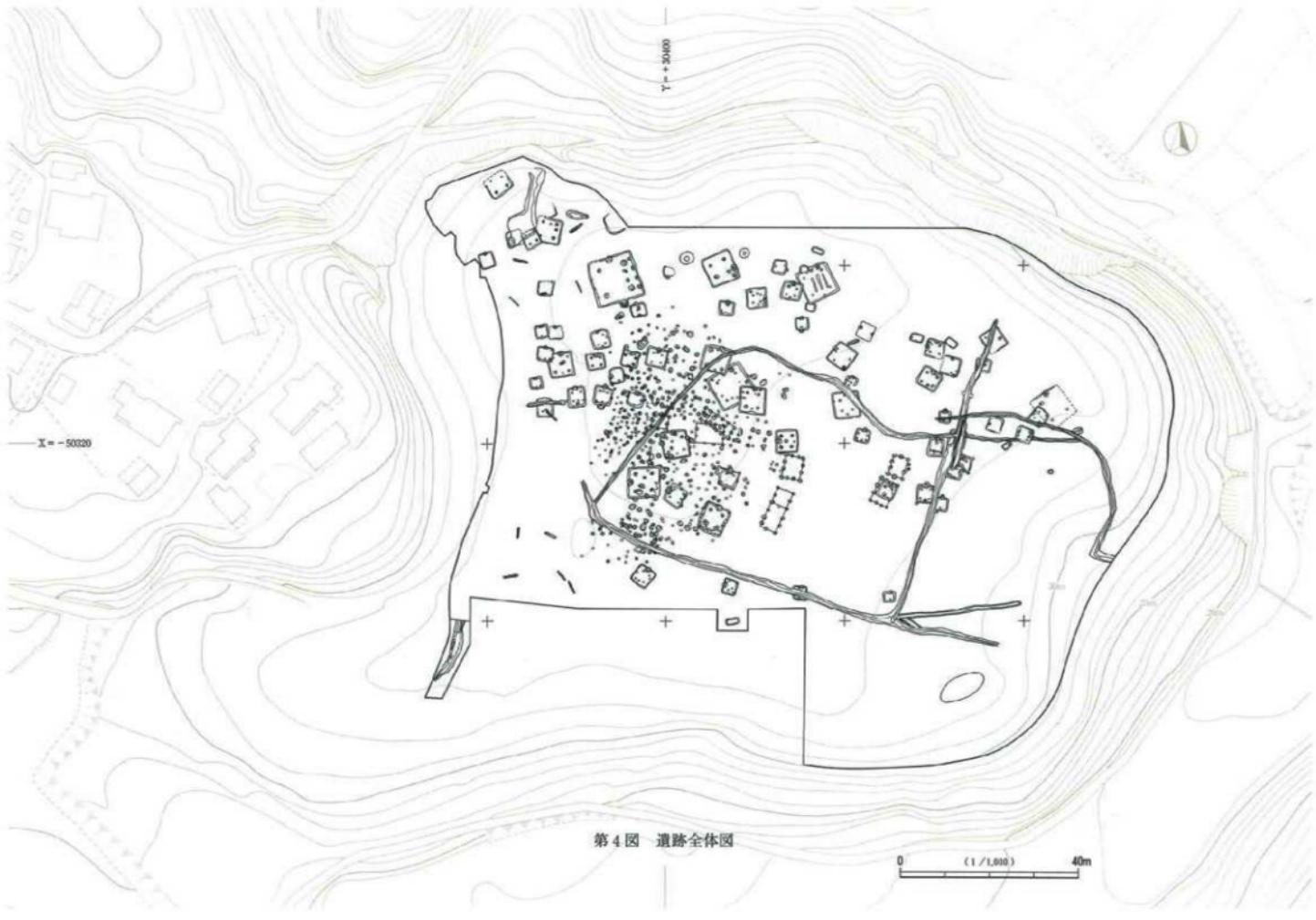
平成8年度は台地西側6,200m<sup>2</sup>のうち2,850m<sup>2</sup>を対象に、平成9年2月3日から3月26日まで発掘調査を実施した。上層については平成3年度の本調査成果から、遺構がこの範囲まで広がることが確実であったため、そのまま本調査に移行した。下層は調査区南側の500m<sup>2</sup>を対象に確認調査を行ったが、遺物は検出されなかった。なお、調査区北側については、平成9年度に確認調査から行うことになった。

平成9年度は台地西側6,200m<sup>2</sup>のうち3,350m<sup>2</sup>を対象に、平成9年4月3日から5月30日まで発掘調査を実施した。上層は斜面部1,100m<sup>2</sup>を対象に調査を行ったが、遺構は検出されなかった。下層については、斜面を除く範囲と調査区北側を対象に確認調査を行った。その結果、4か所で石器の出土が確認されたため、周辺を十分に拡張して石器の広がりを明らかにし、本調査の範囲を確定した。本調査は170m<sup>2</sup>を対象に行い、このうち1か所は大きな集中地点となり、計239点の石器が出土した。

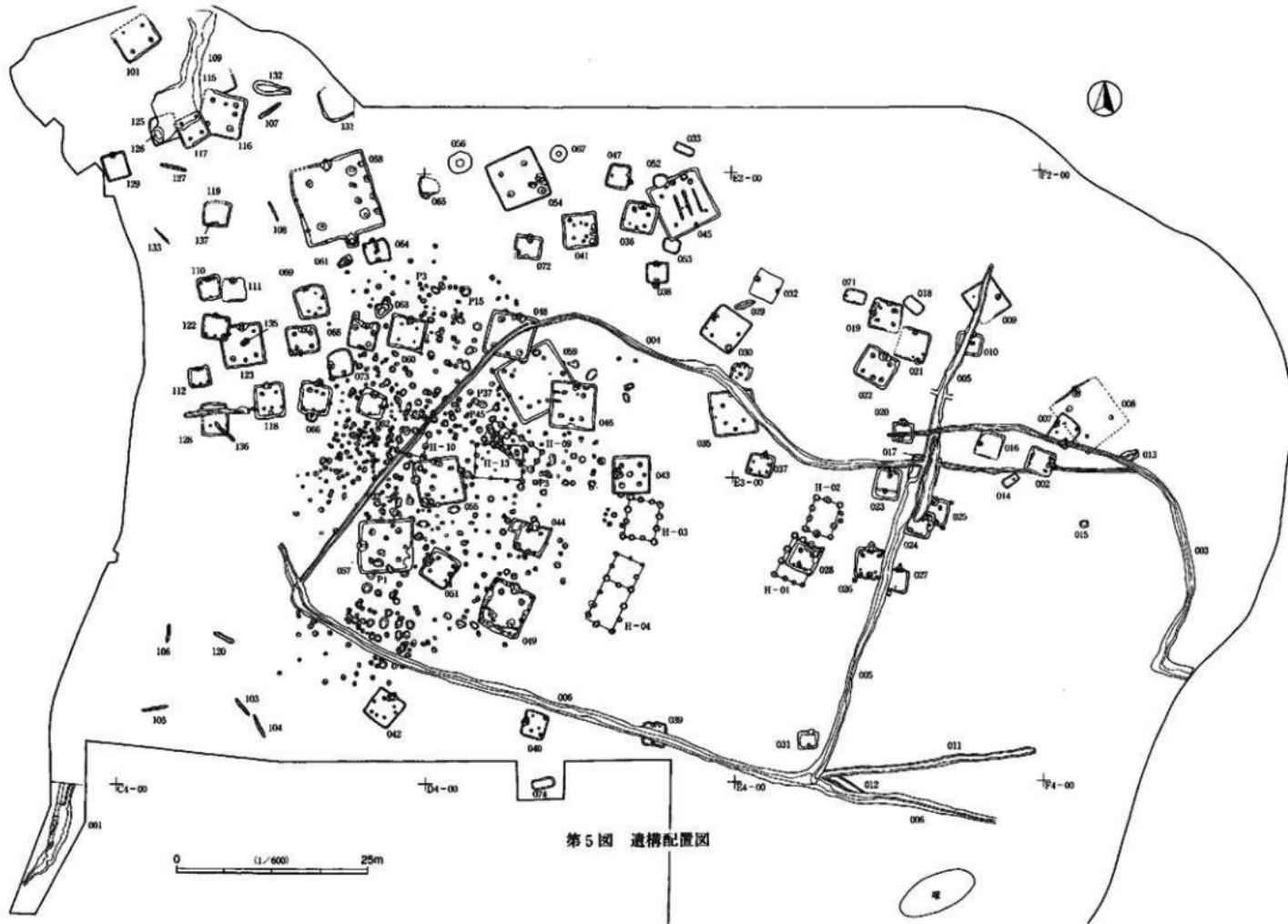
遺構番号は掘立柱建物跡を除いて、基本的に遺構の内容にかかわらず通し番号を使用しているが、整理作業の際に欠番にした遺構もある。調査時の遺構番号を極力使用することにしたが、調査年次が多年度にわたるため、平成8・9年度調査時の遺構は新たな遺構番号を付した。

## 参考文献

- (財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン1-椎名崎古墳群(第1次)」 1975  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン2-木戸作遺跡(第1次)」 1975  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン3-生吉遺跡(第1次)」 1975  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン4-生浜古墳群」 1977  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン5-有吉遺跡(第2次)」 1978  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン6-椎名崎遺跡」 1979  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン7-木戸作遺跡(第2次)」 1979  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン8-ムコアラク遺跡・小金沢古墳群」 1979  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン9-六道遺跡・御塚台遺跡」 1980  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン10-小金沢貝塚」 1982  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン11-六通金山遺跡」 1981  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン12-南二重塙1号墳・孤塙古墳群」 1982  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン13-赤塙1号墳・孤塙古墳群」 1983  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン14-バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡」 1983  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン15-馬ノ口遺跡・有吉城跡・白島台遺跡」 1984  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン16-大藪野北遺跡」 1985  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン17-高沢遺跡」 1990  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン18-錦取遺跡」 1993  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン19-千葉市有吉貝塚1-」 1998  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン20-千葉市有吉貝塚2-」 1998  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン21-千葉市有吉遺跡(第4次)・高沢古墳群」 1999  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン22-鍛冶場遺跡」 1999  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン23-千葉市太田法師遺跡2-」 2001  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン24-千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群」 2002  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン25-千葉市有吉城I-」 2002  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン26-千葉市推名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡」 2003  
(財) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン27-千葉市春日作遺跡」 2003



第4図 遺跡全体図



第5図 遺構配置図

## 第2章 旧石器時代

### 第1節 調査の概要

下層調査は平成3・8・9年度に実施した。各年度ごとの調査概要は以下のとおりである。

平成3年度は遺跡の大半を占める16,000m<sup>2</sup>を対象として640m<sup>2</sup>の確認調査を実施し、調査を終了した。

平成8年度は遺跡西南隅の500m<sup>2</sup>を対象として16m<sup>2</sup>の確認調査を実施し、調査を終了した。

平成9年度は遺跡西側の3,450m<sup>2</sup>を対象として156m<sup>2</sup>の確認調査を実施し、引き続き170m<sup>2</sup>の本調査を行った。調査の結果、旧石器時代のブロックを4か所確認した。

4か所のブロックは、いずれも遺跡西側に向かって開口する谷頭に面した台地縁辺部に分布し、出土層準はすべて立川ローム層のⅣ層からⅥ層にかけてである。

第1・3・4ブロックは小規模なブロックで資料が少なく、石器群の特徴がはっきりしない。いっぽう、第2ブロックは239点の石器群で構成される大型のブロックで資料も充実しており、房総半島における当該期石器群の様相をよく示している。

第2ブロックは黒曜石によるナイフ形石器、剥片、碎片を中心とし、これに珪質頁岩による各種石器群が加わって構成されている。

主体をなす黒曜石は、黒色不透明で夾雜物を多く含んでおり、栃木県高原山産と推定される。分割繰等を持ち込み、小規模ながらも素材の生産からナイフ形石器の製作まで行っている。ナイフ形石器は不定型な剥片を用い、表裏両面からの調整加工によって製作されている。

珪質頁岩は暗褐色～灰褐色で硬質緻密なものが多く、東北南部あるいは北関東に由来すると考えられる石材である。小型の石核から小規模な剥片生産を行う母岩と、搬入品の石刃およびその再加工に関連した母岩の二者で構成される。

房総半島におけるⅣ層からⅥ層にかけての石器群は、①信州産黒曜石による中・小型の石刃を用いた2側縁調整のナイフ形石器を特徴とする一群(八千代市権現後遺跡第4文化層)と、②東北産珪質頁岩による大・中型石刃を特徴とする一群(香取郡多古町香山新田中横堀遺跡)、③房総半島南部産の各種石材による一群(市原市草刈遺跡)などがある。本ブロックの石器群と共通点のある②は、千葉市馬ノ口遺跡、同荒久遺跡、市原市草刈遺跡、同下鈴野遺跡などで、高原山産黒曜石による寸詰まりの縱長剥片あるいは不定型剥片を用いた石器群が一定量伴っており、黒曜石と珪質頁岩とが別々の形態で搬入されたあり方が当該期に一般的であることがわかる。

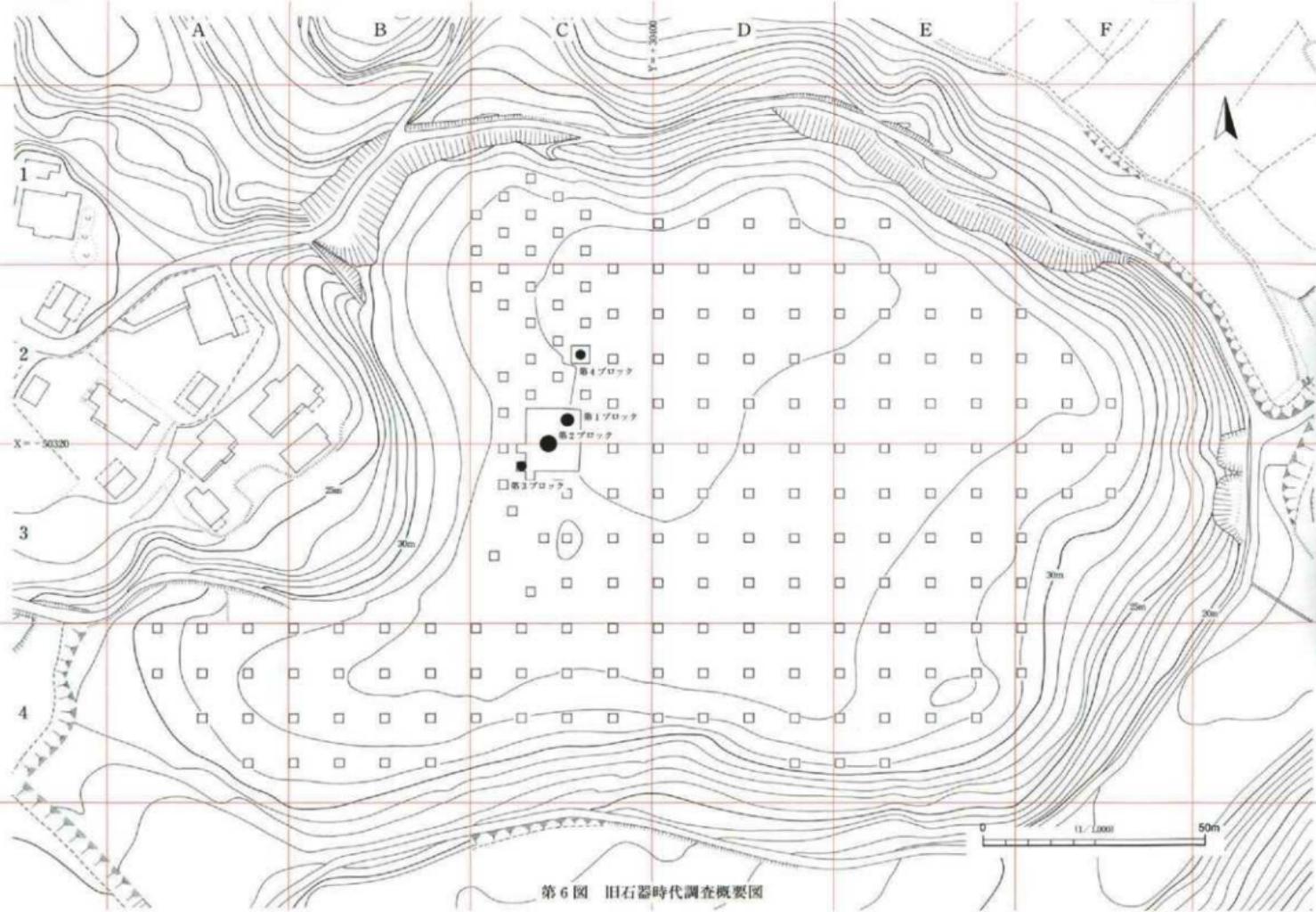
### 第2節 基本土層

本遺跡の立川ローム層は、層相、層厚とともに東南部地区で一般的なものである。また、下総台地で広く観察される基本土層と共通する(第7図、図版5)。

Ⅲ層 黄褐色の軟質ローム層で、厚さは10cm～20cmである。

Ⅳ・V層 にぶい黄褐色の硬質ローム層で、その大半が下総台地における立川ローム層第1黑色帯に相当すると考えられる。厚さは20cm～30cmである。

なお、本地域では軟質ローム層下部から硬質ローム層上部にかけてスコリアを多く含む赤褐色の土層が観察されることが多く、これをIV層として区分するが、本遺跡でははっきりしなかった。



第6図 旧石器時代調査概要図

VI層 明黄褐色の硬質ローム層で、黒色粒と火山ガラスを豊富に含むA T(始良丹沢火山灰)ブロックがまとまっている。厚さは20cm~30cmである。

VII層 黄褐色の硬質ローム層で、立川ローム層第2黑色帶上部に相当する。A Tが拡散しており、V層と同様、あまり暗い色調ではない。厚さは30cm~40cmである。

IX層 褐色の硬質ローム層で、立川ローム層第2黑色帶下部に相当する。厚さは20cm~30cmである。

なお、本地域ではIX層中の間層(I X b層)を識別することは困難であるが、赤みを帯びた褐色のIX a層と暗褐色でスコリアが顯著なIX c層には区分できことが多い。ただし、本遺跡ではIX層の細分は行えなかった。

X層 黄褐色の硬質ローム層であるが、IX層に比べて軟質である。スコリアは見られない。立川ローム層最下層にあたり、下底部は波状となっている。厚さは20cmほどである。

### 第3節 石器群の分布と出土遺物

#### 1. 第1ブロック (第8図、第10・11図、第1・2表、図版5・6・34)

##### 1) 概要

第1ブロックは遺跡西側の谷頭に面した台地縁辺部に位置しており、台地縁辺からの距離は20mである。石器群は、C2-85・95グリッドに分布する。

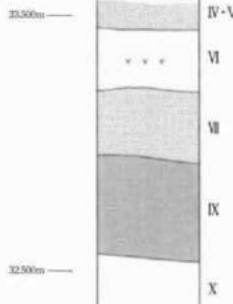
ブロックの規模と形状は、直径3mほどの範囲に12点の石器群が散漫に分布する。出土層位はⅥ層を中心とするが、その一部はⅨ層にもおよんでいる。

石器組成は剥片11点、碎片1点、石材構成は砂岩5点、ホルンフェルス7点である。上総丘陵砂礫層で採取したと想定される石材を持ち込み、小規模な剥片生産によって形成されたブロックである。

##### 2) 母岩別資料

・砂岩1 黒灰色で粒子の細かい砂岩である。剥片4点、碎片1点で構成される。剥片はいずれも小型不定型のものである。残された資料から、ブロック内で小規模な剥片生産が行われたと推定されるが、石核は残されていない。剥片剥離作業半ばの工程に関連する資料と考えられる。接合資料はない。

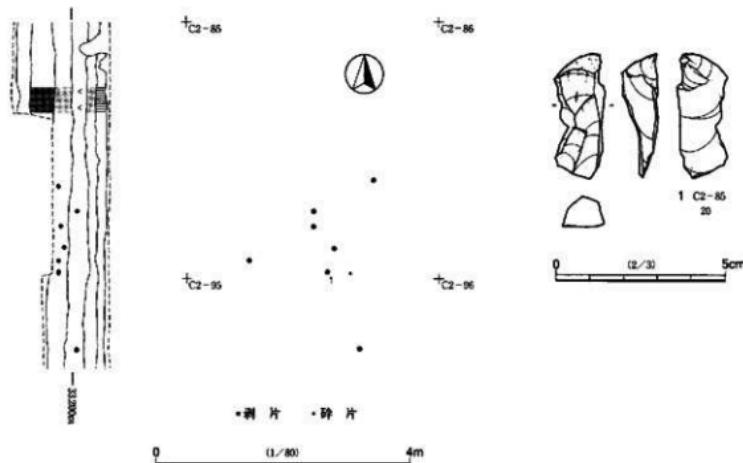
・ホルンフェルス1 黄灰色に風化したホルンフェルスで、剥片7点で構成される。概ね小型の剥片、碎片であるが、厚手の分割片が1点含まれている。砂岩1と同様、ブロック内で小規模な剥片生産を行ったと考えられる。



第7図 基本土層図

### 3) 出土遺物 (第8図)

剥片 (第8図1) 1は砂岩1による不定型の剥片である。自然面を打面とし、表面は、主要剥離面とは反対の方向からの剥離面で覆われている。剥離時に打点で二つに割れている。



第8図 第1ブロック石器別分布図・出土遺物実測図

第1表 第1ブロック出土遺物属性表

測定 番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長		最大幅		最大厚		重 量	打面	打角	背面剥離角	末端形状	裏表角	使用痕	被削痕	折れ	欠損
				mm	mm	mm	mm	mm	mm										
1	C2-85-17	剥片	砂岩	1	10.20	10.00	1.70	0.15	L	-	I + II	D	-	-	-	-	-	-	
	20	剥片	砂岩	1	36.38	16.22	10.88	4.63	C	80	-	-	-	-	-	-	-	-	
	21	砂片	砂岩	1	5.99	9.64	4.48	0.18	C	94	III	III	-	-	-	-	-	-	
	22A	剥片	ホルンフェルス	1	12.60	7.43	4.50	0.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	22B	剥片	ホルンフェルス	1	15.74	8.20	3.85	0.63	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	22C	剥片	ホルンフェルス	1	12.55	4.55	3.47	0.24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	22D	剥片	ホルンフェルス	1	12.73	6.59	4.56	0.51	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	23	剥片	砂岩	1	7.49	23.86	4.69	0.67	L	-	I + V	H	-	-	-	-	-	-	
	24A	剥片	ホルンフェルス	1	21.37	19.15	15.22	8.64	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	24B	剥片	ホルンフェルス	1	17.52	14.10	13.27	3.28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	24C	剥片	ホルンフェルス	1	15.36	11.20	10.42	1.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	25	剥片	砂岩	1	7.77	12.50	2.05	0.19	-	-	I	S	-	-	-	B	-	-	

第2表 第1ブロック出土遺物組成表

母岩名	剥片	砂片	点数	点数比	重量 g	重量比
砂岩1	4	1	5	41.67%	5.82	27.43%
ホルンフェルス1	7	0	7	58.33%	15.40	72.57%
計	11	1	12	100.00%	21.22	100.00%
点数比	91.67%	8.33%	100.00%			

## 2. 第2ブロック（第9～15図、第3・4表、図版5・6・32～34）

### 1) 概要

第2ブロックは遺跡西側の谷頭に面した台地縁辺部に位置しており、台地縁辺からの距離は15mである。石器群は、C2-84・85・93-95、C3-04・05グリッドに分布する。

ブロックの規模と形状は、長軸9m、短軸5mの橢円形の範囲に239点の石器・礫が分布する。ただし、分布状況を細かく見ると、直径2m～3mほどの小規模なまとまりが南北に4か所連なっており、それぞれが石器製作作業を中心とする諸活動の単位を反映した可能性がある。出土層位はVI層を中心とし、50cmほどの高低差をもって包含されている。

石器組成はナイフ形石器12点、削器3点、楔形石器2点、二次加工剥片20点、剥片108点、碎片89点、石核1点、礫4点で、石器石材は黒曜石188点、安山岩8点、凝灰岩1点、珪質頁岩33点、砂岩3点、チャート2点、礫石材は珪質頁岩1点、チャート1点、不明2点である。

黒曜石はいずれも黒色不透明で夾雜物を多く含んでおり、肉眼観察では栃木県高原山産と推定される。ナイフ形石器の未製品とその調整剥片（プランティングチップ）を含むこと、小型不定型の剥片類が多いことから、分割礫または作業途中の石核を持ち込み、剥片生産からナイフ形石器の調整加工に至るまでの諸工程を行ったと考えられる。

珪質頁岩は暗褐色から灰褐色で硬質緻密なものが主体を占める。作業途中の石核を持ち込み、不定型な剥片の生産を行ったものと、大型の石刃を持ち込み、これを再加工したもの二者がある。なお、珪質頁岩では調整加工を施した定型的な石器は見られない。

石材ごとの分布について、黒曜石はブロックの全域にわたって分布するが、珪質頁岩はブロック南半部に偏在する。

### 2) 母岩別資料

本ブロックでは出土した石器・礫を24の母岩に分類した。内訳は黒曜石5母岩、安山岩2母岩、凝灰岩1母岩、珪質頁岩9母岩（うち礫1母岩）、砂岩2母岩、チャート3母岩（うち礫1母岩）、石材不明2母岩（うち礫2母岩）である。このほか、母岩分類できなかった黒曜石の一群（便宜的に黒曜石6）がある。

黒曜石 総数188点で、石器群全体の約80%を占める。このうち、微細な碎片を除く172点を5母岩に分類した。

・黒曜石1 表面は平滑な角礫面をもち、内部は漆黒色不透明で光沢に富む黒曜石である。 $\phi 0.5\text{mm} \sim 2\text{mm}$ ほどの不整形の夾雜物を多く含む。同一母岩は、ナイフ形石器3点、同未製品4点（接合して3個体）、二次加工剥片7点、剥片27点、碎片29点で、最も充実した内容の母岩である。

接合資料はナイフ形石器未製品2点が接合して1個体となるもの、ナイフ形石器の製作過程で切断した剥片がナイフ形石器の未製品に接合するものがある。

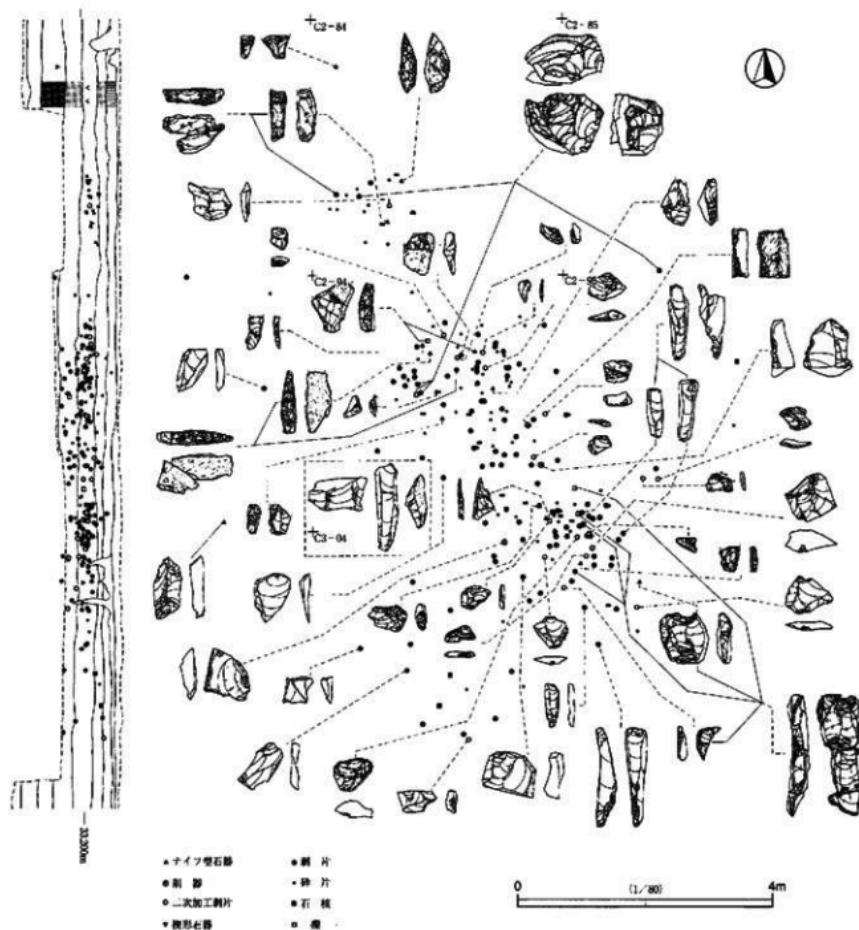
ナイフ形石器以外の資料は2cm角程度の剥片類数点と1cm角以下の碎片で、碎片の中にはナイフ形石器の調整剥片（プランティングチップ）がある。とくに、本遺跡のナイフ形石器は、表裏両方向からの調整加工が特徴的であるが、これと対応して、表面に上下両方向からの剥離面をもつプランティングチップが一定量含まれている。また、ナイフ形石器の調整加工とは異なる要因で生じたと考えられる小型の剥片、碎片も多く、したがって、小規模な剥片生産からナイフ形石器の調整加工に至る諸工程をブロック内で行った母岩と考えられる。

・黒曜石 2 黒曜石 1 に類似するが、本母岩の方がやや透明感がある。同一母岩は削器 1 点、剥片 16 点、碎片 12 点である。削器 1 点を除くと細かな資料が主体をなすが、プランティングチップは見られない。

・黒曜石 3 灰色みを帯びた黒色不透明で、 $\phi 0.5\text{mm} \sim 2\text{ mm}$  の夾雜物を含む黒曜石である。同一母岩はナイフ形石器 4 点、二次加工剥片 5 点、剥片 17 点、碎片 31 点である。

接合資料はナイフ形石器の製作過程で切断した剥片がナイフ形石器の未製品に接合するものがあり、これは黒曜石 1 と共通する手法である。

ナイフ形石器以外では、1 cm ~ 2 cm 角の小型不定型な剥片と碎片を中心とした母岩で、ブロック内で剥



第 9 図 第 2 ブロック石器別分布図

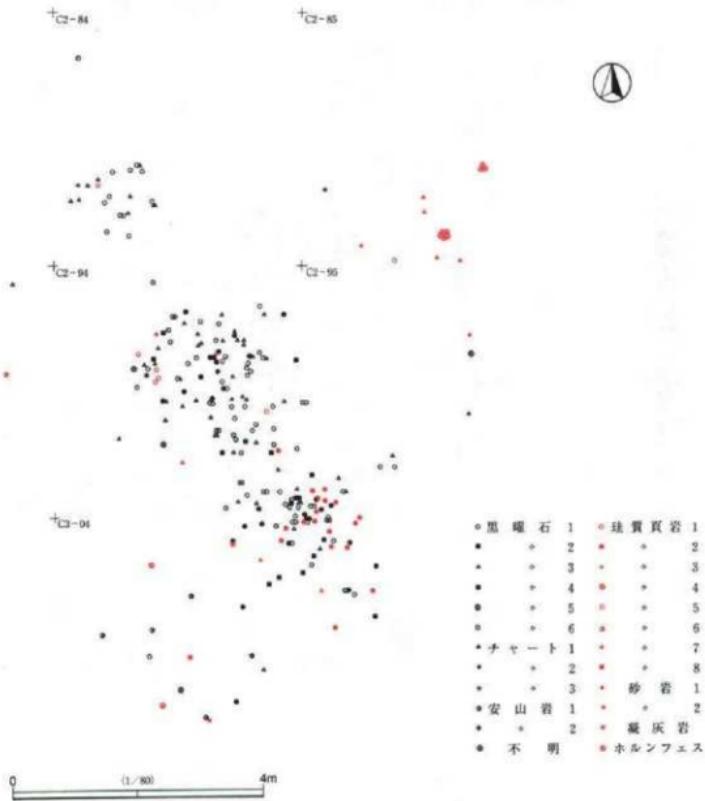
片生産を行った形跡がある。また、プランティングチップもわずかながら含まれている。

・黒曜石4 黒灰色不透明で $\phi 0.5\text{mm} \sim 1\text{mm}$ の夾雜物を含む黒曜石である。同一母岩はナイフ形石器1点、楔形石器1点、二次加工剥片3点、剥片9点である。なお、本母岩は搬入した削器の再加工に関連する資料で、一般的な剥片生産の工程は見られない。珪質頁岩に顕著な「下縦型石刃再生技法」と共通する手法である。

・黒曜石5 黒色不透明で大小の夾雜物を多く含む黒曜石である。剥片2点で構成される。

珪質頁岩 総数33点で、9母岩に分類した。このうち1点(珪質頁岩8)は礫片である。珪質頁岩1は小型の石核から不定型の剥片を生産した母岩であるが、それ以外は石刃、あるいは剥片の搬入品とその再加工の過程で生じた資料で、「下縦型石刃再生技法」に関連したものである。

・珪質頁岩1 自然面は橙褐色、内部は暗褐色で硬質緻密な東北産ないしは北関東産の珪質頁岩である。自然面は滑らかで光沢のある円錐面である。同一母岩は剥片5点と石核1点で、このうち剥片4点と石核



第10図 第1・第2ブロック母岩別分布図

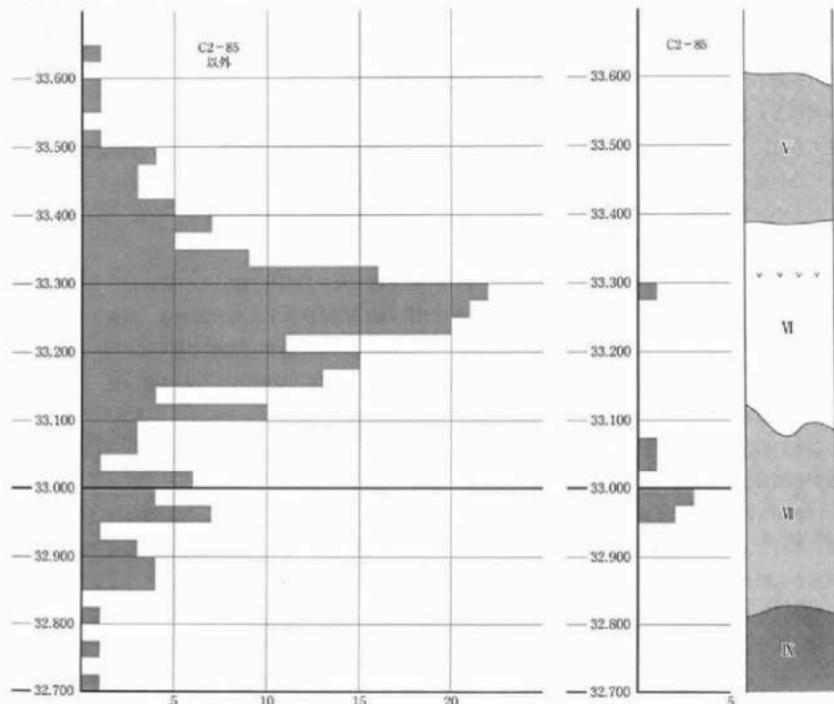
1点が接合する。接合資料から、作業途中の石核(拳の半分ほど)を持ち込んで不定型な剥片の生産を再開し、そのまま本母岩を使い切ったことがわかる。

・珪質頁岩2 自然面および自然面に近い部分は黄灰褐色、内部は灰色を帯びた暗褐色で硬質緻密な東北産ないしは北関東産の珪質頁岩である。同一母岩は、削器1点、二次加工剥片4点、剥片13点(有柄石刃から剥離された小石刃3点含む)、碎片1点である。搬入された大型の石刃ないしは剥片の再加工に由来する資料と考えられるが、もともとの搬入品は1個体でない可能性がある。

・珪質頁岩3～5・9 谈褐色から暗褐色で硬質緻密な石材で、珪質頁岩3は大型の石刃の頭部片と再生に関連した小石刃、珪質頁岩4は小型不定型の剥片2点、珪質頁岩5は石刃素材の削器1点の単独資料、珪質頁岩9は石刃1点の単独資料である。単独で搬入された製品(珪質頁岩5・9)と再加工に関連したもの(珪質頁岩3・4)と考えられる。概ね、東北産ないしは北関東産であろう。

・珪質頁岩6・7 硅質頁岩6は暗灰緑色で硬質緻密な石質で、剥片1点の単独資料、珪質頁岩7は黄灰色で珪化度は高いあまり均質ではない石質で、剥片1点の単独資料である。

安山岩 総数8点で、2母岩に分類した。安山岩1は房総半島における剥片石器通有の灰褐色に風化した安山岩で、小型不定型の剥片6点で構成される。安山岩2は赤紫色で多孔質の安山岩である。剥片2点



第11図 第1・第2ブロック垂直分布図

で構成される。

凝灰岩 凝灰岩1は淡黄灰色で比較的硬質緻密な凝灰岩である。二次加工剥片1点の単独資料である。

砂岩 砂岩も总数3点で、2母岩に分類した。砂岩1は剥片2点、砂岩2は剥片1点で、いずれも小型不定型の剥片である。なお、砂岩1は第1ブロックに5点分布する。

チャート 3点出土し、これを3母岩に分類した。チャート1は楔形石器1点、チャート2は剥片1点、チャート3は蝶片1点である。

### 3) 出土遺物

ナイフ形石器(第12図1~11) 1~3は完成品、4~11は未製品と考えられる。それぞれの帰属する母岩は、1~5・11が黒曜石1、6~8・10が黒曜石3、9が黒曜石4である。

1は1側縁調整のナイフ形石器である。厚手の不定型な剥片を横位に用い、左側縁(素材剥片の末端部)全体を表裏両面から細かく調整している。右側縁下部には素材時の打面が残る。2は薄手の縱長剥片を縦位に用い、基部右側と先端部左側を裏面から細かく調整している。3も薄手の縱長剥片を縦位に用いたナイフ形石器である。左側縁に裏面からの調整加工が見られる。下半部は欠損する。

4はナイフ形石器の基部破片と判断した。左側縁にはナイフ形石器通有の調整加工が見られるが、右側縁及び上半部は大きく欠損しており、製作途上で廃棄されたと考えられる。5は2側縁調整のナイフ形石器である。厚手の不定型な剥片を用い、右側縁は表裏両面から、左側面は裏面から調整している。全体に作りが粗く、形状が整っていないことから、未製品と判断した。6も2側縁調整のナイフ形石器である。両側面とも表面の平滑な自然面から調整加工を行っている。本例も調整加工が粗いことから、未製品と考えられる。7は横長剥片を用いた2側縁調整のナイフ形石器の基部破片である。8・9は縱長剥片の1側縁に急角度の調整加工を行ったものである。特に、9は第14図34で示した中型の削器を再加工する過程で生じた小石刃を素材に用いており、「下総型石刃再生技法」に関連するものである。なお、7~9もナイフ形石器の未製品と判断した。

10はナイフ形石器の未製品(10a)とその製作過程で折り取った末端部片(10b)とが接合した資料である。10aは幅広不定型の剥片を横位に用い、左側面(素材剥片の打面部)全体を表裏両面から、右側面(素材剥片の末端部)の基部寄りを裏面から調整加工したナイフ形石器である。全体に調整が粗いことから、未製品と考えられる。なお、接合資料から、右側縁の調整加工に先立って、素材剥片の末端部(10b)を折り取っていることがわかる。ただし、本石器は、ナイフ形石器通有のプランティングによって調整加工されてはいるものの、素材剥片の一次面がまったく残されていないことから、角錐状石器など別種の石器を見るべきかも知れない。

11も10と同種の接合資料で、ナイフ形石器の未製品(11a)とその過程で折り取った末端部片(11b)による接合資料である。表面に平滑な自然面を広く残す不定型の剥片を用い、左側面(素材剥片の打面側)全体を表裏から細かく調整している。右側面は、11bを切断した後、裏面から調整している。

本ブロックからは製品と未製品を合わせて12点(11個体)のナイフ形石器が出土したが、それらは大別的に見て2種類に区分できる。第一は厚手の不定型な剥片を横位に用い、表裏両方向から調整加工を行ったもの、第二は薄手の縱長剥片を縦位に用い、裏面から調整加工したものである。すべて高原山産と推定される黒曜石を用い、概ね本ブロックで製作、あるいは再加工を行っており、明らかに搬入品とわかるものはない。

**削器（第13図12～14）** 12は珪質頁岩2による大型の石刃を用いた削器で、左側縁に細かな調整加工が連続する。ただし、右側面には上端部を打面とする楕状の剥離面が見られることから、損傷等を契機として、再生行為を行ったと考えられる。石器として再生されたか、小石刃を剥離した石核に転用されたかははっきりしない。13は珪質頁岩5による中型厚手の石刃を用いた削器である。素材の主要剥離面から細かな調整加工を行っている。節理面（表面）は赤褐色、内部は淡褐色で硬質緻密な珪質頁岩である。14は黒曜石2による不定型の剥片である。右側縁に細かな調整加工が連続する。

**二次加工剥片（第13図15～32）** 15～32は小型不定型の剥片を素材として、その末端部に小規模な剥離痕をもつ不定型の石器である。帰属する母岩は16・17・20～22・25・31が黒曜石1、15・18・19・23・32が黒曜石3、24が黒曜石4、26が凝灰岩1、27～30が珪質頁岩2である。黒曜石1や珪質頁岩2など、ブロック内で剥片生産を行った母岩に多く、剥片生産時に製作した臨機的な石器と考えられる。

**楔形石器（第13図33）** 33はチャート1による楔形石器である。

**剥片類（第15図36・38・40・43・45～47）** 40は珪質頁岩9による石刃である。表面の両側縁には打点の多い大型の剥離面が残っていることから、本石刃を剥離した石核が大型の石刃ないしは剥片を素材とした可能性がある。このほかは、いずれも不定型の剥片である。36・46は黒曜石3、38は珪質頁岩7、43は珪質頁岩6、45は黒曜石1、47は安山岩1に帰属する。

#### 4. 接合資料と関連資料（第14図）

・**黒曜石4** 34はもともと不整形な綫長剥片を用いた削器であったものを再加工したものである。接合資料は、楔形石器1点(34c)、二次加工剥片2点(34a・f)、剥片3点(34b・d・e)による。

ブロック内に削器が嵌入された後、①34a・b・cを含む部分、②34d・eを含む部分、③34fの三つに割れ、それぞれ独自の再利用が図られる。

①は両極打撃により楔形石器(34c)が製作されている。ただし、34cを石核として、小型の剥片を生産したと見るべきかも知れない。②は下位の割れ口を打面として、34dを含む小石刃数枚を剥離し、34eが石核として残される。③は上端の折れ面周辺に刃にぼれが見られることから、そのまま石器として利用した可能性がある。

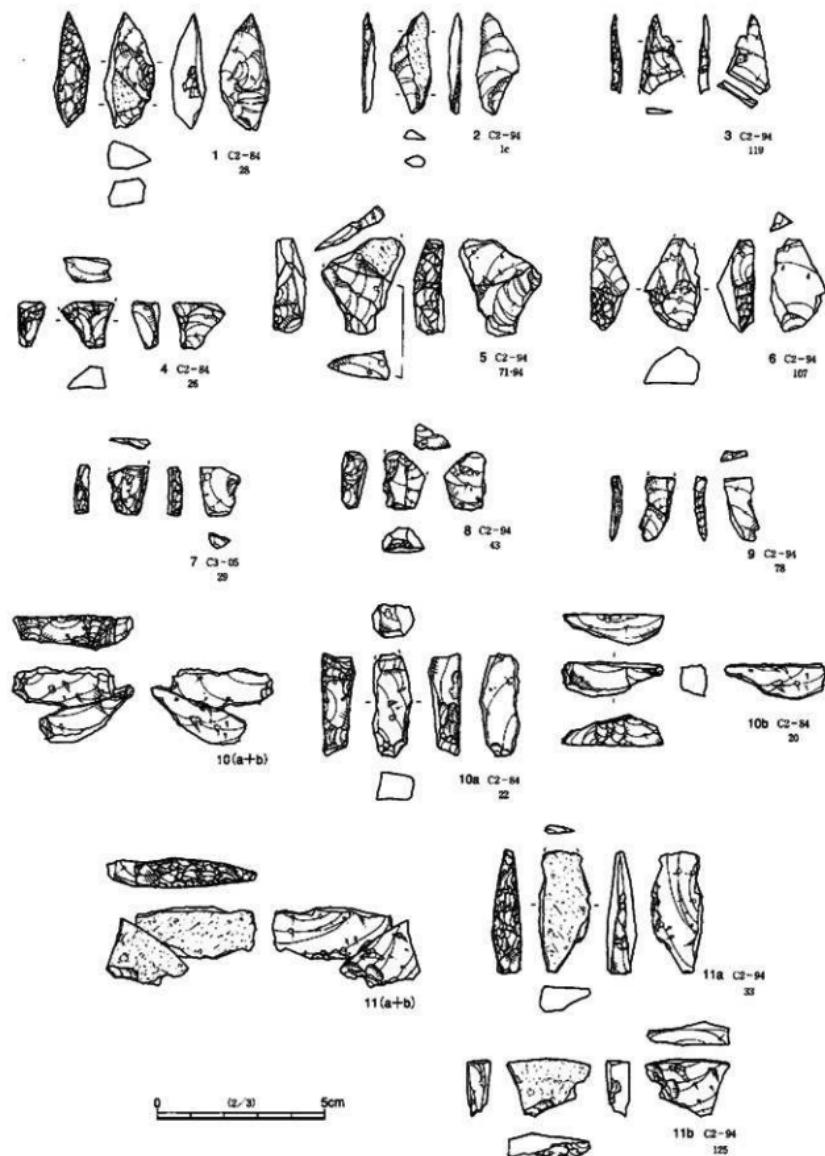
なお、先述した第12図9のナイフ形石器については、34の再生作業で素材を得たものか、34とともに嵌入されたものか、はっきりしない。

・**珪質頁岩1** 35は剥片4点と石核1点の接合資料である。作業途中の石核をブロック内に持ち込み、これを使い切った剥片生産の後半段階の資料である。打面と作業面を頻繁に入れ替えながら、各所から小型不定型の剥片を生産している(35c→35a→35b→35d)。

44は不定型の剥片である。このほか、先述した二次加工剥片の27～30も同一母岩の資料である。

・**珪質頁岩2** 41は有機石刃から剥離された小石刃、42も同種の小石刃で、2点が接合する。41、42とも両側面に平坦で互いに平行する剥離面があることから、大型厚手の石刃の小口部から剥離されたと推定される。ただし、41と42は同一母岩ではあっても別個体の有機石刃から剥離された可能性がある。

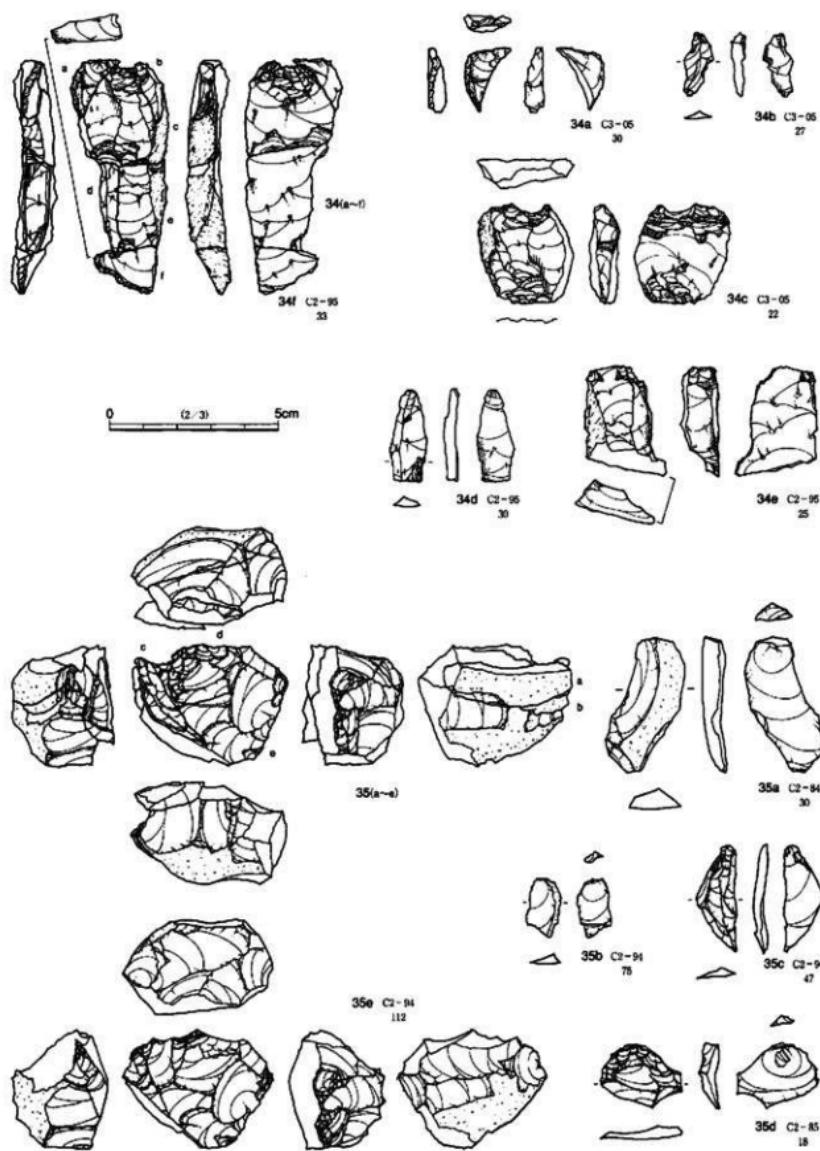
・**珪質頁岩3** 37は大型の石刃の頭部、39は小形の再生型石刃である。黒みの強い暗褐色で硬質緻密な珪質頁岩である。



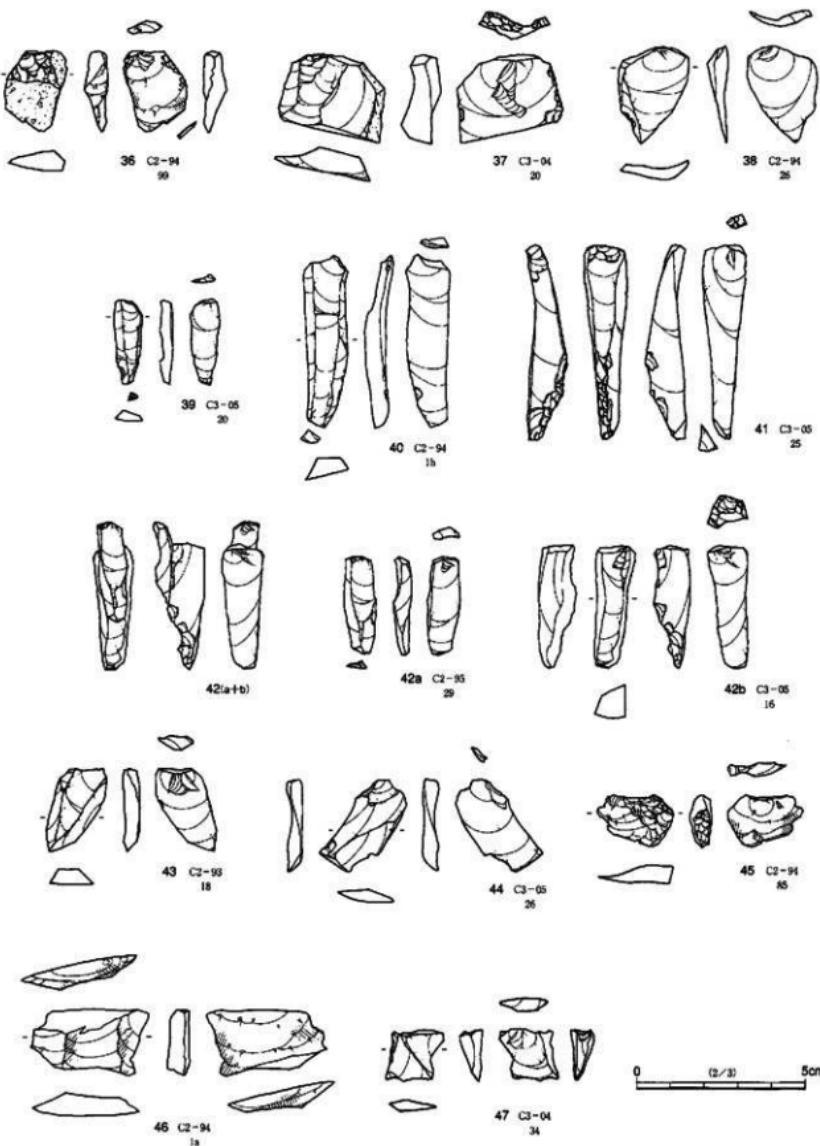
第12図 第2ブロック出土遺物実測図 (1)



第13図 第2ブロック出土遺物実測図 (2)



第14図 第2ブロック出土遺物実測図 (3)



第15図 第2ブロック出土遺物実測図(4)







第2ブロック出土遺物属性表(4)

母岩 番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	重 量 g	打痕 有無	打痕 角 度範囲	背面構成	実用 形状	調整角	使用面 観察結果	割れ	欠損	
7	C3-05-29	ナイフ形石器	黒曜石	3	14.32	6.67	0.73	1	106	I	-	66~118	-	-	
34a	35	二次加工剥片	黒曜石	4	17.64	14.08	6.22	0.81	-	-	-	94~110	-	-	
31	剥片	珪質頁岩	2	10.69	14.82	4.07	0.32	1	104	I+B	H	-	-	-	
32	剥片	安山岩	1	15.65	9.05	3.80	0.50	-	-	I+B	H	-	-	B	
27	33	二次加工剥片	珪質頁岩	2	27.56	31.19	72.73	6.70	1	118	I+B	H	88~120	-	-
16	34A	二次加工剥片	黒曜石	1	8.63	12.00	3.25	0.26	-	-	I	F	58~64	-	B
34B	剥片	黒曜石	1	12.60	7.80	2.35	0.14	-	-	I+B	F	-	-	B	
34C	剥片	黒曜石	1	5.35	15.95	1.84	0.12	-	-	I	H	-	-	B	
35	剥片	黒曜石	1	7.45	13.30	2.30	0.15	-	-	I+B	H	-	-	B	
24	36	二次加工剥片	黒曜石	4	16.87	15.10	3.08	0.44	-	-	I+B+V	H	56~72	-	B
25	37	二次加工剥片	珪質頁岩	2	20.15	23.11	11.13	2.15	7(1)	104	I+B+II	H	76~94	-	-
38A	剥片	黒曜石	2	3.72	8.41	1.31	0.01	-	-	I	H	-	-	B	
38B	剥片	黒曜石	2	8.11	5.97	0.59	0.03	-	-	III	F	-	-	B	
38C	剥片	黒曜石	1	6.79	13.33	1.44	0.08	-	-	I	F	-	-	B	

第4表 第2ブロック出土遺物組成表

母岩名	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工剥片	剥片	砂片	石核	塊	点数	点数比	重量 g	重量比
黒曜石 1	7	0	0	7	27	29	0	0	70	29.29%	91.28	23.43%
黒曜石 2	0	1	0	0	16	12	0	0	29	12.13%	20.57	5.28%
黒曜石 3	4	0	0	5	17	31	0	0	57	23.85%	75.86	19.47%
黒曜石 4	1	0	1	3	9	0	0	0	14	5.86%	19.03	4.88%
黒曜石 5	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.84%	19.60	5.03%
黒曜石 6	0	0	0	0	0	0	16	0	16	6.69%	0.33	0.08%
安山岩 1	0	0	0	0	6	0	0	0	6	25.1%	4.67	1.20%
安山岩 2	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.84%	14.75	3.79%
礁灰岩 1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.42%	1.69	0.43%
珪質頁岩 1	0	0	0	0	5	0	1	0	6	25.1%	52.65	13.51%
珪質頁岩 2	0	1	0	4	13	1	0	0	19	7.96%	51.44	13.20%
珪質頁岩 3	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.84%	8.93	2.29%
珪質頁岩 4	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.84%	1.08	0.28%
珪質頁岩 5	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.42%	4.99	1.28%
珪質頁岩 6	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.42%	2.15	0.55%
珪質頁岩 7	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.42%	2.24	0.57%
珪質頁岩 8	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.42%	0.63	0.16%
珪質頁岩 9	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.42%	4.79	1.23%
砂岩 1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.42%	0.22	0.06%
砂岩 2	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.84%	0.59	0.15%
チャート 1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.42%	4.00	1.03%
チャート 2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.42%	5.11	1.31%
チャート 3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.42%	0.41	0.11%
不明 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.42%	2.43	0.62%
不明 2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.42%	0.20	0.05%
計	12	3	2	20	108	89	1	4	239	100.00%	389.64	100.00%
点数比	5.02%	1.26%	0.94%	8.37%	45.19%	37.24%	0.42%	1.57%	100.00%			

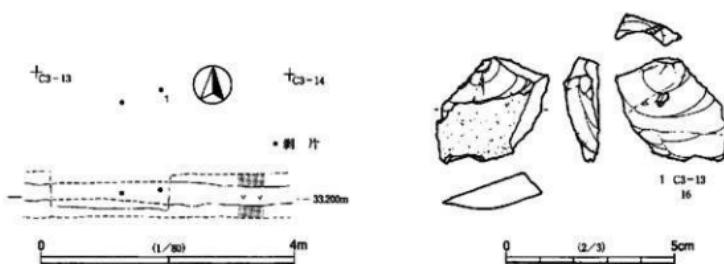
## 3. 第3ブロック(第16図、第5表、図版5・6・34)

## 1) 概要

第3ブロックは第2ブロックの南側に隣接し、C3-13グリッドに分布する。チャートによる剥片2点で構成され、両者は同一母岩である。出土層位はVI層の中程である。

## 2) 出土遺物

剥片(第16図1) 1は不定型の剥片である。表面中央には自然面が広く残る。石材は自然面は褐色、内部は青灰色のチャートである。このほかに、同一母岩による小型不定型の剥片1点がある。



第16図 第3ブロック石器別分布図・出土遺物実測図

第5表 第3ブロック出土遺物属性表

探査番号	遺物番号	器種	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 削造角	背面構成	末端 形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
1	C3-13-16	チャート	チャート	30.83	34.50	10.02	8.09	3	96	I + II + V	H	-	-	-	-
-	17	チャート	チャート	27.45	15.62	10.19	3.60	-	-	I + II + V	F	-	-	B	-

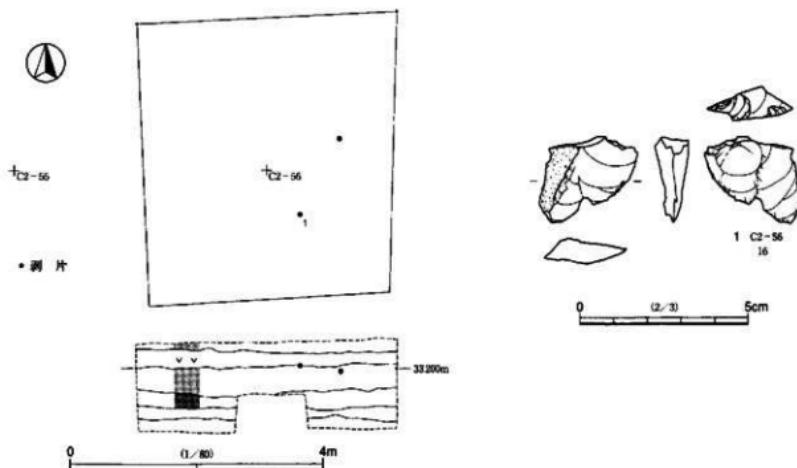
#### 4. 第4ブロック（第17図、第6表、図版6・34）

##### 1) 概要

第4ブロックはC3-46・56グリッドに分布する。チャートおよび珪質頁岩による剥片2点で構成される。出土層位はⅤ層とVI層の境界付近である。

##### 2) 出土遺物

剥片（第17図1） 1は不定型の剥片である。表面は裏面と同一方向の剥離面と自然面で構成される。



第17図 第4ブロック石器別分布図・出土遺物実測図

石材は暗褐色で硬質緻密な東北産珪質頁岩である。このほかに、図示しなかったが、黄灰色のチャートによる不定型の剥片が1点ある。

第6表 第4ブロック出土遺物属性表

標印番号	遺物番号	器種	石材	最大長mm	最大幅mm	重さg	打面	打角・剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕	折れ	欠損
-	C2-46-16	剥片	チャート	27.51	19.78	10.27	6.08	C	128	Ⅲ+V	H	-	-	-
1	C2-56-16	剥片	珪質頁岩	27.10	28.84	9.67	4.73	10(6)	94	Ⅲ+V	H	-	N?	-

#### 属性表註

- 打面** 数字：打面上に残る剥離面数 打擊方向が判断できない節理面であっても、面数に含める。そのうちネガティヴバルブをもつ剥離面数を〇内に示す。  
 P：点状打面 L：線状打面 C：自然面打面
- 打角・剥離角** 打角：剥片の打面とポジティヴバルブがつくる角度  
 剥離角：石核の打面とネガティヴバルブがつくる角度
- 背面構成** I：主要剥離面と同一方向の剥離面が存在する場合  
 II：主要剥離面と逆方向の剥離面が存在する場合  
 III：主要剥離面と直交または斜行する剥離面が存在する場合  
 I～IIIの場合、剥片剥離後の調整痕は除く。  
 IV：剥離方向が不明な節理面  
 V：原裸面
- 末端形状** F：直線状 Feather end H：無番状 Hinge fracture S：階段状 Step fracture  
 O：逆反りまたは石核底面に達する Outrepasse
- 調整角** 撃削器の刃部、ナイフ形石器の刃挫し、影刻刃面の形成などにおける調整剥離角  
 同面調整石器の場合は剥離角を示さない。
- 使用痕** N：刃こぼれ Nicked edge  
 C：いわゆるコーングロス 植物との接触面に生じるボリッシュ Corn gross  
 S：敲打 Striking (Striked) marks  
 G：すりつぶし Grinding marks  
 P：磨り Polishing (Polished) marks  
 H：被熱痕 Heated marks (Turn red or black with heat)  
 記号は折れによって残存している部位を示す。
- 折れ** H：頭部 Head  
 VM：上下方向の中間部 Vertical Middle  
 B：尾部 Bottom  
 R：背面からみて右側 Right  
 HM：左右方向の中間部 Horizontal Middle  
 L：背面からみて左側 Left

#### 参考文献

- 新田浩三 1995年「下縁型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16 -20周年記念論文集-』(財)千葉県文化財センター  
 (財)千葉県文化財センター 1984年『千葉東南部ニュータウン15 -馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡-』  
 (財)千葉県文化財センター 1984年『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV -No.7遺跡-』  
 (財)千葉県文化財センター 1984年『八千代市撫親後遺跡 -豊田地区埋蔵文化財調査報告書I-』  
 (財)千葉県文化財センター 2001年『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIV -一ノ森田甚平山西遺跡(空港No.16遺跡)-』  
 (財)千葉県文化財センター 2003年『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書I -市原市下鈴野遺跡-』  
 (財)千葉県文化財センター 2003年『千葉台ニュータウンX -市原市草刈遺跡(東部地区旧石器時代)-』

## 第3章 繩文時代

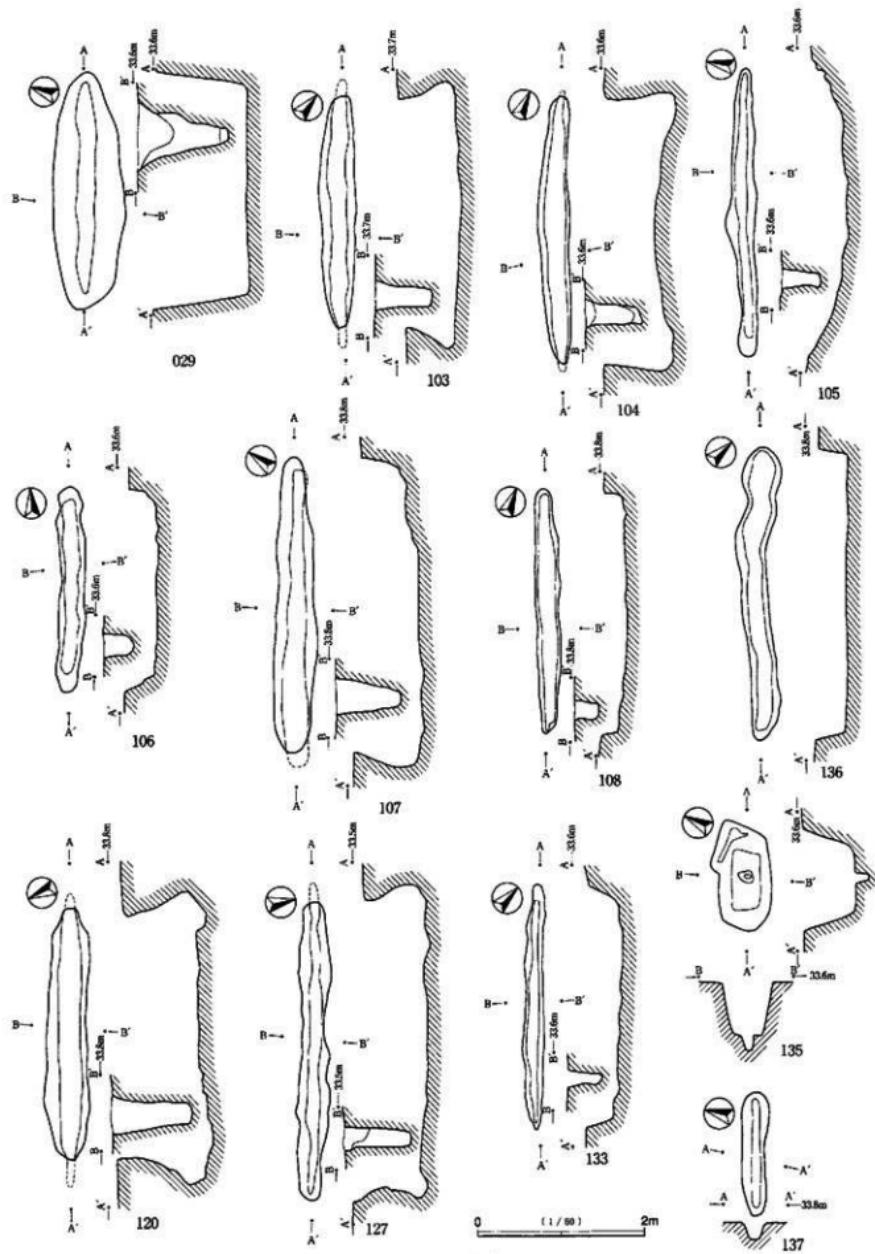
縄文時代の遺構は、草創期から早期の陥穴13基と早期の炉穴2基である。ほかの時期の竪穴住居跡等の遺構は確認されていない。主に台地の西側中央部から縁辺部に、やや散漫に分布している。台地全域での遺物の出土量も少ないので、各時期にわたって遺物が出土している。特に、前期から中期初頭と後期の遺物が比較的多い。

### 第1節 陥穴

13基の陥穴を検出した（第18図、第7表、図版7・8）。時期を確定できる出土遺物はないが、周辺遺跡の類例や平面形態などから、縄文時代草創期から早期にかけての時期が考えられる。主に標高約33.5mの台地西側縁辺部に沿って展開し、さらに北側と南側に大きく分かれて位置している。029号陥穴のみ单独で検出された。南側の5基（103号～106号、120号）は、台地が西側にすさまる部分にやや密集して配置されている。これに対し、北側の7基は台地北西部でやや集中しているが、全体に散漫な傾向がみられる。いずれも長軸が斜面の等高線に沿うか、谷を意識して構築されている。平面形態は長楕円形を基本としている。ほぼ垂直に掘り込まれ、断面形態がV字形の陥穴（029号）もあるが、長軸方向に底面が抉られオーバーハングしている陥穴も多い。105号陥穴は緩やかに掘り込まれている。135号陥穴は他とは異なり、平面形態は不整長方形で、底面にピット（径15cm、深さ18cm）が1基穿たれている。規模は長軸長2.8m前後と3.4m前後のものが主体である。上面がすでに削平されている陥穴もあり、深さは遺存状態により異なるが、最も深い029号陥穴でも1.15mと比較的浅い。底面が平坦な遺構（029号、136号）は少なく、凹凸のあるものが多い。覆土は暗黄褐色土系で、ソフト・ローム粒やハード・ロームブロックが多く含む單一の堆積状況を示す陥穴（103号、105号～108号）が多くみられる。135号陥穴は覆土上層にロームと暗褐色土が交互に堆積しており、埋め戻された状況が確認されている。

第7表 陥穴一覧

遺構番号	旧遺構番号	グリッド	平面形態	長軸方位	長軸長×短軸長(m)	深さ(m)	備考
029号	043-029	E2-40	長楕円形	N-73°-E	2.85 × 0.85	1.15	
103号	118-003	C3-74	長楕円形	N-39°-W	2.75 × 0.42	0.64	底面長軸長3.02m
104号	118-004	C3-84	長楕円形	N-26°-W	3.17 × 0.37	0.71	底面長軸長3.40m
105号	118-005	C3-71	長楕円形	N-79°-E	3.43 × 0.34	0.32	
106号	118-006	C3-51	長楕円形	N-7°-E	2.34 × 0.29	0.34	
107号	118-007	C1-75	長楕円形	N-56°-E	3.46 × 0.51	0.71	底面長軸長3.42m
108号	118-008	C2-15	長楕円形	N-24°-W	2.84 × 0.27	0.24	
120号	118-020	C3-53	長楕円形	N-64°-W	2.94 × 0.55	0.96	底面長軸長3.01m
127号	118-027	C1-91	長楕円形	N-78°-W	3.54 × 0.31	0.80	底面長軸長3.57m
133号	118-033	C2-21	長楕円形	N-45°-W	2.87 × 0.24	0.39	
135号	118-035	C2-54	不整長方形	N-64°-E	1.21 × 0.61	0.55	上面削平、ピット1
136号	118-036	C2-83	長楕円形	N-45°-W	3.42 × 0.38	0.34	
137号	118-037	C2-14	長楕円形	N-77°-E	1.45 × 0.25	0.55	上面削平



第18図 陥穴

## 第2節 炉穴

### 063号炉穴（第19図、図版8・36）

調査区北西部、C 2グリッドに位置する。

2基の炉穴(A、B)が複合した不整形の平面形態で、長軸長3.0m、短軸長2.0m、深さは0.43mである。Aの炉床は南側に偏在し、規模は1.3m×0.77mである。焼土の厚さは22cmを測り、が床面、側壁ともよく焼けている。Bの炉床は北側に偏り、規模は0.4m×0.5mと小さい。焼土の厚さは10cmを測る。中央北側と西側に足場と考えられるテラスが設けられている。覆土は黒色土を主体に、褐色土が混在する。

遺物はAの炉床から早期茅山下層式の深鉢が出土している。体部下半を欠損しているが、遺存状態は比較的良好である。波頂部が2単位1組の4単位の波状口縁で、二段のくびれをもつ。内外面を条痕で施したもの、ナデによる器面調整を行っている。口縁部は緩やかな波状を示し、2単位の突起した波頂部と2単位の低い波頂部が認められる。口唇部には多截竹管状工具による刻みが施されている。上部文様帯は2段に多截竹管状工具による横位刺突文が連続的に巡っている。突起した波頂部の位置で微隆帯を縱位に貼り付け、指頭による圧痕が施されている。下部文様帯は4段に横位刺突文が連続的に巡っており、その下部は条痕のみの施文となる。文様帯の境は隆帯を貼り付けて段を形成し、刺突文が巡っている。焼成は良好で、胎土には纖維が少量含まれている。口縁部最大径28.3cm、現高22.1cmである。

### 065号炉穴（第19図、図版8）

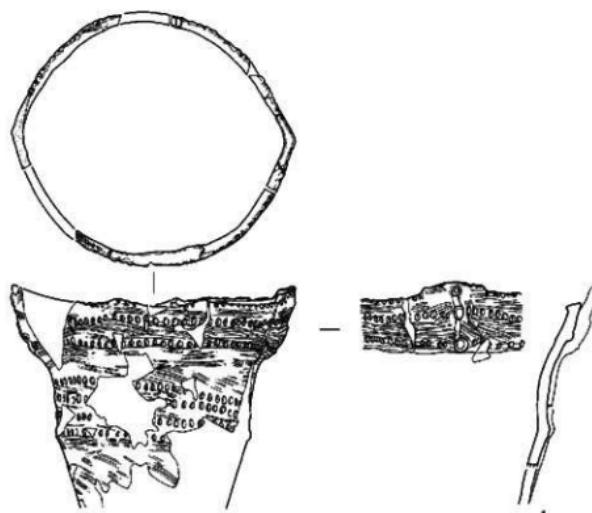
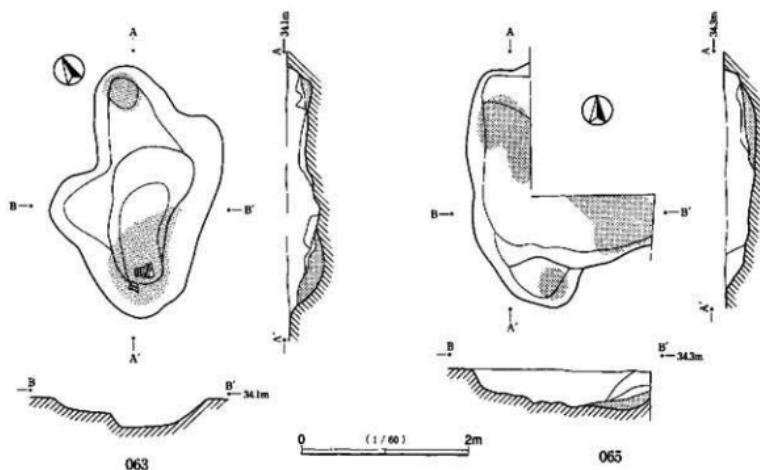
調査区の北西部、C 2・D 2グリッドに位置する。旧石器時代の確認調査時に検出されたため、大半は削平されていた。

炉床が3基(A、B、C)検出されており、複合した炉穴であるが平面形態等は不明である。現状で南北長1.45m、東西長1.1m、深さは0.24mである。北側の炉床Aは東側が削平されており、残存している規模は0.3m×0.55m、焼土の厚さは7cmである。東側の炉床Bは大きく削平されており、0.35m×0.55mの範囲で厚さ7cmの焼土が残存している。南側の炉床Cの規模は0.17m×0.2mと小さいが、焼土は16cmと比較的厚い。覆土は黒色土を主体に、ローム粒を含む暗黄褐色土が混在する。遺物はわずかに条痕文系の土器片が出土したのみである。

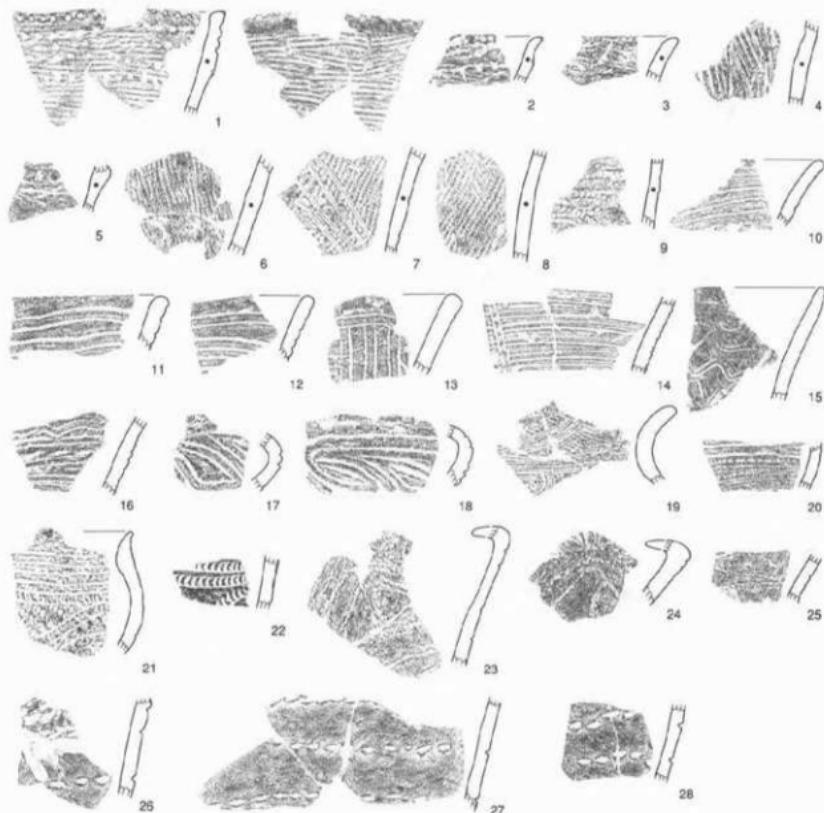
## 第3節 遺構外出土遺物

確認調査時や遺構に伴わざり出土した遺物をまとめて報告する。

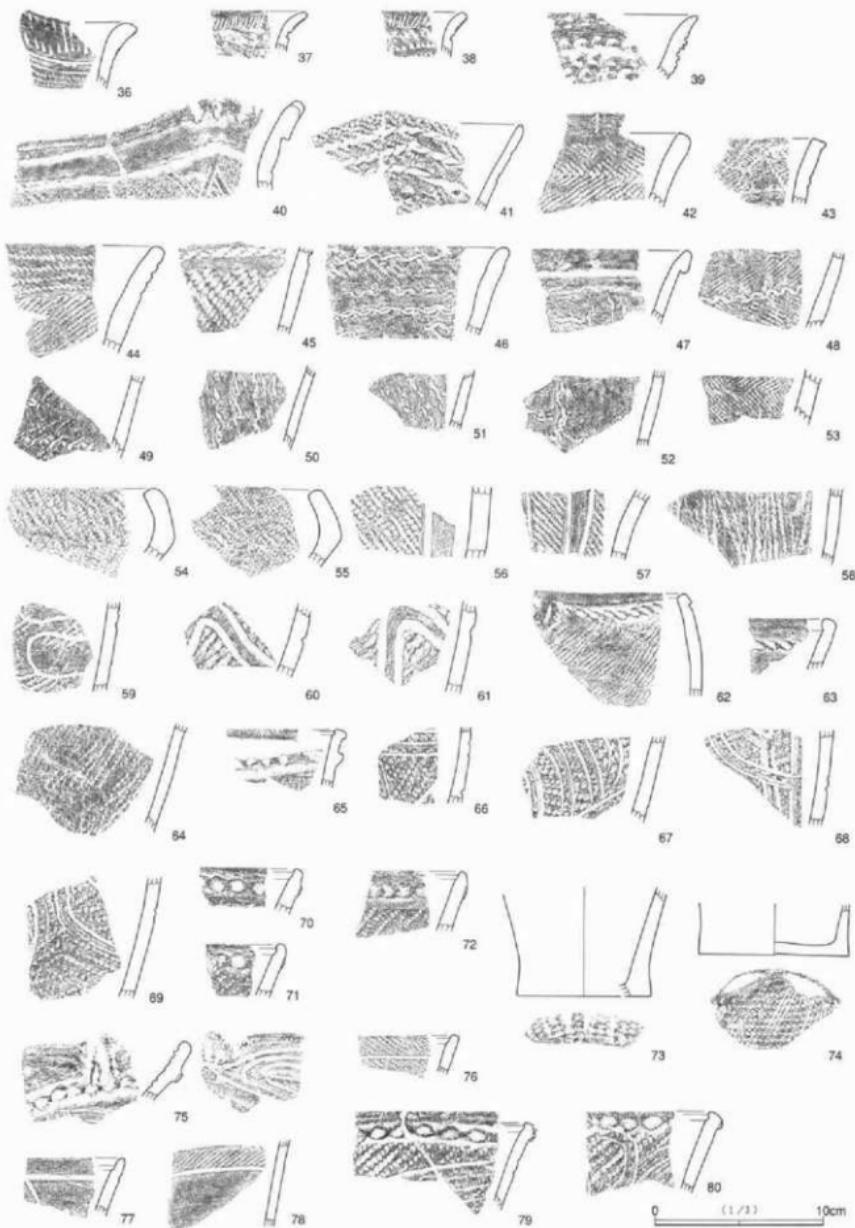
縄文土器（第20・21図、図版35・36） 1～6は条痕文系土器で、胎土には少量の纖維が含まれている。1は半截竹管による4段の横位の連続的な刺突文が施されている。口唇部に同様の工具による刻みをもつ。2も口唇部に棒状工具による刻みをもつ。2・3・5は条痕で施文後、器面がナデにより調整されている。いずれも早期茅山下層式である。7～9は前期黒浜式土器である。胎土に纖維が多く混入し、内面はよくナデされている。7・8はLR縄文施文後に、斜位に細い半截竹管沈線文が施されている。9はLR縄文が横位に施文されている。10～16は諸磯a式土器で、平行沈線が特徴的である。10～12は口縁部下部に半截竹管の沈線が施文されている。13は波状口縁で、半截竹管による平行沈線が施文されている。14は平行沈線施文後、縦位に半截竹管による沈線が施されている。15は波状の弱い沈線が施文されている。16は平行沈線を主体に一部波状文が施されている。いずれも胎土に白色礫を含み、11はさらに雲母粒を多く混入している。17～25は諸磯b式土器である。17・18は同一個体である。鉢形土器で沈線による木葉文が施文



第19図 炉穴及び出土遺物

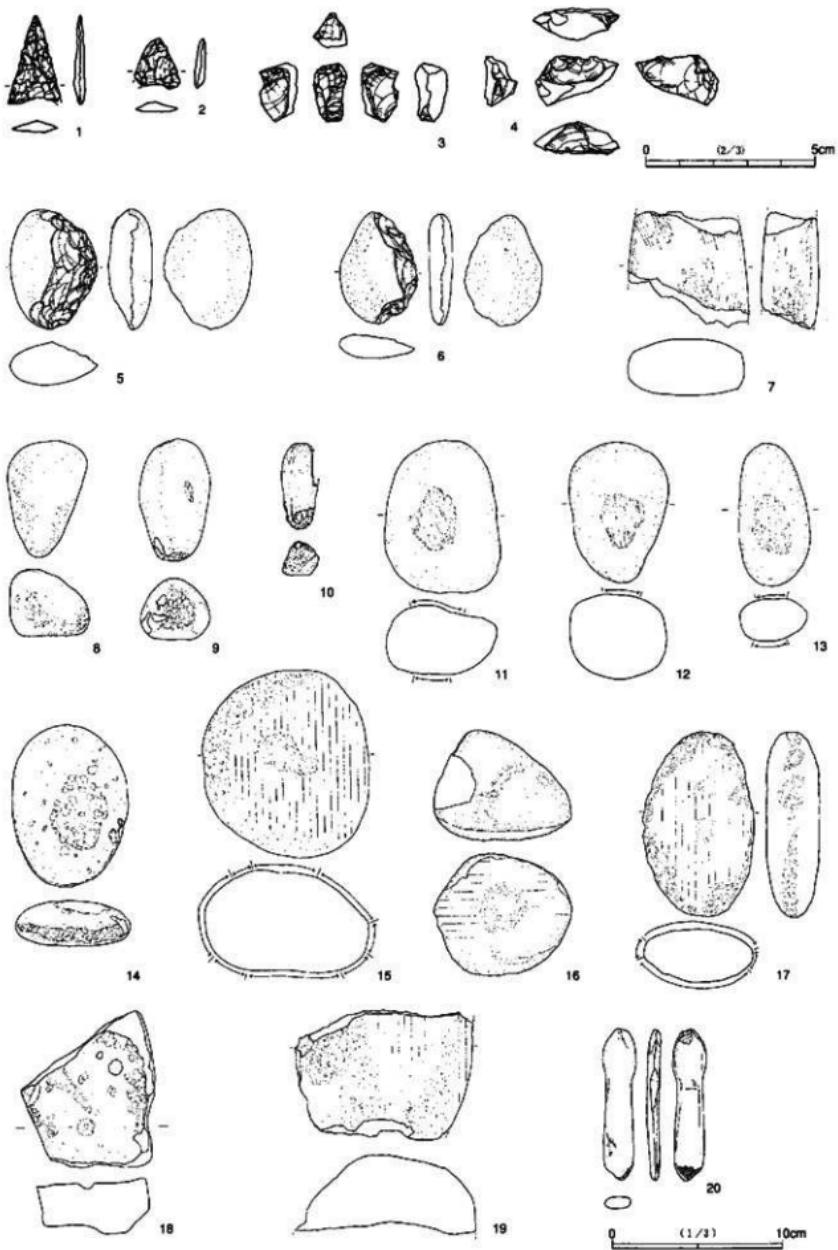


第20図 遺構外出土縄文土器 (1)



第21図 遺構外出土縄文土器 (2)

されている。19は大きく外反した波状口縁部で、L R 縄文の地文に沈線を引いている。21はR L 縄文の地文で、浅い沈線の間に連続的に半截竹管による爪形文を施している。23・24は鉢形土器の波状口縁で、口唇部から胴部にかけて細い棒状工具により、列点状に連続的に刺突されている。26~28は諸磽式から浮島式の土器である。ともにヘラ状工具による刺突文が施文されている。29~35は浮島II式土器である。沈線や爪形文で構成されている。29は複数の造構から出土しているが、同一個体である。外反する深鉢形の器形で、口縁部の隆帯には棒状工具による刻みが施されている。口縁部と胴部は棒状工具による連続的な刺突文で文様帶を区画し、半截竹管の沈線で菱形文を施文している。胴部下半は棒状工具による沈線が施されている。30は平縁の口縁部で、幅広の細い沈線で区画し二段に爪形文を施文する。31・32は波状貝殻腹縁文を施している。33・34は変形爪形文である。33は口唇部にも刻みをもつ。35は貝殻腹縁文を施文している。36~39は奥津式土器で、いずれも口縁部である。36は口縁部が棒状工具の連続的な刺突により、沈線状に施文されている。さらに沈線で区画された胴部には横位に細い刺突文が施されている。37・38は同一個体で、口縁部には縱の沈線が施文され、直下に半截竹管による刺突文が施文されている。39は折り返し口縁で、竹管状工具により連続的な刺突文を施している。40~55は前期末から中期初頭にかけての土器群である。40は折り返し状の波状口縁で、波頂部にR L 縄文原体の刻みが入れられている。胴部はL R 縄文の地文に半截竹管状工具による沈線が施文されている。41は波状口縁で、R L 縄文の地文に横位に縄文原体を押圧し、口唇部にも原体の刻みが入れられている。42は無節Lの縄文を羽状に施文し、口唇部にも原体を押圧する。43は無節Lの縄文を三角形状に押圧し文様を構成している。44は口縁部直下にL R 縄文原体を押圧し、胴部はL R 縄文で施文する。45はR L 縄文と原体押圧で施文している。46~52は結節縄文が施されているものである。49はL R の結節縄文で施文されているほかは、R L の結節縄文である。47は折り返し口縁で、縦横に施文される。48の上段は無節Lの縄文である。50~52は縦に施文されている。46・48は胎土に長石粒、雲母片を含む。53は羽状にL R ・R L 縄文が施文されている。54・55は鉢形土器の口縁部である。口縁部にR L 縄文、胴部にはL R 縄文が施文されている。56~58は中期加曾利E式土器である。56・57は懸垂文、58は撚糸により施文されている。ともにE II~E III式であろう。59~61は後期堀之内I式土器である。L R 縄文を地文に沈線で文様を構成し、蛇行沈線などの沈線で単位文様を施し、区画内の縄文は磨り消している。62~69は堀之内II式土器である。62は口縁部が内彎する鉢である。L R 縄文が施文され、口縁部には貼り付け文と棒状工具による刺突文が施されている。内面はよく磨かれている。63も同様の刺突文が施文されている。64は撚糸を施している。66~69はL R 縄文を地文に半截竹管で弧状などの平行沈線を施文する。ともに砂粒の多い胎土である。65は口唇部は厚く、口縁部直下に縦線文を貼り付けている。口縁内面に細い沈線が巡る。地文はL R 縄文が施されている。70~74は堀之内II式土器から加曾利B I式土器である。70~72は縫線文が貼り付けられ、口縁部内面に沈線が巡っている。72の地文はL R 縄文である。73・74は深鉢底部で、外面が磨かれ網代痕が残る。75~80は加曾利B I式土器である。75は口縁部に小突起をもち、その外面に棒状工具による小さな刺突が垂下している。内側にも刺突がある。平行沈線がわずかに残っている。弧状の縫線文が貼り付けられ、さらに梢円形の貼り付け文が加わる。口縁内面にも沈線による文様が施文されている。76・77は口縁部の破片で、口縁部内面に沈線が巡っている。76はR L 縄文施文後に沈線を1条施文している。黒褐色で内面もよく磨かれている。77は沈線のみの施文である。78は沈線で区画した文様の内部をL R 縄文で充填している。器面は内外面ともよく磨かれている。79・80は粗製土器である。口縁部に縫線文をもちL R 縄文を地文に平行沈線が施文されている。



第22図 遺構外出土縄文石器

石器（第22図、第8表、図版36） 1・2は石鎚で、凹基式の無茎鎚である。基部をわずかに欠損する。ともに抉りは小さい。1はチャート製で丁寧な調整を行っているが、2は雑なつくりである。3・4は黒曜石製の両極剥片である。石鎚を製作するために、両極打法により小円錐からとられた剥片素材である。5・6はスクレイバーである。円錐の一辺を加工し、調整を加えて刃部をつくりだしている。7は砂岩製の磨製石斧である。全面に丁寧な研磨が行われている。大きく欠損しているが、大型の製品になると考えられる。8～18は磨石類である。使用痕や形状などから、8～10は敲石、11～17は磨石、18は凹石とした。石材は砂岩や流紋岩、安山岩が多く使用されている。9は凝灰岩製で、長軸両端に敲打痕がある。8・10は下端にのみ敲打面をもつ。磨石は両面にくぼみをもち、なかには敲打痕を伴うもの（14・15・17）もある。14・17は被熱している。18は砂岩製で、片面が研磨されている。両面に1か所ずつくぼみをもち、凹石として使用された後、砥石に転用されたと考えられる。19は砂岩製の台石である。大きく欠損しており、表面に敲打痕や磨痕が認められる。20は粘板岩製の石劍である。扁平なつくりで、欠損した基部を二次加工している。

第8表 石器計測表

番号	器種	旧造構番号	遺物番号	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	石鎚	043-59	13	チャート	2.6	1.5	3.3	0.99	凹基
2	石鎚	043-71	1	安山岩	1.5	1.3	3.2	0.60	凹基
3	両極剥片	043-34	3	黒曜石	1.8	1.0	1.1	1.54	
4	両極剥片	043-C3(P)	9(6)	黒曜石	1.4	2.4	1.0	2.14	
5	スクレイバー	043-6	1c	流紋岩	5.2	3.8	1.9	42.28	
6	スクレイバー	043-55	1	ホルンフェルス	4.9	3.5	1.0	20.72	
7	磨製石斧	043-6	1a	砂岩	6.3	7.1	3.5	251.73	
8	敲石	043-70	5	チャート	60.9	5.0	3.8	163.42	
9	敲石	118-23	47	流紋岩	7.0	4.1	3.7	135.16	
10	敲石	043-F3	1	流紋岩	5.0	7.8	2.0	24.12	
11	磨石	043-2D-65	2	流紋岩	8.9	6.8	4.4	355.00	
12	磨石	043-70	3	砂岩	8.0	5.9	5.0	308.74	
13	磨石	043-18	1	砂岩	8.3	4.2	2.8	136.74	
14	磨石	118-16	8	安山岩	9.5	6.9	2.7	242.41	
15	磨石	043-70	2	砂岩	10.9	9.7	6.0	960.00	磨面あり
16	磨石	043-1号塚	1c	安山岩	6.4	8.1	7.1	465.00	磨面あり
17	磨石	043-6	1d	安山岩	10.8	6.4	3.2	307.93	磨面あり
18	凹石	043-44	9	砂岩	9.0	7.8	3.1	285.51	
19	台石	043-4	1a	砂岩	7.9	10.5	4.5	445.00	
20	石劍	118-18	172	粘板岩	8.8	1.9	0.8	19.78	

块状耳飾（第23図、図版36） 1/3の遺存である。表面の調整はやや雑で、色調は明褐色である。外縁部が厚く、中心部に向かって薄くなる。推定径5.2cm、推定孔径1.4cm、最大厚1.6cm、重量は11.84gである。

058号住居跡の覆土中から出土した。



第23図 块状耳飾

## 第4章 古墳時代以降

古墳時代以降は、古墳時代の竪穴住居跡17軒・土坑墓5基・土坑6基、奈良・平安時代の竪穴住居跡49軒・掘立柱建物跡7棟・土坑6基・小鐵冶遺構1基、ピット群、溝状遺構8条、塚1基で構成されている。

### 第1節 竪穴住居跡

#### 1 古墳時代

竪穴住居跡は台地の北側を東西に長く展開している。台地全体の状況を考慮すれば、居住空間を限定的な範囲で利用していることがわかる。集落は出土土器からみて、6世紀前半から始まり7世紀中頃まで断続的に続き、6世紀後半から7世紀前半にかけての時期が、最も竪穴住居跡の軒数が多い。その後、次第に軒数を減少させながら、奈良・平安時代の集落へ移行していく。

##### 008号住居跡（第24図、図版9・37）

調査区の東端、F2グリッドに位置する。カマドのある北壁部分を残して大きく削平されており、全体に遺存状態は悪い。西側部分は007号住居跡と003号溝に重複し、削平されている。

平面形態は方形になると考えられ、規模は7.9m×7.4mと推定される。主軸方位はN-38°-Wである。壁は北壁部分では垂直に掘り込まれ、壁高は現存で3cm～8cmを測る。床面も全体に削平されており、壁溝は確認できなかった。柱穴は北東側を除き、3本検出された。覆土はわずかに暗褐色土が堆積していた。

カマドは壁を35cm掘り込んで、北壁中央に設けられている。砂質粘土で構築された袖部を一部残すのみで、遺存状態は悪い。火床は10cmほど皿状に掘り窪まれている。

出土遺物は少なく、1はカマド内、2は覆土中から出土している。

##### 009号住居跡（第24図、図版9）

調査区の東側、E2グリッドに位置する。全体に削平され、遺存状態は悪い。005号溝と重複する。

平面形態は方形で、規模は4.40m×4.74mを測る。主軸方位はN-56°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は現存で5cm程度である。床面は全体に軟弱である。壁溝（幅12cm～18cm、深さ10cm前後）は、東側と南側の床面で一部確認された。西側床面でピットを1個検出したが、極めて浅く主柱穴とは考えがたい。覆土は暗茶褐色土が薄く堆積していた。

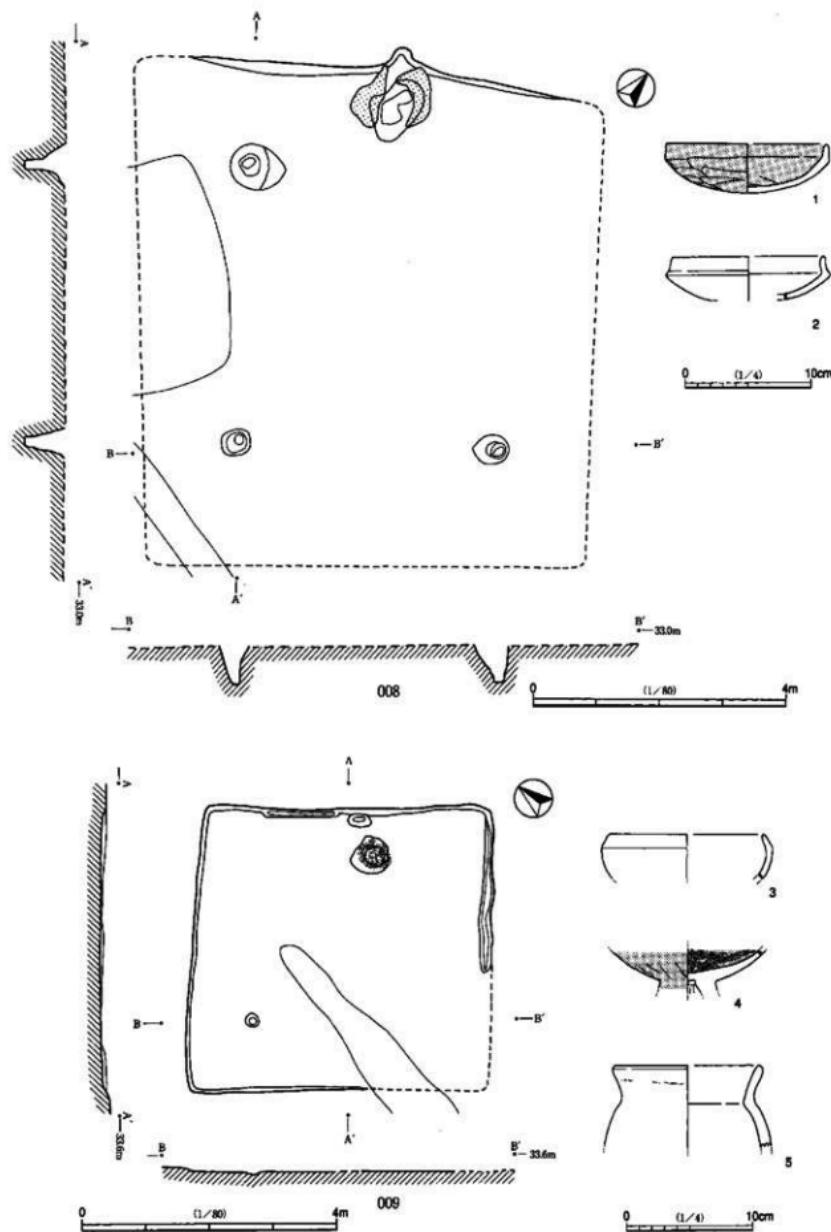
カマドは遺存状態が悪く判然としないが、砂質粘土の範囲や火床の焼土から、東壁中央の南寄りに設けられていたと考えられる。

出土遺物は少なく、覆土中から土師器杯・高杯・甕などがわずかに出土している。

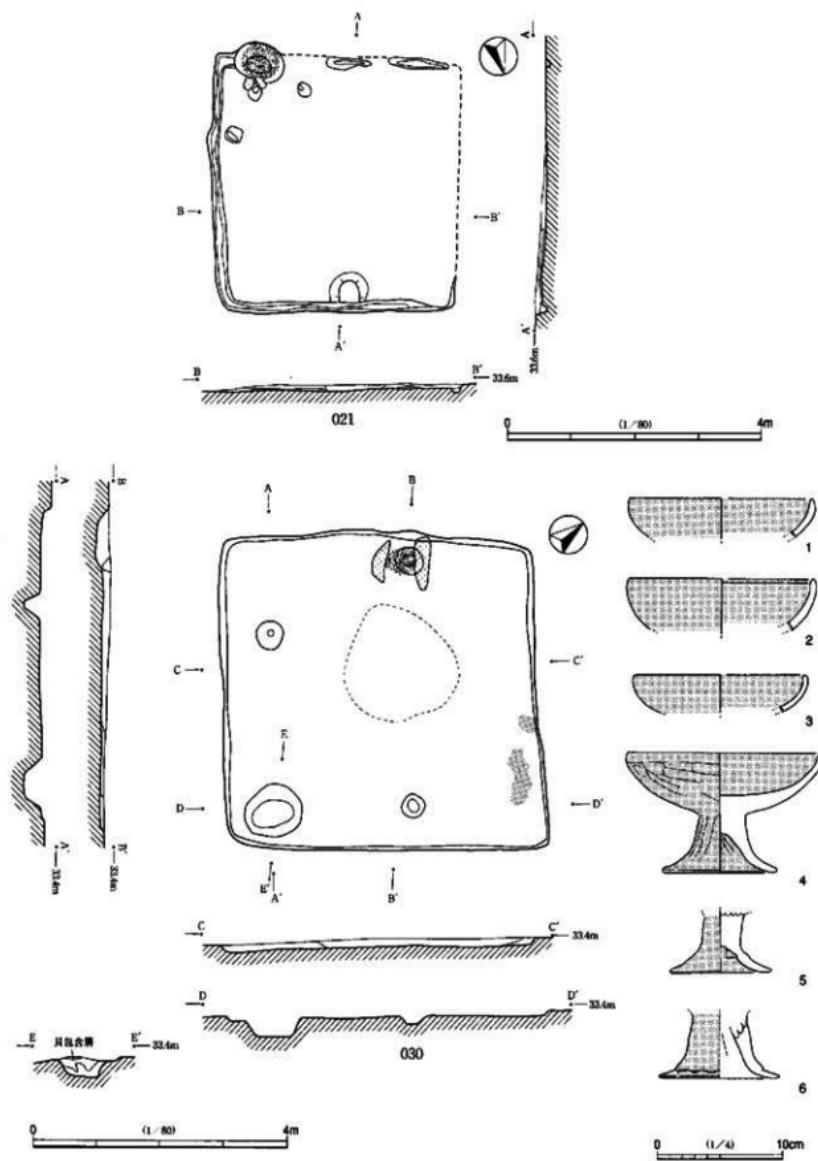
##### 021号住居跡（第25図、図版9）

調査区の東側、E2グリッドに位置する。南壁コーナー付近にカマドが設けられ、特異な形態を示す。西壁側の大部分が削平されており、全体に遺存状態は悪い。

平面形態は方形で、規模は4.04m×3.80mを測る。主軸方位はS-21°-Wである。壁は遺存部分ではほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は現存高で10cm程度である。床面は全体に軟弱で、カマド付近で2個のピットが検出されたが、主柱穴は確認されていない。壁溝（幅16cm～20cm、深さ5cm～8cm）は遺存部分ではほぼ全周する。北壁中央床面にロームをわずかに高く削り出している部分があり、出入り口の踏み台の可能性



第24図 008・009号住居跡及び出土遺物



第25図 021・030号住居跡及び出土遺物

も考えられる。覆土はローム粒を含む暗褐色土が薄く堆積していた。

カマドは南壁コーナー付近に設けられているが、遺存状態は悪く、わずかに袖部の砂質粘土の一部や火床の焼土からその存在が確認できた。

遺物は覆土中からわずかに出土したのみで、図示できるものはなかった。

#### 030号住居跡（第25図、図版9・37）

調査区の中央やや北側、D 2・E 2グリッドに位置する。上面を全体に削平されている。また、東壁付近の床面から炭化材が検出された。

平面形態は方形で、規模は5.04m×5.0mを測る。主軸方位はN-50°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は5cm～10cmを測る。床面中央付近はよく踏み固められ硬化していた。柱穴は不明であるが、出入り口施設に伴うピットが1個検出された。壁溝は認められない。また、南壁コーナー付近に貯蔵穴（幅80cm×90cm、深さ60cm）が付設され、その覆土上面には貝類が少量含まれていた。分析結果については第7節で述べる。この位置に貯蔵穴が設けられているのは、本住居跡のみである。住居跡覆土はローム粒を含む黒色土を主体に、暗褐色土が混在する。

カマドは西壁中央付近に設けられ、壁をわずかに掘り込んでいる。天井部はすでに失われ、袖部の砂質粘土が遺存している。火床には焼土が堆積し、底面は被熱していた。

上面を削平されているため、出土遺物は少ない。4の高杯はカマド前面の床面から出土した。

#### 032号住居跡（第26図、図版9・37）

調査区の中央やや北側、E 2グリッドに位置する。030号住居跡の北東に隣接し、上面はすでに大きく削平されている。

平面形態は方形で、規模は3.46m×3.5mを測る。主軸方位はN-63°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、全体に浅い住居跡で壁高はわずかに5cm程度である。床面は全体に軟弱で、中央部に焼土がわずかに残る。壁溝、柱穴は検出されていない。021号住居跡と同様に、東壁中央床面に出入り口の踏み台の高まりが残る。覆土は暗褐色土が薄く堆積していた。

カマドは西壁中央よりやや北側に設けられ、壁を15cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く、北側の袖部がわずかに残る程度である。

出土遺物は少なく、覆土やカマド内から若干出土している。1の瓶は床面直上からの出土である。

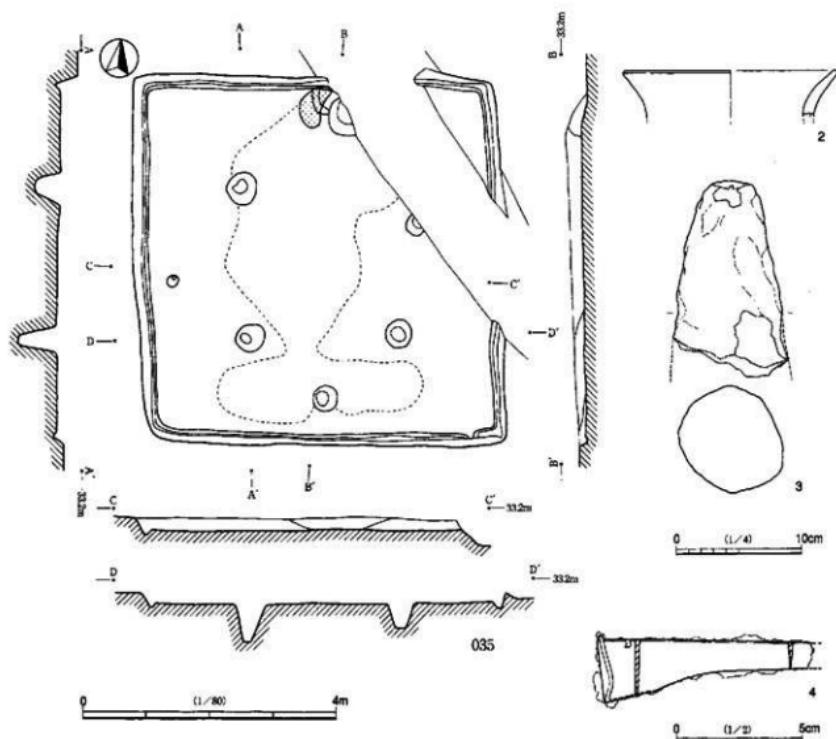
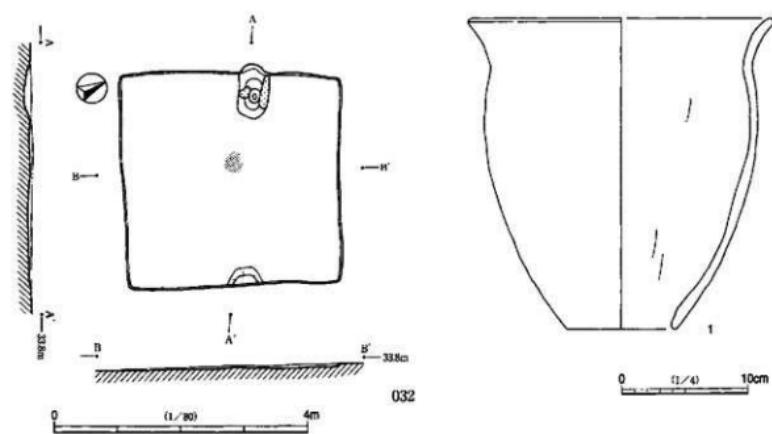
#### 035号住居跡（第26図、図版10・51）

調査区のほぼ中央、D 2・E 2グリッドに位置する。030号住居跡の南に隣接し、北壁、東壁とカマドの一部が004号溝と重複する。

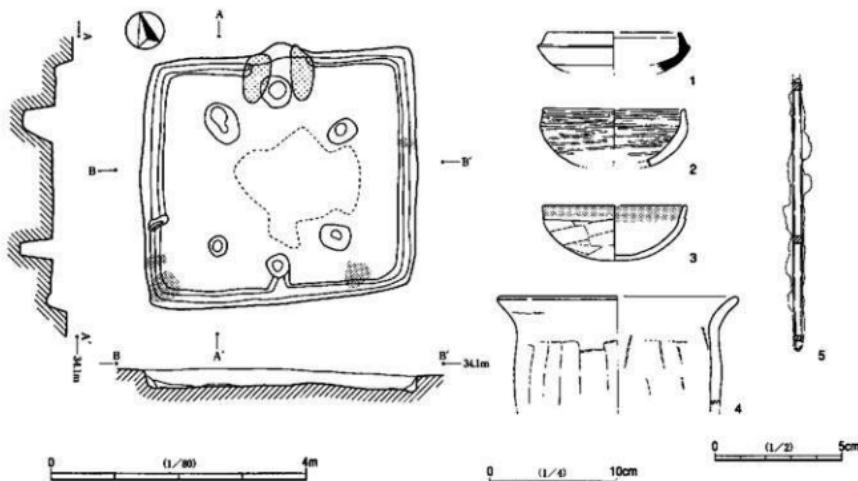
平面形態は正方形で、規模は5.84m×5.84mを測る。主軸方位はN-5°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は10cm～20cmを測る。床面はカマド前面から南壁側にかけて中央部がよく踏み固められている。壁溝（幅10cm、深さ6cm）は南壁の一部を除いてほぼ全周すると考えられる。4本の柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられているが、004号溝により東側を大きく削平されており、西側袖部が遺存している。袖部は砂質粘土で構築され、火床は12cmほど掘り窪まれている。

遺物は少なく、覆土やカマド内から出土している。鎌は南壁に近い覆土中から、壺は覆土中、支脚はカマドからそれぞれ出土した。鎌は小型で通有の形態とは異なり、基端部の折り返しを左側にもつ。先端部



第26図 032・035号住居跡及び出土遺物



第27図 036号住居跡及び出土遺物

を折損している。刃部は元来、直線的に伸びていたと考えられるが、よく研がれ小さく磨り減っている。

現存長8.5cm、刃部現存長6.15cm・幅1.05cm・厚さ0.18cm、折り返しの高さ0.7cm、重量16.96gである。

#### 036号住居跡（第27図、図版10・37・51）

調査区の中央北側、D 2 グリッドに位置する。045号住居跡と重複する。遺存状態は良好である。

平面形態は方形で、規模は3.90m × 4.20mを測る。主軸方位はN - 13° - Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁際の一部に焼土が投棄されている。壁高は18cm～30cmを測り、東側がやや低くなっている。床面は凹凸があり、中央部が硬化している。壁溝（幅20cm、深さ2cm～8cm）はカマド部分を除いて全周し、南壁中央で出入り口施設に伴うピットとなつた。主柱穴4本と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム粒・黒色土粒を含む暗褐色土が主体である。

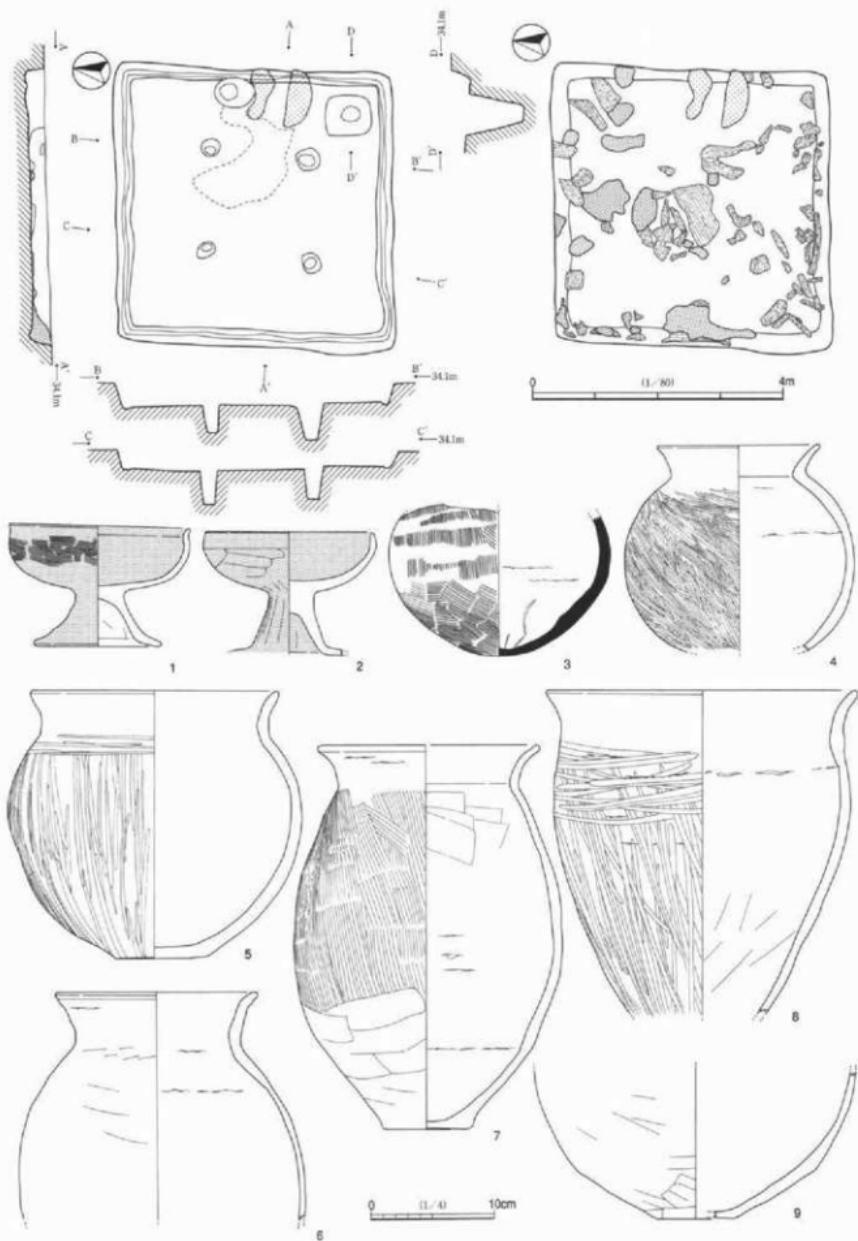
カマドは北壁中央に設けられ、壁を15cm掘り込んで煙道部を形成している。天井部はすでに崩落していたが、袖部の遺存は良い。火床は皿状に浅く掘り込まれている。

出土遺物は少なく、カマド内から2の杯、覆土中から1の須恵器杯、土師器壺や鉄製紡錘車の軸部分などが出土した。紡錘車の軸は現存長10.7cm、断面(3.9mm × 3.0mm)は方形である。

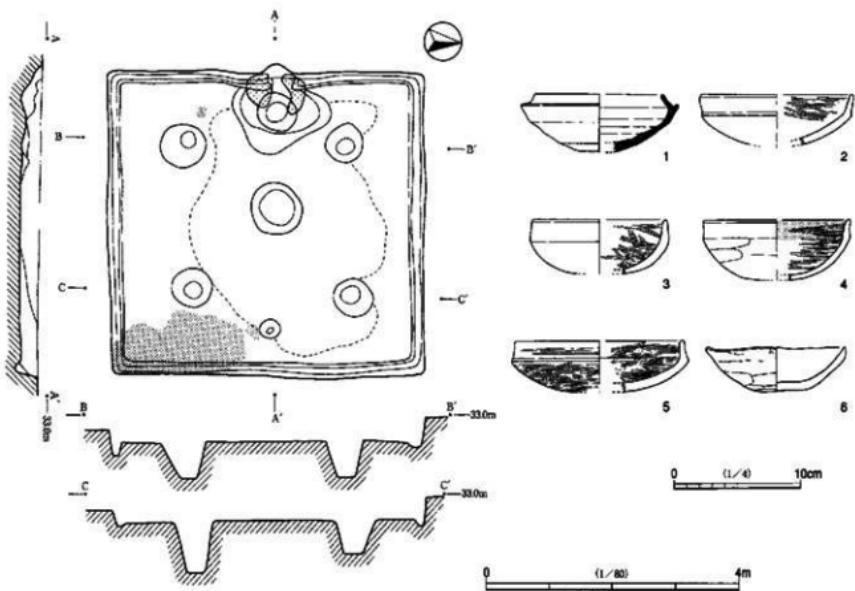
#### 041号住居跡（第28図、図版10・37）

調査区の中央北側、D 2 グリッドに位置する。焼失住居で、炭化材や焼土が全面から検出された。

平面形態はほぼ正方形で、規模は4.50m × 4.42mを測る。主軸方位はN - 87° - Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は20cm～32cmを測る。床面は全体に硬化しているが、特にカマド前面がよく踏み固められている。壁溝（幅20cm、深さ10cm）は全周する。やや内側に寄って4本の柱穴が検出された。カマドの南側に貯蔵穴（一辺70cm、深さ90cm）が付設されている。カマド北側の土坑は貯蔵穴ではなく、本住居跡より新しい。覆土はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土が主体で、部分的に焼土や炭化粒を含んでいる。



第28図 041号住居跡及び出土遺物



第29図 043号住居跡及び出土遺物

カマドは東壁に設けられており、壁をほとんど掘り込んでいない。北側袖部が土坑により壊されているものの、遺存状態は比較的良好である。火床の掘り込みは浅い。2の高杯はカマド内に倒置され、支脚として使用されたと考えられる。

高杯、甕を中心に多くの遺物が出土している。7はカマド南袖部の横、1・3～6は貯蔵穴周辺の床面、8はP4北西の床面、9は覆土中から、それぞれ出土した。

#### 043号住居跡（第29図、図版10・37）

調査区の中央、D 2・D 3グリッドに位置する。南東コーナー付近に焼土が堆積している。

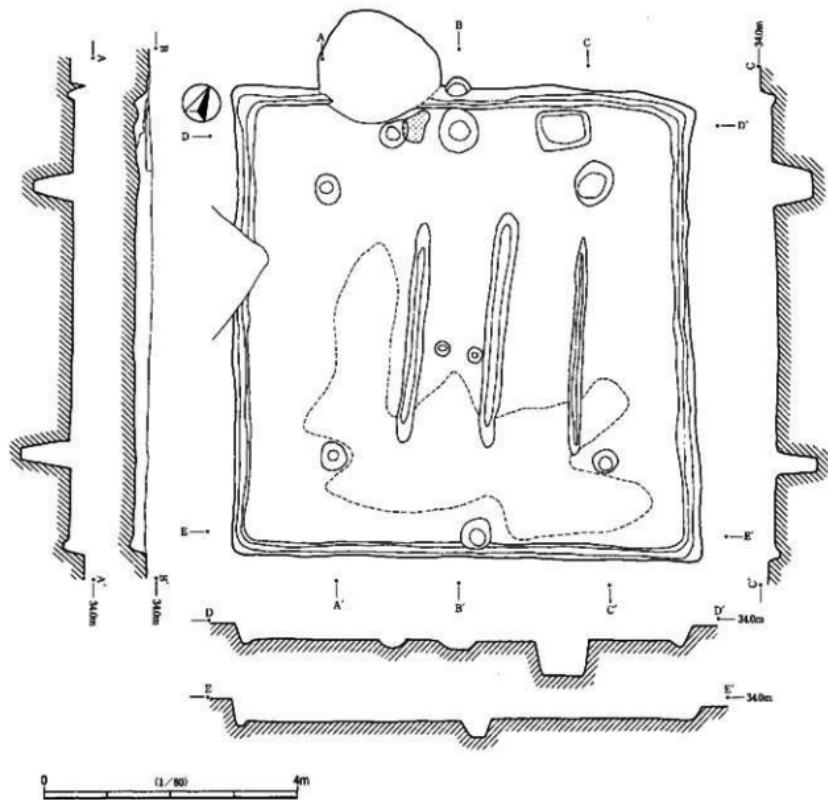
平面形態は方形で、規模は4.86m×5.06mを測る。主軸方位はW-2°-Sである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は20cm～30cmを測る。床面はほぼ平坦で、中央部が広く硬化している。4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。床面中央には梢円形の土坑（径80cm、深さ20cm）が掘り込まれている。壁溝（幅20cm、深さ8cm～18cm）はカマドの部分を除き全周する。覆土は暗褐色土が主体である。

カマドは西壁中央に設けられ、壁を15cm掘り込んでいる。砂質粘土で構築され、袖部を残し天井部はすでに崩落していた。煙道部は緩やかに立ち上がり、火床は15cmほど掘り崖まれている。

出土遺物は少なく、図示した土器は覆土中からの出土である。

#### 045号住居跡（第30・31図、第18表、図版11・37・38・53）

調査区の中央北側、D 2グリッドに位置する。焼失住居で壁際から炭化材や焼土が検出された。西壁の一部を036号住居跡と、北壁とカマドの一部を052号土坑と重複する。



第30図 045号住居跡

平面形態は方形で、規模は $7.46m \times 7.18m$ を測る。主軸方位はN- $27^{\circ}$ -Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は16cm~32cmを測る。中央より南側の床面がよく踏み固められている。壁溝(幅20cm、深さ6cm~8cm)は全周する。主柱穴の4本と出入り口施設に伴うピットを検出した。貯藏穴(86cm×68cm、深さ56cm)はカマドの東側に設けられている。また、床面中央には、東西方向に3基の深い溝が並んで掘り込まれている。覆土は炭化粒・焼土粒を含む暗褐色土が主体である。

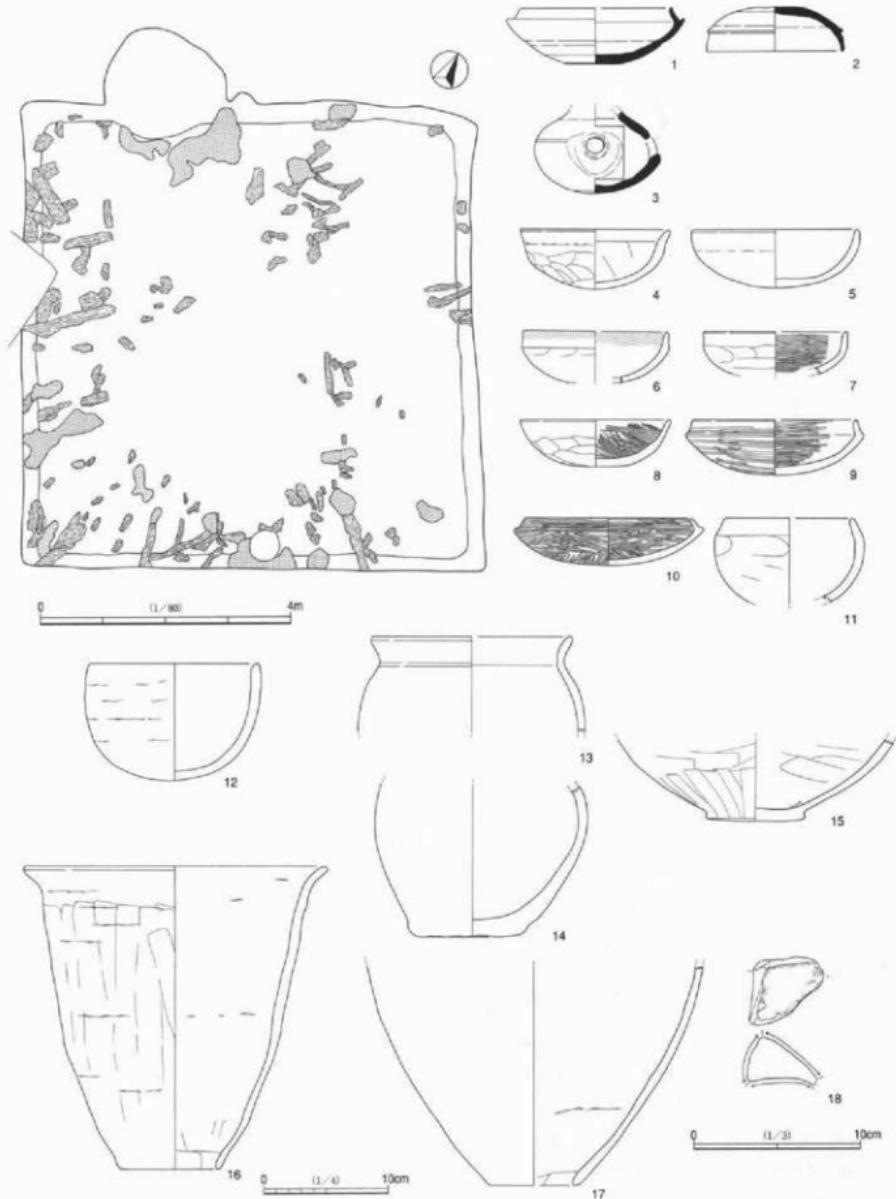
カマドは北壁中央に設けられ、壁を15cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く、西側の袖部がわずかに残っていた。火床は12cmほど皿状に掘り窪められている。

遺物はカマド周辺や壁際から多く出土している。2・4・5・12・14・17・18は床面上から、その他は覆土中からの出土である。砥石の計測値等は第18表にまとめた。

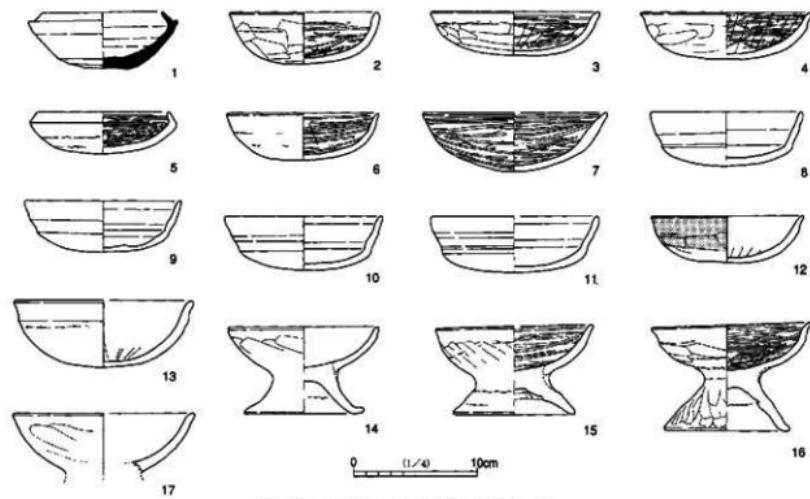
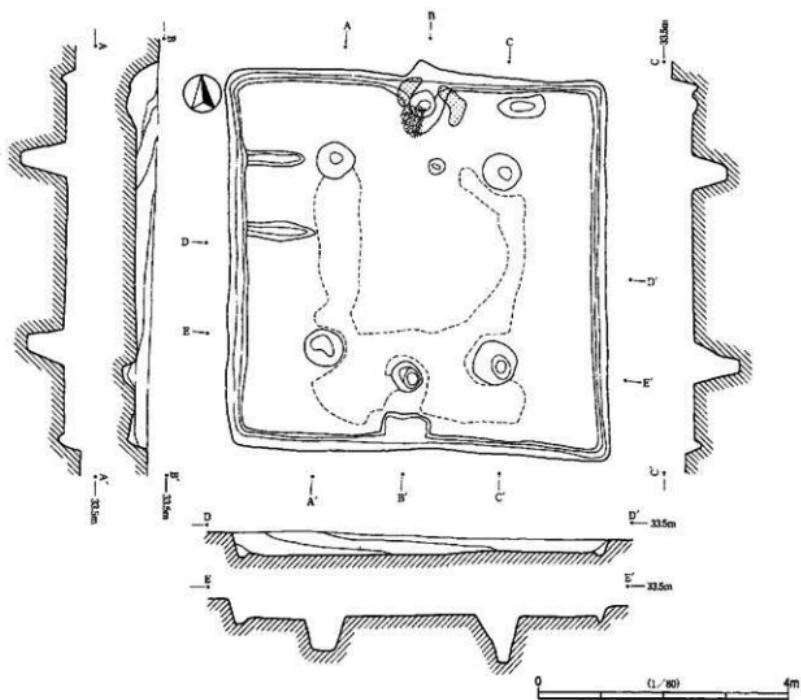
#### 046号住居跡 (第32・33図、第18表、図版11・38・39・53)

調査区の中央、D 2 グリッドに位置する。059号住居跡と重複している。

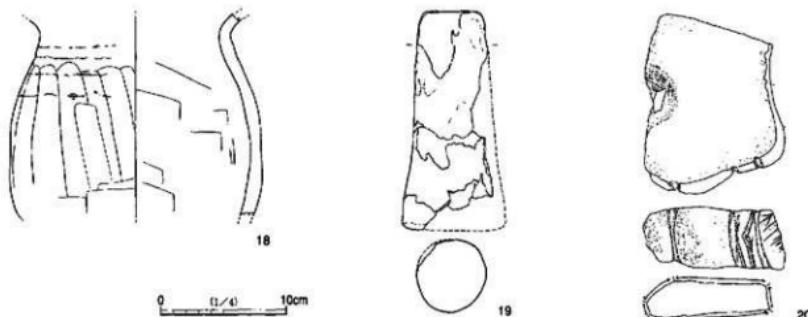
平面形態はほぼ正方形で、規模は $6.04m \times 6.06m$ を測る。主軸方位はN- $6^{\circ}$ -Eである。壁は垂直に掘り



第31図 045号住居跡出土遺物



第32図 046号住居跡及び出土遺物 (1)



第33図 046号住居跡出土遺物 (2)

込まれ、壁高は20cm~34cmを測る。床面は中央部でやや窪んでいる。柱穴周辺が硬化している。壁溝(幅15cm、深さ6cm~12cm)はカマド部分を除いて全周し、南壁側中央では一部方形に広がる。主柱穴4本と出入り口施設に伴うピットを検出した。カマド東側には、浅い不整形の貯蔵穴(75cm×30cm、深さ32cm)が設けられている。覆土は暗褐色土が主体であるが、ローム粒を含む暗褐色土も壁際に流れ込んでいる。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を15cmほど掘り込んでいる。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部の砂質粘土がわずかに残っていた。煙道部は緩やかに立ち上がり、火床は皿状に10cm掘り込まれている。

遺物は床面を中心に土器師杯・高杯などが多く出土している。カマドから北東コーナー付近にかけての範囲と、南壁中央付近の床面に集中している。砥石の計測値等は第18表にまとめた。

#### 054号住居跡（第34図、図版12・39）

調査区の中央北側、D 1・D 2 グリッドに位置し、041号住居跡と隣接する。壁際に焼土が一部堆積している。

平面形態はほぼ正方形で、規模は6.70m×6.78mを測る。主軸方位はN-67°-Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は8cm~20cmと浅い。床面はカマド前面などが一部硬化しているが、全体に軟弱である。壁溝は検出されていない。主柱穴は4本検出した。カマド南側に貯蔵穴(径50cm×55cm、深さ80cm)が設けられている。覆土はローム・ブロックを含む黒色土がまず堆積し、その上にローム粒を含む暗褐色土が堆積していた。

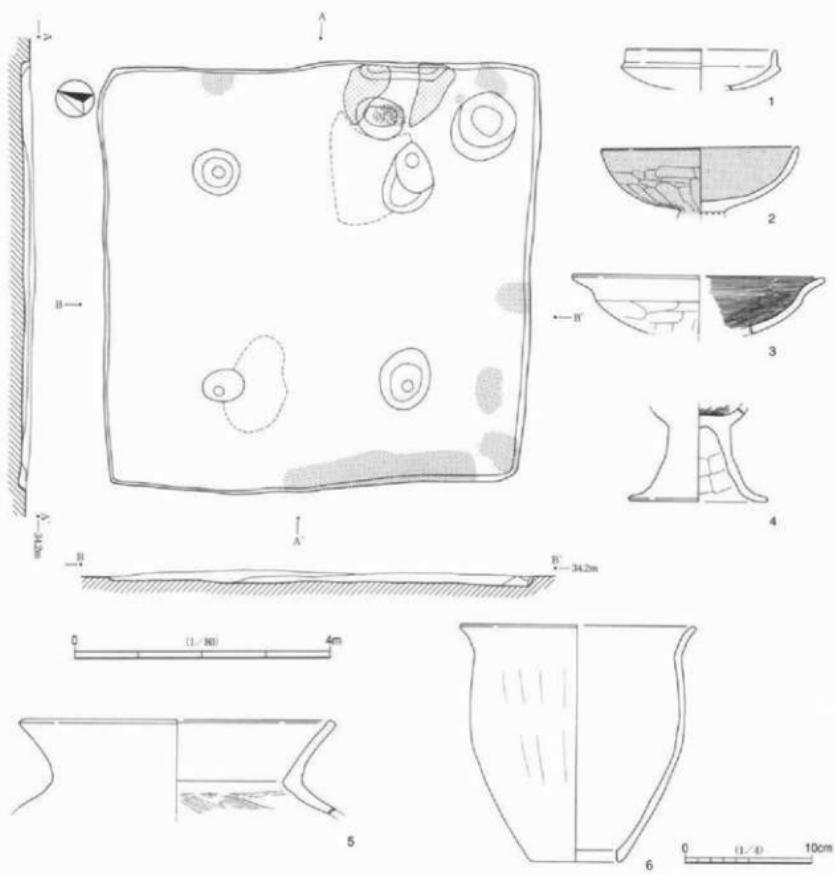
カマドは東壁中央より南側に設けられている。壁への掘り込みはない。遺存状態は悪く、砂質粘土で構築された袖部が残っている。火床は10cm掘り窪められ、焼土が堆積していた。

出土遺物は少ない。2は北コーナー付近の床面から、5がカマド内から検出された他は、覆土からの出土である。5は腰東型の甕で、周辺では有吉遺跡、高沢遺跡などからも出土している。

#### 058号住居跡（第35・36図、第9表、図版12・39・40・51・53）

調査区の北西部、C 2 グリッドに位置する。北西コーナー付近が一部削平されている。南壁中央が張り出し、貯蔵穴が設けられている。この形態の住居跡は本遺構のみで、本遺跡では最大の住居跡である。

平面形態はほぼ正方形で、規模は10.46m×10.26mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。壁はほぼ垂

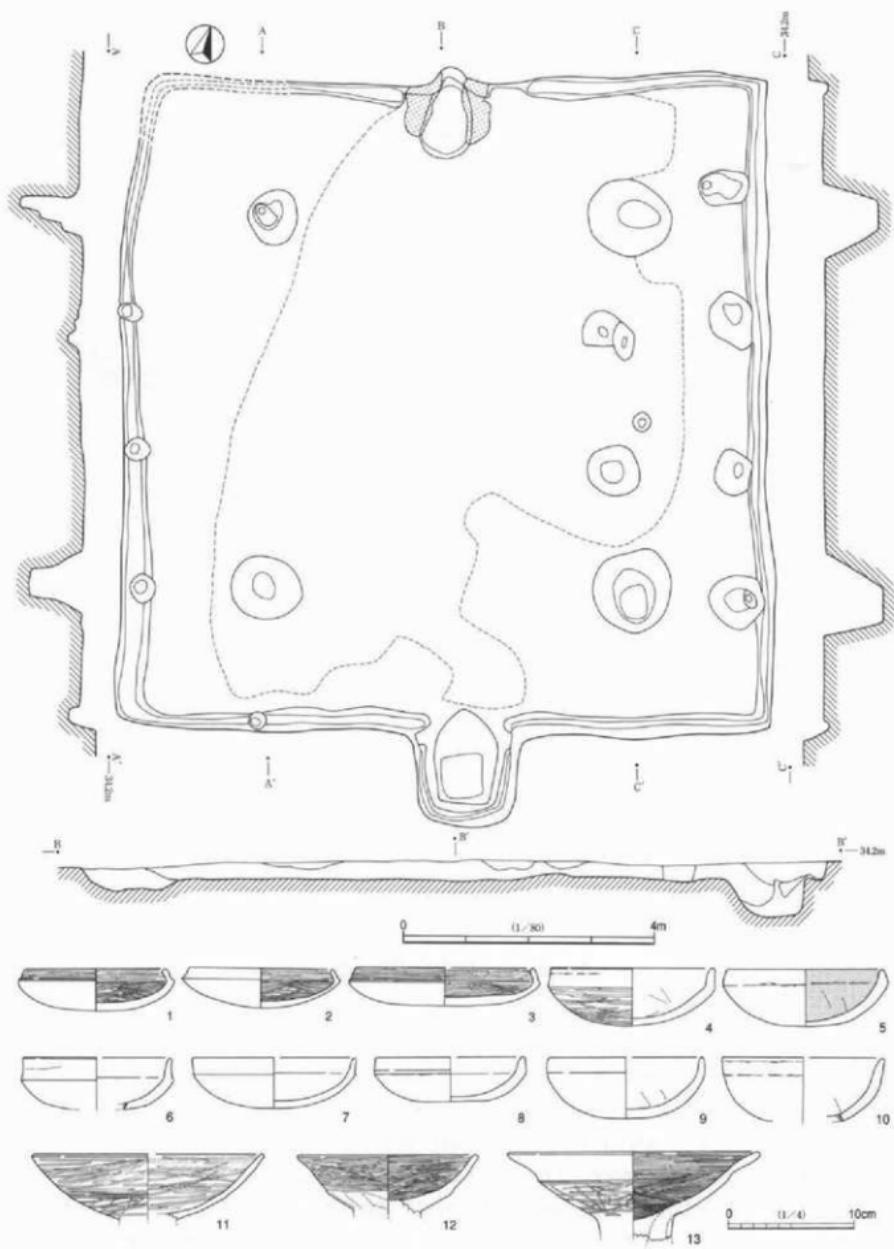


第34図 054号住居跡及び出土遺物

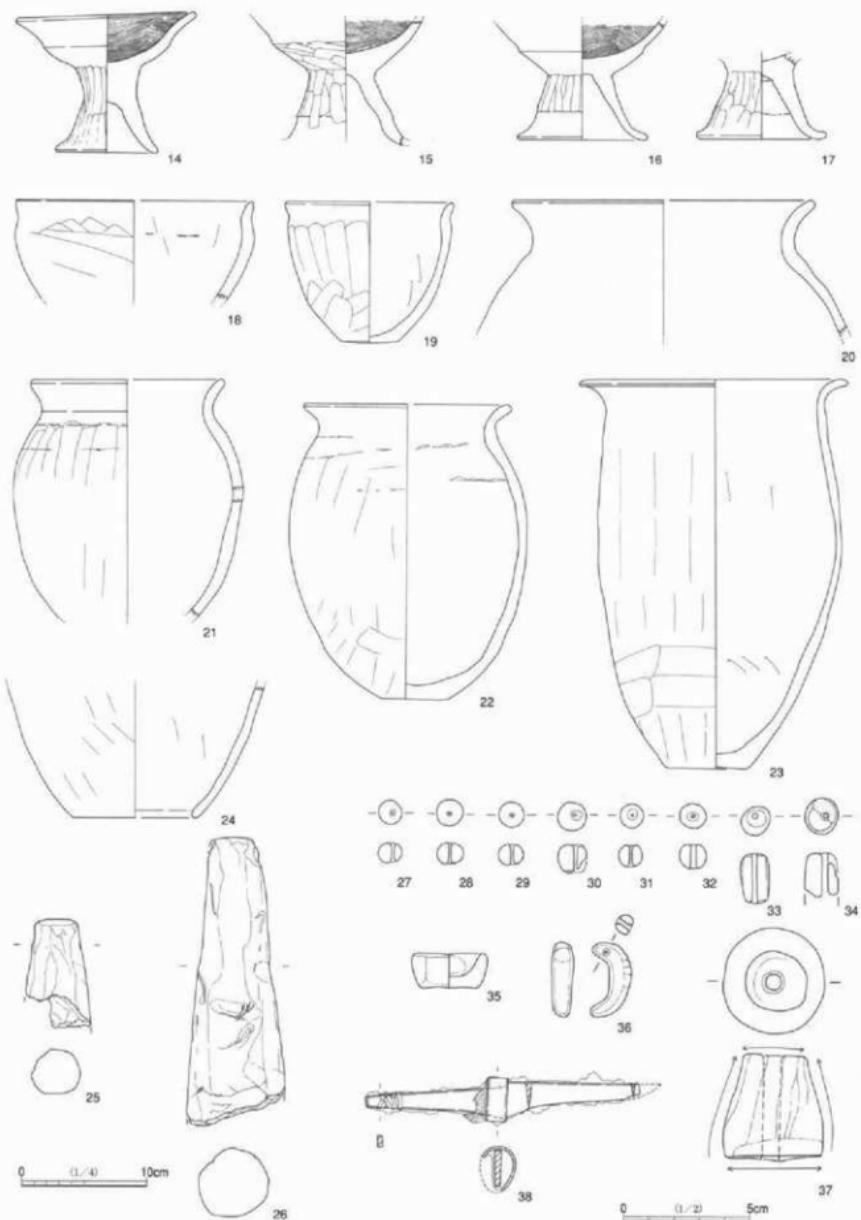
直に掘り込まれ、壁高は14cm～30cmと北側が低くなっている。床面はカマド前面から張出部付近にかけて広く踏み固められている。壁溝(幅20cm、深さ3cm～8cm)は、カマド部分を除いて全周する。4本の主柱穴の他に、東壁に沿って4本のピット(径60cm～80cm、深さ23cm～44cm)が並ぶ。貯藏穴(100cm×150cm、深さ60cm)は不整形で、南壁張出部に設けられ、周囲に溝が巡る。住居覆土はローム粒を含む暗黄褐色土が主体であるが、貯藏穴内にはローム粒を多く含む黄褐色土が流れ込んでいた。

カマドは北壁中央に設けられ、櫛を30cm掘り込んでいる。遺存状態は、天井部がすでに崩落していたが比較的良好である。煙道部は緩やかに立ち上がる。火床は11cm掘り込まれ、焼土が堆積していた。

遺物は土師器杯・高杯・甕等の他に、土製勾玉・管玉・丸玉・紡錘車、刀子などが出土した。特に、東



第35図 058号住居跡及び出土遺物 (1)



第36図 058号住居跡出土遺物 (2)

壁際から南壁際にかけての床面に集中している。38の刀子は覆土中からの出土である。刀子は切先を折損しているが、鍔や柄の木質部の一部は残存していた。また、茎の先端近くには、植物の纖維が螺旋状に巻き付いている。刃部はよく研がれ、磨り減っている。現存長10.88cm、身は現存長5.28cm・幅1.05cm・厚さ0.26cm、茎は長さ5.6cm・幅0.42cm・厚さ0.2cm、鍔は長さ1.8cm・幅は推定1.4cm、重量12.97gである。土製勾玉は、長さ3.0cm・幅0.9cm・厚さ0.9cm・孔径0.1cm、重量2.91gである。土製紡錘車は上面径2.5cm・下面径4.0cm・厚さ4.2cm・孔径0.6cm、重量69.69gである。玉類の計測値は第9表にまとめた。

第9表 玉類計測表 (現存値)

番号	遺物番号	種類	最大径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)
27	2	丸玉	0.90	0.80	0.10	0.64
28	3	丸玉	1.10	0.80	0.10	1.02
29	5	丸玉	1.00	0.80	0.10	0.83
30	12	丸玉	1.10	1.10	0.10	1.09
31	29	丸玉	0.90	0.90	0.10	0.77
32	30	丸玉	1.00	0.90	0.10	1.08
33	31	管玉	2.00	1.20	0.20	2.88
34	4	管玉	1.60	1.40	0.20	3.27

#### 059号住居跡（第37・38図、第18表、図版12・40・53）

調査区の中央、D 2 グリッドに位置する。北側を048号住居跡、南側を046号住居跡と重複する。平面形態はほぼ正方形で、規模は8.26m × 8.44mを測る。主軸方位はN - 30° - Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は20cm～46cmを測り、南側が低い。床面は全体によく踏み固められているが、中央部では長方形に削平されている。壁溝（幅20cm、深さ7cm～11cm）は遺存部分では全周する。3本の主柱穴と出入り口施設に伴うビットが確認されているが、その他にも深さ20cm前後のビットを検出した。カマドの東側に長方形の貯蔵穴（75cm × 105cm、深さ62cm）が設けられている。覆土は小ローム・ブロックを含む暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。048号住居跡に大きく削平されており、西側の袖部がわずかに遺存していた。火床は皿状に7cmほど掘り窪まれ、焼土が一部残っていた。

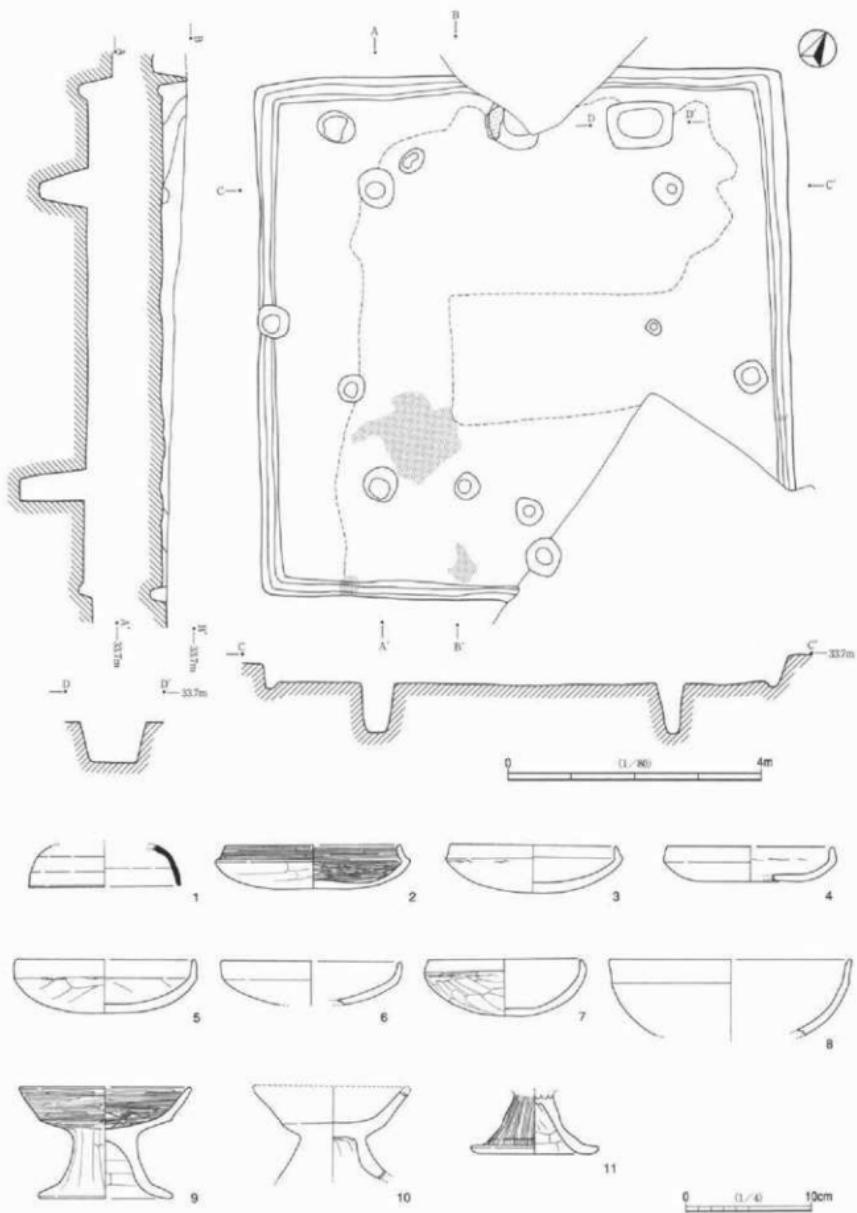
出土遺物は多くないが、壁際の床面を中心に土師器杯・高杯などが出土している。3・10は床面から、15は貯蔵穴北側の壁際床面からそれぞれ出土した。砥石の計測値等は第18表にまとめた。

#### 101号住居跡（第39図、図版13・40）

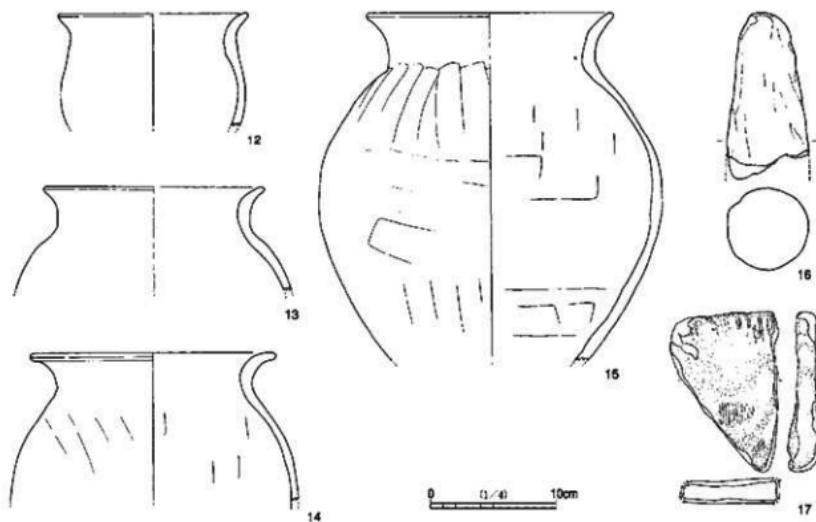
調査区北西端、C 1 グリッドに位置し、斜面にかかって構築されている。北側はすでに大きく削平されカマドは失われているが、南壁の全部と東西壁の一部は遺存している。

平面形態は方形になると考えられ、規模は現存で4.2m × 5.21mを測る。主軸方位はN - 39° - Wである。南壁は垂直に掘り込まれ、壁高は48cmを測る。床面は中央部にやや硬化している面が確認された。壁溝（幅20cm、深さ3cm）は東壁の一部から南壁にかけて巡っている。主柱穴は4本検出されているが形態、深さとも不統一である。覆土には暗茶褐色土が堆積していた。

遺物は覆土から土師器杯・高杯・甕などが多く出土している。ほとんど破片で、図示できたのは5点である。



第37図 059号住居跡及び出土遺物 (1)



第38図 059号住居跡出土遺物 (2)

#### 115号・116号住居跡 (第40図、図版13・40・53)

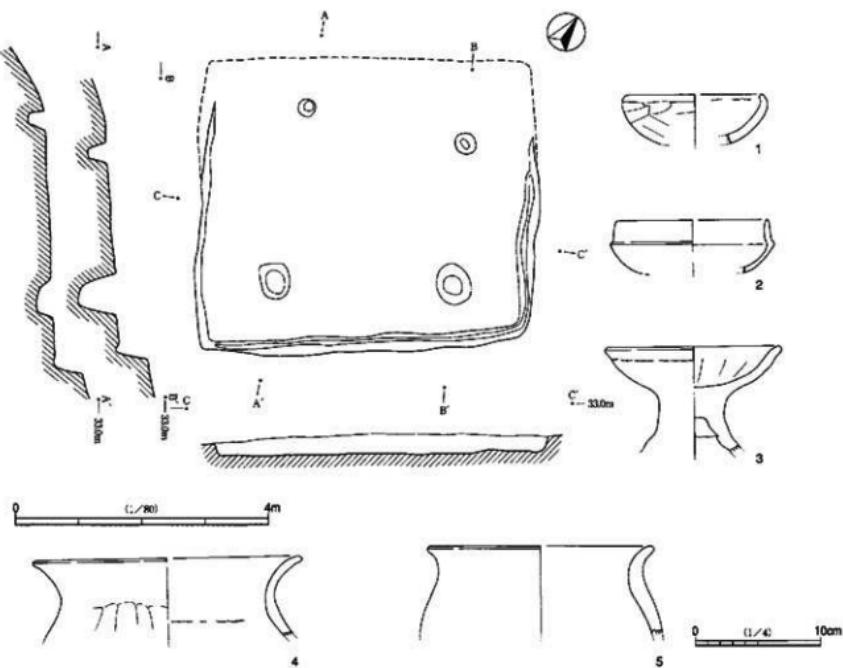
調査区北西端、C 1 グリッドに位置する。ともに削平されており、遺存状態は悪い。

115号住居跡は大半が失われ、南東側の一部が残存しているにすぎない。遺存部分では、柱穴・壁溝等は検出されていないが、遺物は土師器杯・壺が覆土を中心に多く出土している。いずれも破片で図示できたのは3点のみである。両住居跡とも覆土は暗褐色土が薄く堆積していた。

116号住居跡は、南西側で017号住居跡と重複し、西側が大きく失われている。平面形態は方形になると考えられ、規模は現存で5.45m × 4.7mを測る。残存する壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は東壁側で10cm～14cmを測る。床面は全体に軟弱で、壁溝(幅20cm、深さ5cm～8cm)は北壁から東壁の一部に巡る。主柱穴は4本検出された。カマドは確認されなかったが、P1とP2の中間に焼土を検出した。遺物は少なく、覆土中からわずかに土師器片などが出土した。図示できたのは4の丸玉(径1.1cm × 1.2cm、孔径1mm、重量145g)のみである。

#### 2 奈良・平安時代

奈良から平安時代の竪穴住居跡は台地全体に展開するようになる。掘立柱建物跡も伴い、本遺跡では最も繁栄した時代である。時期は出土土器から、8世紀前半から9世紀後半まで続いている。区域では大きく、東側、中央から西側、南側の3群に分かれて広がりをみせる。さらにその群のなかの消長も、時期によって変遷が認められる。また、墨書き土器の出土も比較的多く、詳細については第5章にまとめた。



第39図 101号住居跡及び出土遺物

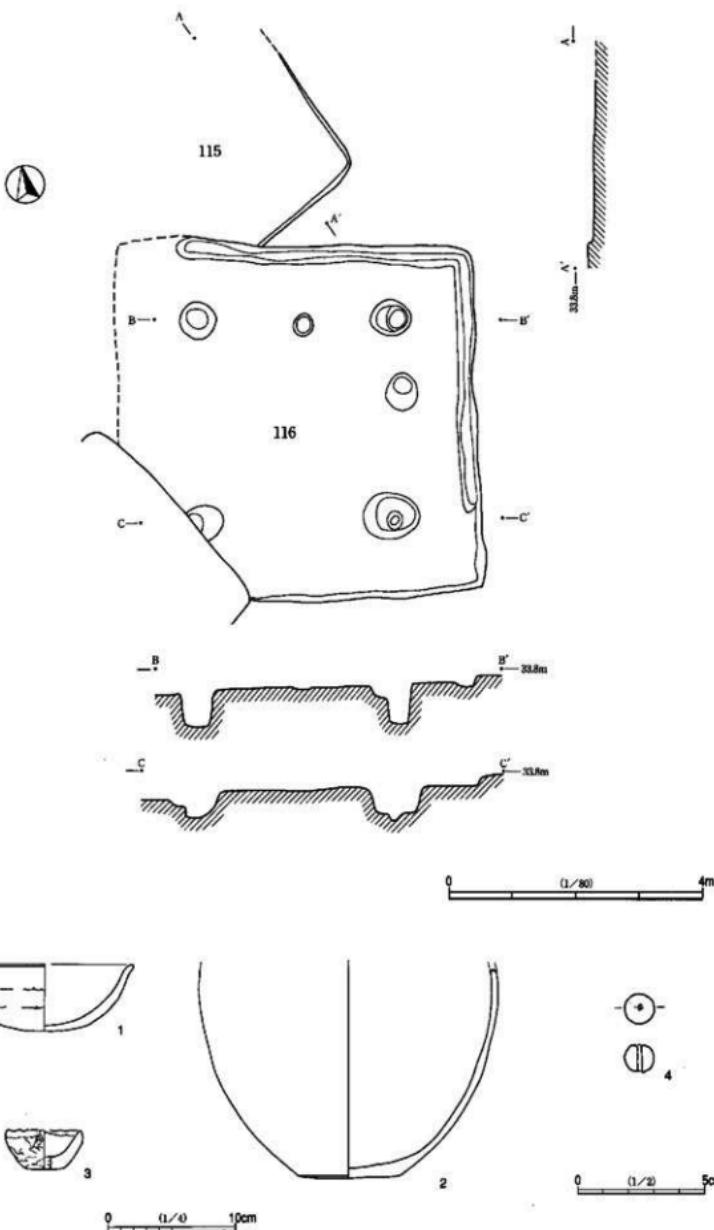
002号住居跡（第41図、図版13・41・52）

調査区の東端、E 2・F 2グリッドに位置する。004号溝と重複し、溝を一部削平している。

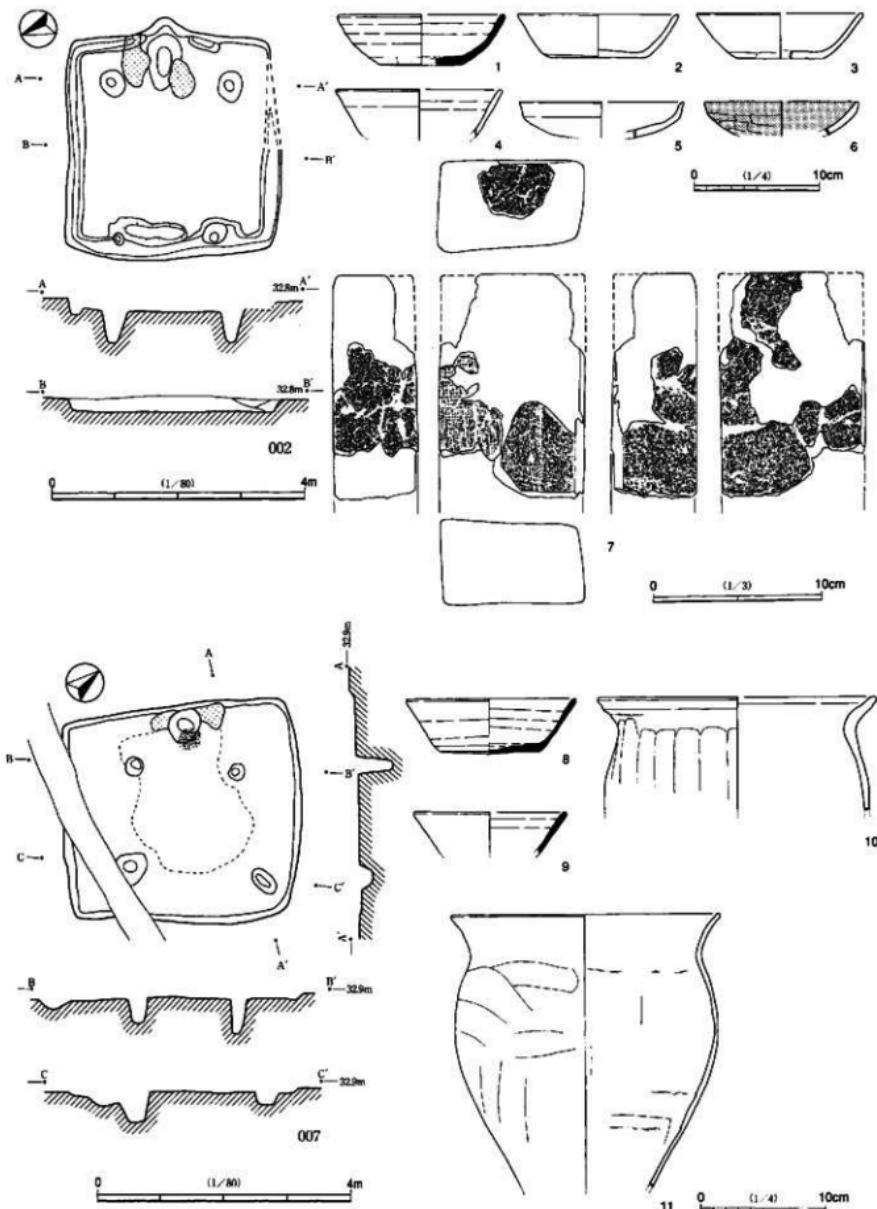
平面形態は方形で、規模は3.56m × 3.36mを測る。主軸方位はE -21° - Sである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は10cm～18cmを測る。床面は全体に軟弱で、硬化面はない。壁溝（幅20cm、深さ2cm～10cm）は南コーナー付近を除いて全周する。主柱穴は4本検出され、西側の2本は壁溝にかかっている。西壁際の浅い落ち込みには砂質粘土が充填されていた。出入り口施設に伴う可能性もある。覆土は焼土粒・炭化粒を含む暗茶褐色土を主体に、小ローム・ブロックが混在する。

カマドは東壁中央に設けられ、壁を30cm掘り込んでいる。上面の一部で機乱を受け、南側袖部の一部が欠損している他は、遺存状態は比較的良好である。煙道は緩やかに立ち上がる。火床は皿状に5cmほど浅く掘り窪まれ、底面はよく焼けていた。

遺物は少なく、2は西壁際から、刀子（第80図10）は北西コーナー床面から出土した。5・6は混入した古墳時代の土器である。7は壇である。カマド内から出土した。全面に二次焼成を受け、下端部は欠損し、遺存状態は悪い。片面に布目痕が残る。現存長13.1cm、幅8.5cm、厚さ5.1cm、重量は448.7gである。型に粘土を詰め成形したと考えられる。布目は型の下面に敷いていた布の痕跡であろう。側面の一部は肩に丸



第40図 115・116号住居跡及び出土遺物



第41図 002・007号住居跡及び出土遺物

味をもつが、その他の面はヘラ削り後ナデ調整されている。胎土には砂粒を含み、色調は二次焼成のため全体に明褐色から橙色である。

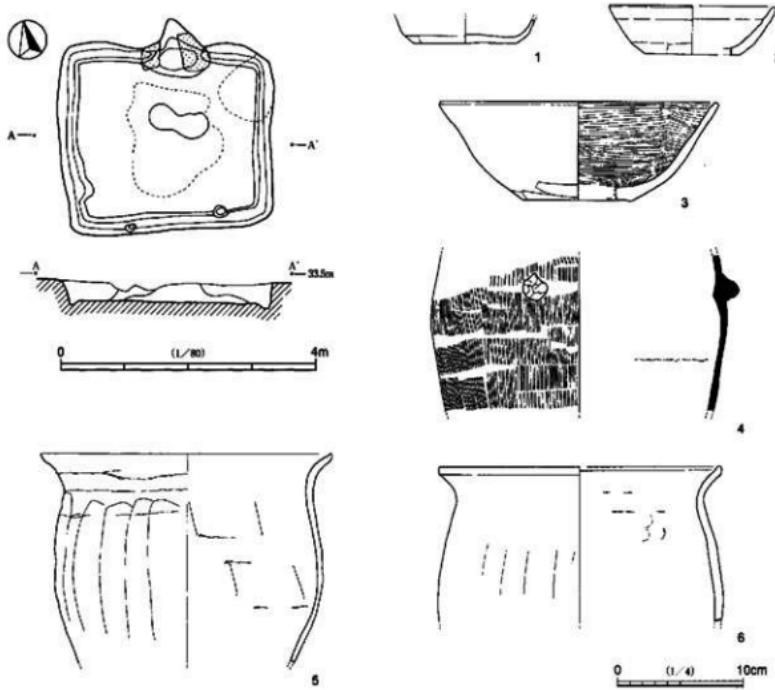
#### 007号住居跡（第41図、図版13・41）

調査区の東端、F 2 グリッドに位置する。008号住居跡と003号溝と重複し、上面が削平されている。

平面形態は北東壁が西南壁より長い不整方形で、規模は $3.51\text{m} \times 3.58\text{m}$ を測る。主軸方位は $N - 52^{\circ} - W$ である。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は遺存の良い箇所で10cm程度である。床面はカマド前面から中央にかけて硬化面が広がる。壁溝は確認されていない。支柱穴は4本検出された。覆土は暗褐色土が薄く堆積していた。

カマドは北西壁中央に設けられ、壁への掘り込みはない。遺存状態は悪く、砂質粘土の範囲から袖部の位置を推定した。火床は皿状に6cm掘り窪まれ、焼土が堆積していた。

出土遺物は少ない。11の土師器壺は北コーナー付近の床面、8の須恵器杯は覆土中からそれぞれ出土した。



第42図 010号住居跡及び出土遺物

#### 010号住居跡（第42図、図版14・41）

調査区の東側、E 2 グリッドに位置する。本遺構の中央を005号溝が南北に走り、上面の一部が削平されている。また、床面中央の一部は擾乱されている。

平面形態は方形で、規模は $2.94m \times 3.20m$ を測る。主軸方位はN-7°-Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は30cmを測る。床面は中央部が硬化している。壁溝（幅20cm、深さ8cm）はカマド部分を除いて全周する。主柱穴と考えられるピットは検出されていない。覆土はローム・ブロックやローム粒を多く含む暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を45cm掘り込んでいる。上面の一部が擾乱を受けたが、遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに崩落していたが、砂質粘土で構築された袖部の遺存は良い。煙道部は緩やかに立ち上がる。火床は皿状に10cm掘り窪まれているが、焼土層の堆積は薄い。

遺物は土師器杯・壺や須恵器瓶などが、カマドの東側から北東コーナーにかけてまとめて出土している。

#### 016号住居跡（第43図、図版14）

調査区の東側、E 2 グリッドに位置する。上面の大半がすでに削平されており、遺存状態はかなり悪い。カマドの残存部分や壁溝などから、わずかに存在が確認できた。

平面形態は方形になると考えられ、規模は現存で $3.1m \times 3.42m$ を測る。主軸方位はN-72°-Wである。床面は中央部に硬化面が残っていた。壁溝（幅10cm～20cm、深さ2cm～7cm）は遺存部分ではカマドの周辺を除いて巡っている。柱穴等は検出されていない。覆土はわずかに暗褐色土が堆積していた。

カマドは西壁中央に設けられていたが、天井部・袖部ともすでに失われ、火床が一部遺存していた。

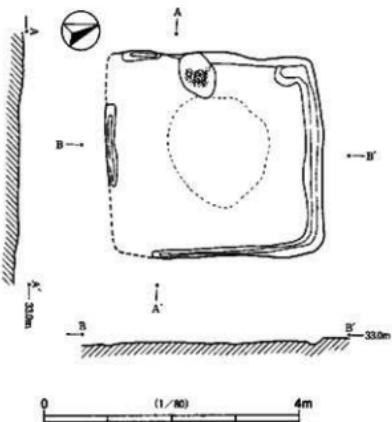
遺物は覆土、カマド内から少量出土しているが、図示できるものはなかった。カマド内から出土した須恵器片で時期を判断した。

#### 017号住居跡（第44図、図版14・41）

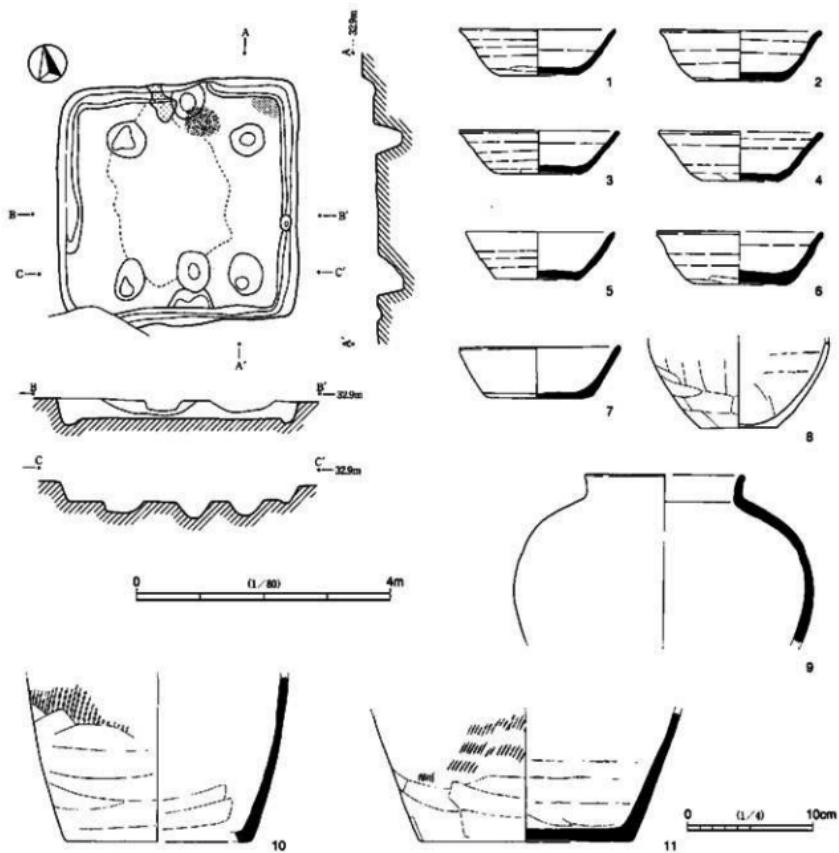
調査区の東側、E 2 グリッドに位置する。遺構上面の中央を南北方向に005号溝が走り、南西コーナーが削平されている。

平面形態は正方形で、規模は $3.80m \times 3.80m$ を測る。主軸方位はN-13°-Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は遺存の良い箇所で16cm～20cmを測る。床面は中央部分が広く踏み固められている。壁溝（幅20cm、深さ2cm～6cm）はカマド部分と南西コーナー付近を除いて巡っている。4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。南壁中央床面には高さ5cmの踏み台状の高まりが認められる。覆土はローム粒を含む暗黄褐色土が主体である。

カマドは壁をわずかに掘り込み、北壁中央に設けられていた。005号溝に大きく削平され、袖部が一部遺存しているにすぎない。火床は浅いが、底面は比較的よく被熱していた。



第43図 016号住居跡



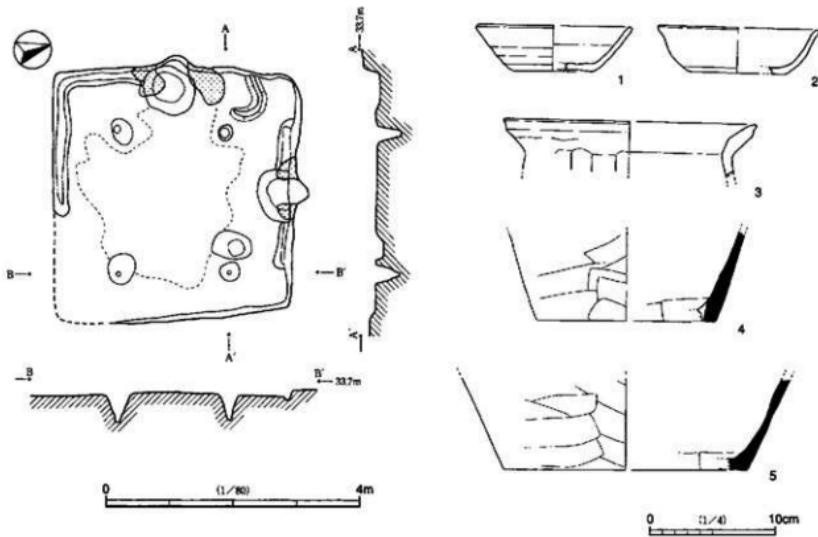
第44図 017号住居跡及び出土遺物

出土遺物は少ない。覆土から床面にかけて、須恵器杯や鉄鏃などが出土している。特に、北東コーナーの壁溝からは2・5・8がまとまって出土した。刀子(第80図15)は覆土中からの出土である。

#### 019号住居跡 (第45図、図版14)

調査区の東側、E 2グリッドに位置する。西壁と北壁に2基のカマドが付設され、西壁側の方が新しい。東壁から南壁にかけて一部削平されており、南東コーナー付近が失われている。

平面形態は正方形で、規模は3.92m × 3.90mを測る。主軸方位はN-77°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は遺存の良い箇所でも10cm程度である。床面は中央部に硬化面が広がっているが、全体に凹凸がみられる。壁溝(幅20cm、深さ6cm)は東壁以外の箇所に部分的に巡っている。主柱穴は4本検出され、



第45図 019号住居跡及び出土遺物

P3の北側にも深さ45cmのピットが穿たれている。西カマドの北側には土手状の高まりがあり、内側はやや掘り窪まれている。覆土は暗褐色土が薄く堆積していた。

カマドは2基存在する。カマドAは新たに壁を20cm掘り込み、西壁中央に設けられている。天井部がすでに崩落していたが、袖部は比較的良好に遺存していた。煙道部は急に立ち上がり、火床は浅い皿状に掘り窪まれている。先につくられたカマドBは壁を20cm掘り込んで、北壁中央に設けられていた。袖部がわずかに遺存している程度である。煙道部は緩やかに立ち上がり、火床は浅い。

出土遺物は少ない。2の土師器杯はカマドA、3の土師器甕と5の須恵器甕はカマドBからそれぞれ出土している。他に、鉄製品(第81図37)が北東コーナーの床面から出土した。

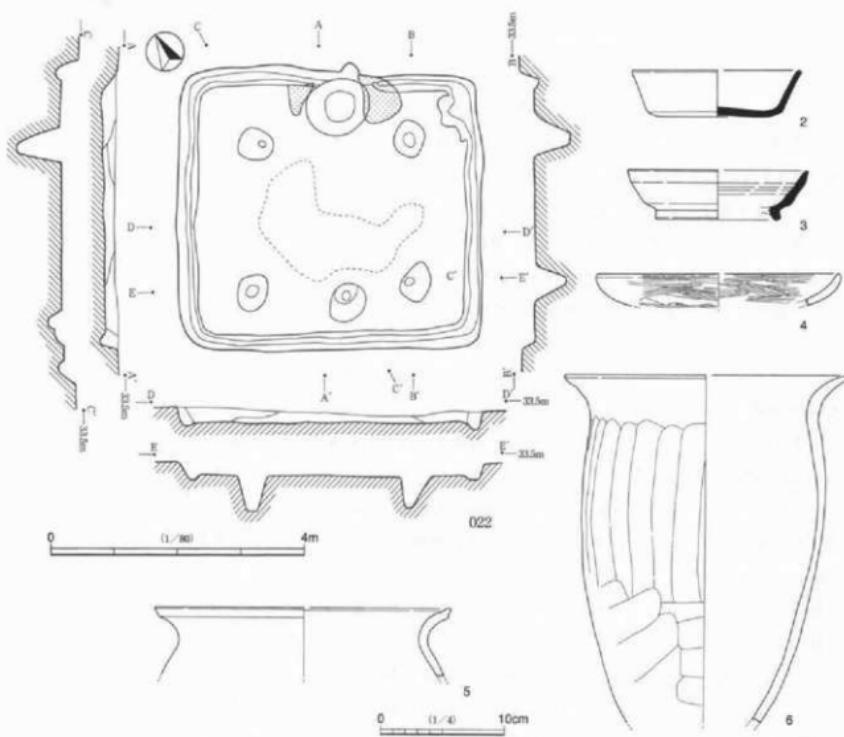
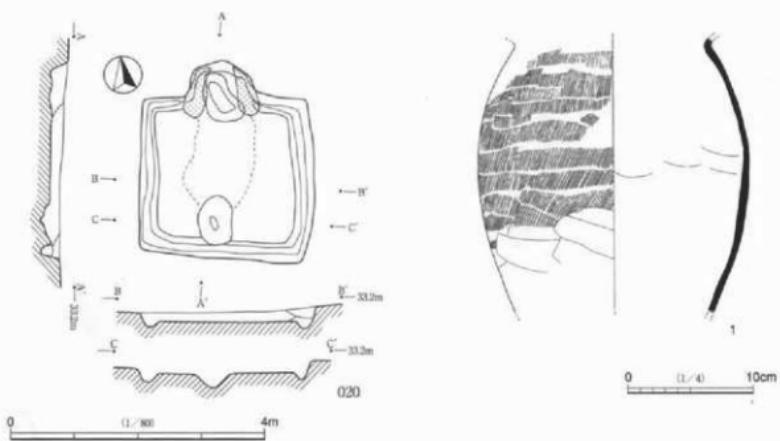
#### 020号住居跡 (第46図、図版14)

調査区の東側、E 2グリッドに位置する。遺構の上面中央を東西に003号溝が走るが、ほとんど削平されず遺存状態は良好である。

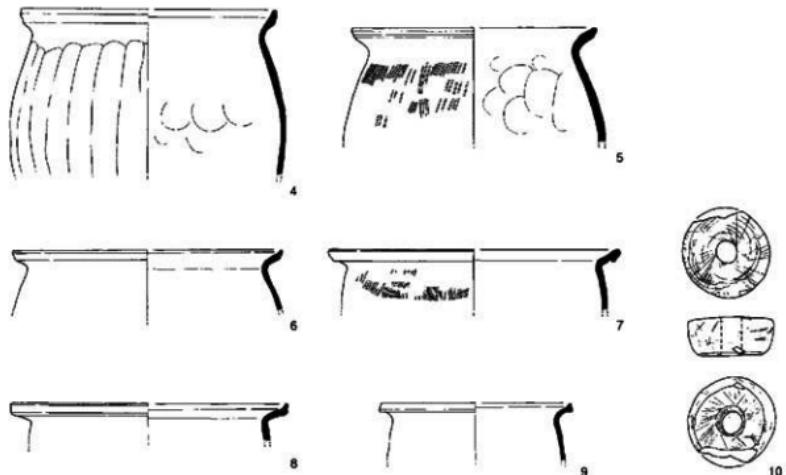
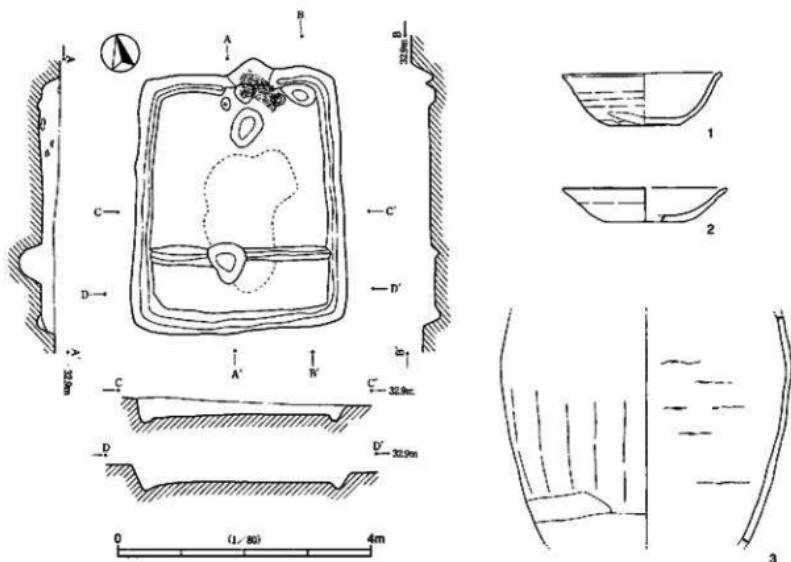
平面形態はほぼ正方形で、規模は2.70m × 2.80mを測る。主軸方位はN -6°- Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は14cm～20cmを測る。床面は全体に堅緻で、特に中央部はよく踏み固められていた。壁溝(幅14cm～20cm、深さ11cm～14cm)はカマド部分を除いて全周する。主柱穴は検出されなかったが、出入り口施設に伴うピット(径50cm × 80cm、深さ20cm)を検出した。覆土は小ローム・ブロックを含む茶褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に壁を50cmと大きく掘り込んで構築されている。遺存状態は良好である。煙道部は角度をもって立ち上がる。火床は梢円形に掘り窪まれ、底面はよく被熱していた。

遺物は少なく、覆土中とカマドからわずかに出土している。1の須恵器甕は覆土中から出土した。刀子(第80図12)は覆土中からの出土である。



第46図 020・022号住居跡及び出土遺物



第47図 023号住居跡及び出土遺物

#### 022号住居跡（第46図、図版14・15・41）

調査区の東側、E 2グリッドに位置する。遺存状態は良好である。

平面形態は方形で、規模は4.54m×4.82mを測る。主軸方位はN-31°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は12cm～30cmを測り、南壁側が低くなっている。床面は全体に堅緻でやや凹凸があり、中央部はよく踏み固められている。壁溝（幅20cm、深さ5cm～8cm）はカマド部分を除いて全周するが、東コーナー付近で内側に不整形に広がりをみせる。4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム粒を含む暗褐色土・黒褐色土が主体で、一部貝類が投棄されていた。貝類の分析結果については第7節述べる。

カマドは北東壁中央に設けられ、壁を半円形に30cm掘り込んでいる。天井部の一部も遺存し、遺存状態は比較的良好である。袖部の内側もよく被熱し、火床は20cmほど大きく掘り窪まれている。

遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯などが、カマド前面からP1にかけてまとまって出土している。3の須恵器高台付杯はカマドからの出土である。

#### 023号住居跡（第47図、図版15・41・53）

調査区の東側、E 2・E 3グリッドに位置する。南東側の上面がやや削平されている。

平面形態は長方形で、規模は4.10m×3.32mを測る。主軸方位はN-10°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は10cm～36cmを測り、南側が低くなっている。床面は南北に溝（幅20cm～30cm、深さ11cm～13cm）で仕切られ、北側が7割を占めて広く、南側に比べ2cm～7cm高くつくられている。北側の床面は全体に堅緻であるが、凹凸があり中央部に硬化面が広がる。南側も一部で硬化面が認められるが、全体にやや軟弱である。主柱穴は検出されていない。仕切り溝の中央から出入り口施設に伴うピットが、カマドの東側には不整形のピットが、それぞれ検出されている。覆土には茶褐色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に壁を24cm掘り込んで構築されている。遺存状態は悪く、すでに天井部は崩落し、袖部の砂質粘土と焼土が一部残存していた。

遺物は、土師器杯・壺や須恵器壺、石製筋轆車などが主に覆土中から出土している。1の杯は覆土下層、2の杯はカマド東側のピットから出土した。10の筋轆車は滑石製で、上面径3.5cm、下面径2.8cm、厚さ1.6cm、孔径0.9cm、重量は28.56gを測る。

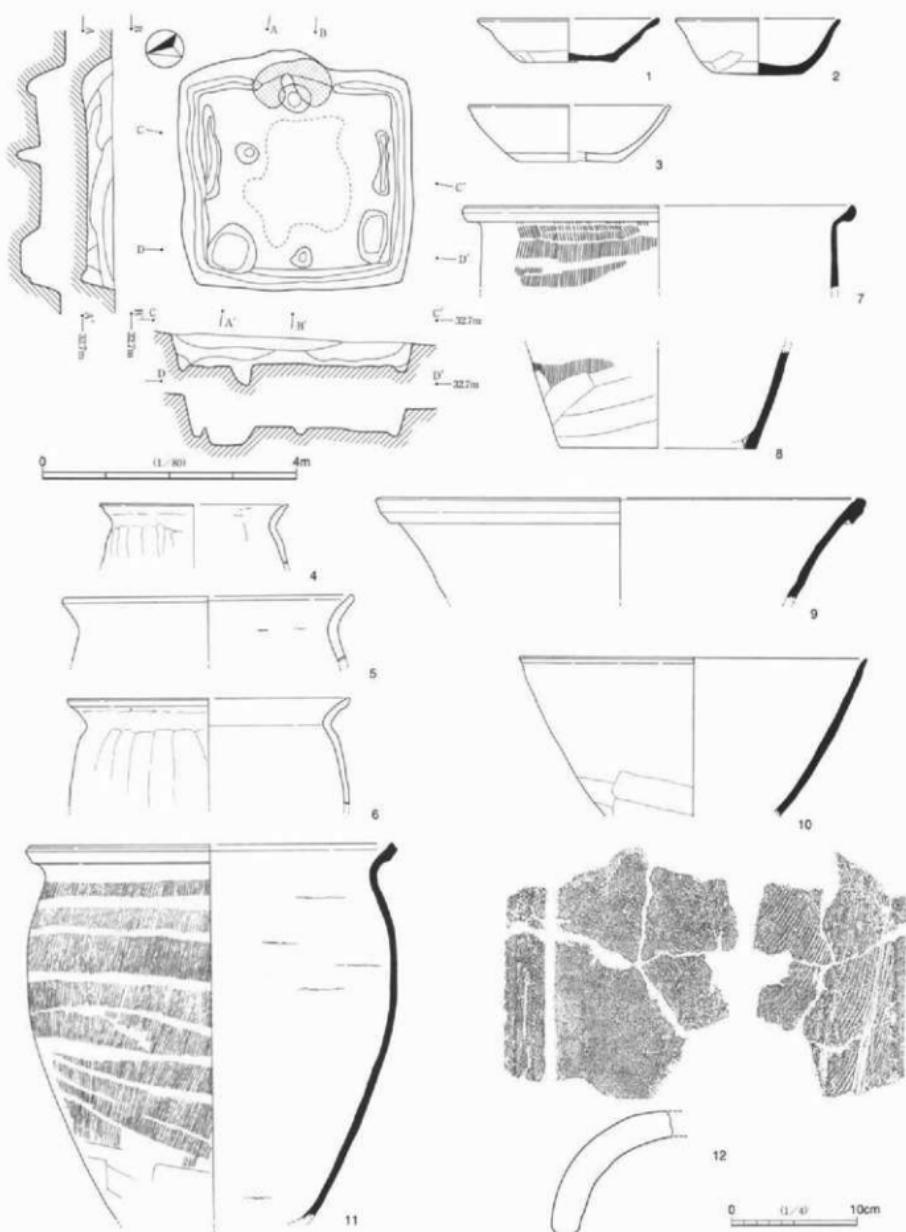
#### 024号住居跡（第48図、図版15・42・52）

調査区の東側、E 3グリッドに位置する。北壁から西壁にかけて005号溝に一部削平され、北東側の一部は025号住居跡を削平しているが、遺存状態は比較的良好である。

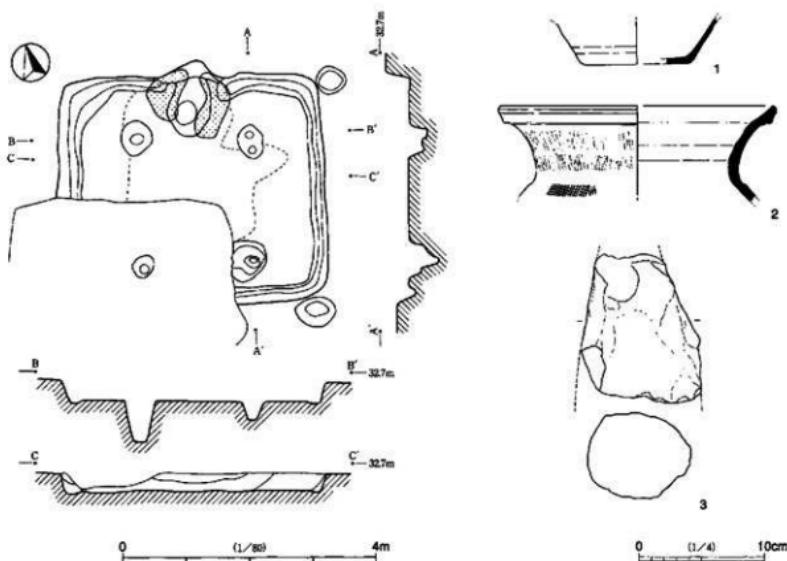
平面形態は方形で、規模は3.46m×3.70mを測る。主軸方位はE-15°-Sである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は40cm～50cmである。床面は全体に堅緻で凹凸があり、中央部はさらに硬化している。壁溝（幅20cm前後、深さ10cm～12cm）はカマド部分を除いて全周する。北側と南側の一部にさらに浅い溝をもつ。主柱穴は確認されなかったが、出入り口施設に伴うピットを検出した。中央北側のピットは、025号住居跡の柱穴である。貯蔵穴（径40cm、深さ30cm）は北西コーナーに付設されている。覆土は、焼土粒を含む暗褐色土がまず堆積し、その上に暗褐色土・暗褐色土が堆積している。

カマドは東壁中央に設けられ、壁を25cm掘り込んでいる。遺存状態は良好で、天井部の一部から袖部にかけてよく残っていた。煙道部は急に立ち上がる。火床は浅く、焼土の堆積はない。

遺物は、覆土中やカマドから土師器杯・壺、須恵器杯・壺・鉢、瓦などが出土している。特にカマド内



第48図 024号住居跡及び出土遺物



第49図 025号住居跡及び出土遺物

からは、3・10・11が出土した。また、銅鉢の鉈尾(第80図1)は貯蔵穴内から出土している。

#### 025号住居跡(第49図、図版16・42)

調査区の東側、E 3 グリッドに位置する。南西部を024号住居跡によって、北壁の上面を一部005号溝に、それぞれ削平されている。

平面形態は長方形で、規模は推定で $3.6m \times 4.16m$ を測る。主軸方位はN-14°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は20cmを測る。床面は全体に堅緻で、中央付近は硬化している。壁溝(幅20cm、深さ4cm~6cm)は遺存している範囲では、カマド部分を除いて全周する。主柱穴は4本検出された。P3は024号住居跡の床面から確認されている。覆土はローム・ブロックが多い暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に、壁を30cm掘り込んで設けられている。天井部はすでに崩落していたが、砂質粘土で構築された袖部はよく遺存していた。煙道部は緩やかに立ち上がる。火床は30cmほど掘り窪められ、焼土ブロックが堆積していた。

出土遺物は少なく、図示できた1・2の須恵器は覆土中から、3の支脚はカマド内からの出土である。

#### 026号住居跡(第50図、図版16・42)

調査区の東側、E 3 グリッドに位置する。027号住居跡に隣接し、東壁側を005号溝に削平されている。

平面形態は方形で、規模は推定で $3.9m \times 4.0m$ を測る。主軸方位はN-6°-Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は20cm~33cmを測る。南壁側が次第に低くなっている。床面は中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅20cm、深さ6cm)は遺存している範囲では、カマド部分と南壁を除いて巡っている。主柱穴と考えられるピットは6本検出されている。出入り口施設に伴うピット(径50cm×80cm、深さ30cm)は梢円形で、

中に小ピットをもつ。覆土は暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を85cmと大きく掘り込んでいるが、煙道部の立ち上がりは緩やかである。遺存状態は比較的良好で、天井部の一部と袖部が残っていた。火床の掘り込みは浅いが、焼土が堆積していた。

遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・甕・瓶や鉄製品などが覆土やカマドから多く出土している。8と鉄製紡錘車(第81図26)はP7から、5~7・10・11はカマド内からそれぞれ出土した。不明鋼製品(第80図2~4)は覆土中からの出土である。

#### 027号住居跡 (第51図、図版16・42)

調査区の東側、E 3 グリッドに位置する。005号溝に西側を削平されている。

平面形態は方形で、規模は推定で2.8m × 2.9mを測る。主軸方位はN - 11° - Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれている。壁高は5cm~17cmを測り、南壁側が低い。床面は中央部が広く硬化している。壁溝(幅10cm~15cm、深さ5cm前後)は遺存範囲では、カマド部分を除いて全周する。主柱穴は確認できなかつたが、出入り口施設に伴うピットを検出した。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を120cmの幅で20cm掘り込んでから、さらに煙道部を外に55cm掘り進めている。天井部はすでに崩落していたが、袖部はよく遺存していた。火床は浅く皿状に掘り窪まれ、煙道部とともに焼土粒が多く堆積していた。覆土は暗褐色土が主体である。

遺物は床面・カマド・覆土中から、土師器甕・須恵器杯・須恵器甕などが出土している。1・5・6は床面から、2・3・4はカマド内からそれぞれ出土した。

#### 028号住居跡 (第52図、図版17・42・52)

調査区の東側、E 3 グリッドに位置する。掘立柱建物のH-01と重複し、カマドや壁・床面の一部を壊されている。

平面形態は方形で、規模は3.68m × 3.82mを測る。主軸方位はN - 27° - Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は15cm~36cmを測る。東壁側が低くなっている。床面はほぼ平坦で、中央部から南壁側にかけて硬化している。壁溝(幅16cm、深さ6cm)は壁からやや内側につくられ、遺存範囲では全周する。4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。南側の2本の主柱穴は、壁溝内に設けられている。覆土は暗褐色土を主体に、灰褐色砂質土が混在している。

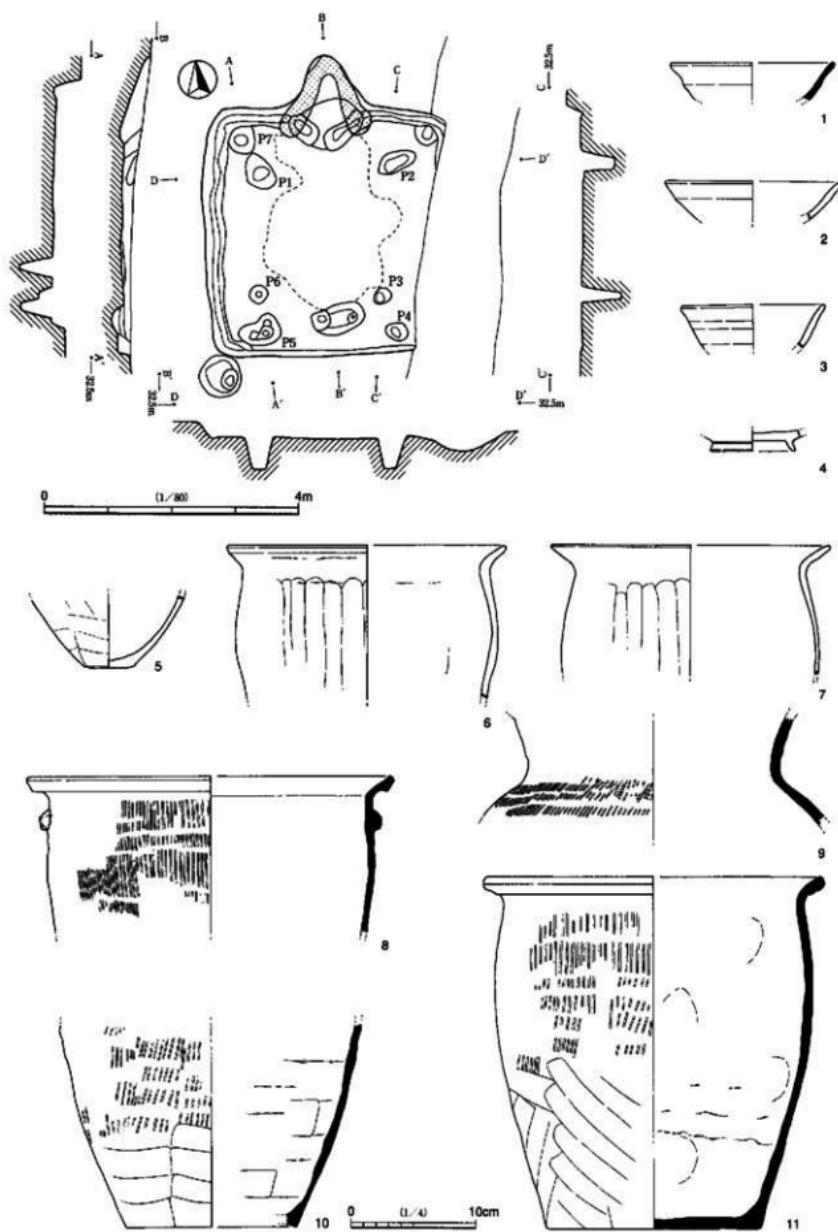
カマドは北壁中央に設けられている。袖部の一部が遺存していたが、H-01の柱穴によって大部分が壊されており、遺存状態は悪い。火床は広く掘り窪められ、よく被熱していた。また、カマド内からは9の男瓦が出土している。

遺物は覆土中や床面から、土師器甕・須恵器杯・灰釉陶器・鉄製品・瓦などが出土している。4や刀子(第80図8)・鉄製紡錘車(第81図25)は、床面から出土した。6の灰釉陶器の長頸瓶・鉄製品(第81図38・39)と8の女瓦は覆土中からの出土である。

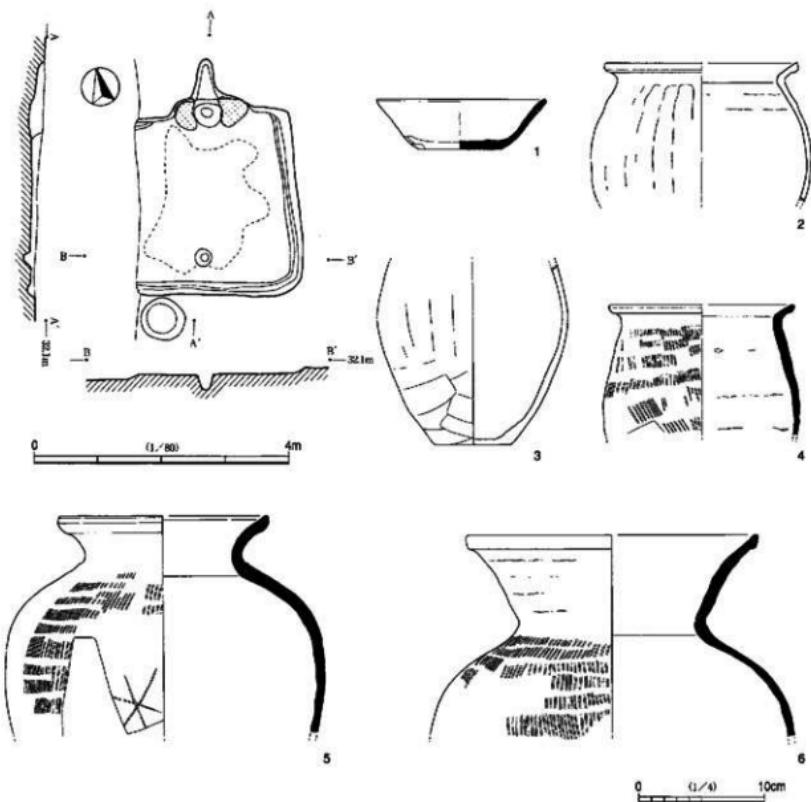
#### 031号住居跡 (第53図、図版17・42)

調査区の南側、E 3 グリッドに位置する。他の住居跡とやや離れて単独で所在している。

平面形態は方形で、規模は2.30m × 2.62mを測る。主軸方位はN - 3° - Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれている。壁高は15cm~30cmを測り、北東側が次第に低くなっている。床面は全体に堅敷で、特に中央部はよく踏み固められている。東側の床面には厚さ3cmの焼土が堆積していた。壁溝(幅12cm~20cm,



第50図 026号住居跡及び出土遺物



第51図 027号住居跡及び出土遺物

深さ6cm～8cm)は全周する。主柱穴は確認できなかったが、出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体である。

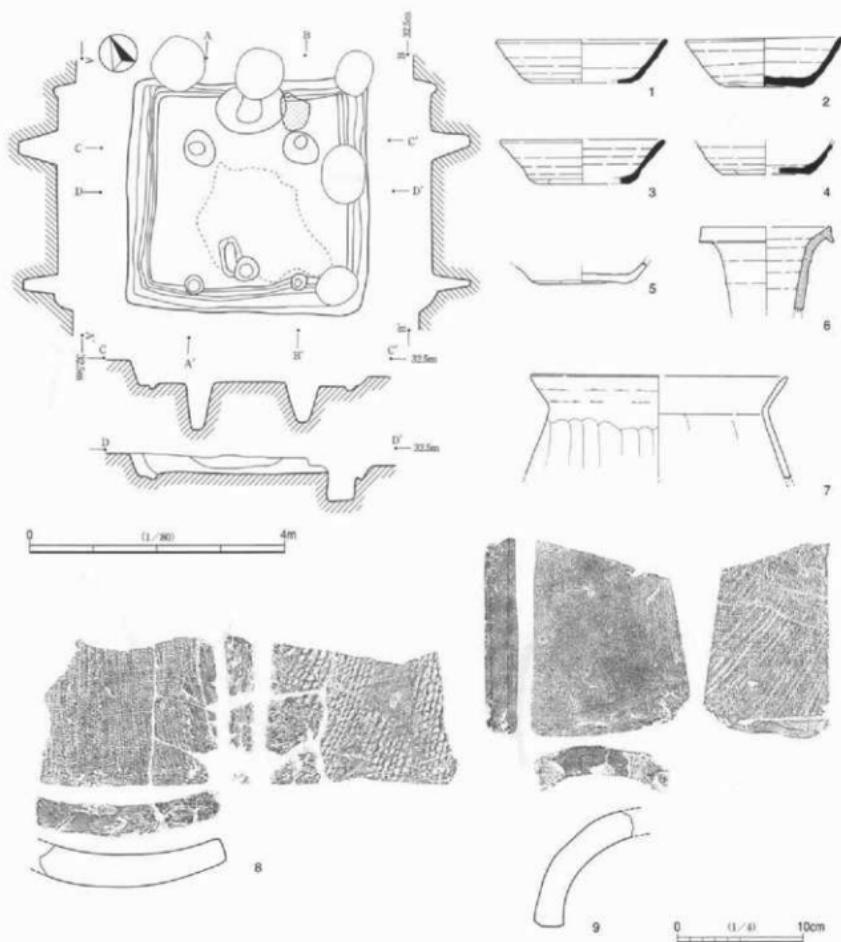
カマドは北壁東寄りに設けられ、壁を不整方形に75cmの幅で40cm掘り込んでいる。崩落した天井部は遺存していたが、袖部は遺存していない。火床は皿状に10cm掘り窪まれている。

出土遺物は少なく、床面からは2の須恵器杯が出土している。

#### 034号住居跡(第53図、図版17)

調査区のはば中央、E2グリッドに位置する。上面は大きく削平され、壁はほとんど残存していない。南側も004号溝に壊されており、遺存状態は悪い。

平面形態は方形で、規模は推定で2.8m×2.62mを測る。主軸方位はN-21°-Eである。壁の状態は不明である。床面は中央部がよく踏み固められている。壁溝(幅30cm、深さ10cm)は遺存範囲では、カマド部分



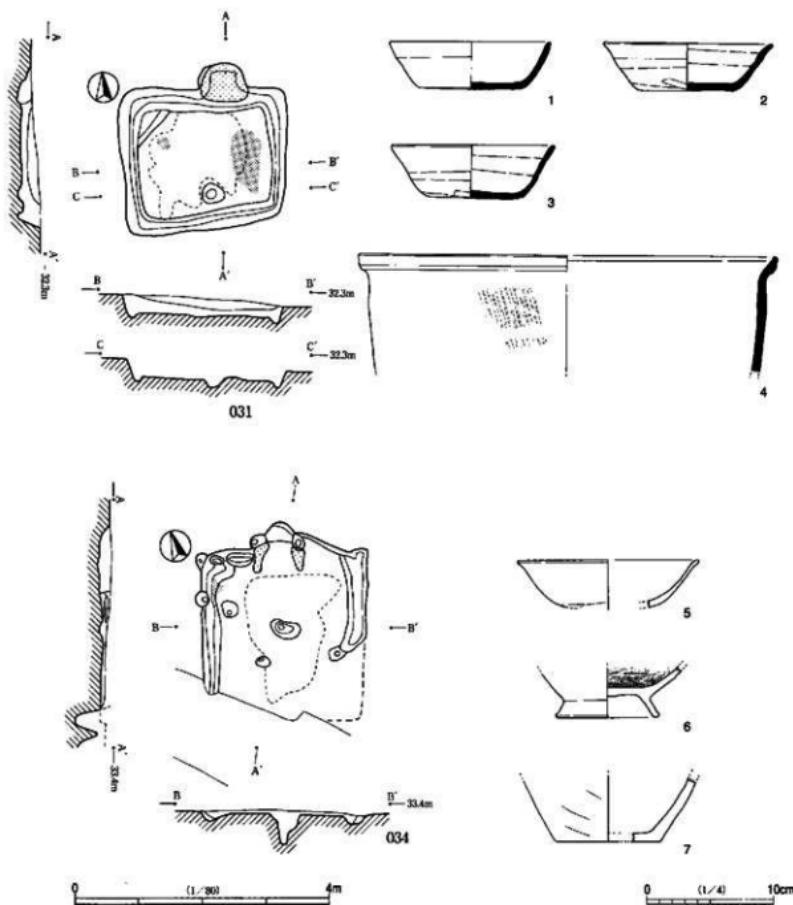
第52図 028号住居跡及び出土遺物

を除いて全周している。4本のピットを検出したが、主柱穴とは考えがたい。覆土は暗褐色土が薄く堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を30cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く、袖部が一部残存していた程度である。火床の掘り込みは確認できなかったが、煙道部に焼土が堆積していた。

遺物の出土は少なく、覆土中から土器師杯などがわずかに出土している。7はカマド内から出土した。037号住居跡（第54図、図版17・18・42）

調査区の東側、E 2 グリッドに位置する。西側の上面が削平されている他は、遺存状態は良好である。平面形態は方形で、規模は2.90m × 3.22m を測る。主軸方位はN - 12° - Eである。壁は垂直に掘り込ま

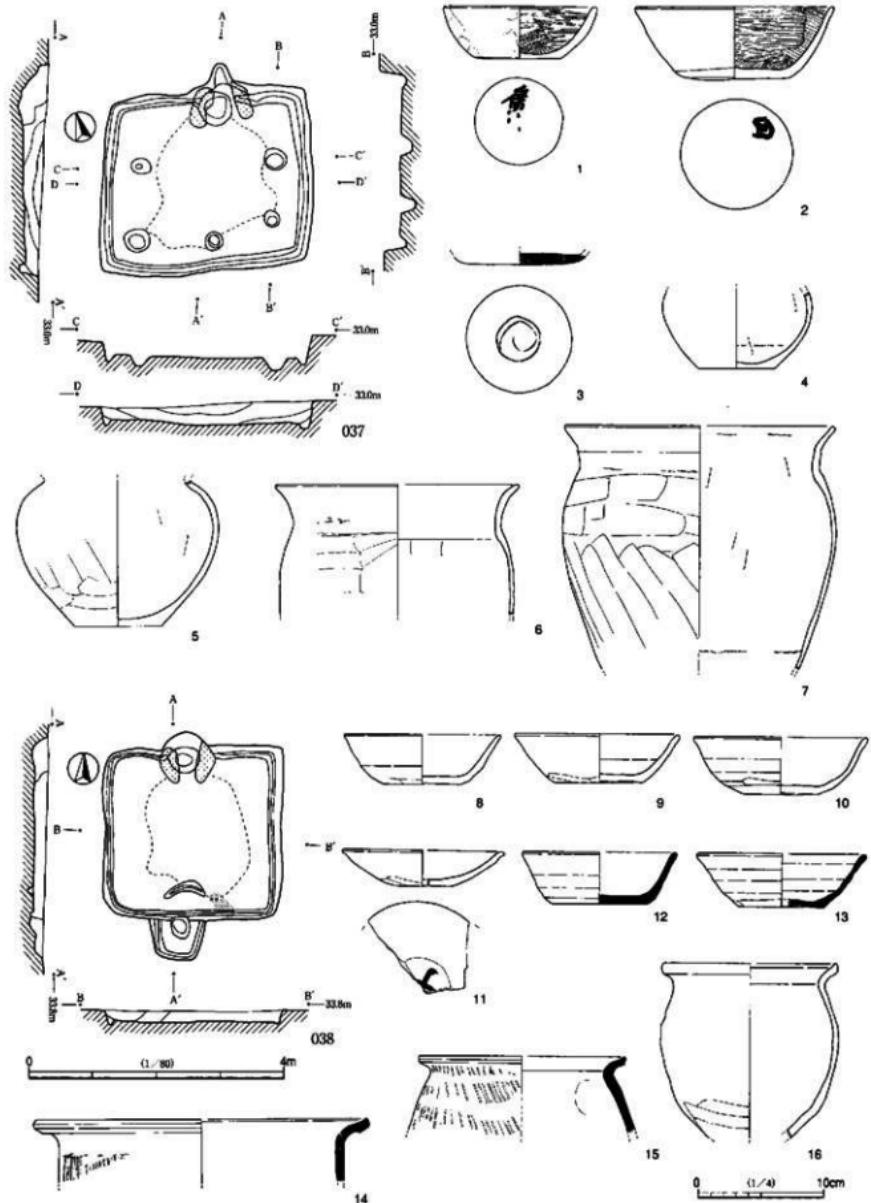


第53図 031・034号住居跡及び出土遺物

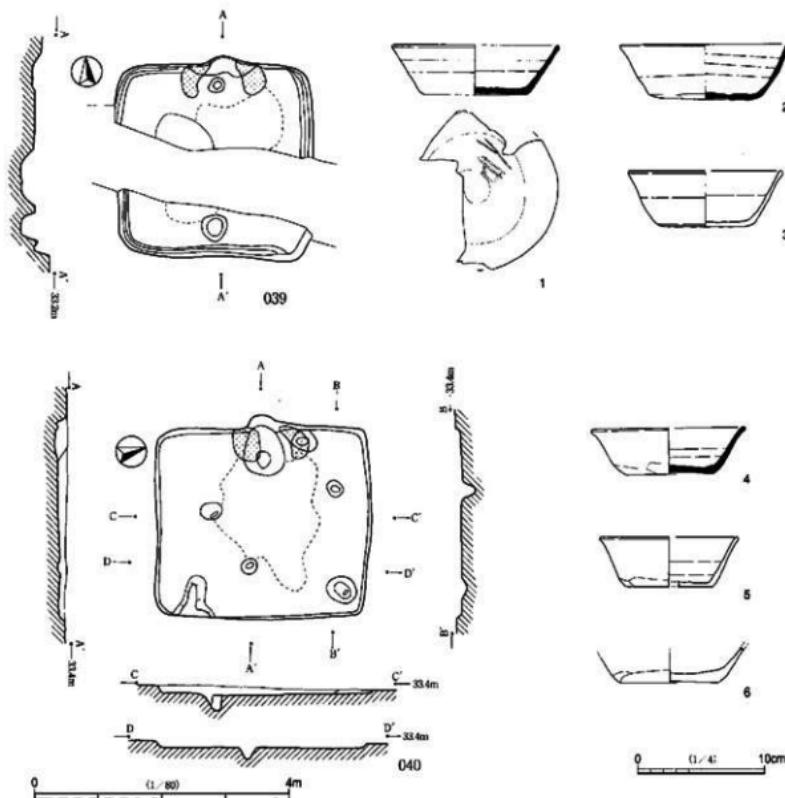
れ、壁高は21cm～35cmを測る。西壁側が低くなっている。床面は凹凸があり、中央部に硬化面が広がる。カマド前面には砂質粘土が流れている。壁溝(幅14cm～20cm、深さ8cm前後)はカマド部分を除き全周する。4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム・ブロックやローム粒を含む暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を43cm掘り込み、立ち上がりの緩やかな煙道部を形成する。遺存状態は比較的良好で、天井部の一部と袖部がよく遺存していた。火床は皿状に掘り窪まれ、焼土がよく堆積していた。

遺物は床面やカマド中から、土師器杯・壺などが出土している。2は墨書き土器で床面直上から、3はカ



第54図 037・038号住居跡及び出土遺物



第55図 039・040号住居跡及び出土遺物

マド内からそれぞれ出土した。1は覆土上層、鉄製紡錘車(第81図27)は覆土下層からの出土である。

#### 038号住居跡(第54図、図版18・43)

調査区の中央北側、D 2グリッドに位置する。出入り口施設が壁外に張り出す、特異な形態である。

基本的な平面形態はほぼ正方形で、規模は2.76m×2.82mを測る。主軸方位はN-2°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は15cm～18cmを測る。床面は凹凸が激しく、中央部がよく踏み固められている。壁溝(幅10cm、深さ5cm)はカマド部分を除いて全周する。主柱穴は確認できなかった。出入り口施設(幅87cm、奥行き63cm、深さ17cm)は南壁外に張り出して設けられている。底面は床面とほぼ同じレベルで、ピット(径35cm、深さ17cm)を検出した。また、この施設に対応して、床面にも弧状にピット(深さ8cm)が設けられている。覆土は暗褐色土が主体で、暗黄褐色土や黒色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を半円状に25cm掘り込んでいる。天井部はすでに崩落しているが、被

部がよく遺存していた。火床は皿状に浅く掘り窪められている。

遺物は床面や覆土中から、土師器杯・皿、須恵器杯・壺などが出土している。9は床面から、16はカマドの脇から、8・13～15はカマド内からそれぞれ出土した。11の墨書き土器は覆土中からの出土である。

#### 039号住居跡（第55図、図版18・43）

調査区の南側中央、D 3 グリッドに位置する。遺構の中央を東西に006号溝に削平されている。また、床面中央部も攪乱を受けている。

平面形態は正方形で、規模は3.06m × 3.08mを測る。主軸方位はN - 5° - Eである。壁は垂直に掘り込まれている。壁高は12cm～20cmを測り、北側が低くなっている。床面は凹凸があり、中央部に硬化面が残る。壁溝（幅10cm、深さ4cm）はカマド部分や北東・南東コーナー付近を除いて巡っている。主柱穴は確認できなかったが、出入り口施設に伴うピット（径40cm、深さ24cm）を検出した。覆土はローム・ブロックを含む暗褐色土がわずかに残っていた。

カマドは北壁中央に、壁を15cm掘り込んで構築されている。遺存状態は悪く、天井部はすでに崩落し、袖部が遺存していた。火床は浅く、焼土の堆積もない。

出土遺物は少なく、2は床面から、1・3はカマド内から出土している。1の底部は「仲」と線刻されている。

#### 040号住居跡（第55図、図版19）

調査区の南側中央、D 3 グリッドに位置する。上面が全体に削平されている。

平面形態は方形で、規模は3.0m × 3.38mを測る。主軸方位はN - 74° - Wである。壁の立ち上がりは緩やかで、壁高は現存で10cm程度である。床面は全体に堅緻で、カマド前面には硬化面が広がる。壁溝は認められない。床面から4個のピットを検出したが、いずれも柱穴とは考えがたい。東壁南寄りの床面に踏み台状の高まりが認められる。覆土には暗褐色土が薄く堆積していた。

カマドは西壁中央に設けられ、壁を15cm掘り込んでいる。遺存状態は良好ではなく、袖部が一部残存していた。火床は20cm掘り窪められているが、焼土の堆積はない。

出土遺物は少なく、図示した土器は覆土中からの出土である。

#### 042号住居跡（第56図、図版19・43）

調査区の南東部、C 3 グリッドに位置する。上面が削平され、特に南側の遺存は悪い。

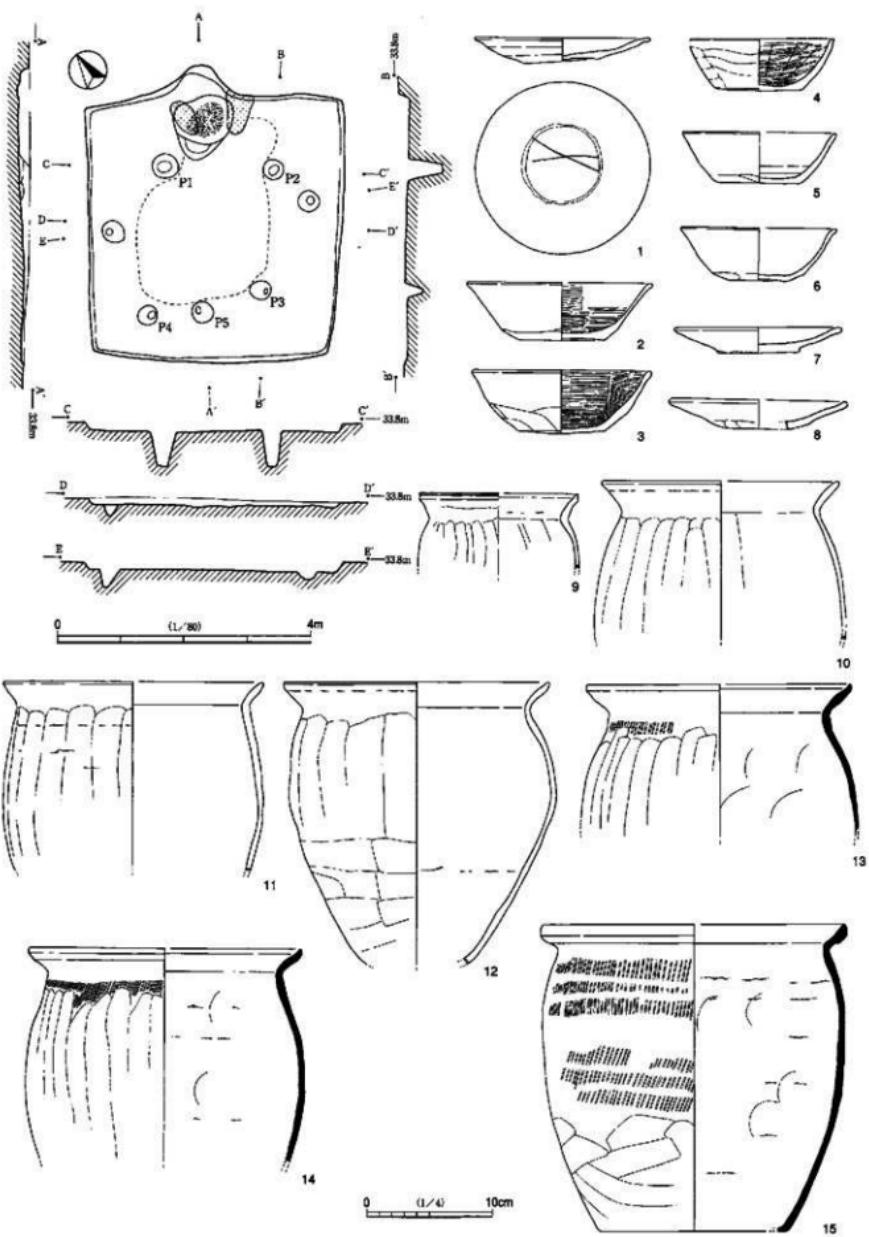
平面形態は方形で、規模は4.42m × 4.0mを測る。主軸方位はN - 37° - Eである。北壁では垂直に掘り込まれ、壁高は5cm～20cmを測る。南側が全体に低くなっている。床面は全体に堅緻で、特に中央部はよく踏み固められている。壁溝は認められない。床面から7個のピットを検出したが、主柱穴と考えられるのはP1～P4で、P5は出入り口施設に伴うピットである。覆土には暗褐色土が堆積していた。

カマドは北東壁中央に設けられ、壁を45cm掘り込み縫道を形成している。遺存状態は悪く、袖部の一部が残存しているにすぎない。火床は皿状に浅く掘り窪められ、よく焼土が堆積していた。

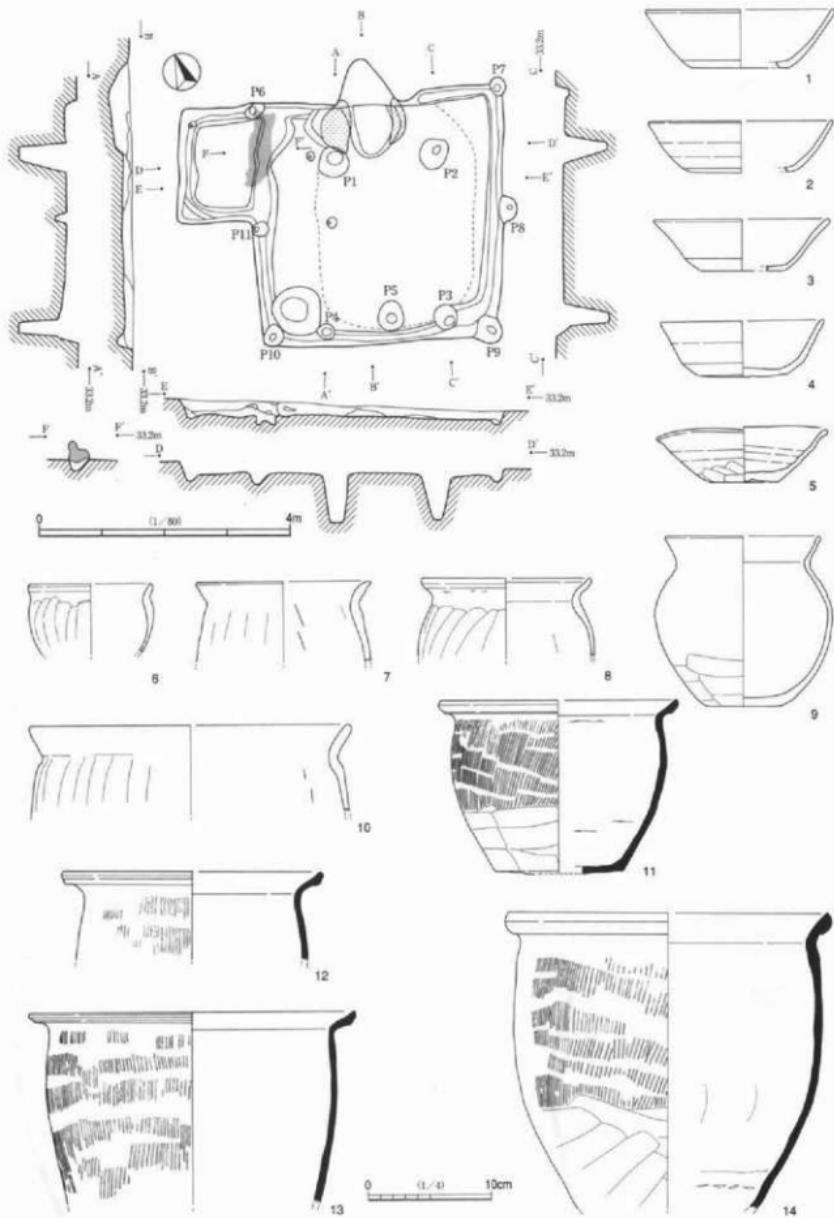
出土遺物は多く、覆土中や床面から土師器杯・皿・壺、須恵器壺、鉄製品（鎌・鍬）などが出土している。特に鉄製品の出土頻度が高い。4は床面、1・2は床面上、6・8はカマドからそれぞれ出土している。鎌（第80図5）と鉄鍬（第80図17・19）は床面上から、釘（第81図31）は覆土中から出土した。

#### 044号住居跡（第57図、図版19・20・43・44）

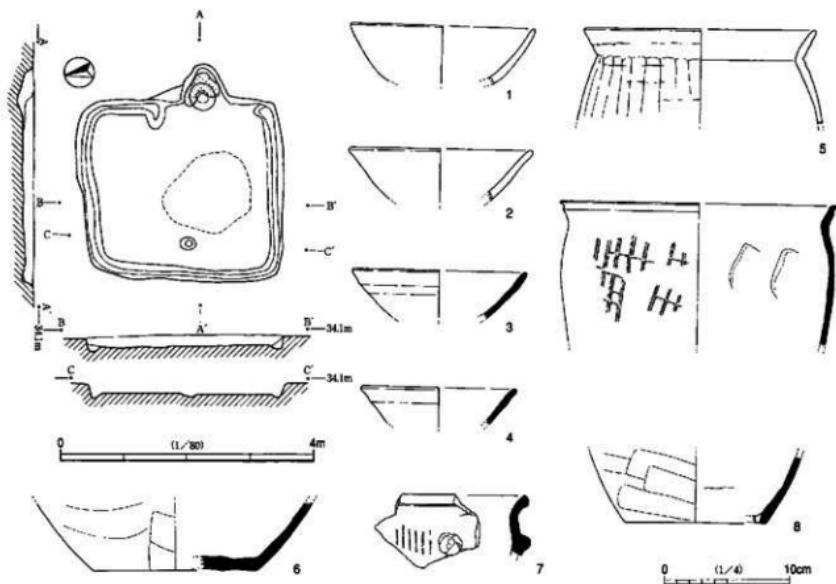
調査区の中央、D 3 グリッドに位置する。上面が全体にやや削平されているが、遺存状態は良好である。



第56図 042号住居跡及び出土遺物



第57図 044号住居跡及び出土遺物



第58図 047号住居跡及び出土遺物

西壁北半に張出施設をもつ、特異な形態の住居跡である。

基本的な平面形態は正方形で、規模は $4.02m \times 4.04m$ を測る。主軸方位はN- $19^{\circ}$ -Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は13cm-24cmを測る。西壁側の遺存が良好である。床面は全体に堅緻で、硬化面が広がる。壁溝(幅20cm、深さ6cm-12cm)はカマド部分を除いて全周し、北西コーナー付近ではやや広くなる。床面から8個のピットを検出したが、P1-P4は主柱穴、出入り口施設に伴うピットはP5と考えられる。P3・P4は壁溝内に設けられている。東西の壁に沿って穿たれているP6-P11は壁柱穴で、径25cm-40cm、確認面からの深さは31cm-62cmと、規模の差異はあるがほぼ直線的に配列されている。また、南西コーナーには貯藏穴(径80cm、深さ48cm)が設けられている。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体で、ローム・ブロックやローム粒を含む暗褐色土、黄褐色土や黒色土が混在している。

張出施設は長方形で、西壁長1.8m、南壁長1.2mを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、深さは26cmである。底面はほぼ平坦で、住居の床面との段差はない。壁溝(幅15cm-20cm、深さ3cm-7cm)は全周し、住居の壁溝に続いている。住居との境には、砂質粘土で仕切りを形成している。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を70cm掘り込んで、緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好ではなく、袖部が残存しているにすぎない。火床は20cm掘り窪められ、焼土が堆積していた。

出土遺物は多く、覆土中や床面から土師器杯・甕、須恵器甕や刀子が出土している。2は床面、4は壁溝内、9はP2の周辺でそれぞれ出土している。手録(第80図6)は覆土中から出土した。

#### 047号住居跡（第58図、図版20・44）

調査区北側中央、D 2 グリッドに位置する。上面が全体に削平されている。

平面形態は方形で、規模は2.82m × 3.28mを測る。主軸方位はE - 12° - Sである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は12cm～18cmを測る。床面は全体に凹凸があり、中央の一部が踏み固められている。壁溝（幅15cm、深さ7cm）はカマド部分と東壁の一部を除いて巡っている。主柱穴は確認できなかったが、出入り口施設に伴う浅いピットを検出した。覆土にはローム・ブロックを含む暗褐色土が堆積していた。

カマドは東壁中央南寄りに設けられ、壁を50cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く、袖部はすでに失われ、天井部の一部が残存しているにすぎない。火床は皿状に掘り窪められ、焼土がわずかに残っていた。

出土遺物は少なく、覆土中やカマド内から、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。3・5はカマドから出土した。

#### 048号住居跡（第59図、図版20・44）

調査区の中央、D 2 グリッドに位置する。059住居跡と一部重複し、004号溝が上面を走るが、遺存状態は良好である。

平面形態は方形で、規模は5.74m × 6.08mを測る。主軸方位はN - 17° - Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は40cm～56cmを測る。南側が次第に低くなる。床面は凹凸があり、全体に堅緻である。硬化面は中央部に広がる。壁溝（幅20cm、深さ6cm～10cm）はカマド部分を除いて全周する。4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム粒を含む暗茶褐色土である。

カマドは北壁中央東寄りに設けられ、壁を30cm掘り込んで、角度をもって立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は悪く、天井部はすでに崩落し袖部のみが残存していた。火床は楕円形に掘り窪められており、焼土が多く堆積していた。

遺物は床面やカマド内、覆土中から土師器杯・甕、鉄錐などが出土している。3は床面、2・8・10はカマド内から出土した。6・7と鉄製工具（第81図30）は覆土中からの出土である。

#### 049号住居跡（第60・61図、第18表、図版20・21・44・45・53）

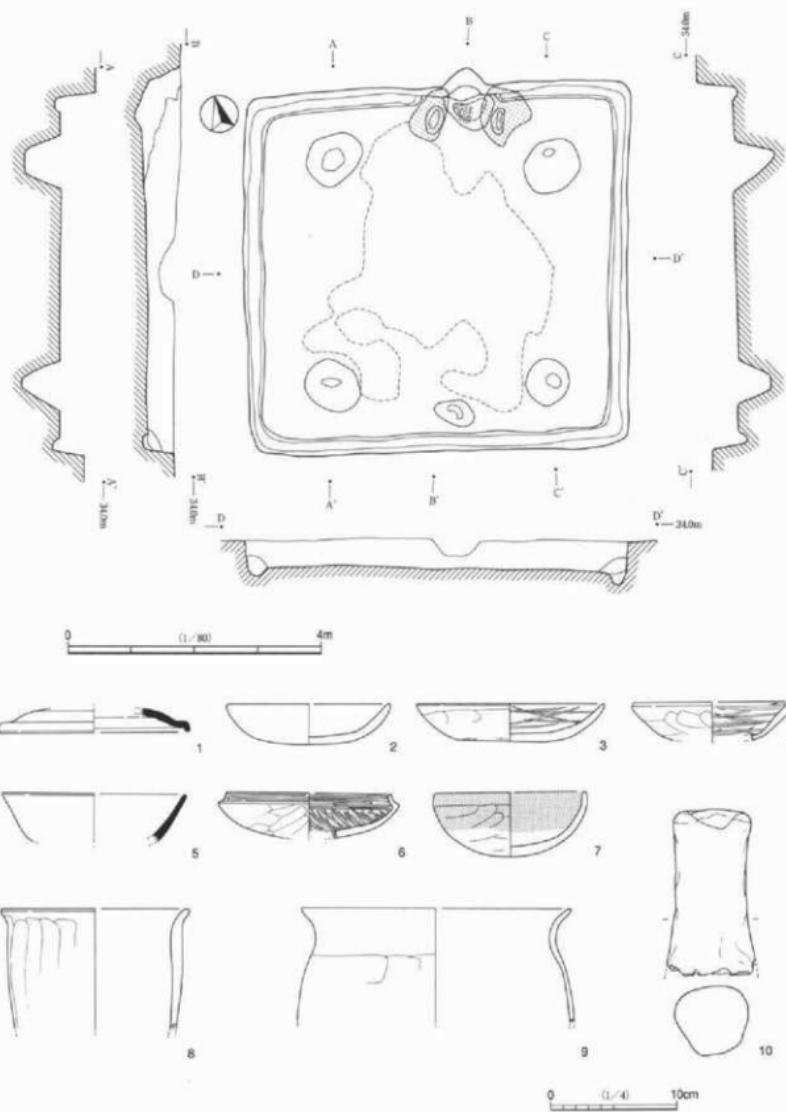
調査区の中央、D 2 グリッドに位置する。北東側上面がやや削平されているが、遺存状態は良好である。

平面形態は方形で、規模は6.34m × 5.90mを測る。主軸方位はN - 27° - Eである。壁は緩やかに掘り込まれている。壁高は37cm～60cmを測り、南西側が深くなっている。床面はやや凹凸があり、中央部に硬化面が広がる。南東コーナー付近では不整形な範囲で、床面が10cm高くなっている。壁溝（幅15cm～30cm、深さ5cm～12cm）は不安定な形態で、カマド西側から南壁にかけての範囲と東壁の一部に巡っている。

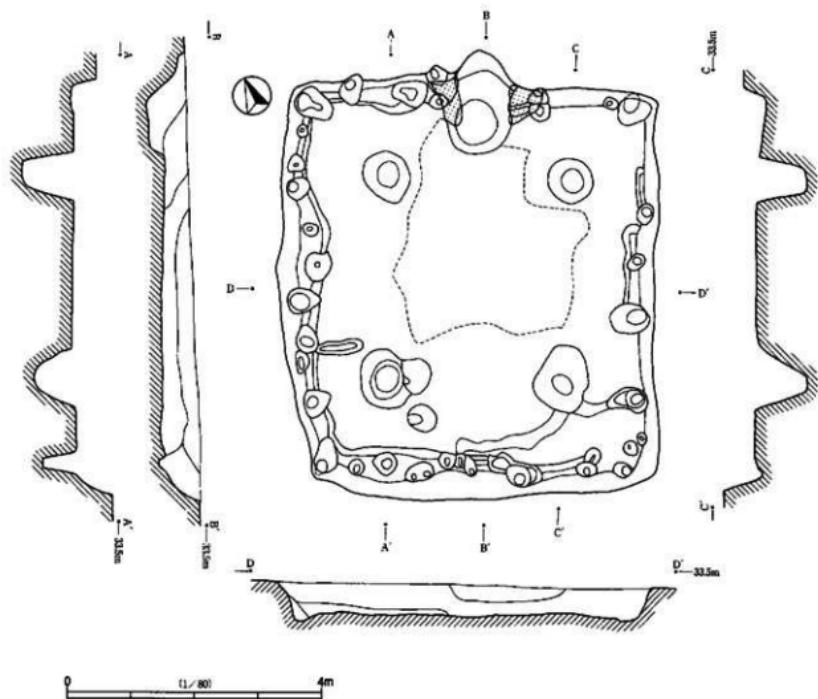
また、壁溝内には大小多数のピットが穿たれており、中には壁柱穴の機能をもつものもある。主柱穴は4本検出されているが、出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。覆土は焼土粒・ローム粒を多く含む褐色土を主体に、暗褐色土や明褐色土、黒色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を50cm掘り込んで、緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好ではなく、袖部の一部が残存していた。火床は円形に35cm掘り窪められ、多くの焼土が堆積していた。

遺物は覆土中から多数の土師器、須恵器や灰釉陶器、鉄製品が出土している。8と19、刀子（第80図9）、鉄錐（第80図18・23）は覆土下層から、鎌（第81図29）、筋錘車の軸部（第81図28）は覆土上層から出土した。15の墨書土器や29の灰釉陶器長頸瓶は覆土中からの出土である。砥石の計測値等は第18表にまとめた。



第59図 048号住居跡及び出土遺物



第60図 049号住居跡

051号住居跡（第62図、図版21・45）

調査区の中央、D 3 グリッドに位置する。上面はすでに削平されている。

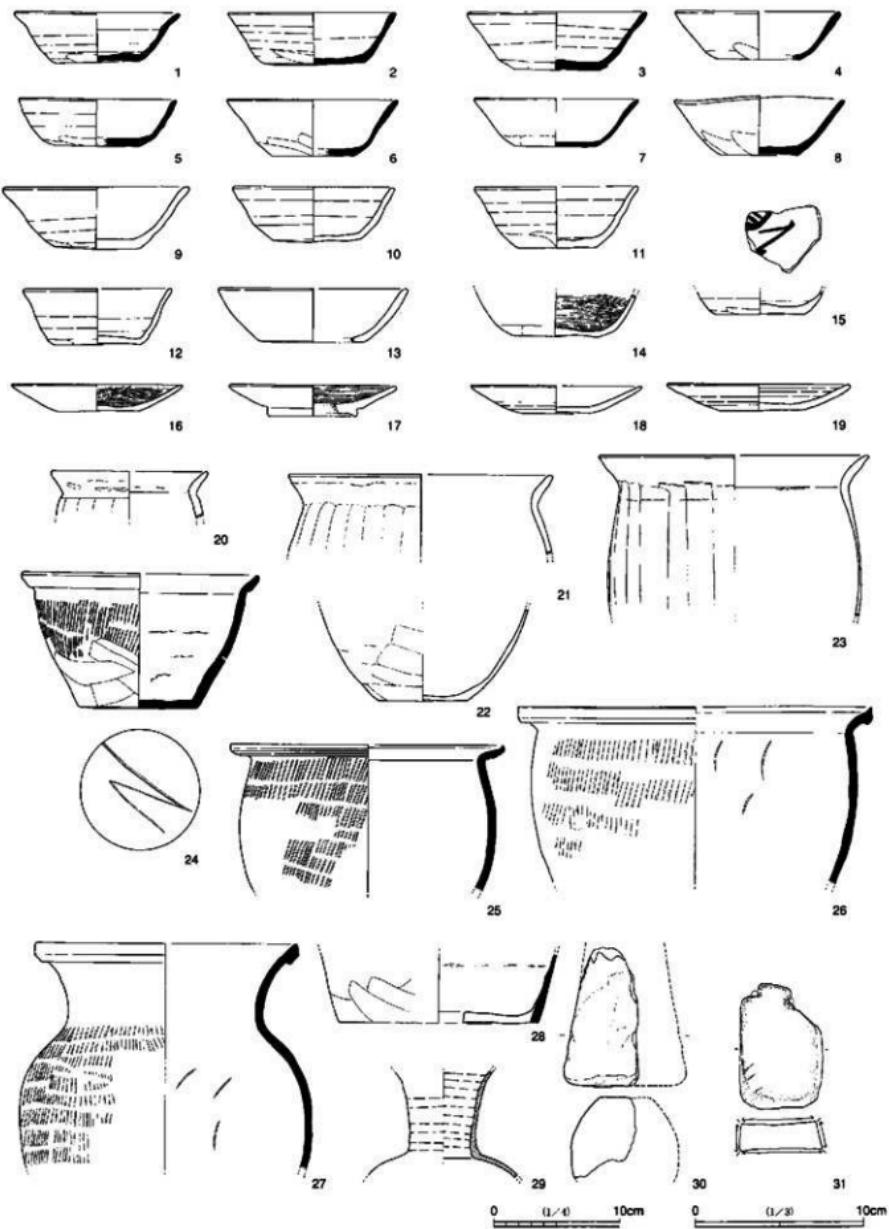
平面形態は方形で、規模は $4.04\text{m} \times 4.26\text{m}$ を測る。主軸方位はN-57°-Wである。壁の立ち上がりは緩やかで、壁高は6cm~12cmを測り、南側が低くなっている。床面は全体に凹凸があるが、堅縫で中央部はよく踏み固められていた。壁溝（幅20cm~30cm、深さ4cm~8cm）はカマド周辺と南東コーナー付近を除いて巡っている。北壁側の壁溝の幅は広い。床面から主柱穴4本と出入り口施設に伴うピットを検出したほか、壁溝内には浅い小ピットが確認されている。覆土は暗褐色土が堆積していた。

カマドは西壁中央に設けられ、壁を40cm掘り込んでいる。袖部が残存しているが、ピットと重複し遺存状態は良好ではない。火床は楕円形に30cm掘り進められ、焼土が堆積していた。

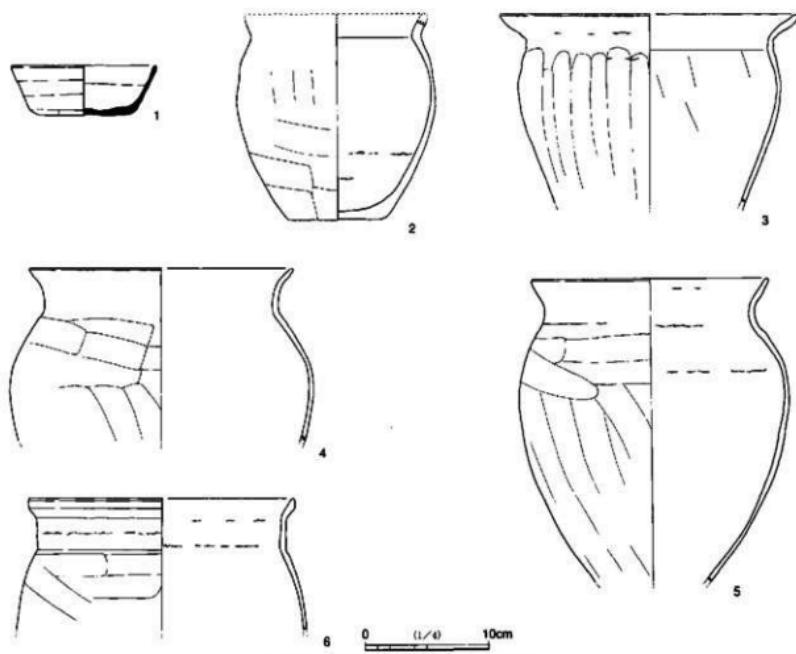
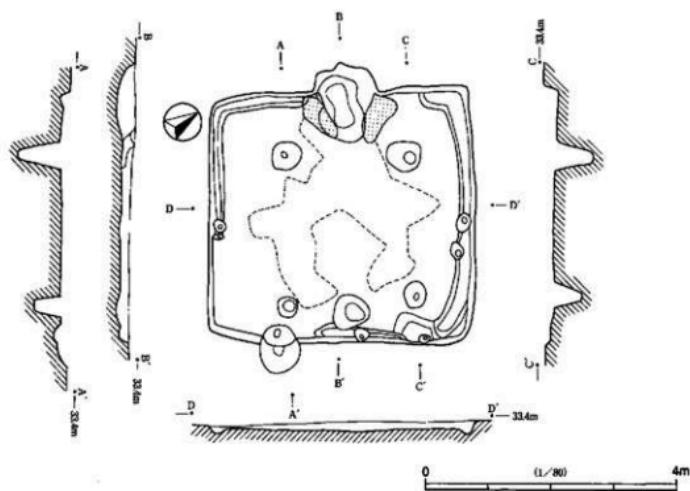
遺物は床面や覆土から須恵器杯、土師器甕、鉄製品が出土している。5はカマド前面の床面からまとまって出土した。刀子（第80図13）と鉄製品（第81図35）は床面直上からの出土である。

055号住居跡（第63図、図版21）

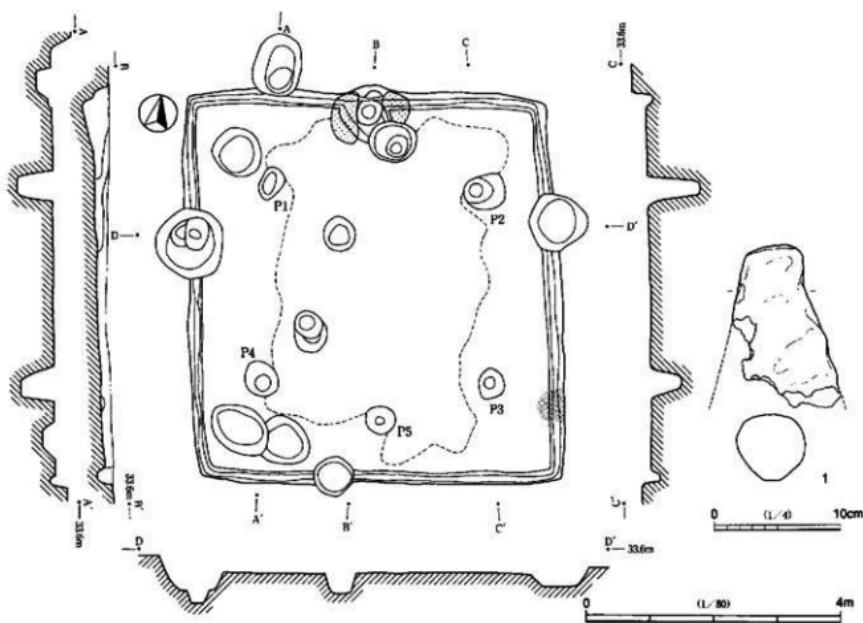
調査区の中央、D 2・D 3 グリッドに位置する。周辺のピット群に一部擾乱を受け、南東コーナー側の上面がやや削平されている。



第61図 049号住居跡出土遺物



第62図 051号住居跡及び出土遺物



第63図 055号住居跡及び出土遺物

平面形態は方形で、規模は $6.14m \times 5.88m$ を測る。主軸方位はN- $7^{\circ}$ -Wである。壁は垂直に掘り込まれている。壁高は13cm~25cmで、南東側が低くなっている。床面はほぼ平坦で、全体に堅致である。特に、中央部は硬化面が広がる。壁溝(幅12cm~20cm、深さ8cm~12cm)は全周する。床面からは11個のピットを検出したが、このうち主柱穴となるのはP1~P4で、P5は出入り口施設に伴うピットである。覆土はローム粒や焼土粒を含む黒色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を14cm掘り込んでいる。ピットに袖部の一部を壊されるなど、全体に遺存状態は良好ではない。火床は浅く皿状に掘り窪まれ、焼土の堆積は少ない。

出土遺物は少なく、図示できたのはカマド西袖部から出土した支脚のみである。カマド内から出土した須恵器片で時期を判断した。

#### 057号住居跡（第64図、図版21・45）

調査区の中央西寄り、C 3グリッドに位置する。周辺のピット群に一部擾乱を受けている。

平面形態はほぼ正方形で、規模は $7.06m \times 7.0m$ を測る。主軸方位はW- $1^{\circ}$ -Nである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は30cm~50cmである。東壁側が次第に低くなる。床面には焼土が散布している。床面は凹凸があるが、全体に堅致で中央部はよく踏み固められている。壁溝(幅20cm、深さ9cm前後)は全周する。床面からは多数のピットを検出したが、主柱穴となるのはP1~P4で、P5は出入り口施設に伴うピットである。覆土はローム粒や焼土粒を含む黒色土が堆積していた。

カマドは西壁中央に設けられ、壁を30cm掘り込んで緩やかに立ち上がる煙道を形成する。天井部はすでに崩落していたが、袖部が遺存していた。火床は皿状に大きく掘り窪められ、焼土が多く堆積していた。

出土遺物は須恵器蓋、土師器壺、手捏土器、鉄鑓(第80図20~22)、スラグなどで、主に覆土中から出土している。1は住居跡より新しいビット(P6)内からの出土で、本遺構には伴わない。2はビット内、8はカマド内からそれぞれ出土した。他は覆土中からの出土である。

#### 060号住居跡（第65図、図版21・45）

調査区の北西部、C 2 グリッドに位置する。上面が一部削平されているが、遺存状態は良好である。

平面形態は方形で、規模は4.12m × 4.70mを測る。主軸方位はN - 14° - Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は19cm ~ 35cmを測る。南西コーナー側が次第に低くなる。床面は凹凸があるが、全体に堅敏で、中央部には硬化面が広がる。壁溝(幅20cm ~ 25cm、深さ6cm ~ 12cm)は全周する。4本の主柱穴を検出したが、出入り口施設に伴うビットは確認できなかった。覆土は黒色土と暗黄褐色土が混在している。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を24cm掘り込んでいる。天井部はすでに崩落していたが、袖部が遺存していた。袖部の内面はよく被熱し、火床にも焼土が堆積していた。

出土遺物は少なく、図示できたのは2点である。2の壺はカマド内から、1は覆土中から出土した。

#### 062号住居跡（第66図、図版21・45）

調査区の北西部、C 2 グリッドに位置する。上面が全体に削平されている。

平面形態は不整形で、規模は3.34m × 3.42mを測る。主軸方位はN - 23° - Eである。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は20cmを測る。床面は全体に堅敏で、硬化面が広がっている。壁溝は西壁側で幅15cm、深さ10cmと一定の規模を保っているが、その他の範囲では不安定な規模で巡る。主柱穴と考えられるビットはP1 ~ P3で、いずれも壁際で設けられている。P4は出入り口施設に伴うビットである。覆土は黒色土が主体である。部分的にローム・ブロックが混在する。

カマドは北壁中央に設けられている。遺存状態は悪く、袖部の一部が残存していた。火床は梢円形に掘り窪まれ、焼土が堆積していた。

遺物は床面や覆土から土師器杯・皿、須恵器杯・壺と4点の鉄製品が出土している。3の墨書き器はカマド前の床面から出土した。鉄製品(第81図40・41)と釘(第81図32)は床面から、刀子(第80図16)はカマド上からそれぞれ出土している。

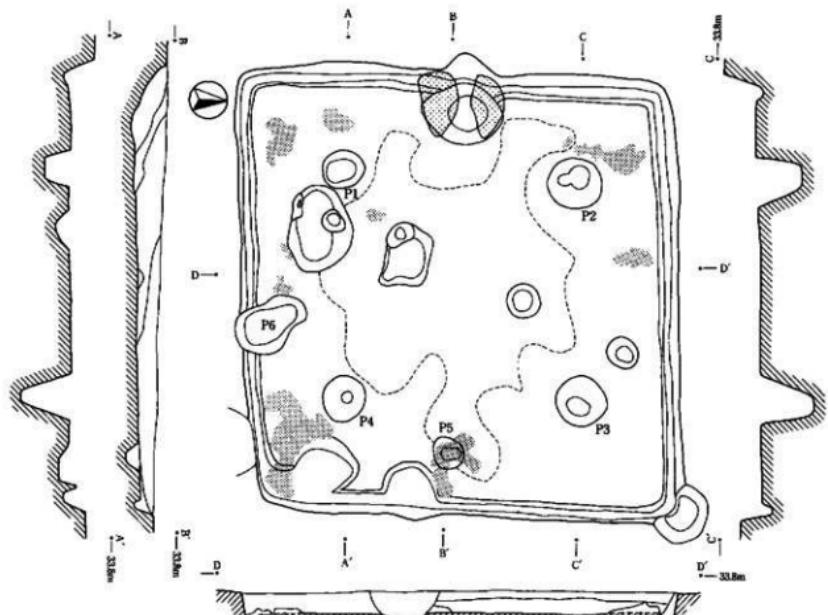
#### 064号住居跡（第67・68図、第10表、図版22・23・53）

調査区の北西部、C 2 グリッドに位置する。床面から轆羽口、楕円形鍛冶滓や多量のスラグが検出され、鍛冶関連の遺構であることが判明した。

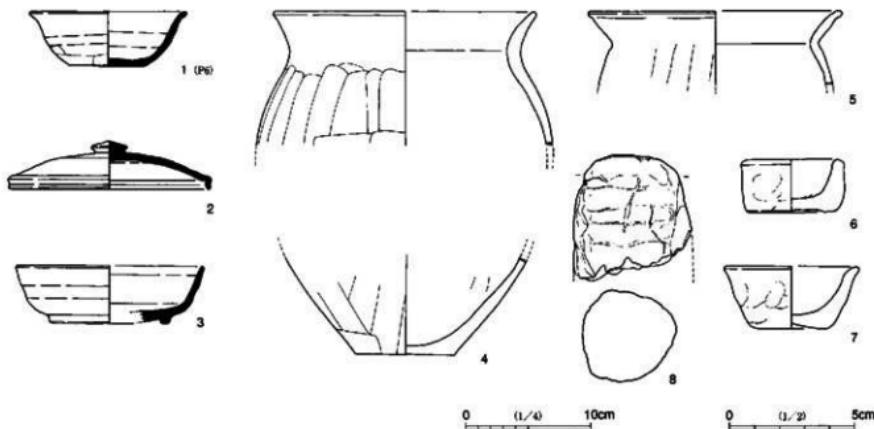
平面形態は方形で、規模は2.85m × 3.34mを測る。北西コーナー付近で、壁はやや内側へ曲がる。主軸方位はN - 15° - Wである。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は12cm前後と浅い。床面は凹凸があり、全体に軟弱である。壁溝は検出されていない。床面からは北西コーナー付近で浅い掘り込みを検出したのみで、柱穴は確認できなかった。また、南壁中央の床面に踏み台状の高まりを検出した。覆土は暗褐色土を主体にローム・ブロックが混在している。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を53cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く、構築材の砂質粘土がわずかに確認された程度である。火床は浅い皿状で、被熱していた。

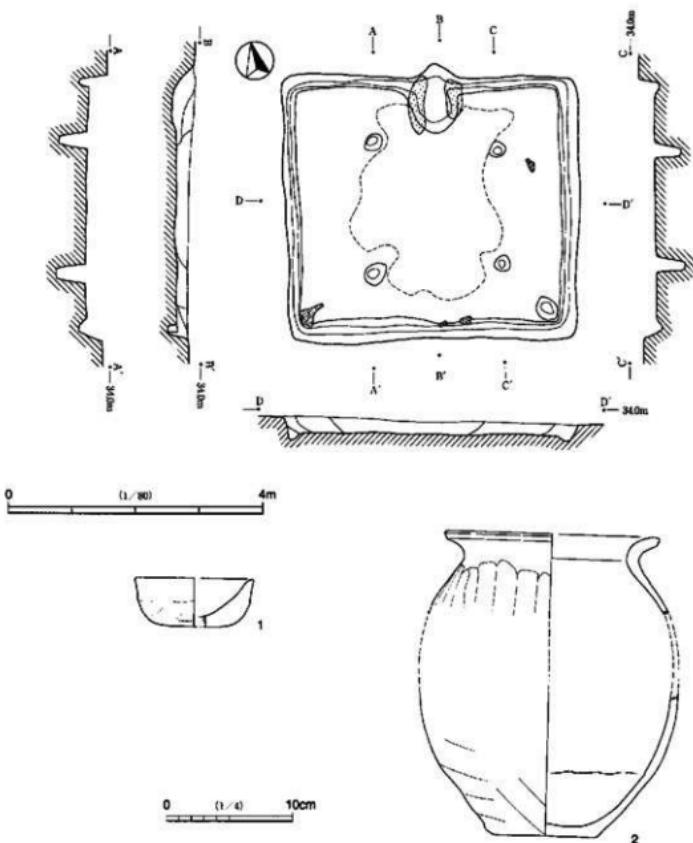
本遺構を掘り下げていったところ、床面中央付近から多量のスラグが検出された。これらを取り上げ床



0 1/80 4m



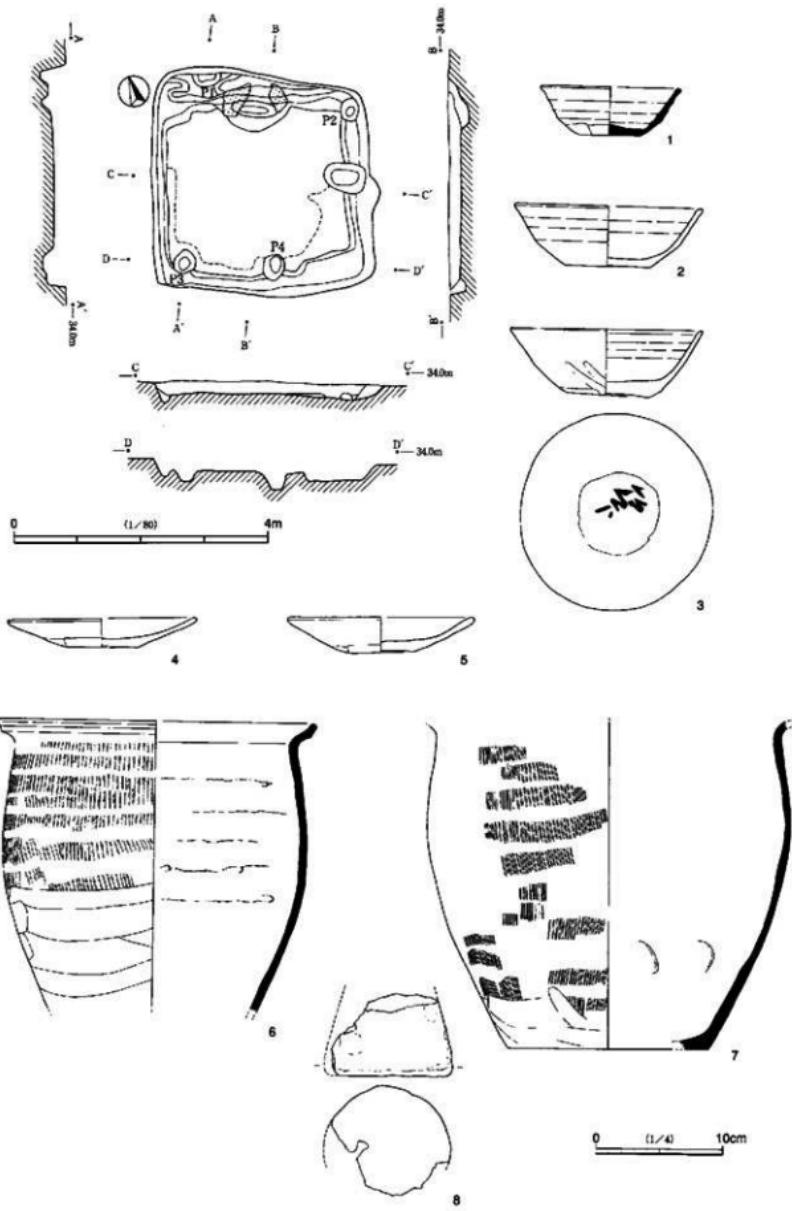
第64図 057号住居跡及び出土遺物



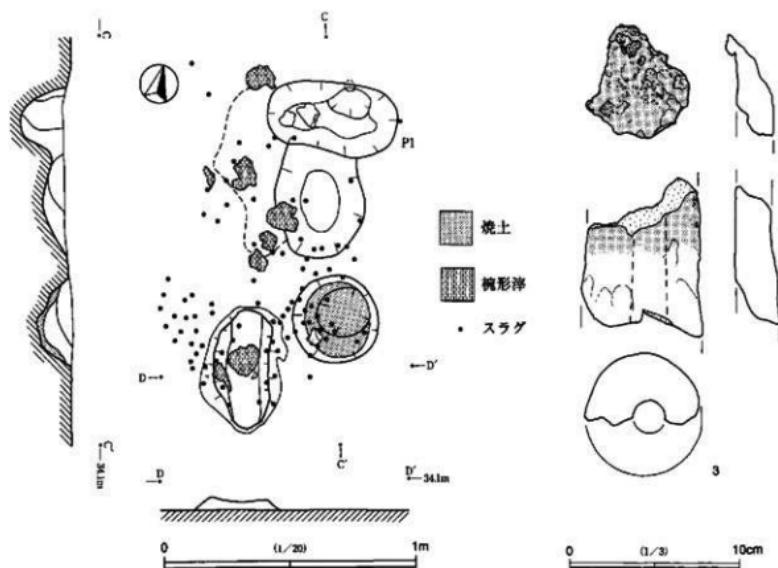
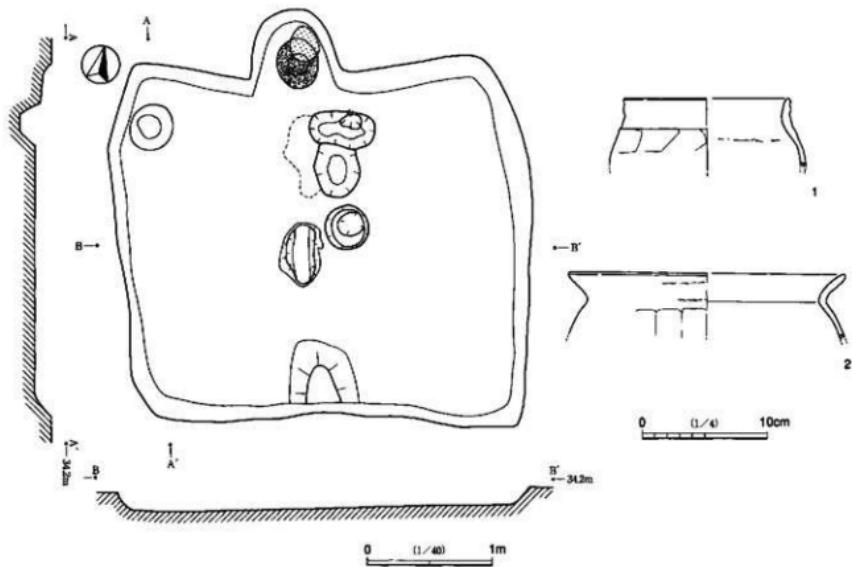
第65図 060号住居跡及び出土遺物

面を精査すると、3基のビットと床面を一部高くした箇所が検出された。このビット周辺からは、楕円形鍛冶津や繩羽口片も出土したが、楕円形鍛冶津は西寄りの範囲に集中している。3基のビットの内、南側の1基は鍛冶炉(径35cm、深さ15cm)で、覆土には炭化粒やスラグが多く含んでいる。底面は焼土が堆積し、よく被熱していた。上面からは繩羽口片が検出された。北側の2基は連続する楕円形のビットで、P1からは繩羽口片が出土しており、繩に関連するビットと考えられる。この2基のビットの西側の床面が、一部硬化している。鍛冶炉の南西側に隣接して、床面が一部高くなった箇所が確認された。全体に黒く変色し、表面が硬化している。中央部が南北にやや窪み、台座として使用した可能性も考えられる。

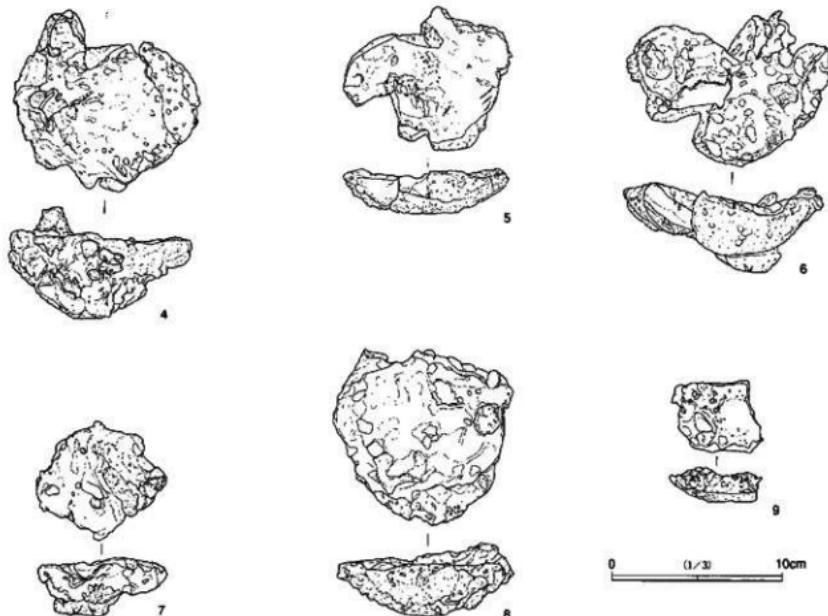
遺物は土器の出土は少なく、土師器片や鉄製品などがカマドや覆土中から出土している。1はカマドから、刀子(第80図14)は床面からそれぞれ出土している。3は繩羽口の先端部と筒部の破片で、同一個体である。先端部は暗褐色～黒色に溶解し、変形している。現存長は7.1cmである。筒部の色調は茶褐色であ



第66図 062号住居跡及び出土遺物



第67図 064号住居跡及び出土遺物



第68図 064号住居跡出土椀形滓

るが、先端部に近い箇所は黒色に変色している。現存長9.2cm、推定外径6.8cm、通風孔の推定径1.9cmを測る。いずれも小礫を若干含む砂粒の多い粘土でつくられている。4～9は椀形鍛冶滓である。計測値等は第10表にまとめた。半月形をした薄手のものが多い。

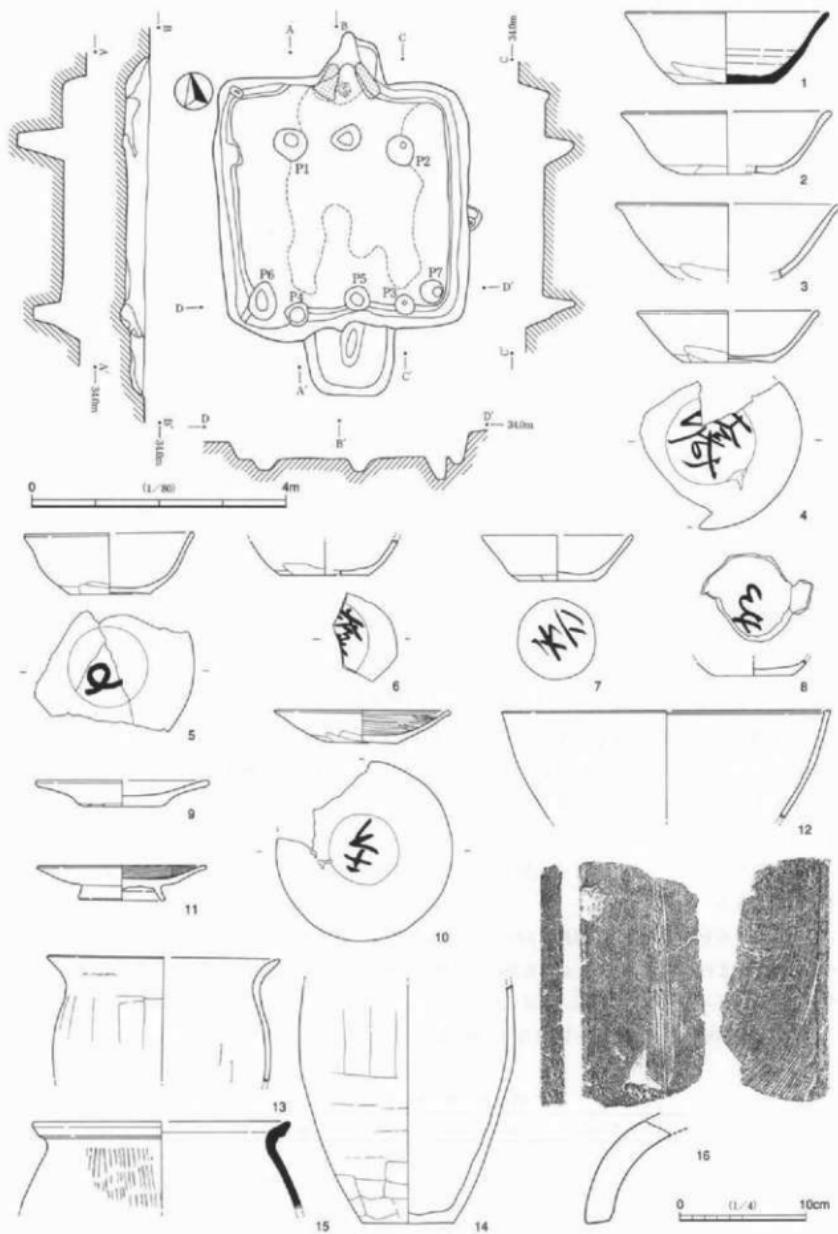
#### 066号住居跡（第69図、図版23・46・52）

調査区の北西部、C2グリッドに位置する。038号住居跡と同様、出入り口施設が壁外に張り出す、特異な形態である。

基本的な平面形態は方形で、規模は3.88m×3.98mを測る。主軸方位はN-12°-Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は30cm～46cmを測る。南側が次第に低くなっている。床面は全体に堅緻で、特に中央部はよく踏み固められている。壁溝（幅20cm～30cm、深さ10cm）は一部を除いて全周する。主柱穴はP1～P4である。南壁コーナーのP6・P7は浅く、補助的な柱穴であろう。出入り口施設（幅140cm、奥行110cm、

第10表 梗形鍛冶滓計測表

番号	遺物番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
4	122	10.7	10.8	6.5	530.3
5	124-125-154	8.6	10	2.6	273.7
6	126-127	9.4	12	5	320.9
7	128	7	7.7	3.5	145.5
8	129	10.4	10.7	4.3	408.7
9	154	4.3	5.5	2	49.7



第69図 066号住居跡及び出土遺物

深さ20cm)は南壁外に張り出して設けられている。底面は床面より10cmほど高くつくられ、長楕円形のビット(径33cm×70cm、深さ19cm)を検出した。また、この施設に対応して、床面にもP5(深さ13cm)が設けられている。覆土はローム粒や焼土粒を多く含む暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を75cm掘り込んで、緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。上面に擾乱を受けているため、遺存状態は良好ではない。袖部の一部が残存し、内面はよく被熱していた。火床は浅いが、焼土は多く残っていた。

遺物は覆土を中心に、土師器杯・皿・壺、須恵器杯・壺、瓦などが出土している。1はカマド上面、2・11は床面、7はP6内からそれぞれ出土した。特に、4~8・10と6点の墨書き器が検出されており注目される。7以外は覆土中からの出土である。

#### 068号住居跡(第70図、第11・18表、図版23・24・46・52・53)

調査区の北西部、C 2グリッドに位置する。上面が全体に削平され、特に北壁西半が擾乱を受けている。

平面形態は方形で、規模は3.70m×3.62mを測る。主軸方位はN-12°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は10cm~14cmである。床面は凹凸はあるが全体に堅致で、中央部には硬化面が広がっている。壁溝は確認されていない。主柱穴はP1~P3で、P4は不整形であるが出入り口施設に伴うビットと考えられる。覆土はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土に暗黄褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられ、壁をわずかに掘り込んでいる。遺存状態は悪く、天井部はすでに崩落し、袖部の一部が残存していた。火床は皿状に11cm掘り進められているが、焼土の堆積はほとんどない。

遺物は覆土中から、土師器杯・壺、須恵器壺、鉄製品(第81図34)、砥石の他、瓦転用品10点(第11表)が出土している。瓦転用品は破片を再利用したもので、覆土南半から検出された。表面や側面が研磨されており、磨石の様な使用法や軸に利用されたことも考えられるが、正確な用途は不明である。砥石の計測値等は第18表にまとめた。

#### 069号住居跡(第71図、図版24・46)

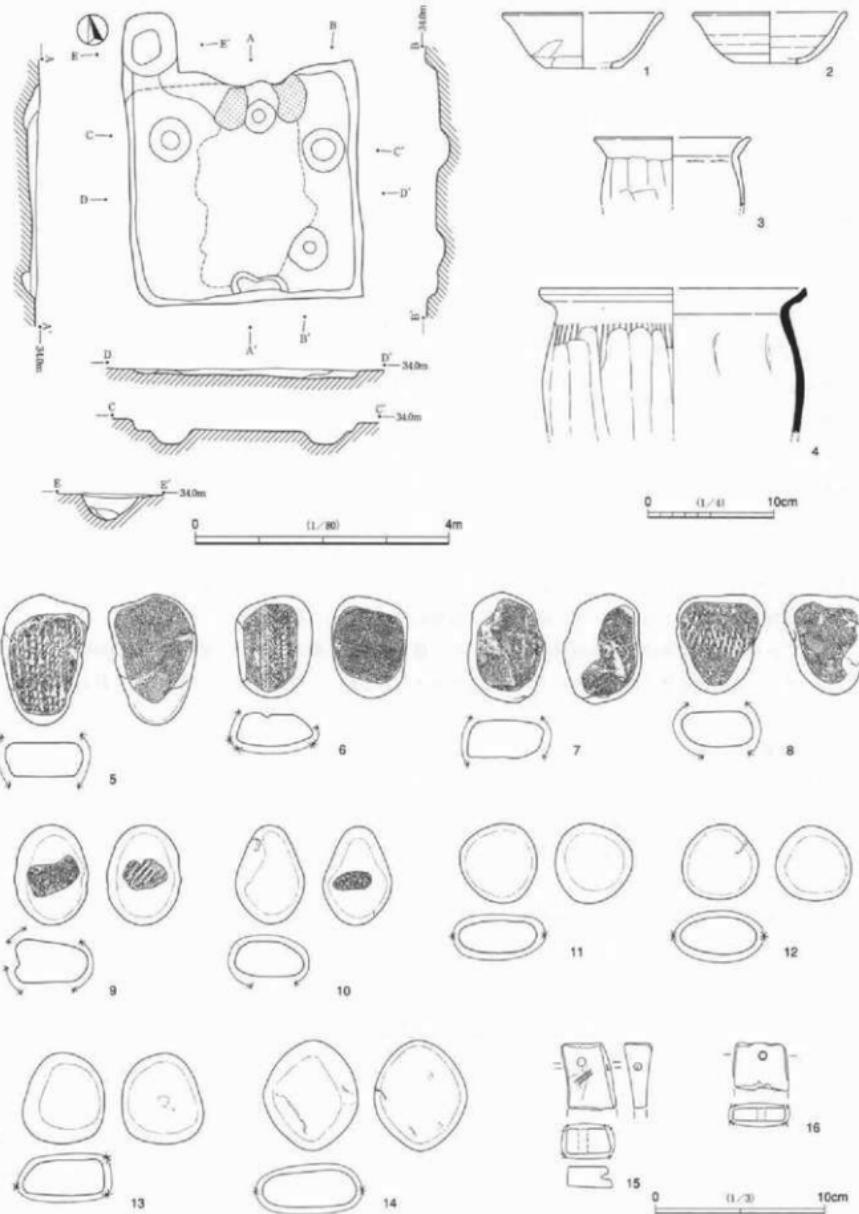
調査区の北西部、C 2グリッドに位置する。上面が全体に削平され、遺存状態は悪い。

平面形態は方形で、規模は4.32m×3.98mを測る。主軸方位はN-12°-Wである。壁の掘り込みは浅く、壁高は12cm前後である。床面は全体に堅致で、中央部はよく踏み固められていた。壁溝(幅20cm、深さ9cm)はカマド部分を除いて全周する。主柱穴と考えられるのはP1~P3で、P4は出入り口施設に伴うビットである。覆土にはローム粒を含む暗茶褐色土が堆積していた。

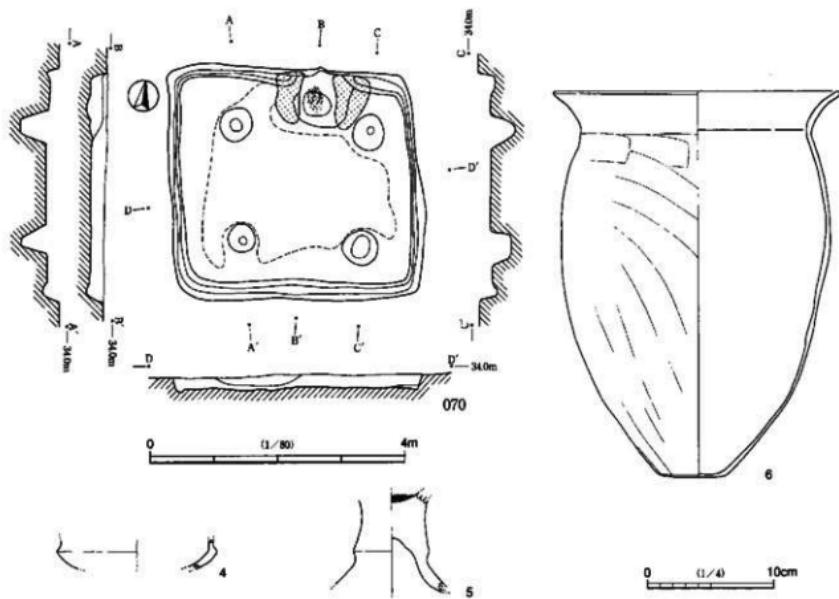
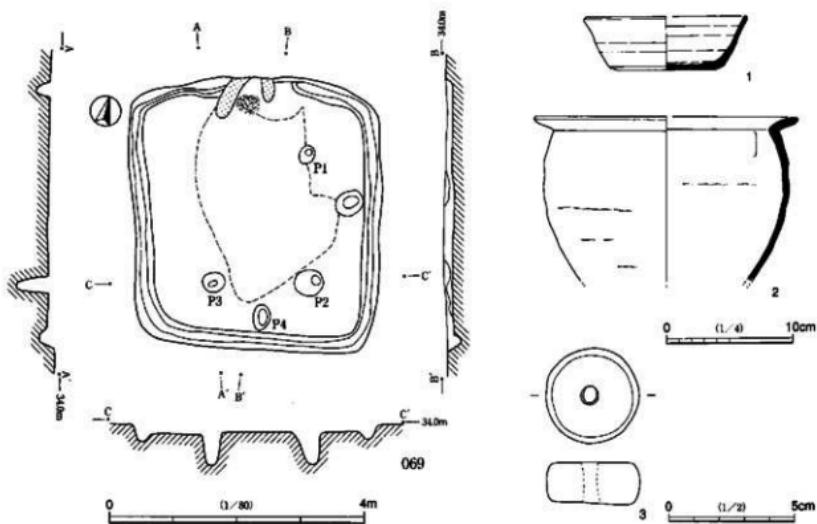
カマドは北壁中央に設けられており、壁への掘り込みはない。遺存状態は悪く、袖部がわずかに残存し

第11表 瓦転用品計測表 (現存値)

番号	遺物番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
5	1	7.65	5.20	2.00	92.84
6	6	5.95	4.55	1.95	57.23
7	11	6.45	4.55	2.20	78.15
8	3	5.85	5.20	2.10	66.84
9	22	5.85	4.35	2.50	61.58
10	12	5.80	4.05	2.00	45.38
11	9	4.70	4.60	1.90	36.41
12	5	4.58	4.46	2.07	39.34
13	2	5.19	4.77	2.11	55.02
14	7	6.43	5.61	2.11	67.00



第70図 068号住居跡及び出土遺物



第71図 069・070号住居跡及び出土遺物

ていた。火床はよく被熱し、焼土が堆積していた。

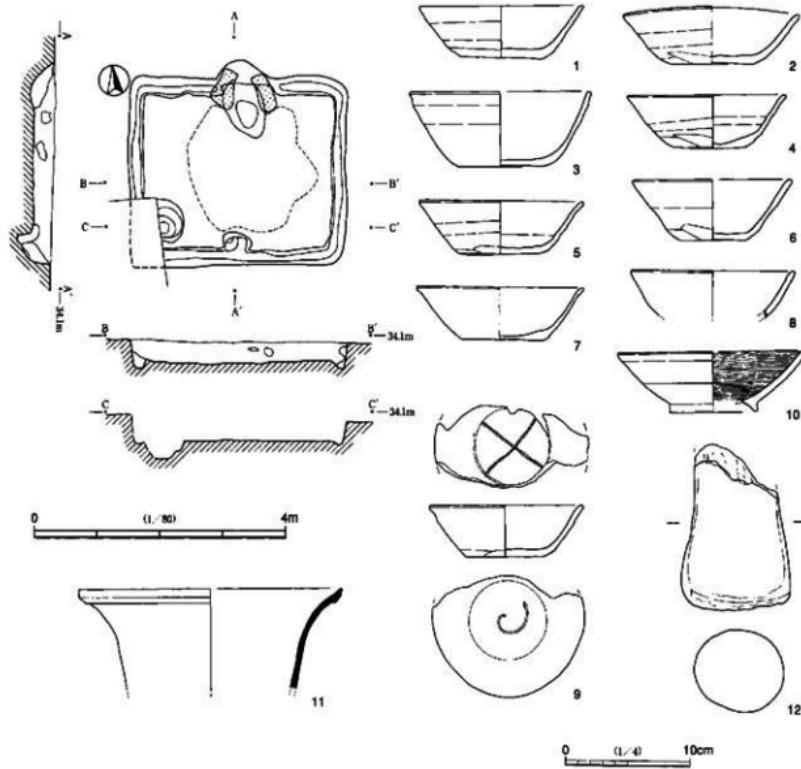
出土遺物は少なく、覆土中から須恵器杯・壺、紡錘車が出土している。紡錘車は砥石を再加工したもので、径3.7cm、厚さ1.6cm、重量は32.78gを測る。

#### 070号住居跡（第71図、図版24・46）

調査区の北西部、C 2 グリッドに位置する。上面が全体に削平されている。

平面形態は方形で、規模は3.64m × 3.94mを測る。主軸方位はN -7° - Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は14cm～20cmを測る。床面は全体に堅緻で、中央部には硬化面が広がる。壁溝（幅10cm～20cm、深さ5cm～7cm）は北壁の一部とカマド部分を除いて巡っている。主柱穴は4本検出した。出入り口施設に伴うピットは確認されていない。覆土には暗黄褐色土と暗褐色土が混在している。

カマドは北壁中央東寄りに設けられている。壁への掘り込みはほとんどない。遺存状態は良好ではなく、



第72図 070号住居跡及び出土遺物

袖部が残存していた。火床は皿状に掘り窪まれ、焼土が堆積していた。

出土遺物は少なく、床面や覆土中から土器類が出土している。6はカマド西袖脇から出土した。

#### 072号住居跡（第72図、図版24・46・47）

調査区の中央北側、D2グリッドに位置する。南西コーナーの一部が擾乱をうけているほかは、遺存状態は良好である。

平面形態は長方形で、規模は2.98m×3.48mを測る。主軸方位はN-7°-Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は30cm~38cmを測る。床面はやや凹凸があり、中央部が広く硬化している。壁溝（幅15cm~20cm、深さ6cm~10cm）はカマド部分を除いて全周し、出入り口施設に伴うピットに続く。主柱穴は確認できなかった。南西コーナーには一部擾乱を受けており、貯蔵穴（径65cm、深さ30cm）が付設されている。覆土はローム粒・焼土粒を多く含む暗褐色土を主体に、灰褐色砂が混在している。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を30cm掘り込んで、緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好ではないが、スサを混入した砂質粘土で構築されている。天井部はすでに崩落し、袖部の一部が残存していた。火床は15cm掘り窪められているが、焼土の堆積は少ない。

遺物は床面や覆土中から土師器杯、須恵器壺などが出土している。1・3・4は床面から、11・12はカマド内から出土した。

#### 073号住居跡（第73・74図、第18表、図版25・47・53）

調査区の北西部、C2グリッドに位置する。上面をやや削平されている。

平面形態は不整形で、規模は3.10m×3.48mを測る。主軸方位はW-8°-Sである。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は14cm~28cmを測る。床面は凹凸があるが堅緻で、中央部には硬化面が広がる。壁溝は確認されていない。南壁際にピットを1本検出したが、主柱穴や出入り口施設に伴うピットは確認されていない。覆土はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土を主体に、暗褐色土が混在している。

カマドは西壁中央に設けられ、壁を20cm掘り込んでいる。天井部は崩落していたが、袖部は遺存していた。火床は皿状に広く掘り窪められ、厚く焼土が堆積していた。

遺物は、覆土中から土師器杯・壺、須恵器壺、石製紡錘車、刀子などが多く出土している。3・10は床面直上から出土した。4の線刻土器と刀子（第80図11）は覆土中からの出土である。紡錘車は凝灰岩製で、最大径4.6cm、厚さ1.4cm、孔径0.7cm、重量は33.79gを測る。砥石の計測値等は第18表にまとめた。

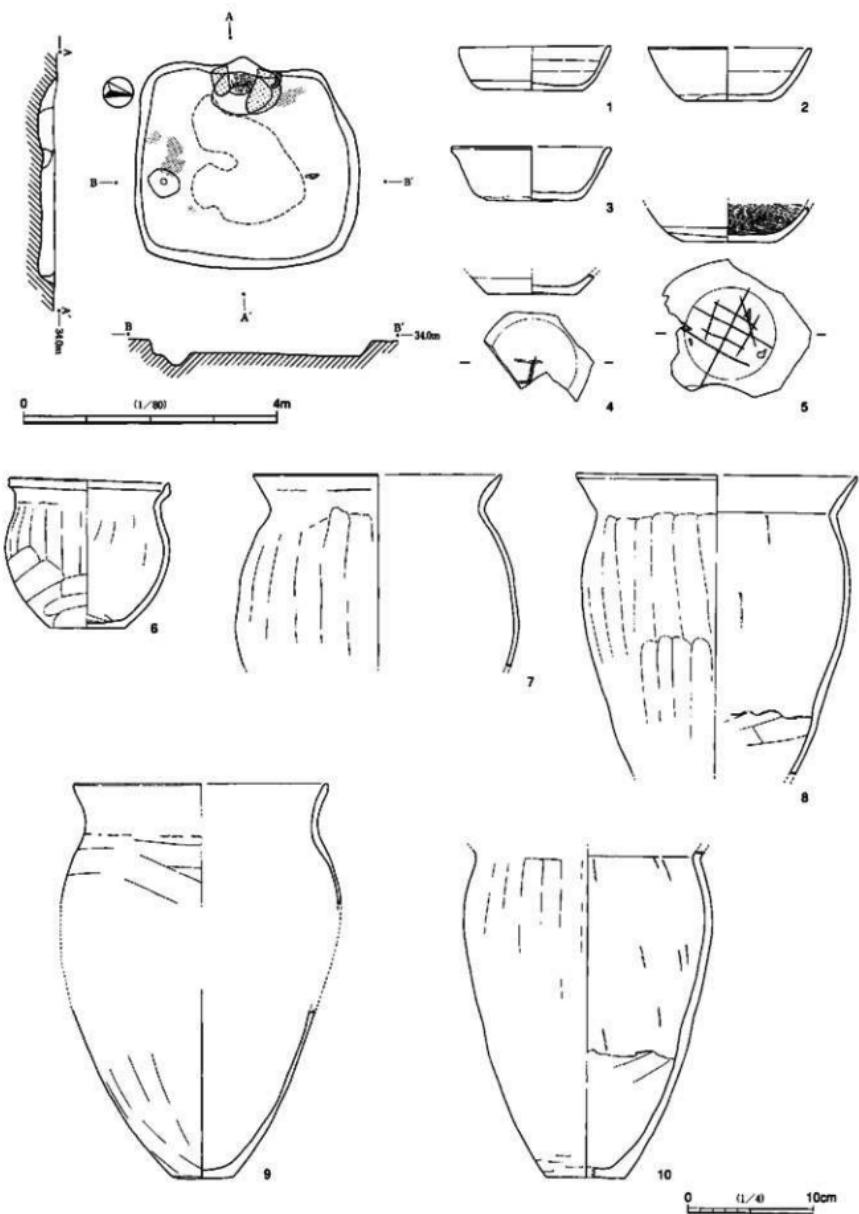
#### 110号住居跡（第75図、図版25）

調査区の北西部、C2グリッドに位置する。床面中央部に擾乱を受けているが、遺存状態は良好である。

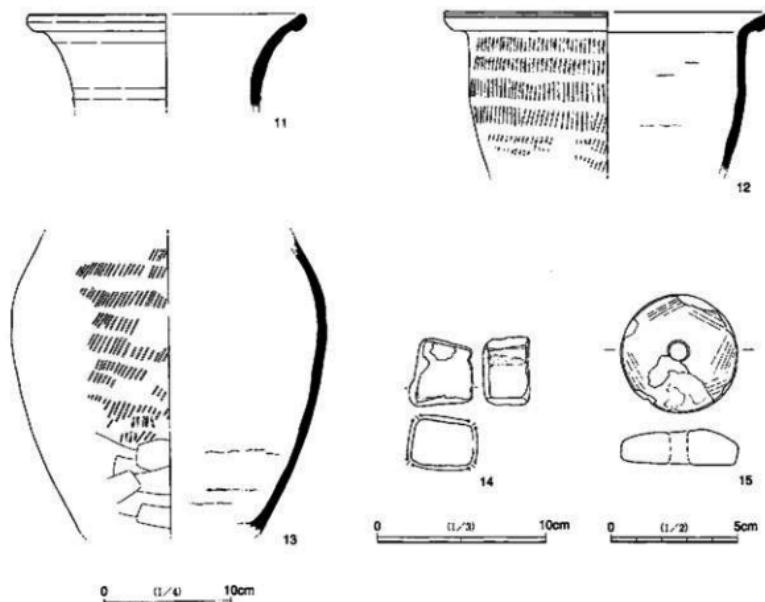
平面形態はほぼ正方形で、規模は3.10m×3.06mを測る。主軸方位はN-12°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は12cm~20cmを測る。東壁側がやや高くなっている。床面は全体に堅緻である。壁溝（幅20cm、深さ5cm前後）は途切れながら巡っている。主柱穴はP1・P2で、P3は出入り口施設に伴うピットである。覆土はローム粒・焼土粒を多く含む暗茶褐色土である。

カマドは北壁中央に設けられ、壁をわずかに掘り込んでいる。遺存状態は良好ではなく、天井部はすでに崩落し、袖部が残存していた。袖部の内面はよく被熱し、火床にも焼土が堆積していた。

遺物はカマド内や覆土中から土師器杯・壺などの破片が多く出土しているが、図示できたのは1点のみである。



第73図 073号住居跡及び出土遺物 (1)



第74図 073号住居跡出土遺物 (2)

111号住居跡（第75図、図版25）

調査区の北西部、C 2 グリッドに位置する。110号住居跡に隣接する。遺存状態は悪く、全体を大きく削平され、床面が露呈していた。また、西半部はすでに消滅していた。

平面形態はほぼ正方形になると考えられ、規模は推定で $3.0m \times 3.1m$ を測る。主軸方位はN-3°-Wである。残存している床面は軟弱である。壁溝（幅20cm、深さ3cm）は、南壁と北東コーナー付近で一部が確認された。ピットは検出されていない。覆土には暗茶褐色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられているが、遺存状態は悪く、袖部の一部が残存していた。火床は12cm掘り窪められ、被熱で硬化していた。

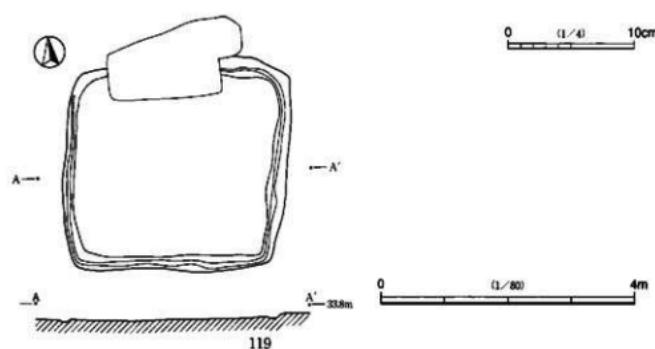
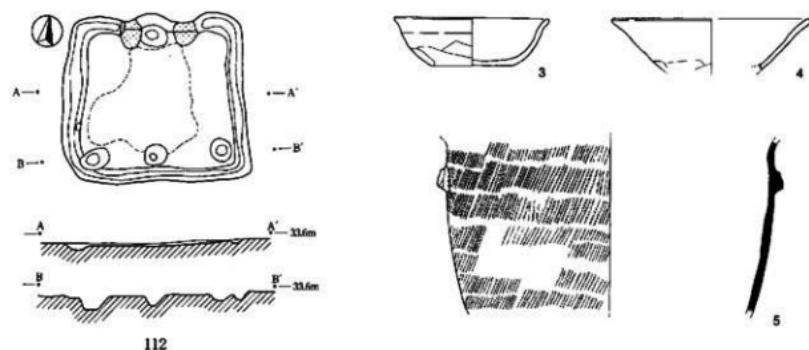
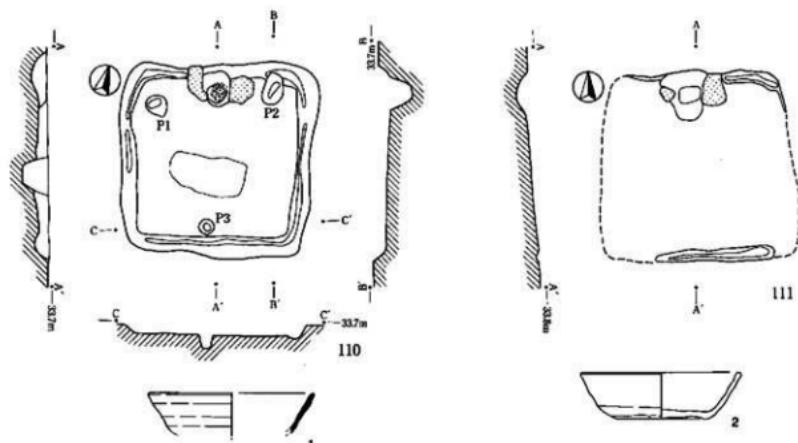
遺物は、カマド内から土器器杯が出土したのみである。

112号住居跡（第75図、図版25・26・47）

調査区の西部、C 2 グリッドに位置する。上面全体をすでに削平されており、遺存状態は悪い。

平面形態は方形で、規模は $2.64m \times 2.84m$ を測る。主軸方位はN-9°-Wである。壁高は現存で2cm~7cmを測る。床面中央部に硬化面が広がっている。壁溝（幅15cm~30cm、深さ4cm~8cm）はカマド部分を除いて全周する。主柱穴は南壁際の2本で、出入り口施設に伴うピットも検出した。覆土にはわずかに暗褐色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられている。遺存状態は悪く、わずかに袖部の一部を確認できたにすぎない。火床は皿状に浅く掘り窪められ、よく被熱していた。



第75図 110・111・112・119号住居跡及び出土遺物

遺物はカマド内を中心に、土師器杯や須恵器壺が出土しているが、図示できたのは3点である。

#### 119号住居跡（第75図、図版26）

調査区の北西部、C2グリッドに位置する。上面は大きく削平され、カマドもイモ穴に攪乱されており、遺存状態は悪い。

平面形態は方形で、規模は3.28m×3.54mを測る。主軸方位はN-5°-Eである。壁は南東コーナー側でわずかに8cmほど残存している。床面の一部まで削平されており、柱穴等も検出できなかった。壁溝（幅12cm～20cm、深さ2cm）は遺存範囲では全周する。

遺物は壁溝内から土師器壺の胴部の破片が1点出土したのみである。図示はできなかったが、9世紀代の土師器壺であろう。

#### 117号住居跡（第76図、図版26・47）

調査区の北西端、C1グリッドに位置する。遺存状態は悪く、116号住居跡、125号住居跡と重複する。109号溝に北壁側を削平されており、カマドはすでに失われていた。

平面形態は方形になると考えられ、規模は推定で3.7m×3.94mを測る。主軸方位はN-28°-Wである。壁は残存部分では緩やかに掘り込まれ、現存高で9cm～16cmである。床面の中央部に硬化面が残る。壁溝（幅20cm～26cm、深さ10cm）は、遺存範囲ではほぼ全周する。主柱穴は4本検出されたが、出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。

遺物は覆土中から土師器杯・皿・壺、須恵器杯・壺などの破片が多く出土している。

#### 125号住居跡（第76図、図版27）

調査区の北西端、C1グリッドに位置する。大半を109号溝に削平されており、西壁と南壁の一部が残存している。南西側の床面も126号上坑に壊されており、遺存状態は悪い。

平面形態は方形になると考えられ、規模は西壁長3.4m、南壁は推定で3.5mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。残存する壁の高さは10cmほどで、床面もほとんど遺存していない。柱穴等も検出できなかった。

出土遺物は少なく、覆土中からわずかに土師器片が出土したが、図示できるものはなかった。

#### 118号住居跡（第76図、図版26・48）

調査区の西部、C2グリッドに位置する。上面を削平されているが、遺存状態は良好である。

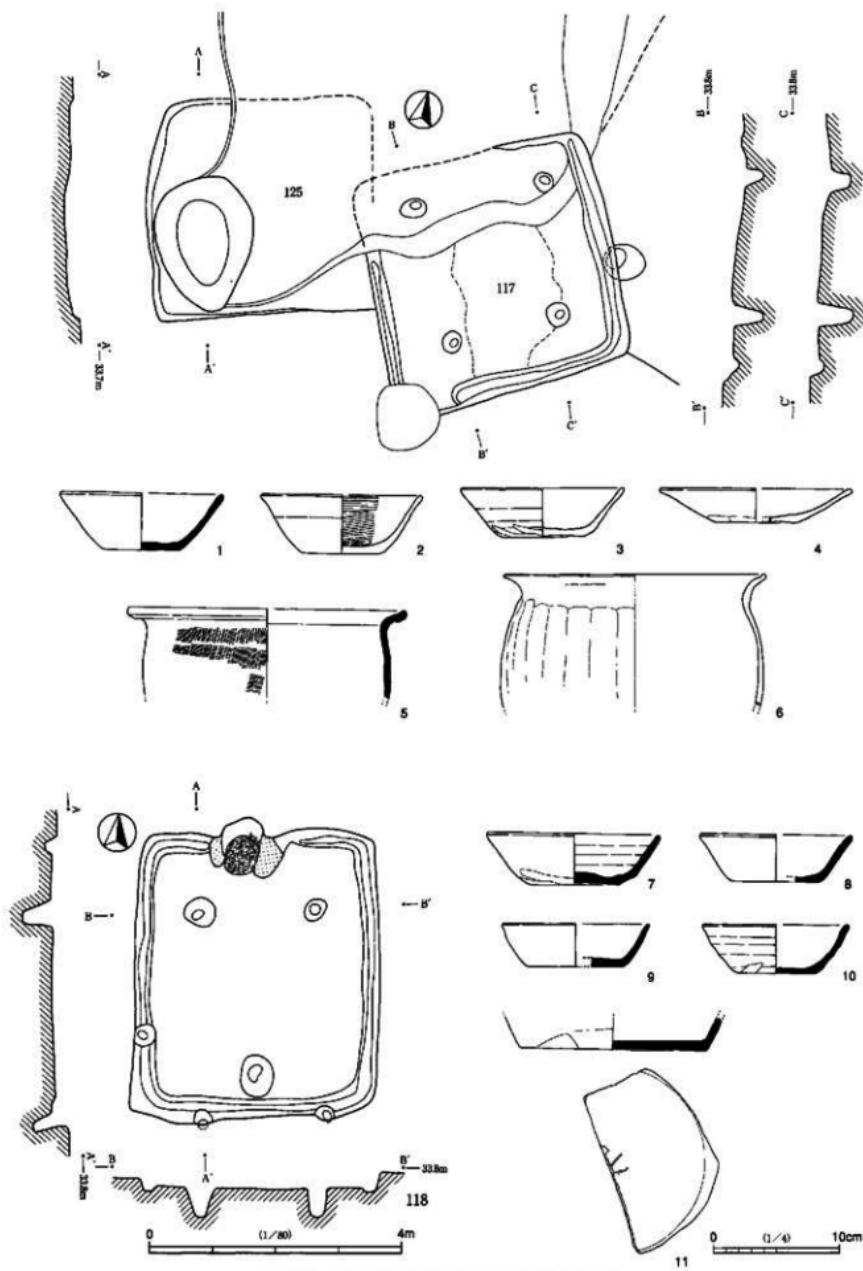
平面形態は長方形で、規模は4.50m×3.90mを測る。主軸方位はN-6°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は14cm～27cmを測る。北西側が次第に低くなっている。床面はやや軟弱で、硬化した面はない。壁溝（幅20cm、深さ3cm～6cm）はカマド部分を除いて全周する。主柱穴は4本検出されたが、南側の2本は壁に内側に向かって穿たれている。P5は出入り口施設に伴うピットである。覆土は、ローム粒・焼土粒を多く含む暗茶褐色土である。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を30cm掘り込んで煙道部を形成している。天井部は崩落しており、袖部が遺存していた。火床は浅いが、焼土がよく堆積し底面は被熱していた。

遺物は覆土中を中心に、須恵器杯・壺などの破片が遺構全体から多く出土している。10は床面から出土した。また、刀子（第80図7）は床面からの出土である。

#### 122号住居跡（第77図、図版26・27・48）

調査区の西部、C2グリッドに位置する。123号住居跡と重複し、北西コーナー付近を削平している。



第76図 117・118・125号住居跡及び出土遺物

平面形態は長方形で、規模は3.12m×3.56mを測る。主軸方位はN-6°-Eである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は7cm～11cmと浅い。床面は凹凸があり、カマド前面が硬化していた。壁溝(幅15cm、深さ8cm～12cm)はカマド部分を除いて全周する。床面からピットが4本検出された。P3は出入り口施設に伴うピットであるが、P1・P2は柱穴よりも貯蔵穴の可能性もある。覆土には暗茶褐色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を27cm掘り込んで煙道部を形成する。遺存状態はあまり良好ではなく、両袖部が残存していた。火床は浅いが焼上が堆積し、よく被熱していた。

遺物はカマドや覆土から土師器杯・皿や鉄製品などが多く出土している。6の墨書き器は床面、1はP2、2と5の線刻土器はカマド内からそれぞれ出土した。紡錘車(第81図24)、鉄製品(第81図33)は覆土中からの出土である。

#### 123号住居跡(第77・78図、図版26・27・48)

調査区の西部、C2グリッドに位置する。122号住居跡に北西コーナー付近を削平されている。

平面形態はほぼ正方形で、規模は5.44m×5.50mを測る。主軸方位はN-8°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ、壁高は7cm～20cmと浅い。床面は全体に軟弱で、硬化した面はない。壁溝(幅10cm～20cm、深さ5cm～8cm)は削平された範囲は不明だが、カマド部分を除いて全周すると考えられる。床面からは4本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。P2はほかの柱穴に比べて径が小さい。覆土には暗茶褐色土が薄く堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられ、壁を10cm掘り込んでいる。天井部は崩落していたが、袖部の遺存は良い。火床は皿状に浅く掘り窪められ、底面はよく被熱していた。

遺物は床面や覆土中から土師器壺、須恵器蓋・高台付杯・長頸壺などが出土している。4・5は混入品である。6の須恵器長頸壺は頸部を欠いた状態で、カマド東脇の床面に倒置されていた。7はカマド前の床面直上からの出土である。

#### 129号住居跡(第79図、図版27・48)

調査区の北西端、B1・C1グリッドに位置する。北側の上面が一部削平されているが、遺存状態は比較的良好である。

平面形態は正方形で、規模は3.22m×3.24mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は10cm～34cmを測る。北側が次第に低くなっている。床面はやや凹凸があり、硬化面はない。壁溝(幅10cm～18cm、深さ4cm)はカマド部分を除いて全周する。柱穴等は検出されていない。

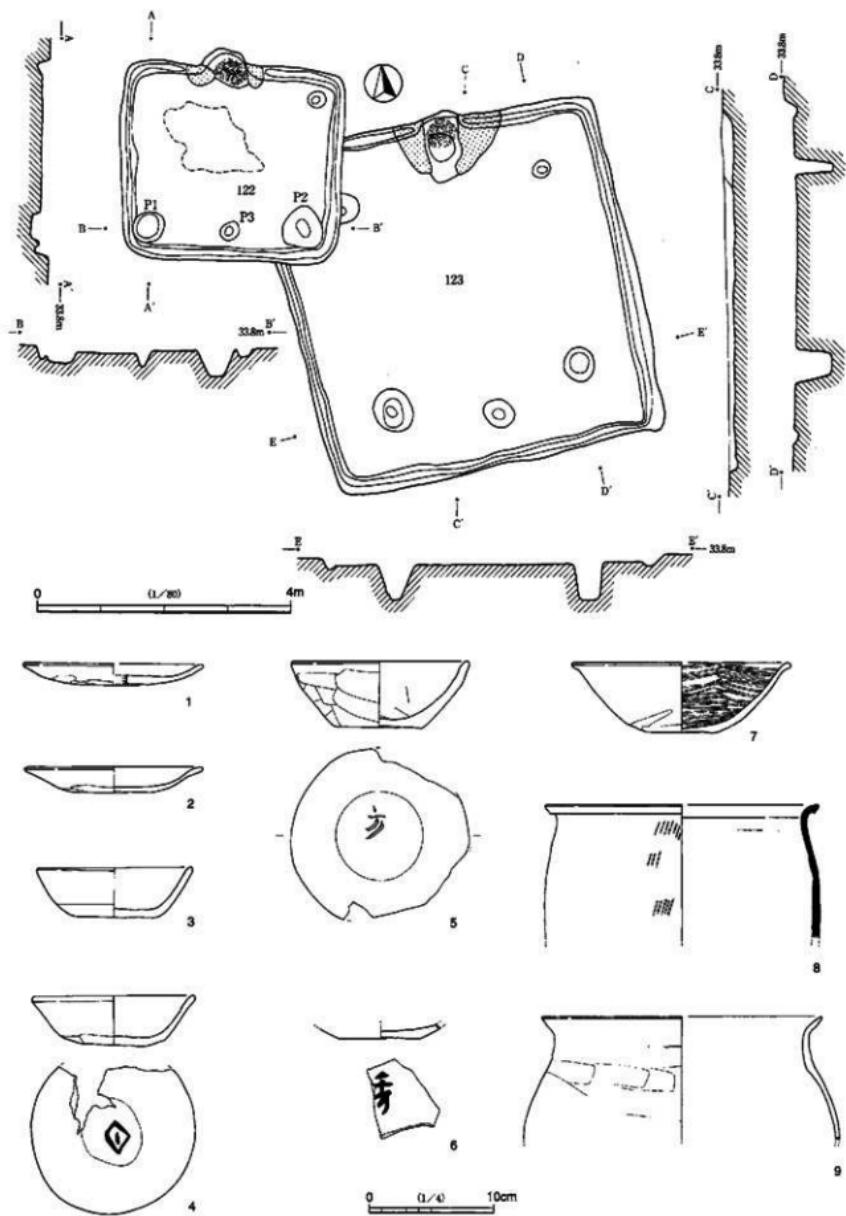
カマドは北壁中央に設けられ、壁を15cm掘り込んでいる。木棟による擾乱を受け、遺存状態は良好ではない。袖部がわずかに残存していたが、内面はよく被熱していた。火床は皿状に掘り窪められ、底面も被熱していた。

遺物は少なく、須恵器杯、土師器壺などが覆土中から出土している。1は覆土中、2はカマド周辺から出土した。

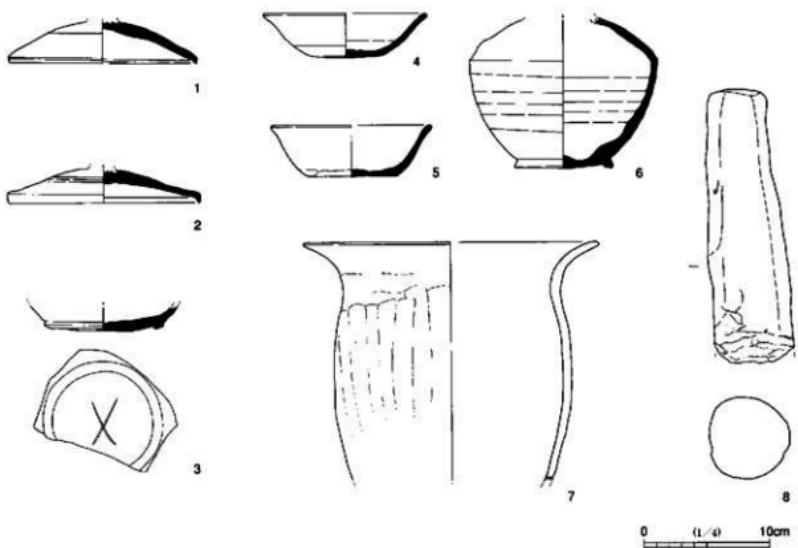
#### 128号住居跡(第79図、図版27)

調査区の西部、C2グリッドに位置する。上面は大きく削平され、遺構北側と西壁中央にも擾乱を受け、遺存状態は悪い。残存していた焼土の範囲などから、カマドは西壁に設けられていたと考えられる。

平面形態は長方形で、規模は3.50m×4.20mを測る。主軸方位はW-2°-Sである。壁はわずかに残存し、高い箇所でも6cm程度である。床面はほぼ平坦で、中央部は硬化している。壁溝(幅10cm～20cm、深さ4



第77図 122・123号住居跡及び122号出土遺物



第78図 123号住居跡出土遺物

cm～9 cm)は遺存している範囲では全周する。4本の主柱穴が検出された。東側の2本は壁溝に穿たれており、深さも西側の2本に比べて深い。出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。覆土にはわずかに暗褐色土が堆積していた。

カマドはすでに攪乱を受けており、遺存していない。残存する焼土の範囲から、西壁中央より北側に設けられていたと考えられる。

遺物はわずかに9世紀中頃と考えられる土師器皿片などが柱穴や覆土から出土したが、図示できるものはなかった。

#### 131号住居跡（第79図、図版27）

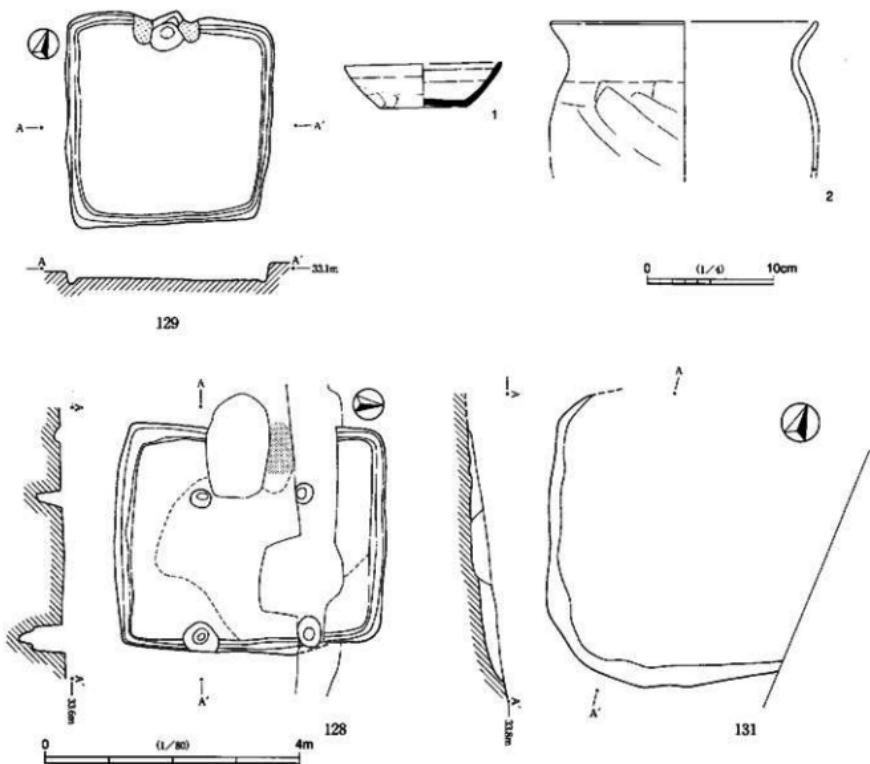
調査区の北端、C1グリッドに位置する。斜面にかかるため、北壁と東壁側はすでに消失しており、遺存状態は悪い。南北側の残存部分と遺物の出土状況から、住居跡と判断した。

平面形態は方形になると考えられ、規模は西壁長4.3m、南壁長は現存で3.1mを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は遺存のよい南壁で26cmである。床面は全体に軟弱で、斜面に向かって下がっている。柱穴等は検出されていない。また、カマドの位置等も不明である。

遺物は覆土中から主に9世紀代の土師器片などがわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

#### 3 金属製品

奈良・平安時代の竪穴住居跡から出土した金属製品である（第80・81図、図版50・51）。鉄製品がほとんどであるが、銅製品も2点含まれている。鉄製品は20軒の竪穴住居跡から37点出土している。以下、製品



第79図 128・129・131号住居跡及び出土遺物

ごとに報告する。

**銅鉗**（第80図1） 役人の腰帶に装着する鉗帶金具の鉗尾である。表金具のみで裏金具は出土していないが、遺存状態は良好である。横幅4.7cm、縦幅2.9cm、高さ0.5cm、厚さ1.5mm、重量は18.09gである。上面で横幅4.3cm、縦幅2.5cmの面をつくる。内面は鉄放しの粗面のままで、横幅方向に2足、縦幅方向に沿って2足、計4足の鉗足を鉄出す。鉗足の先端は折損している。024号住居跡から出土した。

**不明銅製品**（第80図2～4） 銅板の小片である。3片出土しているが、もとは同一個体であろう。2は現存長4.05cm、幅1.85cmで、厚さ0.5mmの2枚の薄い銅板をあわせてある。3は現存長1.45cm、幅0.85cm、厚さ1.2mm。4は現存長0.8cm、幅0.6cm。026号住居跡の覆土上面から出土した。

**鎌**（第80図5） ほぼ完成品で、住居跡からの出土はこの1点のみである。基部は大きく外彎する特徴的な形態で、刃は直線的に延び先端でやや外反する。基部部に高さ1.5cmの折り返しをもつ。全長20.8cm、最大刃幅4.2cm、棟厚5.5mmを測る。042号住居跡から出土した。

**手鎌**（第80図6） 銛孔はないが、形態等から手鎌と考えられる。現存長4.38cm、幅1.8cm、棟厚2.0mmを測る。刃部先端が内弯する。044号住居跡から出土した。

**刀子**（第80図7～16、第12表） 10軒の住居跡から10点出土した。多くは刃闇と棟闇をつくりだしている一般的な形態の刀子で、大きさは様々である。11のみ棟闇のない形態の小型品で、茎の先端が少し折り曲がっている。完形品は少なく、16は大きく折り曲げられており、本来の形態も復元して図示した。15は茎の一部と考えられ、無闇か闇が鈍角につくられている形態であろう。7・10は柄の木質が残っている。

**鉄鎌**（第80図17～23、第13表） 3軒の住居跡から7点出土した。042・049号住居跡で2点、057号住居跡では3点と、特定の住居跡からまとめて出土している。鎌身の形態の内訳では、平根式2点、尖根式1点、雁股鎌1点、片刃箭式1点である。18の逆刺の長さは0.8cmである。19の革元には、上部に糸巻による径1.0cmの口巻、その下には樹皮による径0.9cmの口巻が施され、矢柄への装着の仕方がよくわかる。17は雁股鎌、18・19は長三角形式で根は両丸造りである。

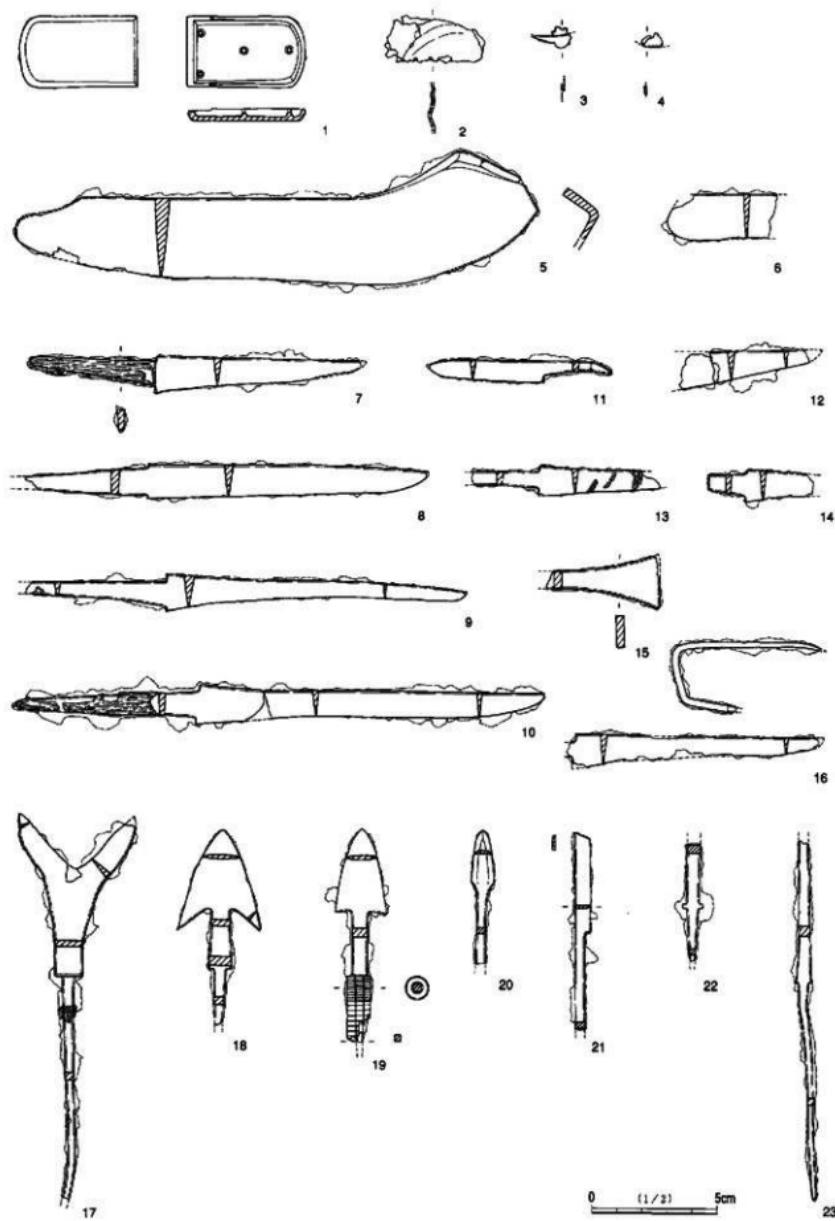
**紡錘車**（第81図24～28、第14表） 5軒の住居跡から5点、うち4点は紡輪が装着した状態で出土した。25は遺存状態は良好である。軸を欠損しているものが多く、全体の形状は不明である。紡輪の大きさから、径5cm前後(24・25)、径4cm前後(27)、径3.5cm前後(26)の3種類に大別できる。

**鎌**（第81図29） 本来はコ字状になり、両端も尖っていたと考えられる。現存総長6.0cm、横幅4.5cm、厚さ0.5cmである。049号住居跡から出土した。

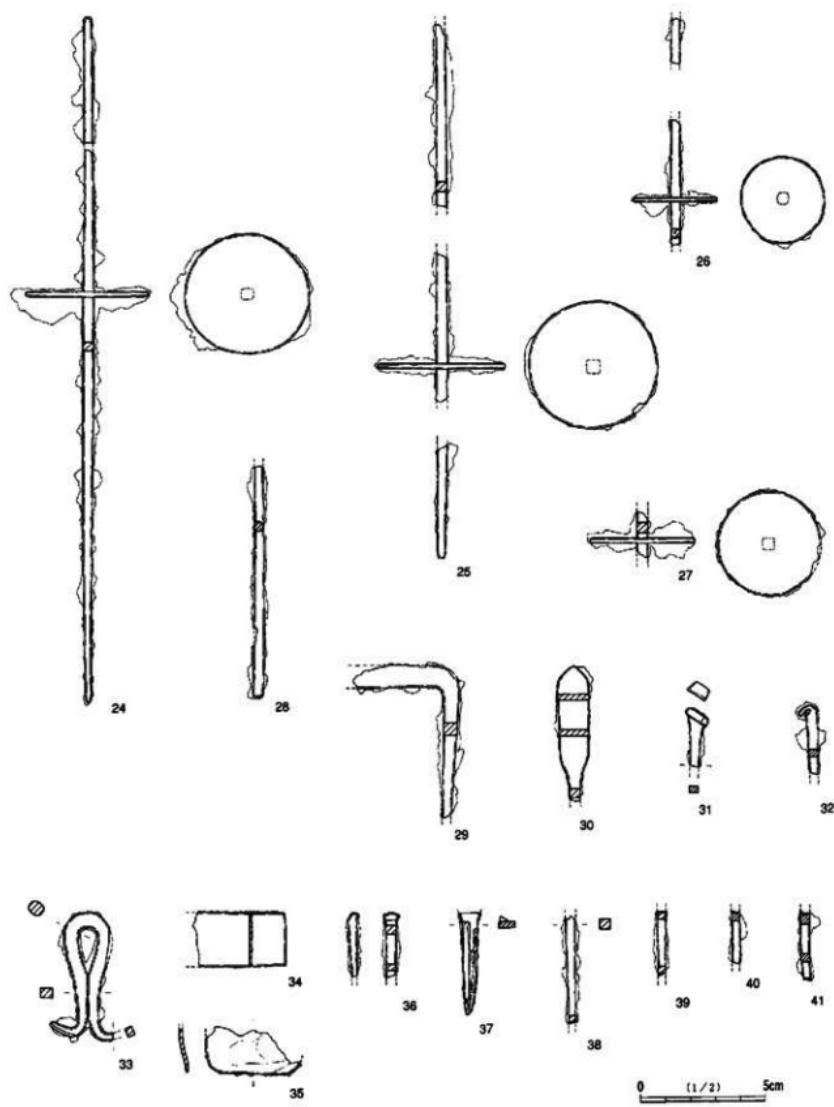
**不明工具**（第81図30） 用途は不明であるが、工具と考えられる。鎌身にあたる部分に刃部がなく、断面も扁平であることから、鉄鎌ではないと判断した。全長5.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。基部は断面方形で、幅0.45cm、厚さ0.38cmである。

**鉄釘**（第81図31・32） 2点出土した。いずれも脚下半部を折損する。31は頭部が傾いている。現存長2.33cm、方形の頭部(8.5mm×5.1mm、厚さ3.0mm)は小さく、脚(3.6mm×2.5mm)は断面長方形である。042号住居跡出土。32は折頭釘で、脚の上端を打ち延ばし、内側に折り曲げて頭部をつくる。現存長2.78cm、脚(3.8mm×3.0mm)は断面方形である。062号住居跡から出土した。

**不明鉄製品**（第81図33～41） 用途不明や、棒状で原形が不明な製品である。33は棒状の鉄を折り曲げ、断面楕円形(5.5mm×5.2mm)の環部をつくる。現存長5.02cm、棒状部分は断面方形(4.0mm×2.9mm)である。122号住居跡出土。34は薄い板状の製品で、刃部はない。現存長3.73cm、幅2.1cm、厚さ0.1cmである。068号住居跡出土。35も薄い板状の製品で、表面に歪みがある。現存長3.78cm、現存幅1.45cm、厚さ0.12cmである。051号住居跡出土。36は頭部はないが、釘の可能性もある。現存長2.52cm、断面は方形(3.5mm×2.5mm)である。064号住居跡出土。37は木質が付着しており、刀子か鉄鎌の一部と考えられるが判然としない。現存長4.0cm、最大幅0.9cm、断面は長方形(2.3mm×6.5mm)である。019号住居跡出土。38～41は鉄鎌や釘などの一部と考えられる。いずれも棒状で、断面を方形につくる。38・39は028号住居跡、40・41は062号住居跡からそれぞれ出土した。



第80圖 住居跡出土金屬製品（1）



第81図 住居跡出土金属製品 (2)

第12表 刀子計測表

(現存値・cm)

番号	遺構番号	全長	身			茎			備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
7	118号住居跡	13.10	8.10	1.50	0.30	5.00	0.80	0.30	茎に木質部が残る
8	028号住居跡	15.90	11.10	1.35	0.35	4.80	0.95	0.35	
9	049号住居跡	17.45	11.90	1.25	0.40	5.55	0.80	0.24	
10	002号住居跡	20.88	13.85	1.03	0.25	7.03	0.90	0.30	茎に木質部が残る
11	073号住居跡	7.30	4.65	0.80	0.23	2.65	0.42	0.22	刃闊のみ
12	020号住居跡	5.18	—	1.15	0.30	—	—	—	
13	051号住居跡	7.60	4.90	1.00	0.25	2.70	0.55	0.30	
14	064号住居跡	4.20	2.70	1.18	0.22	1.50	0.75	0.25	
15	017号住居跡	4.52	—	—	—	4.52	2.20	0.30	茎のみ遺存
16	062号住居跡	10.00	9.78	1.18	0.20	0.22	—	—	大きく折れ曲がっている

第13表 鉄鎌計測表

(現存値・cm)

番号	遺構番号	全長	鎌身			範被			備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
17	042号住居跡	15.15	6.38	4.68	0.25	—	—	—	雁股鎌
18	049号住居跡	7.65	4.00	2.85	0.19	2.30	0.90	0.35	
19	042号住居跡	8.32	3.30	2.05	0.20	2.50	0.60	0.35	2.58 0.28 0.25
20	057号住居跡	5.28	2.05	0.90	0.16	3.23	0.35	0.24	— — —
21	057号住居跡	7.70	3.98	0.60	0.15	3.72	0.40	0.30	— — —
22	057号住居跡	4.64	—	—	—	2.54	0.50	0.35	2.10 0.27 0.22
23	049号住居跡	14.10	—	—	—	5.58	0.35	0.22	8.52 0.45 0.28

第14表 紡錘車計測表

(現存値・cm)

番号	遺構番号	全長	紡輪		軸			備考
			径	厚さ	長さ	幅	厚さ	
24	122号住居跡	26.90	4.70×4.90	0.22	26.90	0.42	0.35	
25	028号住居跡	17.27	4.98×5.10	0.20	17.27	0.42	0.42	
26	026号住居跡	7.35	3.38×3.40	0.18	7.35	0.35	0.35	
27	037号住居跡	1.80	4.20×4.06	0.20	1.80	0.45	0.45	
28	049号住居跡	9.15	—	—	9.15	0.38	0.35	軸のみ遺存

## 第2節 掘立柱建物跡

### H-01 (第82・85図、図版28・49)

調査区の東側、E 3 グリッドに位置する。028号住居跡を一部壊して重複する。

東西 3 間(3.9m)、南北 3 間(5.4m)の南北棟の側柱建物である。南隅柱の位置がやや北に寄っている。桁行方位は N-29°-E である。柱間寸法は桁行(南北)方向で 1.5m~2.0m、梁間(東西)方向では 1.1m~1.5m を測る。柱穴は径 50cm~96cm の楕円形で、深さ 67cm~103cm と一定していない。北側梁間の柱穴は比較的大きく深く掘り込まれている。残存している柱のあたり痕跡は、径 20cm 前後のものが多い。掘方埋土上面には砂質粘土を充填している。

遺物は覆土中から須恵器杯(第85図 1)と壺(第85図 4~6)などが出土した。

### H-02 (第82・85図、図版28)

調査区の東側、E 3 グリッドに位置する。H-01 の北側に隣接する。

東西 2 間(3.6m)、南北 3 間(4.6m)の南北棟の側柱建物である。桁行方位は N-18°-E である。柱間寸法は桁行(南北)方向で 1.4m~2.0m、梁間(東西)方向では 1.5m~1.8m を測る。柱穴は径 45cm~86cm の楕円形で、深さは 37cm~69cm である。北側梁間方向の柱穴は一定の規模で掘り込まれている。確認された柱のあたり痕跡は径 20cm である。掘方埋土は黒色土を主体に、ローム粒を含む暗褐色土が混入する。

遺物は覆土中から須恵器壺の底部(第85図 7)が出土した。

### H-03 (第83図、図版28)

調査区の中央部、D 3 グリッドに位置する。

東西 3 間(4.0m)、南北 3 間(5.2m)の南北棟の側柱建物である。桁行方位は N-10°-E である。柱間寸法は桁行(南北)方向で 1.6m~2.0m、梁間(東西)方向では 1.1m~1.5m を測る。柱穴は径 64cm~90cm の円形で、深さは 25cm~60cm である。掘方の浅い柱穴が多いが、北東隅の柱穴は深さ 60cm で、柱のあたり痕跡(径 20cm)も確認できた。掘方埋土は小ローム・ブロックを含む暗褐色土と黒色土で構成されている。

覆土中から土器片が出土したが、図示できるものはなかった。

### H-04 (第83図、図版28)

調査区の中央部や南側、D 3 グリッドに位置する。

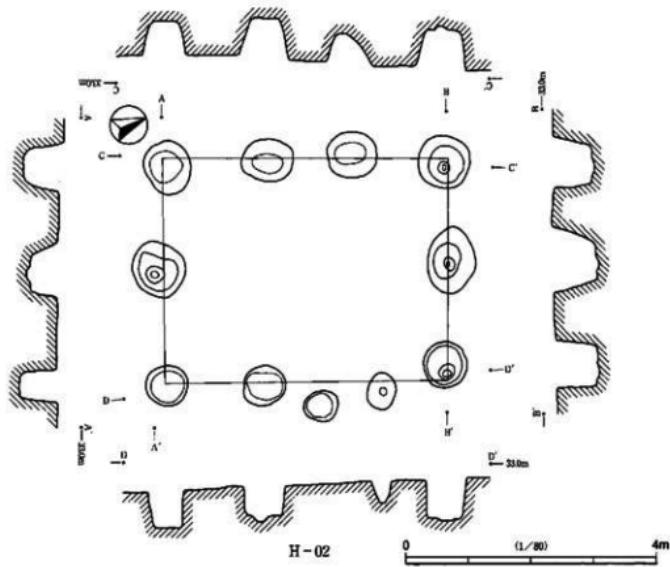
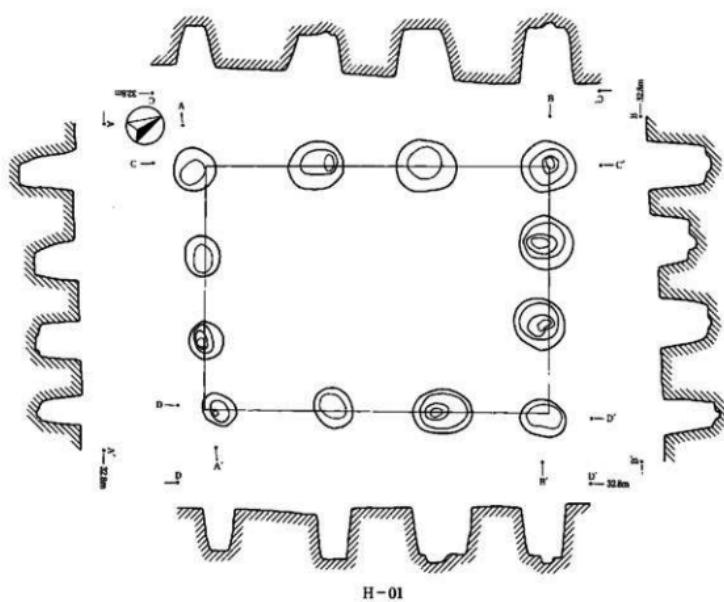
東西 2 間(3.8m)、南北 5 間(9.5m)の南北棟の側柱建物である。南西隅柱の位置がやや北に寄っている。桁行方位は N-24°-E である。柱間寸法は桁行(南北)方向で 1.6m~2.4m、梁間(東西)方向では 1.8m~2.2m を測る。桁行方向の北から 2 間目の棟筋に、間仕切りのための浅い柱穴(深さ 10cm)が穿たれている。柱穴は径 52cm~76cm の円形で、深さは 10cm~60cm と不揃いである。概して浅い柱穴が多い。掘方埋土はローム粒を含む黒色土と暗褐色土からなる。

覆土中から土器片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

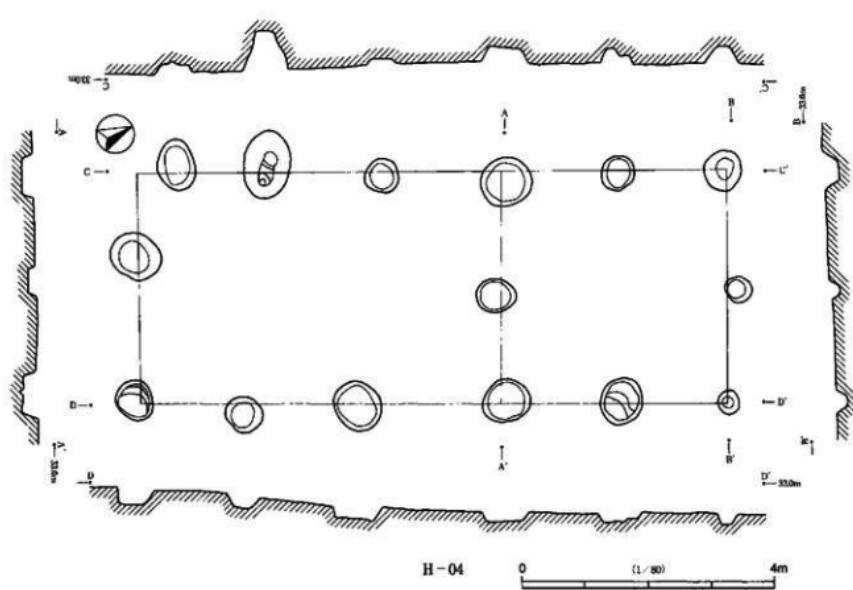
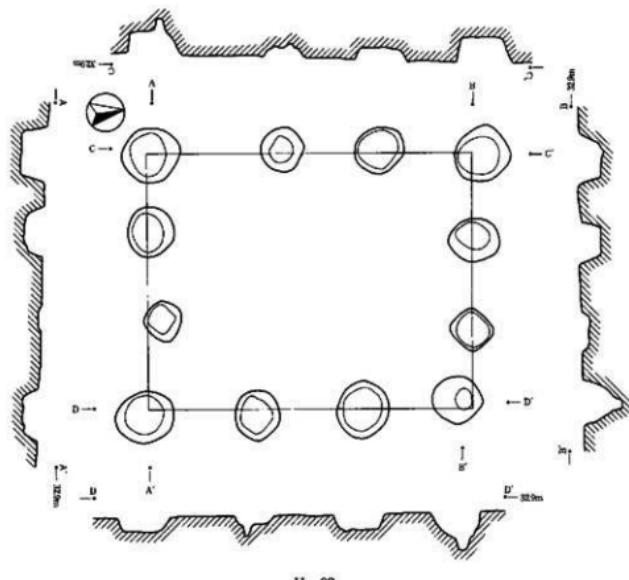
### H-09 (第84・85図、図版28)

調査区の中央部、D 2 グリッドに位置する。H-13 と重複し、柱穴の重複関係から H-13 より新しい。

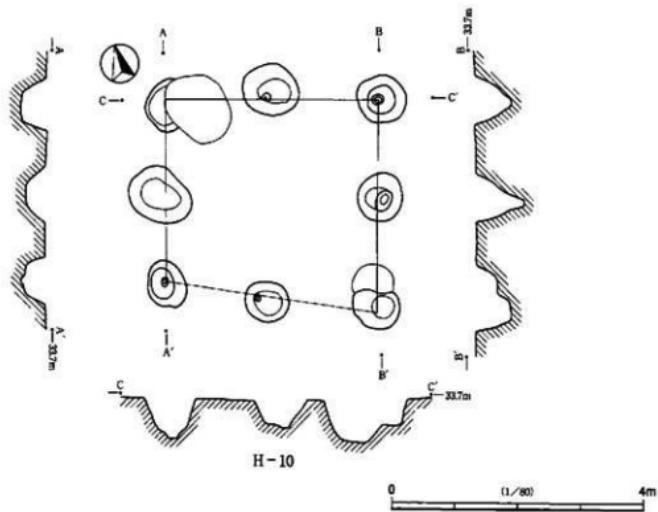
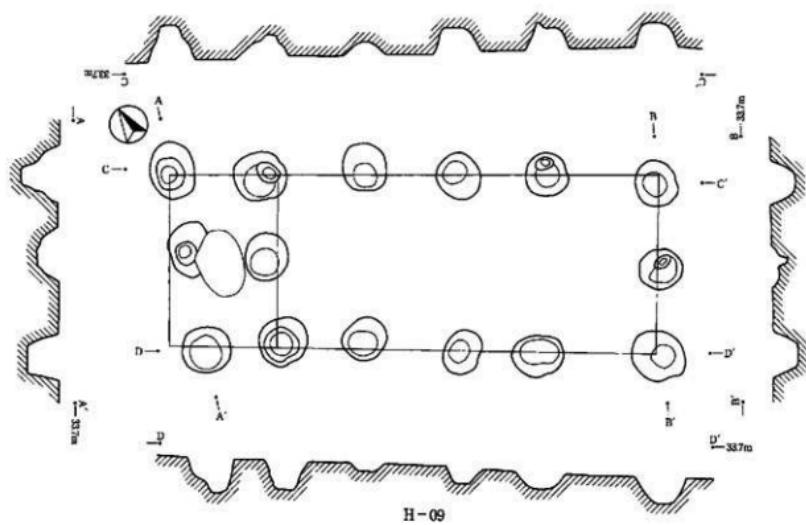
東西 5 間(7.4m~7.8m)、南北 2 間(2.8m)の東西棟の側柱建物で、南側の桁行は北側より短い。桁行方位は N-56°-W である。柱間寸法は桁行(東西)方向で 1.2m~1.8m、梁間(南北)方向では 1.2m~1.6m を測る。桁行方向の西から 1 間目の棟筋に柱穴が穿たれている。西側の柱穴は規模も方向も他と異なるため、間仕切りのための柱穴ではなく、妻庇を付けていた可能性も考えられる。柱穴は径 60cm~80cm の円形で、



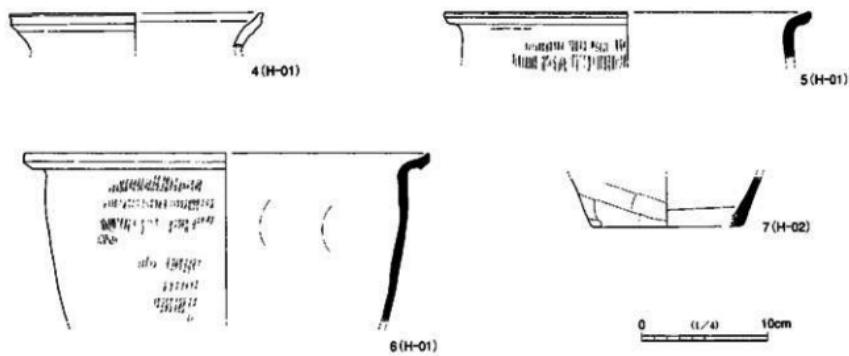
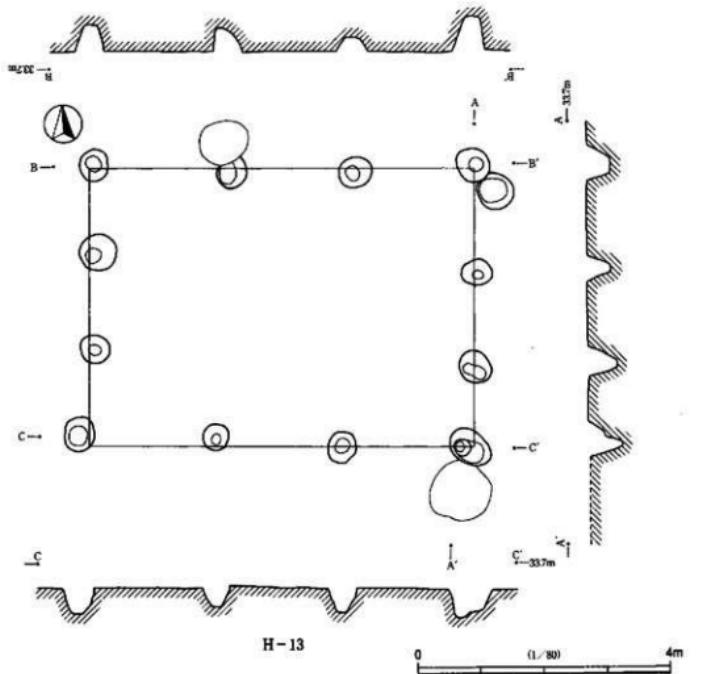
第82図 H-01・02



第83図 H-03・04



第84図 H-09・10



第85図 H-13及び掘立柱建物跡出土遺物

深さは10cm～60cmと不揃いである。西側の2列の柱穴は、他の柱穴と比較して規模も大きく深い。

遺物は覆土中から須恵器杯片(第85図2)が出土している。

#### H-10 (第84・85図、図版28)

調査区の中央部、C2グリッドに位置する。一部擾乱を受けている。

東西2間(3.5m)、南北2間(3.0m)の東西棟の側柱建物である。南東隅の柱がやや南に寄っている。桁行方位はN-77°-Wである。柱間寸法は桁行(東西)方向で1.5m～1.9m、梁間(南北)方向では1.3m～1.7mを測る。柱穴は径60cm～90cmの梢円形で、深さは30cm～74cmと不揃いである。残存する柱のあたり痕跡は径14cm～20cmである。

遺物は覆土中から上師器杯片(第85図3)が出土している。

#### H-13 (第85図、図版28)

調査区の中央部、D2グリッドに位置する。H-09と重複し、柱穴の一部を壊されている。

東西3間(6.1m)、南北3間(4.3m)の東西棟の側柱建物である。桁行方位はN-86°-Wである。柱間寸法は桁行(東西)方向で2.0m～2.2m、梁間(南北)方向では1.3m～1.7mを測る。柱穴は径40cm～60cmの円形で、深さは28cm～65cmと不揃いである。全体に他の建物跡の柱穴より一回り小さい。

第15表 掘立柱建物跡一覧

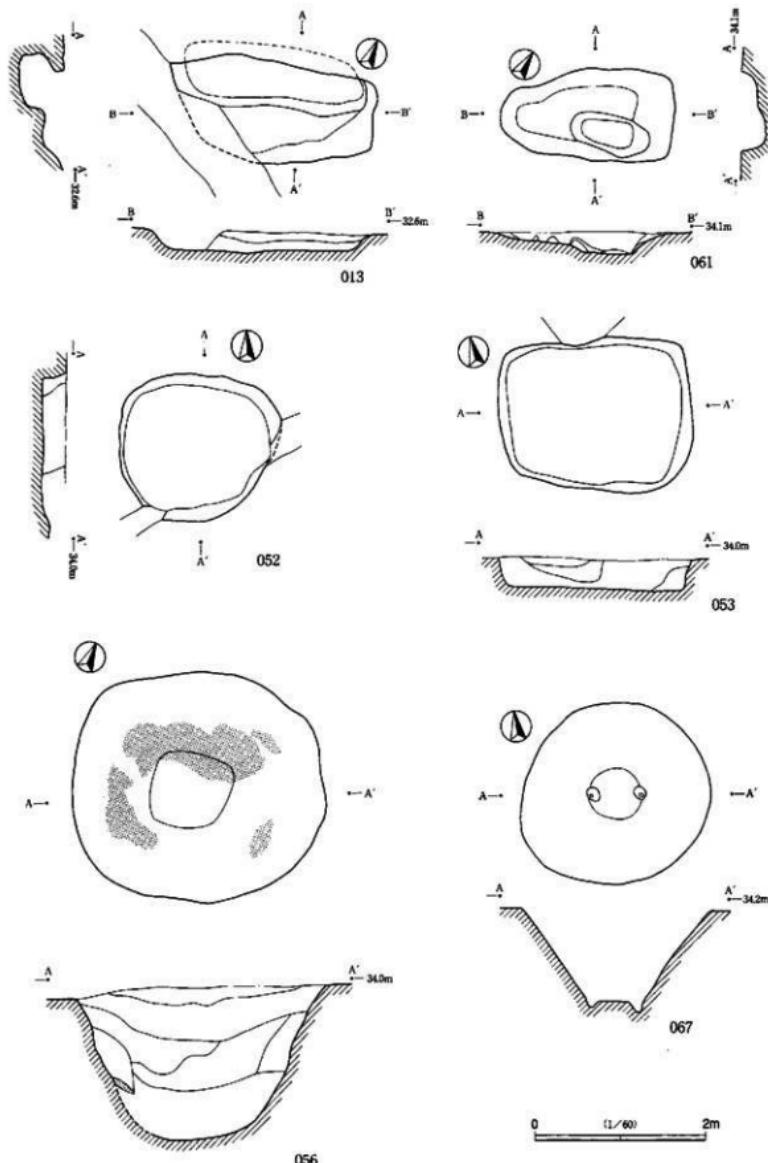
遺構番号	グリッド	棟方向	桁行長(m)	梁間長(m)	桁行間数	梁間間数	桁行柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	備考
H-01	E3-22	南北	5.4	3.9	3	3	1.5～2.0	1.1～1.5	
H-02	E3-12	南北	4.6	3.6	3	2	1.4～2.0	1.5～1.8	
H-03	D3-17	南北	5.2	4.0	3	3	1.6～2.0	1.1～1.5	
H-04	D3-46	南北	9.5	3.8	5	2	1.6～2.4	1.8～2.2	間仕切り
H-09	D2-82	東西	7.8	2.8	5	2	1.2～1.8	1.2～1.6	庇か間仕切り
H-10	C2-89	東西	3.5	3.0	2	2	1.6～1.9	1.3～1.7	
H-13	D2-92	東西	6.1	4.3	3	3	2.0～2.2	1.3～1.7	

### 第3節 土坑

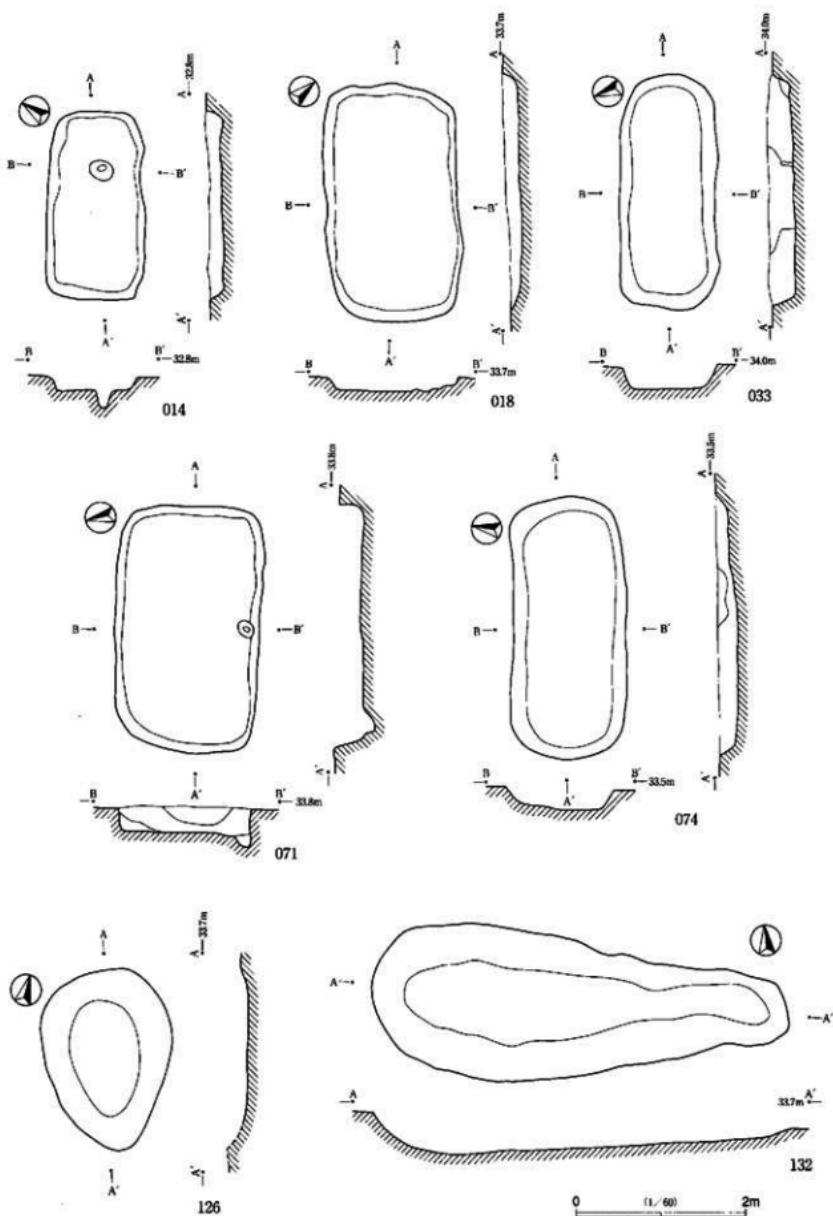
有天井土坑1基と土坑15基のほか、多数のピット群を検出した。主な土坑の規模等は第16表にまとめ、代表的なものは以下に記載した。土坑のなかには、形状等から土坑墓と考えられる遺構や小規模なピットも含まれている。調査区全域に分布しているが、主に北側の区域に東西に展開し、住居跡の周辺に多く位置している。形態は円形・梢円形、長方形、不整方形等があり、規模等も様々である。出土遺物から時期を判断できる土坑もある。また、ピット群は台地中央部から西側にかけて集中的に分布している。性格の不明なピットが多く、このなかから遺物が出土したピットを掲載した(第88図、図版49)。

#### 013号土坑 (第86図、図版28)

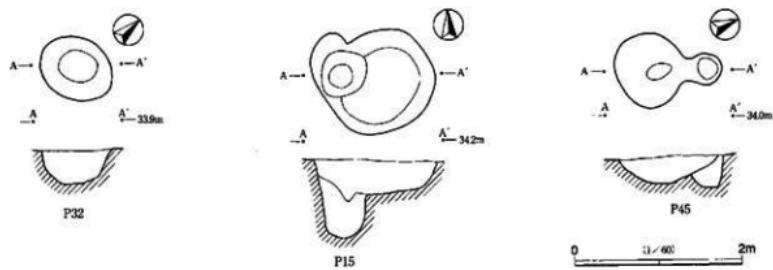
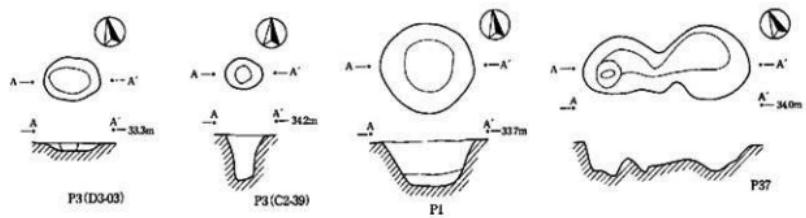
調査区の東端、F2グリッドに位置する、有天井土坑である。003号溝に西側の一部を削平されている。天井部はすでに崩落しており、平面形態は長方形になると考えられる。現存で長軸2.4m、短軸1.2mを測る。緩やかに掘り込まれ、掘り込み面から26cmのところに中段をもつ。底面は長方形で、長軸2.15m、短軸0.65m、深さ0.54mである。底面にピット等は確認されていない。覆土はローム粒を多く含む



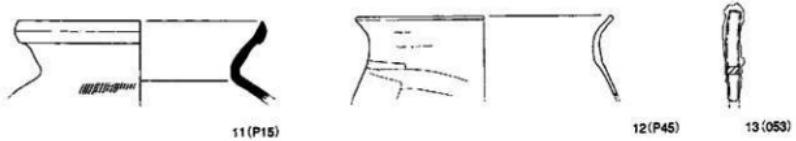
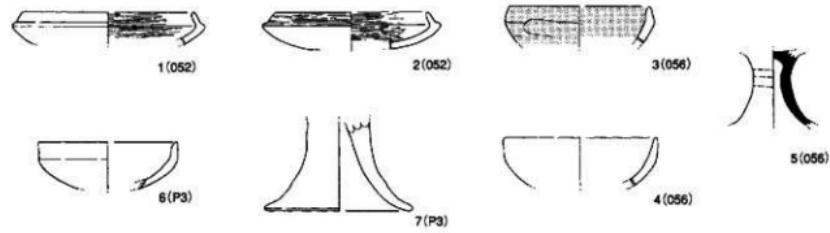
第86圖 土坑（1）



第87図 土坑 (2)



0 1/40 2m



0 1/20 5cm

第88図 土坑(3) 及び出土遺物

茶褐色土とローム粒である。出土遺物はない。

#### 052号・053号土坑（第86・88図、図版29）

調査区の中央北部、D 2 グリッドに位置する。ともに045号住居跡の壁を一部削平し、構築されている。平面形態がやや異なるが、規模や深さは近似している。052号土坑からは古墳時代後期の土師器杯が2点（第88図1・2）出土しており、両土坑とも同時期と考えられる。053号土坑の底面から、棒状鉄製品（第88図13、長さ3.65cm、幅4.8mm、厚さ3.0mm）が出土している。

#### 056号土坑（第86・88図、図版29・49）

調査区の中央北部、D 1 グリッドに位置し、054号住居跡の西側に隣接する。遺存状態は良好で、土坑のなかでは最も規模が大きい。平面形態は楕円形で、径2.7m × 2.95m、深さは1.77mである。緩やかに掘り込まれ、底面は径0.9m × 0.95mの不整形で、ほぼ平坦である。覆土中層に焼土層が広がる。覆土は下部にローム粒や小ローム・ブロックが多く含む暗褐色土と、その上に焼土粒や小ローム・ブロックを含む黒色土や明褐色土が堆積している。遺物は古墳時代後期の土師器杯など（第88図3～5）が覆土中から出土した。

#### 067号土坑（第86図、図版29）

調査区の中央北部、D 1 グリッドに位置し、054号住居跡の東側に隣接する。平面形態は径2.1m × 2.3m のほぼ円形で、深さは1.09mである。逆台形に掘り込まれ、底面も径0.63mの円形でほぼ平坦である。底面の東西両端に2基のピット（径14cm × 17cm、深さ11cm～17cm）が穿たれている。覆土はローム粒や小ローム・ブロックを多く含む暗褐色土を主体に、黒色土が混在する。覆土中から土器片が出土した。

#### 014号・018号・033号・071号・074号土坑（第87図、図版28・29・30）

074号土坑を除いて、調査区北側を東西に分布している。074号土坑のみ調査区中央南部に位置する。と

第16表 土坑一覧

遺構番号	旧遺構番号	グリッド	時期	平面形態	長軸方位	長軸長 × 短軸長(m)	深さ(m)	備考
013号	043-13	F2-93	奈良・平安	長方形	N-67°-E	2.40 × 1.20	0.54	有天井土坑
052号	043-52	D2-07	古墳後期	楕円形	-	1.95 × 1.70	0.29	
053号	043-53	D2-28	古墳後期	隅丸方形	N-78°-W	2.28 × 1.80	0.36	
056号	043-56	D1-91	古墳後期	楕円形	-	2.95 × 2.70	1.77	
067号	043-67	D1-94	古墳後期	円形	-	2.30 × 2.10	1.09	
014号	043-14	E3-08	古墳後期	隅丸長方形	N-57°-E	2.23 × 1.15	0.18	土坑墓
018号	043-18	E2-45	古墳後期	隅丸長方形	N-49°-W	2.80 × 1.60	0.19	土坑墓
033号	043-33	D1-98	古墳後期	隅丸長方形	N-78°-W	2.77 × 1.15	0.31	土坑墓
071号	043-71	E2-43	古墳後期	隅丸長方形	N-85°-W	2.88 × 1.70	0.30	土坑墓
074号	043-74	D4-03	古墳後期	隅丸長方形	N-78°-E	3.04 × 1.31	0.23	土坑墓
061号	043-61	C2-27	不明	不整形	N-58°-E	2.03 × 1.10	0.26	
126号	118-26	C1-81	不明	不整形	-	2.15 × 1.54	0.05	
132号	118-32	C1-74	不明	長楕円形	N-79°-W	2.48 × 0.89	0.52	
P3	043-D3-03-P3	D3-03	古墳後期	楕円形	-	0.68 × 0.50	0.10	
P3	043-C2-39-P3	C2-39	古墳後期	円形	-	0.43 × 0.38	0.53	
P1	043-C3-38-P1	C3-38	奈良・平安	円形	-	1.10 × 1.08	0.13	
P37	043-D2-71-P37	D2-71	奈良・平安	不整楕円形	-	1.96 × 0.70	0.38	
P32	043-C3-08-P32	C3-08	奈良・平安	円形	-	0.90 × 0.72	0.41	
P15	043-D2-31-P15	D2-31	奈良・平安	楕円形	-	1.46 × 1.30	0.93	
P45	043-D2-72-P45	D2-72	奈良・平安	楕円形	-	1.26 × 0.88	0.17	

もに平面形態は隅丸長方形で、規模も014号土坑を除いて近似している。人骨や副葬品等は出土していないが、いずれも平坦な底面や、埋め戻したような覆土の状況などから、土坑墓と考えられる。遺物は小片のため図示できないが、古墳時代後期の土師器が出土しており、いずれもこの時期の遺構と考えられる。

#### 第4節 溝状遺構

##### 001号溝（第89図、図版30）

調査区の南西端、B 4グリッドに位置する。北側が調査区外のため、南端の一部を調査した。南に進むに従い、次第に幅を減じ浅くなる。調査範囲で長さ14.8m、最大幅2.3m、深さは全体に浅く、最も深い北側で0.48mである。底面は凹凸があり、側面にピットをもつ。覆土は暗褐色土とローム粒を含む暗黄褐色土である。出土遺物はない。

##### 003号溝（第89図、図版30）

調査区の東端、E 2グリッドからF 3グリッドに延びる。平安時代の住居、有天井土坑と重複する。西側は次第に狭くなり消滅する。東西方向から南へ進んだ後、東へ直角に曲がり斜面向かって下がっていく。調査範囲で長さ66.4m、幅0.5m～1.7m、深さ0.2m～0.4mである。緩やかに掘り込まれ、底面は平坦だが狭い。覆土は暗茶褐色土が主体である。覆土中から土師器片等が出土しているが、図示できるものはない。

##### 004号溝（第90・92図、図版30・49・51）

調査区中央を東西に走り、中央部で南北に曲がっていく。002号住居跡、003号溝、005号溝、006号溝と重複し、これらの遺構に削平されている。調査範囲で長さ132.8m、幅0.4m～1.6m、深さ0.14m～0.54mである。中央部で幅と深さが最も大きくなる。底面は中央部でさらに溝状に掘り込まれているが、その他の区域ではほぼ平坦である。覆土は場所によって異なるが、暗褐色土、黒色土、暗黄褐色土が主体となる。遺物は、土師器杯、須恵器杯、刀子などが覆土中から出土している。

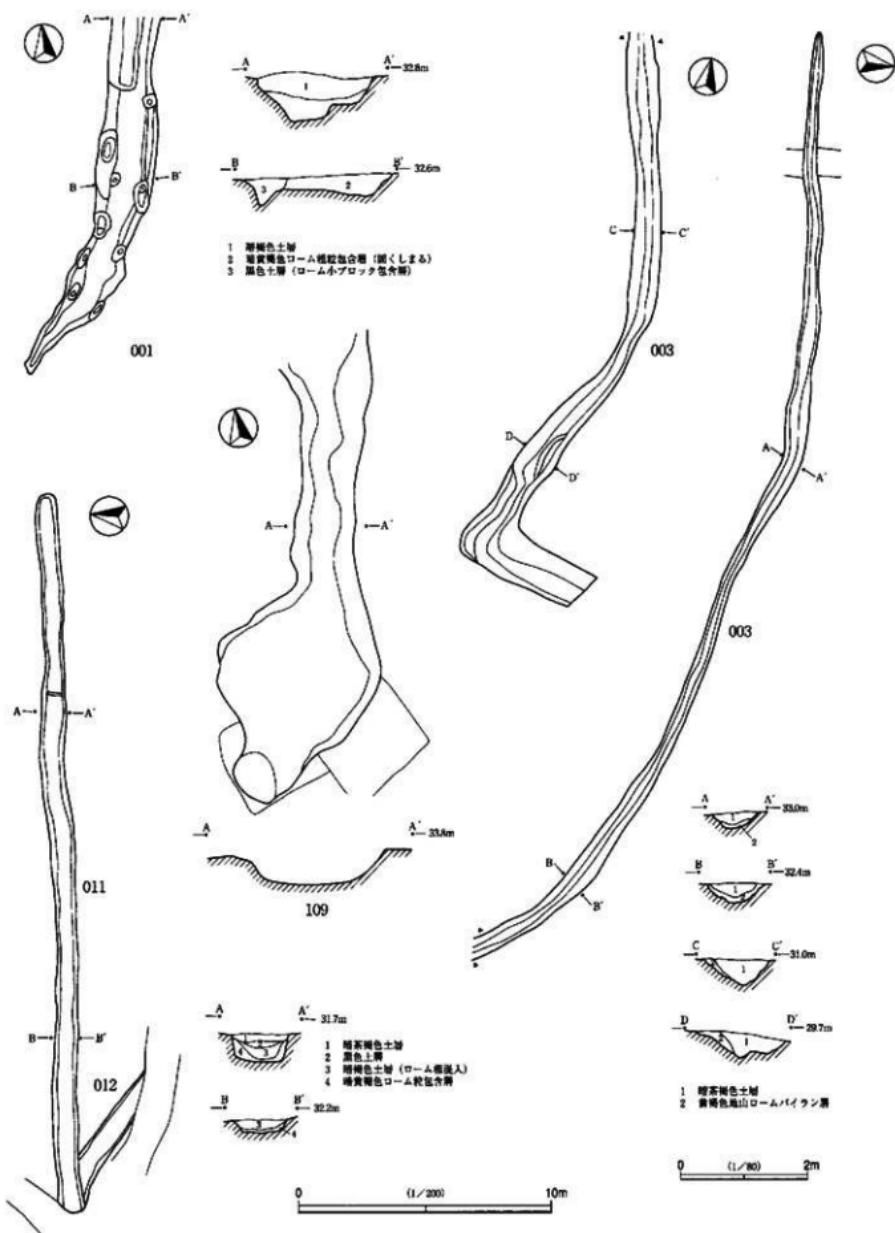
刀子（第92図14）は、身と茎の一部を残す大型の製品である。身は全体に幅広で、棟間はなく刃闌も純角につくられ、身と茎の境が不明瞭である。現存値で、身は長さ12.55cm・幅2.32cm・厚さ4.5mm、茎は長さ1.07cm・幅1.4cm・厚さ2.8mmである。

##### 005号溝（第91図、図版30）

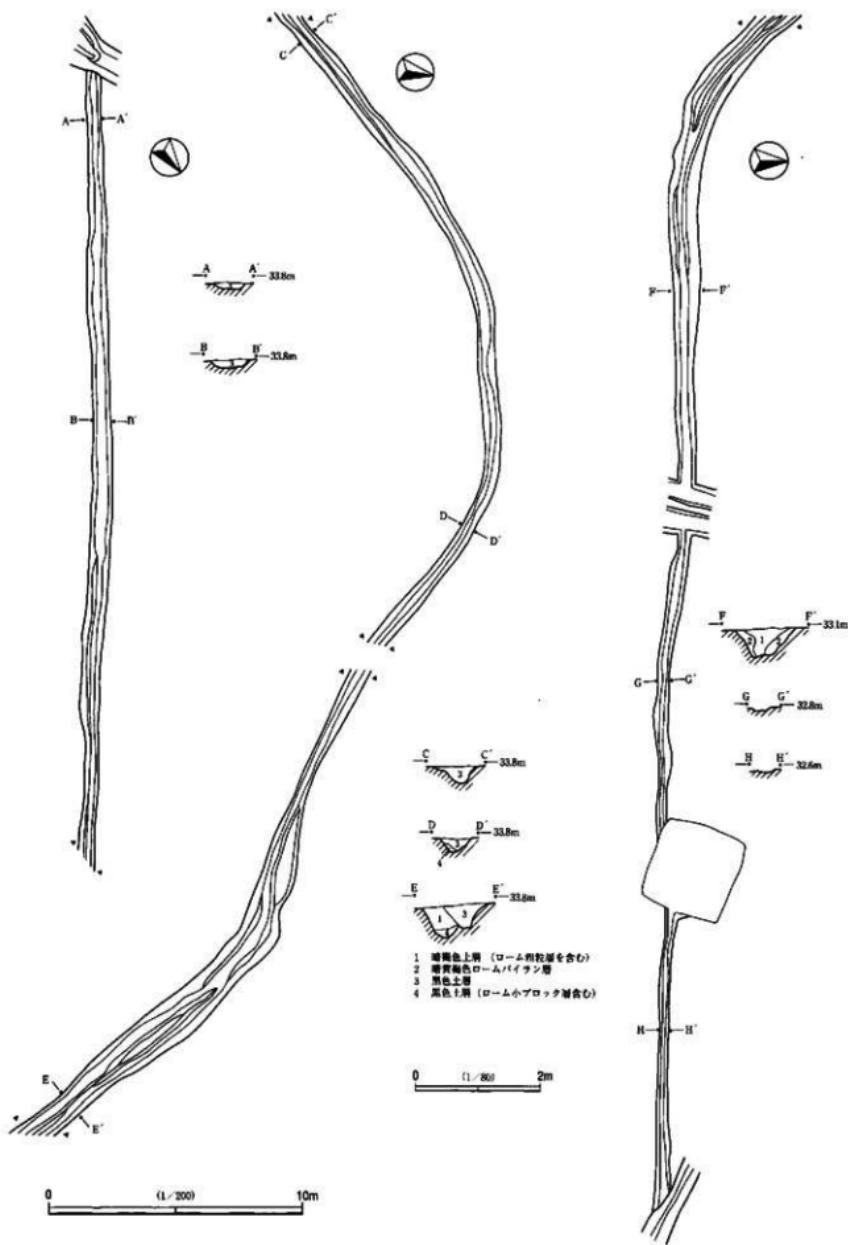
調査区の東側、E 2グリッドからE 3グリッドを南北に走る。古墳時代から平安時代の住居跡を削平し、003号溝よりは古い。南側で006号溝、011号溝と重複する。中央部では一部が東側に分岐し、14mの範囲で2条になる。調査範囲で長さ70.9m、幅0.9m～2.1m、深さ0.21m～0.48mである。底面は北側はほぼ平坦であるが、南側では一部V字状に狭くなる。覆土は暗茶褐色土を主体にローム・ブロックが混在する。覆土中から土師器片等が出土しているが、図示できるものはない。

##### 006号溝（第91・92図、第17表、図版30・53）

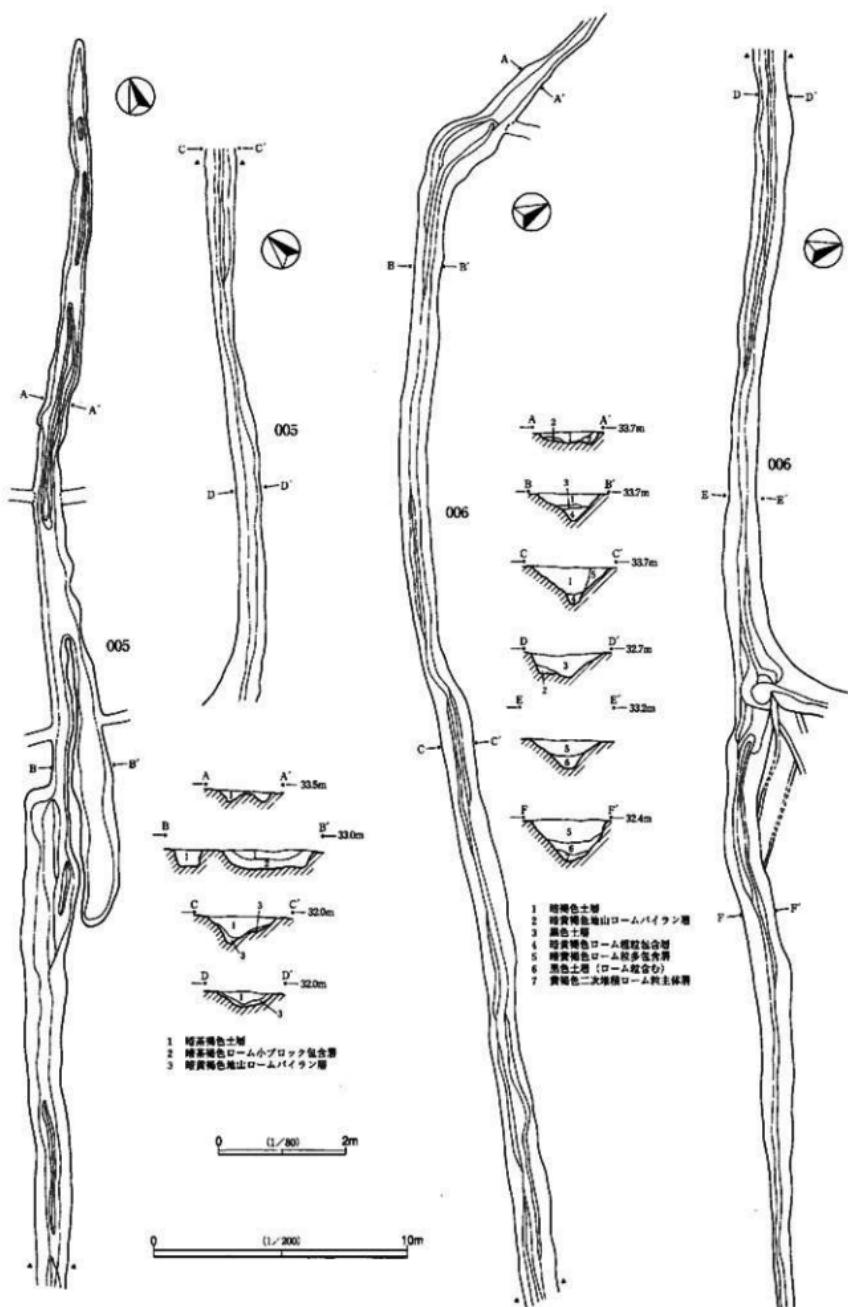
調査区の南端を東西に走り、西端で北方向へ屈曲する。東端は斜面に向かい消滅する。039号住居跡を削平している。調査範囲で長さは102.6mである。幅は0.9m～2.0mと差があるが、平均的には1m前後である。深さは西側で次第に浅くなるが、0.35m～0.70mの範囲に収まり、底面がさらに掘り込まれ深くなっている箇所もある。覆土は暗褐色土、ローム粒を多く含む暗黄褐色土を主体に黒色土が混在している。遺物は土師器杯などの他に、北宋銭の治平通寶（第92図16）が覆土中から出土している。



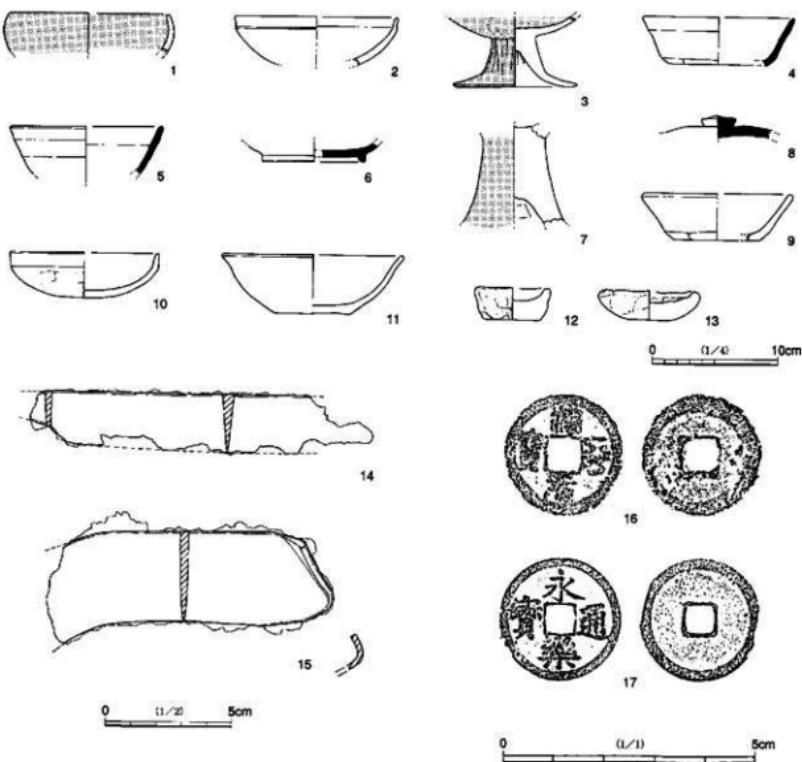
第89図 001・003・011・012・109号溝



第90図 004号溝



第91図 005・006号溝



第92図 溝出土遺物

011号溝（第89図、図版30）

調査区の南東端、E 3 グリッドに位置する。東西に走り、西側で005号溝と重複する。東側は斜面に向かい消滅する。調査範囲で長さ28m、幅1m前後、深さは0.2m～0.53mで中央部でやや深くなる。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土、暗黄褐色土、黒色土が混在する。覆土中から土器類が出土しているが、図示できるものはない。

第17表 銭貨計測表

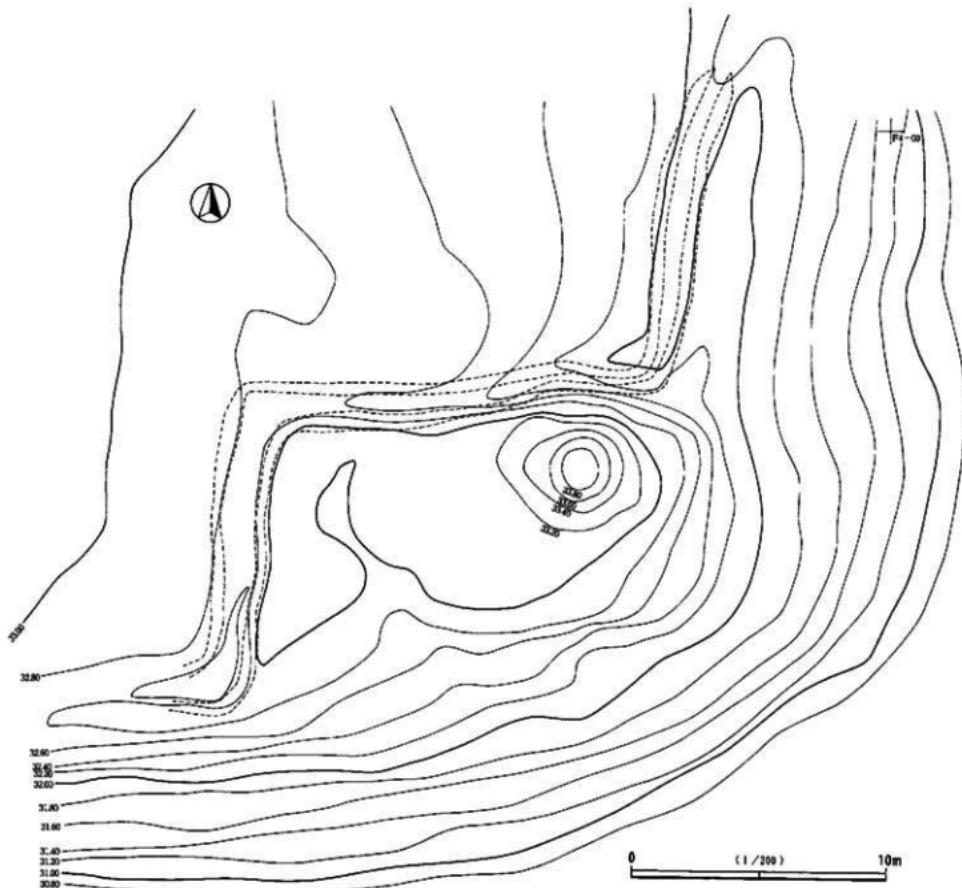
挿図番号	銭種	初鑄年	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)
第92図16	治平通寶	1064年	3.10	24.00	19.30	8.10	6.70	1.45	0.89
第92図17	永樂通寶	1408年	2.90	24.45	21.15	6.75	6.00	1.33	0.83

012号溝（第89図）

調査区の南東端、E 4 グリッドに位置する。両端を006号溝、011号溝に削平され、わずかに残存している。残存長4m、幅0.9m、深さは5cmと浅い。出土遺物はない。

109号溝（第89・92図、第17表、図版49・51・53）

調査区の北西端、C 1 グリッドに位置する。南側は不整形に広がり、緩やかに立ち上がる。古墳時代から平安時代の住居跡を削平している。北側は斜面に向かって下がっていく。調査範囲で長さ17.7m、南側の最大幅6.7m、北側の幅は2.1m～3.6mである。深さは南側では0.1m～0.2mと浅いが、北側の斜面側では次第に深くなり0.38m～0.67mである。底面はほぼ平坦である。出土遺物は多いが、周辺の造構からの流



第93図 墓全体図

れ込みであろう。遺物は土器類の他に、鎌や明鏡の永楽通寶(第92図17)も出土している。

鎌(第92図15)は先端部を欠損する。刃は先端部に向けて大きく彎曲していく。基端部に高さ9mmの折り返しをもつ。現存値で長さ11.3cm、最大刃幅3.75cm、棟厚3.5mmである。

## 第5節 塚

調査区の南東端、E 4グリッドに位置する。台地の縁辺部に構築され、南東側はすぐ斜面になる。谷津を挟んで南側の台地には、前方後円墳や円墳など35基からなる椎名崎古墳群C支群が展開している。

周辺の平坦面より約1m高い楕円形状の土盛りを確認し、古墳もしくは塚の可能性も考慮して調査を実施した(第93図、図版31)。測量後、セクション・ベルトを残し掘り下げていったが、すでに耕作や近代の山道等の造作により大きく改変され、原形をとどめていないことが判明した。副葬品の破片や周溝等も確認できなかったので、本遺構は古墳ではなく、本来は塚の可能性が高いと考えられる。現況では、裾部径4m×6m、高さは0.85mを測る。表土は茶褐色土である。須恵器片、砥石、江戸時代の焙烙片などが表上から出土している。

## 第6節 遺構外出土遺物

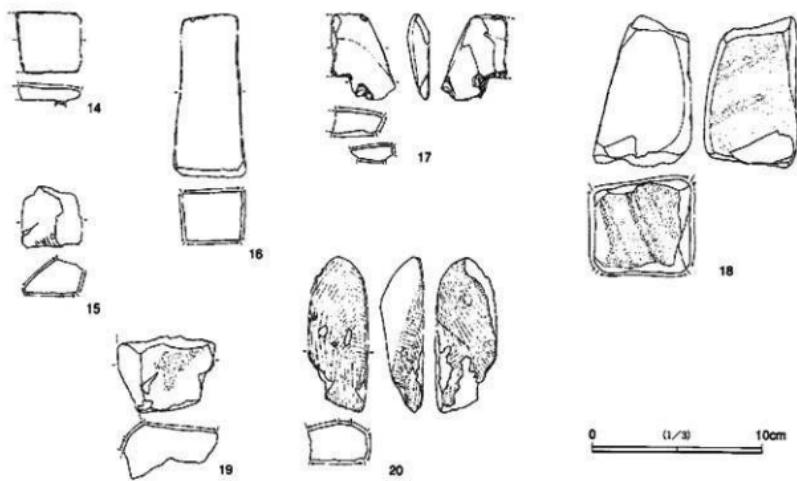
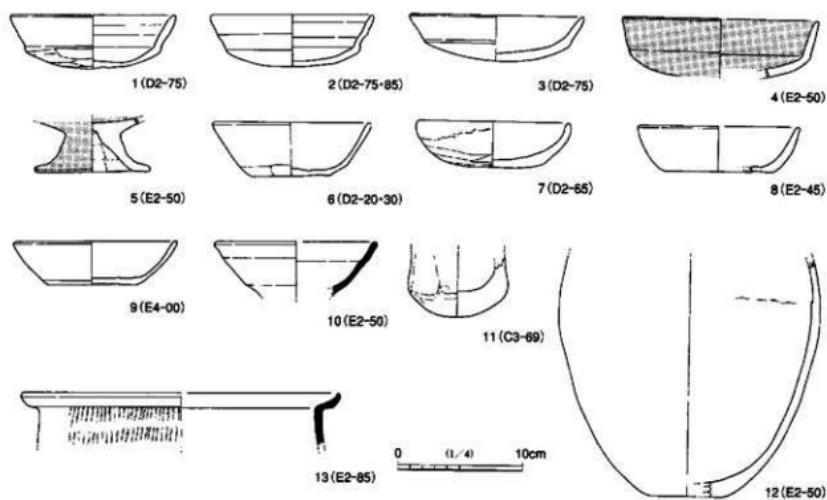
確認調査時や遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する(第94図、第18表、図版49・53)。

確認調査で出土した土器のうち、出土地点から判断して1～3は046号住居跡、4・5・12は030号住居跡、13は020号住居跡に、本米はそれぞれ伴うものと考えられる。

14～20は砥石である。塚の表土中や周辺から出土しているものが多い。石材は凝灰岩製や砂岩製が多いが、15は流紋岩製である。18は筋砥石としても利用している。

第18表 砥石計測表 (現存値)

掉団番号	遺構番号	旧遺構番号	遺物番号	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	備 考
第31図18	045号住居跡	043-45	11	凝灰岩	4.0	4.5	2.7	40.44	
第33図20	046号住居跡	043-46	12	砂 岩	14.8	10.9	4.8	845.00	
第38図17	059号住居跡	043-59	6	砂 岩	12.6	8.6	2.2	214.02	
第61図31	049号住居跡	043-49	11c	凝灰岩	7.2	4.8	2.7	107.57	有孔
第70図15	068号住居跡	043-68	24-1	凝灰岩	3.9	3.1	1.7	22.96	有孔
第70図16	068号住居跡	043-68	24-2	凝灰岩	2.8	3.3	0.8	11.24	有孔
第74図14	073号住居跡	043-73	1	凝灰岩	3.9	3.7	2.7	58.01	
第94図14	遺 構 外	043-1号塚	1d	凝灰岩	3.5	3.8	1.0	19.86	
第94図15	遺 構 外	043-1号塚	1g	流紋岩	3.6	3.7	2.4	28.97	
第94図16	遺 構 外	043-1号塚	1b	凝灰岩	9.6	4.3	3.0	202.58	
第94図17	遺 構 外	043-E3-85	1	凝灰岩	5.0	3.8	1.3	17.15	
第94図18	遺 構 外	043-1号塚	1h	砂 岩	8.8	5.6	5.6	370.00	
第94図19	遺 構 外	043-F3-50	1	砂 岩	4.2	5.8	3.1	69.10	
第94図20	遺 構 外	043-1号塚	1e	凝灰岩	9.0	4.2	2.6	87.29	



第94図 遺構外出土遺物

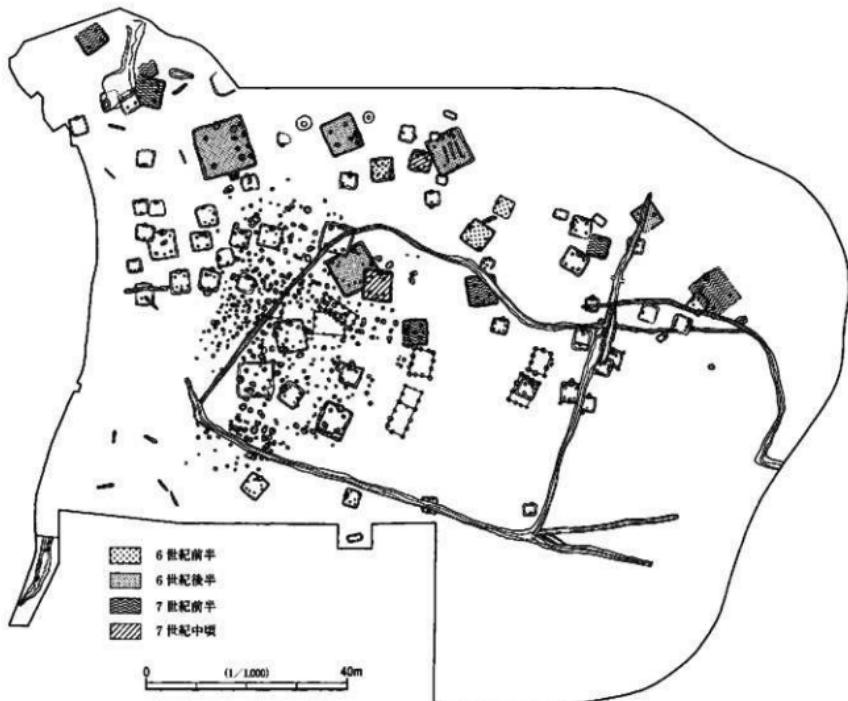


## 第5章 まとめ

### 1 集落の変遷

今台遺跡の中心となるのは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落である。台地の全面を対象としたので、集落の全域を発掘調査したことになる。時代的には6世紀前半に営まれ始めた集落が、断続的にではあるが9世紀後半まで続いている。ここでは、その変遷について述べていきたい。

6世紀から7世紀代の集落(第97図)は、6世紀代8軒、7世紀代9軒の計17軒からなる。このうち時期の把握できる住居跡の内訳は、6世紀前半3軒・後半5軒、7世紀前半4軒・中頃3軒である。6世紀後半から7世紀前半の時期に遺構数は集中するが、次第に減少していく、7世紀後半には住居跡はみられなくなる。遺跡内での分布状況をみると、住居跡が台地の北側を東西に長く展開しているのが特徴的である。これは、南側の区域が耕作地や森林等の理由で、居住区域としての利用が制限されていたために、ここまで集落が展開しなかったと考えられる。また、谷津を挟んだ南側の台地に展開する、椎名崎古墳群の存在に規制されたことも十分に考慮される。6世紀代の集落は、まず台地中央からやや北側の区域で居住

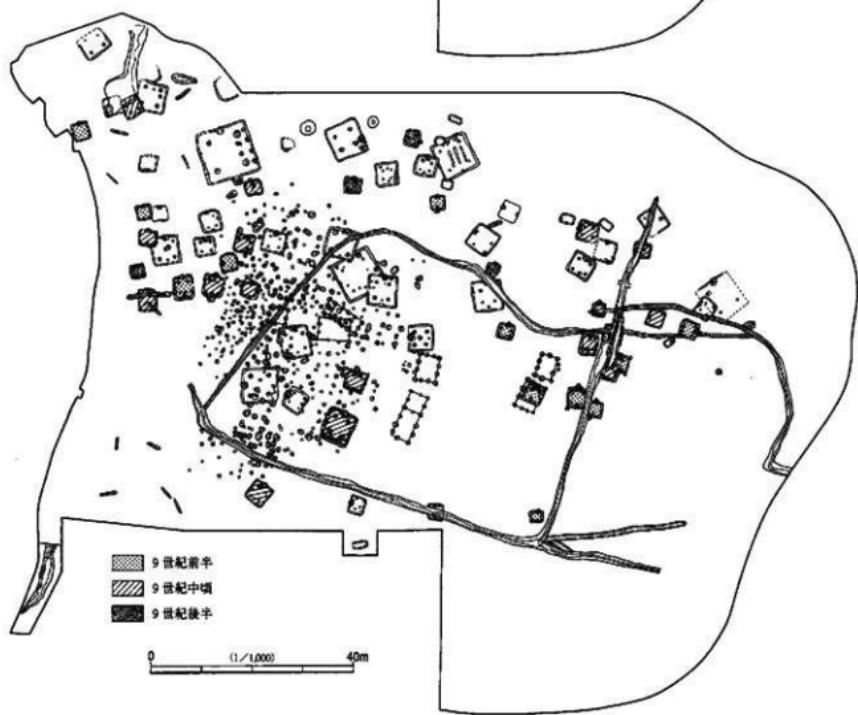
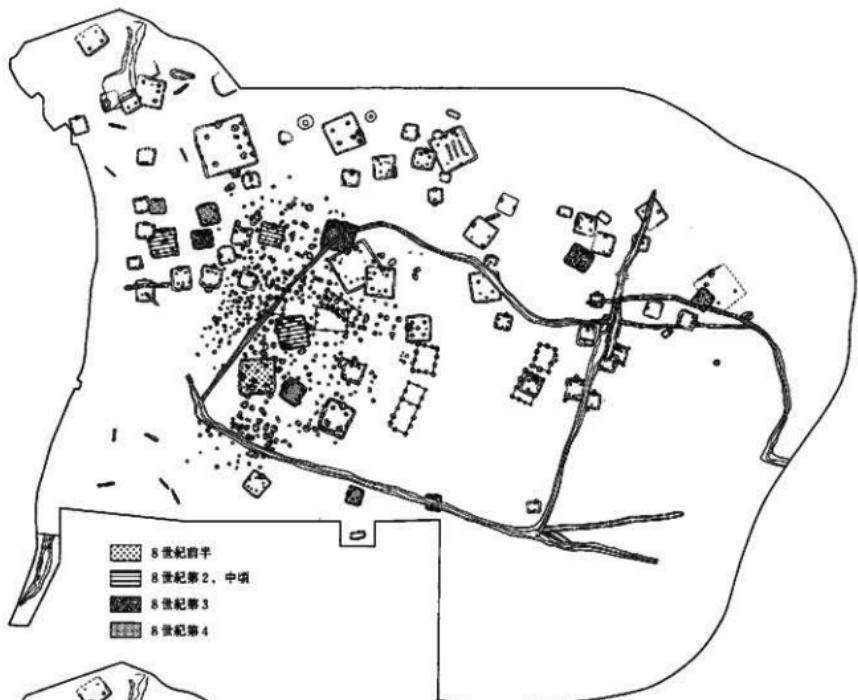


第97図 時期別分布図（6世紀から7世紀代）

を開始する。このうち、030号・032号住居跡は、位置も近接し主軸方位も類似しているが、041号住居跡は位置もやや離れ、主軸方位も他の2軒とは逆の方向をとっている。後半の住居跡は、前代に比べやや西側に広がる傾向をみせる。009号住居跡はほかの住居跡と離れて、東側に占地している。比較的規模の大きな住居跡が多く、058号住居跡のように一辺10mを超す南壁に張出部をもつ、特異な住居が出現するのもこの時期である。遺物の出土量も豊富で、玉類を保有している住居もある。7世紀にはいると、散漫ながらさらに居住範囲が広がり、台地東端の008号住居跡、北西端の101号住居跡と、調査区のなかでも最端に位置する遺構も現れる。しかし、中頃には遺構数も減少し、居住範囲も再び中央部に限定されていく。また、5基の土坑墓は出土土器などから、6世紀後半から7世紀前半に構築されたと考えられる。

8世紀代の集落(第98図)は、8世紀前半1軒・第2四半期から中頃3軒・第3四半期3軒・第4四半期6軒の計13軒からなり、3軒前後のまとまりで推移していったようである。出土土器からみると、古墳時代の集落からの時間的な継続性は少なく、新たな移住の可能性が高い。8世紀前半から中頃の住居跡は、台地中央よりやや西側に寄った範囲に集中している。前半に属する057号住居跡は、西壁にカドマをもち一辺7mと規模も大きく、その後の8世紀代の住居跡とは様相が異なっているが、第2四半期に属する055・123号住居跡は、主軸方位もほぼ一致しまどりがある。後半になると2軒程度にまとまり、さらに南側に広がる傾向をみせ、主軸方位や規模も不統一になっていく。鉄製品は、前半代の057号住居跡・第3四半期の048号住居跡・第4四半期の051号住居跡から出土しており、各時期のうちの1軒に集中的に管理されていたことが窺える。線刻土器は第4四半期の039号住居跡からすでに出土している。また、有天井土坑(013号)は出土遺物はないが、これまでの調査例などから8世紀代の所産と考えられる。土坑墓か改葬墓として、集落の東端に構築されたことになる。

9世紀代の集落(第98図)は、9世紀前半13軒・中頃16軒・後半4軒と、時期は確定できないが9世紀代3軒の計36軒からなる。この時代の集落の特徴としては、住居の軒数が大幅に増加し、これまでの時代とは異なり大きく広がりをみせることである。そして、いくつかの群が形成され、それが次第に定住化していくことである。特に、8世紀代の集落を引き継いだ東側と西側の一群は定着する。9世紀前半では、それぞれの群は5軒前後のまとまりをもち、住居も同程度の規模のものが多い。また、東側の一群は、鉄製品の保有率が高いことや、瓦や埴が出土するなど、ほかの群ではみられない特徴をもつ。埴は、県内では市原市郡本遺跡群・南田瓦窯跡、木更津市真里谷廬寺跡などから出土している。これらの遺跡は、国府・国分寺関連遺跡や寺院跡で、一般的な集落遺跡からの出土は稀である。9世紀中頃の特徴は、東西に大きく二分化していくこと、広場的な空間に掘立柱建物跡が建てられること、小鍛冶の稼働、鉄製品の保有率の高さや墨書き土器の増加など、これまでにない大きな変化が認められる。また、西側の一群は004号溝を境にさらに中央部と西側に分化する。東側と中央部の一群には掘立柱建物跡が加わり、集落としても安定した形態を保っている。なお、044号住居跡のような特異な形態の遺構の出現もこの時期である。9世紀後半になると遺構数が激減し、西端の1軒、中央北寄りの3軒の構成となる。住居のまとまりはみられなくなり、全体として点在するように配置されている。10世紀近くになると034号住居跡のように遺構としての形態も崩れ、集落は次第に衰退していく。



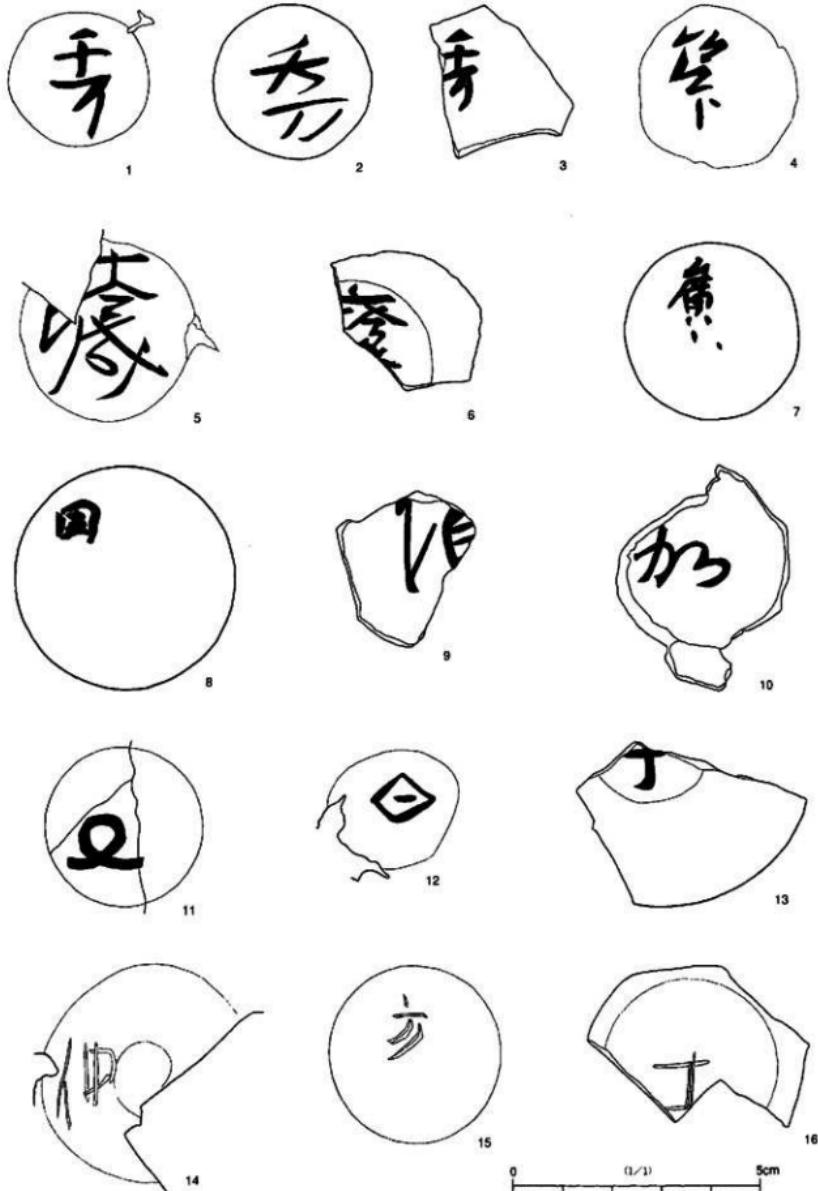
第98図 時期別分布図（8世紀代、9世紀代）

## 2 墨書土器

墨書土器13点、線刻土器3点が出土している（第99図、第21表）。すべて土師器杯・皿に書かれている。墨書の位置は底部外面がほとんどである。時期的には、8世紀第4四半期に現れ9世紀中頃まで続く。墨書土器が出土した9世紀前半の住居跡は、東側や中央部に位置しているが、中頃では西側の一群に集中するようになる。9世紀中頃の出土点数は11点と多いが、これは西側の一群に属する066号住居跡から6点も出土していることによる。文字としては「千万」が3点、「医成」は2点である。ともに066号住居跡に関連している。出土点数の多さや複数種の墨書などから、066号住居跡は集落内で重要な位置を占めていたと考えられる。

第21表 墨書・線刻土器一覧

番号	訛文	種別	器種	部位	遺構番号	時期
1	千万	墨書	土師器・皿	底部外面	066号住居跡	9世紀中頃
2	千万	墨書	土師器・杯	底部外面	066号住居跡	9世紀中頃
3	千万	墨書	土師器・皿	底部外面	122号住居跡	9世紀中頃
4	笠下	墨書	土師器・杯	底部外面	062号住居跡	9世紀中頃
5	医成	墨書	土師器・杯	底部外面	066号住居跡	9世紀中頃
6	医成	墨書	土師器・杯	底部外面	066号住居跡	9世紀中頃
7	廣□	墨書	土師器・杯	底部外面	037号住居跡	9世紀前半
8	国	墨書	土師器・杯	底部外面	037号住居跡	9世紀前半
9	酒	墨書	土師器・杯	底部内面	049号住居跡	9世紀中頃
10	加	墨書	土師器・杯	底部内面	066号住居跡	9世紀中頃
11	記号	墨書	土師器・杯	底部外面	066号住居跡	9世紀中頃
12	記号	墨書	土師器・皿	底部外面	122号住居跡	9世紀中頃
13	不明	墨書	土師器・皿	底部外面	038号住居跡	9世紀前半
14	仲	線刻	土師器・杯	底部外面	039号住居跡	8世紀第4
15	方	線刻	土師器・杯	底部外面	122号住居跡	9世紀中頃
16	不明	線刻	土師器・杯	底部外面	073号住居跡	9世紀前半



第99図 墓書・線刻土器

第22表 古墳時代竪穴住居跡一覧

( ) は推定値 [ ] は現存値

遺構番号	排列番号	旧遺構番号	グリッド	時期	平面形態	規模 (m)	主軸方位	備考
008号	第24図	043-008	F2-81	7世紀第1	方形	(7.9) × (7.4)	N-38°-W	
009号	第24図	043-009	E2-48	6世紀後半	方形	4.40 × 4.74	N-56°-E	
021号	第25図	043-021	E2-55	7世紀代	方形	4.04 × 3.8	S-21°-W	カマド南壁
030号	第25図	043-030	D2-59	6世紀前半	方形	5.04 × 5.00	N-50°-W	
032号	第26図	043-032	E2-31	6世紀前半	方形	3.46 × 3.50	N-63°-W	
035号	第26図	043-035	D2-79	7世紀前半	正方形	5.84 × 5.84	N-5°-W	
036号	第27図	043-036	D2-17	7世紀中頃	方形	3.90 × 4.20	N-13°-E	
041号	第28図	043-041	D2-15	6世紀前半	略正方形	4.50 × 4.42	N-87°-E	消失住居
043号	第29図	043-043	D2-96	7世紀第1	方形	4.86 × 5.06	W-2°-S	
045号	第30図	043-045	D2-08	6世紀後半	方形	7.46 × 7.18	N-27°-W	消失住居
046号	第32図	043-046	D2-74	7世紀中頃	略正方形	6.04 × 6.06	N-6°-E	
054号	第34図	043-054	D2-03	6世紀後半	略正方形	6.70 × 6.78	N-67°-E	
058号	第35図	043-058 118-013	C2-06	6世紀第4	略正方形	10.46 × 10.26	N-15°-W	張出部に貯藏穴
059号	第37図	043-059	D2-63	6世紀第4	略正方形	8.26 × 8.44	N-30°-W	
101号	第39図	118-001	C1-50	7世紀中頃	方形	[4.2] × 5.21	N-39°-W	
115号	第40図	118-015	C1-73	7世紀前半	-	- × -	-	大半消失
116号	第40図	118-016	C1-83	7世紀代	方形	5.45 × [4.7]	-	



第24表 土器観察表(1)

( ) 検定値

( ) 現存値

番号	標本番号	器種	遺存度 (%)	計測値 (cm)	調査	色調	胎土	備考
008	第24図1	土師器杯	40	口径 (12.6) 底径 — 器高 3.9	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
008	第24図2	土師器杯	10	口径 (11.8) 底径 — 器高 (3.4)	底部 — 内部 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
009	第24図3	土師器杯	10	口径 (12.0) 底径 — 器高 (3.5)	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英	
009	第24図4	土師器高杯	20	口径 — 底径 — 器高 (3.4)	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
009	第24図5	土師器壺	10	口径 (11.4) 底径 — 器高 (6.5)	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・長石・ 雲母	
030	第25図1	土師器杯	10	口径 (14.4) 底径 — 器高 (3.1)	底部 — 内部 ナデ	橙褐色	石英	内外面赤彩
030	第25図2	土師器杯	10	口径 (14.6) 底径 — 器高 (4.0)	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英	内外面赤彩
030	第25図3	土師器杯	10	口径 (13.4) 底径 — 器高 (2.9)	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	スコリア	内外面赤彩
030	第25図4	土師器高杯	90	口径 15.3 底径 8.8 器高 14.4	脚部 — 内部 ナデ	赤褐色	砂粒	内外面赤彩
030	第25図5	土師器高杯	30	口径 — 底径 8.0 器高 (4.9)	脚部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
030	第25図6	土師器高杯	20	口径 — 底径 (9.6) 器高 (4.9)	脚部 — 内部 ナデ	橙褐色	砂粒	外面赤彩
032	第26図1	土師器盤	40	口径 (24.2) 底径 (8.4) 器高 (24.9)	孔部 — 内部 ナデ	橙褐色	石英・長石	
035	第26図2	土師器壺	10	口径 (17.0) 底径 — 器高 (3.6)	底部 — 内部 ナデ	黒褐色	石英・雲母	
036	第27図1	頬窓器杯	10	口径 (10.2) 底径 — 器高 (2.9)	底部 — 内部 ナデ	灰白色	砂粒	
036	第27図2	土師器杯	10	口径 (5.5) 底径 — 器高 (4.6)	底部 — 内部 ナデ	黄褐色	スコリア	
036	第27図3	土師器杯	30	口径 (11.2) 底径 — 器高 4.4	底部 — 内部 ナデ	黄褐色	スコリア	口縁部内外面赤彩
036	第27図4	土師器壺	10	口径 (18.6) 底径 — 器高 (8.5)	底部 — 内部 ナデ	橙褐色	石英・長石	
041	第28図1	土師器高杯	完形	口径 14.3 底径 9.9 器高 9.8	脚部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
041	第28図2	土師器高杯	90	口径 13.2 底径 — 器高 (9.8)	脚部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
041	第28図3	頬窓器壺	50	口径 — 底径 — 器高 (11.2)	底部 — 内部 ナデ	茶褐色	石英・長石	
041	第28図4	土師器壺	80	口径 12.8 底径 — 器高 (16.5)	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	石英・長石	
041	第28図5	土師器壺	90	口径 19.6 底径 7.4 器高 21.4	底部 — 内部 ナデ	赤褐色	砂粒	
041	第28図6	土師器壺	30	口径 15.8 底径 — 器高 (18.1)	底部 — 内部 ナデ・ナラダ	茶褐色	石英・長石	
041	第28図7	土師器壺	60	口径 (17.2) 底径 6.4 器高 30.8	底部 — 内部 ナデ	淡褐色	石英・長石	

土器觀察表(2)

( ) 検定値

( ) 現存値

登録番号	測定番号	器種	遺存度 (%)	計測値 (cm)	測定箇所	色調	胎土	備考
041	第28図8	土師器瓶	90	口径 24.7 孔径 — 基高 25.7	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	淡褐色	長石	
041	第28図9	土師器壺	20	口径 — 底径 (6.0) 基高 (11.7)	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	暗赤褐色	石英	
043	第29図1	氣泡器杯	20	口径 (10.0) 底径 — 基高 (4.7)	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	長石	
043	第29図2	土師器杯	10	口径 (12.0) 底径 — 基高 (4.0)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	砂粒	
043	第29図3	土師器杯	30	口径 (10.6) 底径 — 基高 (4.2)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英	
043	第29図4	土師器杯	20	口径 (11.5) 底径 — 基高 (4.1)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	スコリア	口縁部内面赤影
043	第29図5	土師器杯	30	口径 (13.3) 底径 — 基高 (4.0)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	白色針状物	
043	第29図6	手握ね	90	口径 10.9 底径 4.0 基高 3.6	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母	
045	第31図1	氣泡器杯	20	口径 (12.2) 底径 — 基高 (4.5)	底部 剥離ハラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	長石	
045	第31図2	氣泡器蓋	完形	口径 10.9 天井径 — 基高 3.6	天井部 脱離ハラケズリ・ナデ 体部 — 内面 ナデ	暗灰色	長石	天井部自然離
045	第31図3	氣泡器蓋	60	口径 — 底径 — 基高 (6.6)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	長石	
045	第31図4	土師器杯	完形	口径 11.9 底径 — 基高 4.6	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母	
045	第31図5	土師器杯	70	口径 13.2 底径 — 基高 4.6	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	砂粒	
045	第31図6	土師器杯	20	口径 (11.6) 底径 — 基高 (4.1)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	スコリア	口縁部内外面赤影
045	第31図7	土師器杯	30	口径 (11.4) 底径 — 基高 (3.4)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	砂粒	
045	第31図8	土師器杯	90	口径 12.0 底径 — 基高 3.7	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ・ミガキ	橙褐色	砂粒	
045	第31図9	土師器杯	20	口径 (13.2) 底径 — 基高 (4.3)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ハラナデ・ミガキ	橙褐色	砂粒	
045	第31図10	土師器杯	70	口径 13.4 底径 — 基高 3.7	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ハラナデ・ミガキ	橙褐色	砂粒	
045	第31図11	土師器杯	30	口径 (10.2) 底径 — 基高 (6.7)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英	
045	第31図12	土師器鉢	80	口径 (13.4) 底径 8.6 基高 9.3	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・雲母	
045	第31図13	土師器壺	40	口径 (16.2) 底径 — 基高 (7.5)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	砂粒	14と同一個体
045	第31図14	土師器壺	40	口径 — 底径 8.6 基高 10.1	底部 無調査 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	砂粒	13と同一個体
045	第31図15	土師器壺	10	口径 — 底径 7.8 基高 (5.6)	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	砂粒	
045	第31図16	土師器瓶	80	口径 24.0 孔径 7.9 基高 24.0	孔部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	スコリア	

土器観察表 (3)

( ) 検定値

( ) 現存値

番号	採集番号	器種	遺存度 (%)	計測箇所 (cm)	測定値	色調	胎土	備考
045	第31図17	土器器底	40	口径 孔径 器高	— 7.0 (17.4)	孔部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	褐色 砂粒
046	第32図1	土器器杯	90	口径 底径 器高	9.8 — 4.6	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	褐色 石英
046	第32図2	土器器杯	完形	口径 底径 器高	11.7 — 4.2	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	褐色 石英
046	第32図3	土器器杯	完形	口径 底径 器高	13.4 — 3.5	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ ヘラナダ・ミガキ	褐色 スコリア
046	第32図4	土器器杯	完形	口径 底径 器高	13.6 — 3.8	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ ヘラナダ・ミガキ	褐色 砂粒
046	第32図5	土器器杯	完形	口径 底径 器高	10.4 — 3.2	底部 体部 内面	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ ヘラナダ・ミガキ	褐色 スコリア
046	第32図6	土器器杯	完形	口径 底径 器高	12.0 — 3.7	底部 体部 内面	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ ヘラナダ・ミガキ	黒褐色 スコリア
046	第32図7	土器器杯	30	口径 底径 器高	(14.5) — 4.6	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ ヘラナダ・ミガキ	黒褐色 石英
046	第32図8	土器器杯	90	口径 底径 器高	12.0 — 4.3	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 青母・スコリア
046	第32図9	土器器杯	90	口径 底径 器高	12.3 — 4.1	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 石英・スコリア
046	第32図10	土器器杯	90	口径 底径 器高	12.4 — 4.3	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 石英
046	第32図11	土器器杯	40	口径 底径 器高	(13.2) — 4.5	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 石英・長石・ スコリア
046	第32図12	土器器杯	90	口径 底径 器高	12.2 — 3.8	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 砂粒
046	第32図13	土器器杯	60	口径 底径 器高	14.0 — 5.4	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 青母・スコリア
046	第32図14	土器器高杯	90	口径 底径 器高	11.8 — 7.0	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	褐色 砂粒
046	第32図15	土器器高杯	70	口径 底径 器高	12.5 — 7.3	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 砂粒
046	第32図16	土器器高杯	80	口径 底径 器高	12.7 — 8.5	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 石英
046	第32図17	土器器高杯	20	口径 底径 器高	(14.6) — (4.9)	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 砂粒・スコリア
046	第33図18	土器器蓋	20	口径 底径 器高	— — (16.3)	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 石英・長石・ スコリア
054	第34図1	土器器杯	10	口径 底径 器高	(11.6) — (3.2)	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	黒褐色 砂粒
054	第34図2	土器器高杯	70	口径 底径 器高	15.4 — (5.2)	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	赤褐色 45度・青母・ スコリア
054	第34図3	土器器高杯	20	口径 底径 器高	(19.6) — (4.5)	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ ナダ・ミガキ	黒褐色 砂粒
054	第34図4	土器器高杯	20	口径 底径 器高	(13.0) — (7.3)	脚部 体部 内面 ナダ	黒褐色 ヘラケズリ・ナダ	褐色 石英
054	第34図5	土器器蓋	10	口径 底径 器高	(23.8) — (7.4)	底部 体部 内面 ナダ	明褐色 ナダ・ミガキ	明褐色 石英・長石

土器観察表(4)

( ) 推定値

( ) 現存値

器種 番号	測定番号	器種	測定値 (%)	計測値 (cm)	測定	色調	地土	備考
054	第34図6	土器器底	20	口徑 (18.2) 孔径 (7.2) 器高 18.5	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	褐色	スコリア
058	第35図1	土器器杯	80	口徑 11.0 底径 — 器高 33	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・雲母・スコリア 内外面黒色処理
058	第35図2	土器器杯	60	口徑 11.3 底径 — 器高 31	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	スコリア 内外面黒色処理
058	第35図3	土器器杯	20	口徑 (14.2) 底径 — 器高 30	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ	黄褐色	石英
058	第35図4	土器器杯	90	口徑 12.8 底径 4.6 器高 —	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母
058	第35図5	土器器杯	80	口徑 12.6 底径 — 器高 45	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英
058	第35図6	土器器杯	20	口徑 (11.6) 底径 — 器高 40	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	砂粒
058	第35図7	土器器杯	10	口徑 (12.8) 底径 — 器高 (3.9)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・スコリア
058	第35図8	土器器杯	30	口徑 (11.6) 底径 — 器高 (3.5)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母 内外面黒色処理
058	第35図9	土器器杯	30	口徑 (12.2) 底径 (4.8) 器高 —	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	スコリア
058	第35図10	土器器杯	20	口徑 (12.8) 底径 (4.9) 器高 —	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	雲母
058	第35図11	土器器高杯	20	口徑 (18.0) 底径 — 器高 (5.2)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英
058	第35図12	土器器高杯	30	口徑 14.2 底径 — 器高 (4.3)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英
058	第35図13	土器器高杯	60	口徑 19.8 底径 — 器高 (6.7)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	砂粒 杯部内面黒色処理
058	第36図14	土器器高杯	80	口徑 14.0 底径 (8.0) 器高 11.5	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ヘラナデ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英 杯部内面黒色処理
058	第36図15	土器器高杯	70	口徑 — 底径 — 器高 (9.5)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ヘラナデ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	スコリア 杯部内面黒色処理
058	第36図16	土器器高杯	70	口徑 — 底径 (10.0) 器高 (9.2)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ヘラナデ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	スコリア
058	第36図17	土器器高杯	30	口徑 — 底径 10.4 器高 (6.8)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ヘラナデ 底部 ナデ 内面 —	橙褐色	石英
058	第36図18	土器器要	30	口徑 (19.6) 底径 — 器高 (7.8)	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ・ナデ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	赤褐色	砂粒
058	第36図19	土器器要	40	口徑 (13.4) 底径 (4.2) 器高 11.0	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	赤褐色	石英
058	第36図20	土器器要	10	口徑 (23.6) 底径 — 器高 (10.8)	底部 — 内面 —	乳頭 — 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	橙褐色	スコリア
058	第36図21	土器器要	40	口徑 (15.0) 底径 — 器高 (8.7)	底部 — 内面 —	乳頭 — 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	暗赤褐色	スコリア
058	第36図22	土器器要	60	口徑 16.0 底径 (5.3) 器高 23.1	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	暗赤褐色	雲母・スコリア
058	第36図23	土器器要	70	口徑 20.0 底径 6.3 器高 30.6	底部 — 内面 —	乳頭 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	褐色	石英・長石

土器観察表(5)

( )推定値

&lt; &gt;現存値

通番号	博物番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	測量	色調	胎土	備考
058	第36図24	上部器瓶	10	口径 孔径 器高 (9.8) (10.3)	孔部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	黄褐色	スコリア	
058	第36図35	ミニチュア上部	20	口径 底径 器高 2.7 2.4 1.4	底部 体部 内面 ナデ ナデ ナデ	黒褐色	石英	
059	第37図1	須恵器蓋	10	口径 天井径 器高 (12.0) (3.3)	天井部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	明灰色	石英	
059	第37図2	上部器杯	20	口径 底径 器高 (13.6) (3.3) 3.4	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ ナデ・ミガキ	黒褐色	スコリア	
059	第37図3	上部器杯	90	口径 底径 器高 13.3 — 3.8	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	黒褐色	石英	内外面黑色處理
059	第37図4	上部器杯	30	口径 底径 器高 (13.2) — 2.8	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	橙褐色	石英	
059	第37図5	土師器杯	40	口径 底径 器高 (14.0) — 4.2	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	黄褐色	白色針状物	内外面黑色處理 全体に摩耗
059	第37図6	土師器杯	30	口径 底径 器高 (14.2) — (3.4)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	橙褐色	砂粒	
059	第37図7	十輪器杯	80	口径 底径 器高 12.2 — 4.5	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	橙褐色	石英	
059	第37図8	土師器鉢	20	口径 底径 器高 (19.0) — (6.0)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	黒褐色	砂粒	
059	第37図9	土師器高杯	60	口径 底径 器高 (13.4) (10.4) 9.8	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ ヘラケズリ・ナデ・ミガキ ナデ・ミガキ	黒褐色	白色針状物	杯部内外面黑色處理
059	第37図10	七輪器高杯	80	口径 底径 器高 — (6.9)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ ヘラケズリ・ナデ・ミガキ	黒褐色	白色針状物	杯部内外面黑色處理 全体に摩耗
059	第37図11	上部器高杯	20	口径 底径 器高 10.2 — (4.6)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ — —	黒褐色	石英・スコリア	
059	第38図12	土師器甕	20	口径 底径 器高 14.8 — (8.9)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナデ	橙褐色	石英	
059	第38図13	土師器甕	20	口径 底径 器高 — (8.0)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	黄褐色	石英・長石	
059	第38図14	上部器甕	30	口径 底径 器高 18.6 — (11.5)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	橙褐色	石英・長石・ スコリア	
059	第38図15	土師器甕	60	口径 底径 器高 19.4 — (17.4)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	赤褐色	石英・長石	
101	第39図1	上部器杯	20	口径 底径 器高 (10.8) — (4.0)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	黄褐色	白色針状物	
101	第39図2	土師器杯	20	口径 底径 器高 (12.0) — (4.2)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	褐色	石英・スコリア	
101	第39図3	土師器高杯	80	口径 底径 器高 14.0 — 7.9	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ ヘラケズリ・ナデ ナデ	橙褐色	白色針状物	
101	第39図4	十輪器甕	20	口径 底径 器高 (17.6) — (6.1)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	橙褐色	石英・長石	
101	第39図5	十輪器甕	20	口径 底径 器高 (17.6) — (6.9)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	橙褐色	石英・長石・ スコリア	
115	第40図1	土師器杯	40	口径 底径 器高 (13.8) — 5.2	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ナデ	黄褐色	白色針状物	
115	第40図2	土師器甕	20	口径 底径 器高 — 8.2 (16.3)	底部 体部 内面 ヘラケズリ・ナデ ヘラナダ	黄褐色	石英・長石・ スコリア	

土器觀察表(6)

( ) 指定値

( ) 現存値

遺 墓 号	採 回 号	器 種	遺 存 度 (%)	計 量 値 (cm)	調 査	色 調	地 土	備 考
115	第40回3	手握ね	20	口径 (5.7) 底径 (3.0) 器高 3.1	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	スコリア、 白色針状物	
002	第41回1	須恵器杯	30	口径 (13.0) 底径 (6.4) 器高 4.1	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑色	石英	
002	第41回2	土師器杯	90	口径 12.5 底径 7.4 器高 3.6	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英	
002	第41回3	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 (6.8) 器高 3.7	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英	
002	第41回4	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 (3.7) 器高 —	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰褐色	石英	
002	第41回5	土師器杯	10	口径 (12.8) 底径 — 器高 (2.4)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	スコリア	
002	第41回6	土師器杯	10	口径 (12.0) 底径 — 器高 (2.6)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	スコリア	外外面未彩
007	第41回8	須恵器杯	90	口径 13.5 底径 8.8 器高 4.9	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英	
007	第41回9	須恵器杯	10	口径 (12.0) 底径 — 器高 (3.2)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・スコリア	
007	第41回10	土師器甕	20	口径 (21.8) 底径 — 器高 (9.0)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	赤褐色	石英	
007	第41回11	土師器甕	30	口径 (20.1) 底径 — 器高 (21.0)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
010	第42回1	土師器杯	20	口径 (8.0) 底径 (1.8) 器高 —	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
010	第42回2	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 3.9	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
010	第42回3	土師器甕	80	口径 21.6 底径 (8.6) 器高 7.7	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・タタキ	橙褐色	石英	
010	第42回4	須恵器甕	10	口径 — 底径 (12.3) 器高 —	孔部 — 体部 ナデ・タタキ 内面 ナデ	黑色	石英	
010	第42回5	土師器甕	50	口径 22.7 底径 — 器高 16.4	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	黄褐色	石英・黄石	
010	第42回6	土師器甕	20	口径 (22.0) 底径 — 器高 (12.2)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
017	第44回1	須恵器杯	90	口径 12.3 底径 6.1 器高 3.7	底部 回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
017	第44回2	須恵器杯	80	口径 12.6 底径 6.9 器高 4.1	底部 回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑灰色	石英	
017	第44回3	須恵器杯	60	口径 12.6 底径 6.6 器高 3.5	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑灰色	石英	
017	第44回4	須恵器杯	30	口径 12.6 底径 (6.0) 器高 4.0	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ・ハラナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英・スコリア	
017	第44回5	須恵器杯	90	口径 11.7 底径 6.4 器高 3.6	底部 回転系切り 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
017	第44回6	須恵器杯	60	口径 (13.0) 底径 6.5 器高 4.1	底部 回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英	
017	第44回7	須恵器杯	50	口径 (12.6) 底径 7.4 器高 4.0	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英	

土器観察表(7)

( ) 検定値

( ) 現存値

通 番 号	辨認番号	器種	造形度 (%)	計測値 (cm)	部 位	色 調	胎 土	備 考
017	第44図8	土師器甕	20	口径 底径 器高 (6.8)	底部 体部 内面 ナダ	黒褐色	石英・スコリア	
017	第44図9	須恵器 短縄紋	20	口径 (12.2) 底径 器高 (13.1)	底部 体部 内面 ナダ	灰白色	石英・ 黑色粒子	
017	第44図10	須恵器瓶	10	口径 (14.4) 底径 (12.9)	底部 体部 内面 ナダ	黒灰色	石英	
017	第44図11	須恵器甕	10	口径 (17.0) 底径 (10.1)	底部 体部 内面 ナダ	黒灰色	石英・墨母	
019	第45図1	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 (6.2) 器高 (3.7)	底部 体部 内面 ナダ	深褐色	スコリア	
019	第45図2	土師器杯	10	口径 (12.6) 底径 (7.7) 器高 (3.6)	底部 体部 内面 ナダ	灰褐色	石英	
019	第45図3	土師器甕	10	口径 (19.7) 底径 器高 (4.1)	底部 体部 内面 ナダ	深褐色	石英	
019	第45図4	須恵器瓶	10	口径 (14.0) 底径 (6.7)	底部 体部 内面 ナダ	灰褐色	石英	
019	第45図5	須恵器瓶	10	口径 (19.0) 底径 (7.1)	底部 体部 内面 ナダ	黒灰色	石英・スコリア	
020	第46図1	須恵器甕	40	口径 底径 器高 (22.0)	底部 体部 内面 ナダ	黒灰色	石英	
022	第46図2	須恵器杯	40	口径 (13.2) 底径 (9.2) 器高 (3.6)	底部 体部 内面 ナダ	灰白色	石英	
022	第46図3	須恵器 高台付杯	10	口径 (14.2) 底径 器高 (3.9)	底部 体部 内面 ナダ	灰白色	石英	
022	第46図4	土師器甕	10	口径 (19.0) 底径 器高 (2.5)	底部 体部 内面 ミガキ・ナダ	黄褐色	石英・スコリア	
022	第46図5	土師器甕	10	口径 (23.4) 底径 器高 (5.3)	底部 体部 内面 ナダ	黄褐色	石英・長石・ 墨母	
022	第46図6	土師器甕	80	口径 底径 器高 (27.4)	底部 体部 内面 ナダ・ヘラナダ	深褐色	石英・長石	
023	第47図1	土師器杯	90	口径 底径 器高 (5.5)	底部 全周手持ち 体部 内面 ナダ	橙褐色	石英・スコリア	
023	第47図2	土師器杯	10	口径 (12.8) 底径 (6.0) 器高 (2.7)	底部 体部 内面 ナダ	橙褐色	石英・スコリア	
023	第47図3	土師器甕	20	口径 底径 器高 (18.0)	底部 体部 内面 ナダ	赤褐色	石英	
023	第47図4	須恵器甕	20	口径 (20.0) 底径 器高 (13.0)	底部 体部 内面 ナダ・ヘラナダ	橙褐色	石英・スコリア	
023	第47図5	須恵器甕	10	口径 (19.2) 底径 器高 (9.0)	底部 体部 内面 ナダ	灰褐色	石英・スコリア	
023	第47図6	須恵器甕	10	口径 (21.2) 底径 器高 (5.7)	底部 体部 内面 ナダ・ヘラナダ	灰褐色	石英	
023	第47図7	須恵器甕	10	口径 (23.0) 底径 器高 (4.7)	底部 体部 内面 ナダ・ヘラナダ	灰色	石英	
023	第47図8	須恵器甕	10	口径 (21.8) 底径 器高 (2.7)	底部 体部 内面 ナダ	黑色	石英	
023	第47図9	須恵器甕	10	口径 (15.0) 底径 器高 (4.5)	底部 体部 内面 ナダ・ヘラナダ	暗赤褐色	石英	

土器觀察表(8)

( ) 検定値 ( ) 現存値

器種名	探査番号	器種	遺存度 (%)	計画量 (cm)	測定	色調	胎土	備考
024	第48回 1	須恵器杯	50	口径 (14.2) 底径 7.0 器高 3.5	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒色	石英	
024	第48回 2	須恵器杯	40	口径 (12.8) 底径 6.6 器高 4.5	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
024	第48回 3	土師器杯	40	口径 (15.8) 底径 (7.8) 器高 4.6	底部 回転ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・スコリア	
024	第48回 4	土師器甕	10	口径 (14.8) 底径 — 器高 (4.7)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	赤褐色	石英	
024	第48回 5	土師器甕	10	口径 (22.8) 底径 — 器高 (6.0)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	赤褐色	石英・雲母	
024	第48回 6	土師器甕	10	口径 (22.2) 底径 — 器高 (8.5)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	橙褐色	石英・スコリア	
024	第48回 7	須恵器瓶	10	口径 (30.4) 孔径 (6.5) 器高 (6.5)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	黒色	石英	
024	第48回 8	須恵器瓶	10	口径 (15.4) 孔径 (7.8) 器高 (7.8)	底部 — 体部 ハラケズリ・タキ 内面 タキ・ナデ・ハラナデ	黒色	石英	
024	第48回 9	須恵器甕	10	口径 (37.6) 底径 — 器高 (7.9)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黒色	石英・雲母	
024	第48回 10	須恵器甕	20	口径 (30.6) 底径 — 器高 (12.5)	底部 — 体部 ナデ 内面 ハラケズリ・ナデ	黒灰色	石英	
024	第48回 11	須恵器甕	40	口径 (28.6) 底径 — 器高 (29.5)	底部 — 体部 ハラケズリ・タキ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	灰褐色	石英・雲母	
025	第49回 1	須恵器甕	10	口径 (8.2) 底径 — 器高 (3.4)	底部 手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒灰色	石英	
025	第49回 2	須恵器甕	10	口径 (21.6) 底径 — 器高 (7.3)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ	黒灰色	石英	
025	第50回 1	須恵器甕	10	口径 (12.8) 底径 — 器高 (3.1)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黒色	石英・雲母	
025	第50回 2	土師器甕	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 (3.2)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
025	第50回 3	土師器甕	10	口径 (11.2) 底径 — 器高 (3.5)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
025	第50回 4	土師器 萬古呑杯	20	口径 — 底径 (6.8) 器高 (1.7)	底部 同軸ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ミオキ・ナデ	橙褐色	石英・雲母	
025	第50回 5	土師器甕	10	口径 — 底径 (4.0) 器高 (5.7)	底部 手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ 内面 ナデ	黄褐色	石英・雲母	
025	第50回 6	土師器甕	10	口径 (21.8) 底径 — 器高 (12.2)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	橙褐色	石英・雲母	
025	第50回 7	土師器甕	10	口径 (21.8) 底径 — 器高 (10.2)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
025	第50回 8	須恵器甕	30	口径 (28.2) 底径 — 器高 (12.3)	底部 — 体部 タキ 内面 ナデ・ハラナデ	黒褐色	石英・雲母	
025	第50回 9	須恵器甕	10	口径 — 底径 — 器高 (7.8)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ	暗灰褐色	石英・雲母	
025	第50回 10	須恵器瓶	40	口径 (13.4) 孔径 (15.9) 器高 (6.5)	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・タキ 内面 ハラケズリ・ハラナデ	暗灰褐色	石英・スコリア	
025	第50回 11	須恵器甕	30	口径 (16.8) 底径 27.7	底部 無調査 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・スコリア	底部に紫物压痕

土器観察表 (9)

( ) 推定値 ( ) 現存値

番号	件番号	器種	重宝度 (%)	計測値 (cm)	調査	色調	胎土	備考
027	第51回1	須恵器杯	80	LJ径 底径 器高	13.4 6.4 4.1	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・スコリア
027	第51回2	土器器壺	10	LJ径 底径 器高	(15.0) (14.3) (11.1)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	黒褐色	石英
027	第51回3	土器器壺	40	LJ径 底径 器高	— 6.0 (14.3)	底部 — 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英
027	第51回4	須恵器壺	10	口径 底径 器高	(14.4) — (10.3)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・スコリア
027	第51回5	須恵器壺	20	口径 底径 器高	(16.2) — (17.1)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	黒灰色	石英
027	第51回6	須恵器壺	20	口径 底径 器高	(22.8) — (18.6)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・雲母
028	第52回1	須恵器杯	10	口径 底径 器高	(13.2) (7.6) (3.5)	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母
028	第52回2	須恵器杯	80	口径 底径 器高	12.2 6.2 4.0	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母・スコリア
028	第52回3	須恵器杯	10	口径 底径 器高	(12.8) (7.2) (3.5)	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英
028	第52回4	須恵器杯	10	口径 底径 器高	— (7.0) (2.4)	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・スコリア
028	第52回5	土器器杯	20	LJ径 底径 器高	— 7.0 (1.3)	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア
028	第52回6	火除御器 瓦類	10	口径 底径 器高	(10.2) — (6.6)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰褐色	黑色粒子
028	第52回7	土器器杯	10	口径 底径 器高	(20.0) — (8.0)	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗茶褐色	石英・雲母
031	第53回1	須恵器杯	80	LJ径 底径 器高	12.1 6.3 3.8	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・雲母
031	第53回2	須恵器杯	90	口径 底径 器高	13.1 7.2 3.8	底部 回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・雲母
031	第53回3	須恵器杯	完形	口径 底径 器高	12.3 6.8 4.1	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰褐色	石英
031	第53回4	須恵器瓶	10	口径 底径 器高	(33.0) — (8.9)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英
034	第53回5	土器器杯	20	口径 底径 器高	(14.0) — (3.7)	底部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母
034	第53回6	土器器瓶 高台付瓶	50	口径 底径 器高	— 7.7 (3.9)	底部 回転ヘラ切り 体部 ナデ 内面 ミガキ・ナデ	茶褐色	石英・スコリア
034	第53回7	土器器壺	20	口径 底径 器高	— 8.1 (5.2)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英
037	第54回1	土器器杯	90	口径 底径 器高	12.0 6.9 4.2	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	褐色	石英・雲母・スコリア 器身「横口」
037	第54回2	土器器杯	90	口径 底径 器高	15.5 8.5 5.8	底部 回転糸切り・周縁回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ミガキ	明褐色	石英 器身「団」 内面黒色処理
037	第54回3	須恵器杯	10	口径 底径 器高	— 8.4 —	底部 回転ヘラケズリ 体部 — 内面 —	明灰色	石英・雲母
037	第54回4	土器器壺	40	口径 底径 器高	— 6.0 (6.0)	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・雲母

土器觀察表(10)

( ) 標定値

( ) 現存値

遺物番号	種別番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	測量	色調	胎土	備考
037	第54図5	土師器甕	40	口径 6.5 底径 (11.5) 器高 6.0	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	暗茶褐色	石英	
037	第54図6	土師器甕	10	口径 (19.2) 底径 一 器高 (10.2)	底部 一 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	茶褐色	石英	
037	第54図7	土師器甕	20	口径 (21.0) 底径 (19.2) 器高 6.0	底部 一 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	茶褐色	石英・長石	
038	第54図8	土師器杯	40	口径 (12.4) 底径 6.0 器高 3.9	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・スコリア	
038	第54図9	土師器杯	90	口径 13.2 底径 6.8 器高 3.8	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
038	第54図10	土師器杯	30	口径 (13.6) 底径 5.7 器高 4.5	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英・雲母	
038	第54図11	土師器皿	20	口径 (12.6) 底径 (4.4) 器高 2.8	底部 手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・雲母	墨書き
038	第54図12	須恵器杯	40	口径 (12.0) 底径 7.4 器高 4.1	底部 全面圓軸ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰褐色	石英	
038	第54図13	須恵器杯	30	口径 (13.0) 底径 (6.6) 器高 4.2	底部 圓錐手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英・雲母	
038	第54図14	須恵器甕	10	口径 (26.0) 底径 一 器高 (4.5)	底部 一 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	赤褐色	石英	
038	第54図15	須恵器甕	10	口径 (16.7) 底径 一 器高 (6.0)	底部 一 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ・ハラナデ	赤褐色	石英・雲母	
038	第54図16	土師器甕	50	口径 13.6 底径 一 器高 (14.0)	底部 一 内面 ナデ・ハラナデ	橙褐色	石英	
039	第55図1	須恵器杯	50	口径 (13.0) 底径 8.0 器高 4.0	底部 四輪ハラクリ・全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英	線刻「仲」
039	第55図2	須恵器杯	80	口径 13.2 底径 8.9 器高 4.3	底部 圓盤ハラクリ・手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英・スコリア	
039	第55図3	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 (7.0) 器高 4.4	底部 圓錐手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英	
040	第55図4	須恵器杯	30	口径 (11.0) 底径 (6.8) 器高 3.6	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英	
040	第55図5	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 (8.2) 器高 3.9	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
040	第55図6	土師器杯	20	口径 一 底径 7.8 器高 (2.6)	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・雲母	
042	第56図1	土師器皿	完形	口径 13.8 底径 5.9 器高 1.8	底部 四輪赤切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英・雲母・スコリア	ヘラ記号
042	第56図2	土師器杯	70	口径 (14.4) 底径 6.6 器高 4.6	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英・スコリア	
042	第56図3	土師器杯	70	口径 (14.0) 底径 6.6 器高 4.8	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英	
042	第56図4	土師器杯	90	口径 11.4 底径 7.0 器高 4.2	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ハラナデ 内面 ハラナデ・ミガキ	黄褐色	石英・雲母・スコリア	
042	第56図5	土師器杯	40	口径 (12.0) 底径 6.4 器高 4.1	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
042	第56図6	土師器杯	40	口径 (12.2) 底径 4.8 器高 4.1	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	

土器觀察表 (11)

( ) 標定値

( ) 現存値

番号	辨別番号	器種	遺存率 (%)	計測値 (cm)	測定	色調	胎土	備考
042	第56図7	上部器皿	70	口径 13.2 底径 6.4 器高 2.0	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
042	第56図8	上部器皿	30	口径 (13.8) 底径 — 器高 2.2	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・雲母	
042	第56図9	上部器皿	20	口径 (20.4) 底径 — 器高 (6.0)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・雲母	
042	第56図10	土器器皿	10	口径 (18.0) 底径 — 器高 (12.5)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・雲母	
042	第56図11	土器器皿	40	口径 20.2 底径 — 器高 (14.9)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・スコリア	
042	第56図12	土器器皿	60	口径 21.0 底径 — 器高 (22.4)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黃褐色	石英・スコリア	
042	第56図13	須恵器皿	20	口径 (20.8) 底径 — 器高 (12.0)	底部 佐原 タッキ・ケズリ 内面 ナデ・ヘラナデ	黒褐色	石英・雲母・スコリア	
042	第56図14	須恵器皿	20	口径 (21.4) 底径 — 器高 (16.9)	底部 佐原 タッキ・ケズリ 内面 ナデ・ヘラナデ	黒褐色	石英・雲母・スコリア	
042	第56図15	須恵器皿	40	口径 (23.8) 底径 (14.6) 器高 (24.2)	底部 佐原 タッキ・ケズリ 内面 ナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・雲母	
044	第57図1	上部器皿	20	口径 (15.0) 底径 (7.6) 器高 4.8	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・雲母	
044	第57図2	上部器皿	20	口径 (14.8) 底径 (8.2) 器高 4.2	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英	
044	第57図3	土器器皿	10	口径 (14.0) 底径 (6.6) 器高 4.1	底部 脱胎ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・スコリア	
044	第57図4	土器器皿	60	口径 (14.0) 底径 7.0 器高 4.5	底部 ヘラカツリ・脱胎ヘラケズリ 体部 脱胎ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
044	第57図5	上部器皿	90	口径 13.6 底径 5.4 器高 4.5	底部 ヘラカツリ・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・スコリア	
044	第57図6	土器器皿	10	口径 (9.6) 底径 (5.5) 器高	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・雲母	
044	第57図7	上部器皿	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 (6.4)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・スコリア	
044	第57図8	上部器皿	10	口径 (13.6) 底径 — 器高 (6.2)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・雲母	
044	第57図9	上部器皿	70	口径 (12.3) 底径 6.0 器高 3.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・雲母	
044	第57図10	上部器皿	10	口径 (25.6) 底径 — 器高 (7.0)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・雲母	
044	第57図11	須恵器皿	50	口径 (19.0) 底径 (12.2) 器高 3.8	底部 集調査 体部 タッキ・ケズリ 内面 ナデ・ヘラナデ	黒褐色	石英・雲母	底部に象物伝灰
044	第57図12	須恵器皿	10	口径 (20.6) 底径 — 器高 (7.2)	底部 — 体部 タッキ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	橙褐色	石英・スコリア	
044	第57図13	須恵器皿	30	口径 — 底径 — 器高 (23.3)	底部 — 体部 タッキ・ヘラケズリ 内面 ナデ・ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
044	第57図14	須恵器皿	30	口径 26.2 底径 — 器高 (15.2)	底部 — 体部 タッキ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	灰褐色	石英	
047	第58図1	土器器皿	10	口径 — 底径 — 器高 (4.5)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	

土器観察表 (12)

( ) 検定値 ( ) 現存値

器 種 名 号	辨認番号	器 種	遺存度 (%)	計 面 積 (cm <sup>2</sup> )	調 査 部	色 調	胎 土	備 考
047	第58図2	土器器杯	10	口径 (14.4) 底径 — 器高 (4.0)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
047	第58図3	須恵器杯	10	口径 (12.8) 底径 (3.5) 器高 —	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	褐褐色	石英・雲母	
047	第58図4	須恵器杯	10	口径 (12.0) 底径 (2.8) 器高 —	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・雲母	
047	第58図5	土器器毫	10	口径 (18.4) 底径 — 器高 (7.5)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
047	第58図6	須恵器毫	10	口径 — 底径 (13.0) 器高 (5.3)	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
047	第58図7	須恵器瓶	10	孔径 — 底径 (5.0) 器高 —	孔部 ナデ 体部 タタキ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
047	第58図8	須恵器瓶	10	口径 (21.9) 孔径 (11.2) 底径 (16.3) 器高 —	孔部 ヘラケズリ 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
048	第59図1	須恵器壺	10	口径 (15.0) 天井径 — 器高 (1.9)	天井部 扇形 ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
048	第59図2	土器器杯	30	口径 (12.8) 底径 — 器高 (3.2)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
048	第59図3	土器器杯	90	口径 15.0 底径 — 器高 2.9	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英・スコリア	
048	第59図4	土器器杯	10	口径 (12.6) 底径 — 器高 (3.0)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英・雲母・スコリア	
048	第59図5	須恵器杯	20	口径 (14.6) 底径 — 器高 (3.8)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・雲母	
048	第59図6	土器器杯	20	口径 (13.0) 底径 — 器高 (3.5)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黑褐色	石英・スコリア	外外面黑色處理
048	第59図7	土器器杯	20	口径 (12.0) 底径 — 器高 5.0	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	外外面赤彩
048	第59図8	土器器毫	20	口径 (14.5) 底径 — 器高 (9.4)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・スコリア	
048	第59図9	土器器毫	10	口径 (21.3) 底径 — 器高 (8.9)	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	
049	第61図1	須恵器杯	70	口径 13.0 底径 6.6 器高 4.1	底部 ヘラ切り・周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
049	第61図2	須恵器杯	80	口径 13.1 底径 8.0 器高 4.2	底部 ヘラ切り・周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
049	第61図3	須恵器杯	70	口径 14.1 底径 6.6 器高 4.7	底部 ヘラ切り・全周手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
049	第61図4	須恵器杯	40	口径 (13.0) 底径 6.4 器高 3.9	底部 周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
049	第61図5	須恵器杯	60	口径 12.4 底径 6.6 器高 3.8	底部 全周手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
049	第61図6	須恵器杯	70	口径 (13.4) 底径 6.5 器高 4.5	底部 全周手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
049	第61図7	須恵器杯	20	口径 (12.8) 底径 (6.4) 器高 3.9	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰褐色	石英	
049	第61図8	須恵器杯	完形	口径 13.2 底径 6.2 器高 4.5	底部 全周手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・雲母	

土器觀察表 (13)

( ) 推定値 ( ) 現存値

通 路 号	辨 別 番 号	器 種	遺 存 度 (%)	計 測 値 (cm)	測 定 整	色 調	胎 土	備 考
049	第61回9	土師器杯	70	口径 14.6 底径 6.8 器高 4.8	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
049	第61回10	土師器杯	60	口径 12.5 底径 7.0 器高 4.3	底部 全面同軸ハラケズリ 体部 回軸ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
049	第61回11	土師器杯	40	口径 (12.8) 底径 (6.2) 器高 4.7	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英	
049	第61回12	土師器杯	40	口径 (11.5) 底径 6.8 器高 4.4	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
049	第61回13	土師器杯	30	口径 (14.8) 底径 (8.2) 器高 4.1	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
049	第61回14	土師器杯	40	口径 — 底径 6.8 器高 (3.5)	底部 介面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・雲母	
049	第61回15	土師器杯	10	口径 — 底径 (7.0) 器高 (3.7)	底部 手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	茶褐色	石英・スコリア	器書「直」
049	第61回16	土師器皿	90	口径 13.4 底径 6.3 器高 2.1	介面手持ちハラケズリ 底部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
049	第61回17	土師器皿 瓦台付皿	40	口径 — 底径 6.8 器高 2.3	底部 全面同軸ハラケズリ 体部 回軸ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英・雲母	
049	第61回18	土師器皿	30	口径 (13.4) 底径 (5.4) 器高 2.1	底部 全面同軸ハラケズリ 体部 回軸ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
049	第61回19	土師器皿	80	口径 14.4 底径 6.6 器高 2.1	底部 全面同軸ハラケズリ 体部 回軸ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
049	第61回20	土師器甕	10	口径 (12.4) 底径 — 器高 (3.7)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	赤褐色	石英・雲母	
049	第61回21	土師器甕	10	口径 (20.8) 底径 — 器高 (6.2)	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ハラナデ	橙褐色	石英・長石・ 雲母	
049	第61回22	土師器甕	20	口径 — 底径 7.2 器高 (7.6)	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	橙褐色	石英・長石	
049	第61回23	土師器甕	40	口径 (21.2) 底径 — 器高 (12.6)	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ハラナデ	黃褐色	スコリア	
049	第61回24	須恵器鉢	60	口径 (18.6) 底径 9.4 器高 10.7	底部 ナデ 体部 タキキ・ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	灰色	石英・長石	ヘラ記号
049	第61回25	須恵器甕	10	口径 (21.6) 底径 — 器高 (11.5)	底部 — 体部 タキキ・ナデ 内面 ハラナデ	赤褐色	石英	
049	第61回26	須恵器甕	10	口径 (28.0) 底径 — 器高 (14.0)	底部 — 体部 タキキ・ナデ 内面 ハラナデ	黃褐色	石英・長石	
049	第61回27	須恵器甕	20	口径 (20.6) 底径 — 器高 (17.7)	底部 — 体部 タキキ・ナデ 内面 ハラナデ	赤褐色	石英・長石・ 雲母	
049	第61回28	須恵器盤	10	口径 16.0 底径 (5.4)	孔部 ハラケズリ・ナデ 体部 ハラケズリ 内面 ハラナデ	黑褐色	石英・長石	
049	第61回29	灰陶器 長把瓶	10	口径 — 底径 (8.1)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
051	第62回1	須恵器杯	70	口径 11.4 底径 7.2 器高 3.9	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	灰色	石英・雲母	
051	第62回2	土師器甕	50	口径 8.0 底径 (15.5)	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	橙褐色	石英・雲母	
051	第62回3	土師器甕	20	口径 (23.8) 底径 (14.9)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	橙褐色	石英・長石・ 雲母	

土器観察表(14)

( ) 検定値

( ) 現存値

番 号	検査番号	器種	蓋存度 (%)	計測値 (cm)	測定	色調	胎上	備考
051	第62図4	土師器甕	30	口径 (20.8) 底径 — 器高 (13.6)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナダ	橙褐色	石英・長石・ スコリア	
051	第62図5	土師器甕	50	口径 18.7 底径 — 器高 (23.9)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナダ	橙褐色	石英・長石・ 雲母	
051	第62図6	土師器甕	10	口径 (21.0) 底径 — 器高 (11.3)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナダ	褐色	石英・長石・ 雲母	
057	第64図1	須恵器杯	完形	口径 124 底径 60 器高 43	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・スコリア	
057	第64図2	須恵器甕	40	口径 (15.8) 底径 — 器高 38	天井部 回転ハラケズリ・ナデ 体部 — 内面 ナデ	暗灰色	石英	
057	第64図3	須恵器高台付杯	30	口径 (14.7) 底径 (9.2) 器高 4.6	底部 回転ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・雲母	
057	第64図4	土師器甕	30	口径 (20.6) 底径 — 器高 (18.0)	底部 ハラケズリ 体部 ハラケズリ 内面 ハラナダ	橙褐色	石英・スコリア	
057	第64図5	土師器甕	10	口径 (20.0) 底径 — 器高 (5.8)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナダ	赤褐色	石英・雲母	
057	第64図6	手捏ね	80	口径 (7.0) 底径 6.4 器高 4.0	底部 ハラナダ 体部 ハラナダ 内面 ナデ	黑褐色	石英	
057	第64図7	手捏ね	30	口径 (10.4) 底径 (5.8) 器高 4.9	底部 ハラナダ 体部 ハラナダ 内面 ナデ	暗褐色	白色針状物	
060	第65図1	手捏ね	40	口径 (10.6) 底径 (5.2) 器高 3.8	底部 ハラナダ 体部 ハラナダ 内面 ナデ	黄褐色	石英	
060	第65図2	土師器甕	20	口径 (16.6) 底径 8.0 器高 (17.1)	底部 ハラナダ 体部 ハラケズリ 内面 ハラナダ	赤褐色	石英・長石・ 雲母	
062	第66図1	須恵器杯	20	口径 (10.8) 底径 (4.8) 器高 3.9	底部 手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・雲母	
062	第66図2	土師器甕	50	口径 (14.4) 底径 6.8 器高 5.0	底部 ハラナダ 体部 全面手持ちハラケズリ 内面 回転ハラケズリ・ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
062	第66図3	土師器甕	完形	口径 15.2 底径 6.4 器高 5.2	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	墨書き「笠下」
062	第66図4	土師器甕	50	口径 (14.7) 底径 5.6 器高 2.3	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
062	第66図5	土師器甕	50	口径 (14.6) 底径 5.6 器高 2.8	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
062	第66図6	須恵器甕	30	口径 (24.6) 底径 (11.0) 器高 (22.6)	底部 陶キ・ナデ・ハラケズリ 体部 ハラナダ	黑褐色	石英・長石・ 雲母	
062	第66図7	須恵器甕	40	口径 (15.6) 底径 (25.6) 器高 15.6	底部 無開窓 体部 タキキ・ナデ・ハラケズリ 内面 ハラナダ	黑褐色	石英・長石・ 雲母	
064	第67図1	土師器甕	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 (5.5)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・ 雲母	
064	第67図2	土師器甕	10	口径 (21.8) 底径 — 器高 (5.0)	底部 — 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	白色針状物	
066	第69図1	須恵器杯	90	口径 16.0 底径 7.6 器高 5.9	底部 全面手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黑褐色	石英	
066	第69図2	土師器甕	40	口径 (16.4) 底径 (7.3) 器高 4.9	底部 手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
066	第69図3	土師器甕	40	口径 (17.6) 底径 — 器高 (5.9)	底部 — 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	

土器観察表(15)

( ) 基定値

( ) 現存値

通番号	採回番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	測量	色調	胎土	備考
066	第69回4	土師器杯	50	I口径 14.2 底径 7.2 器高 4.0	底部 回転系切り・周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	墨書き「法成」
066	第69回5	土師器杯	50	口径 13.2 底径 6.3 器高 4.7	底部 回転系切り・周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	墨書き「記号」
066	第69回6	土師器杯	10	I口径 7.0 底径 3.7 器高 2.7	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	淡褐色	石英・スコリア	墨書き「法成」
066	第69回7	土師器杯	40	口径 12.0 底径 6.2 器高 3.6	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・スコリア	墨書き「千万」
066	第69回8	土師器杯	20	I口径 — 底径 6.0 器高 1.2	底部 回転系切り 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色	石英	墨書き「旭」
066	第69回9	土師器皿	30	I口径 13.0 底径 6.0 器高 2.0	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	
066	第69回10	土師器皿	80	I口径 13.8 底径 5.7 器高 2.5	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 2.オギ・ナデ	明褐色	石英・スコリア	墨書き「千万」
066	第69回11	土師器 高台付皿	60	I口径 13.2 底径 6.6 器高 2.8	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・雲母	
066	第69回12	土師器盤	10	I口径 25.0 底径 8.4	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
066	第69回13	土師器盤	10	I口径 18.2 底径 9.2	底部 ヘラケズリ 体部 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英	
066	第69回14	土師器盤	40	I口径 7.2 底径 18.7	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英	
066	第69回15	須恵器盤	10	I口径 21.0 底径 6.9	底部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英	
068	第70回1	土師器杯	20	I口径 12.6 底径 6.0 器高 4.5	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
068	第70回2	土師器杯	30	I口径 12.0 底径 5.6 器高 4.1	底部 回転系ヘラケズリ 体部 回転系ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・雲母・ スコリア	
068	第70回3	土師器皿	10	I口径 12.2 底径 ... 器高 (5.4)	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
068	第70回4	須恵器皿	20	I口径 20.9 底径 7.6 器高 (11.0)	底部 タタキ・ヘラケズリ 体部 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・雲母・ スコリア	
069	第71回1	須恵器皿	50	I口径 12.6 底径 7.6 器高 4.3	底部 全面回転ヘラケズリ 内面 回転ヘラケズリ・ナデ ナデ	黒褐色	石英・雲母	
069	第71回2	須恵器皿	30	I口径 (20.1) 底径 ... 器高 (13.0)	底部 ヘラナデ・ナデ 内面 ヘラナデ	明灰色	石英・雲母	
070	第71回4	土師器皿	10	I口径 — 底径 — 器高 (2.3)	底部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・雲母	
070	第71回5	土師器高杯	30	I口径 — 底径 — 器高 (7.9)	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 3ガキ	褐色	石英・雲母	内面黑色処理
070	第71回6	土師器皿	90	I口径 22.4 底径 5.2 器高 31.3	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英	
072	第72回1	土師器皿	80	I口径 13.1 底径 6.4 器高 4.3	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	
072	第72回2	土師器皿	80	I口径 14.1 底径 6.6 器高 4.6	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	
072	第72回3	土師器皿	70	I口径 (14.4) 底径 6.6 器高 6.0	底部 回転系切り・周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	スコリア・ 白色針状物	

土器観察表(16)

( )推定値

( )現存値

器番 分類	辨別番号	器種	遺存度 (%)	計画値 (cm)	調査 部	色調	胎土	備考
072	第72図4	土師器杯	70	口徑 11.6 底径 6.0 器高 4.3	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
072	第72図5	土師器杯	60	口徑 (13.0) 底径 6.5 器高 4.3	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	
072	第72図6	土師器杯	50	口徑 (12.5) 底径 5.2 器高 4.8	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・黄母	
072	第72図7	土師器杯	50	口徑 (13.4) 底径 6.9 器高 4.1	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
072	第72図8	土師器杯	20	口徑 (13.0) 底径 — 器高 (3.7)	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・スコリア	
072	第72図9	土師器杯	40	口徑 12.1 底径 6.2 器高 4.1	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	ヘラ記号
072	第72図10	土師器 高台付杯	10	口徑 (15.0) 底径 (6.8) 器高 4.9	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ミガキ	黄褐色	石英・スコリア	内面黑色処理
072	第72図11	縫合器壺	10	口徑 (21.0) 底径 (8.0) 器高 —	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英	
073	第73図1	土師器杯	完形	口徑 12.0 底径 8.0 器高 3.5	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
073	第73図2	土師器杯	50	口徑 (12.9) 底径 6.7 器高 4.2	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・スコリア	
073	第73図3	土師器杯	40	口徑 (12.5) 底径 6.9 器高 4.4	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・雲母・ スコリア	
073	第73図4	土師器杯	20	口徑 — 底径 7.0 器高 (1.5)	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・雲母・ スコリア	ヘラ記号
073	第73図5	土師器杯	30	口徑 — 底径 7.3 器高 (3.0)	底部 脚軽外切・周縁回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	内面黑色処理 ヘラ記号
073	第73図6	土師器壺	70	口徑 12.5 底径 5.9 器高 11.7	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	暗褐色	石英	
073	第73図7	土師器壺	20	口徑 (18.0) — 器高 (15.1)	底部 一 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	橙褐色	石英・長石・ スコリア	
073	第73図8	土師器壺	20	口徑 (22.5) — 器高 (23.6)	底部 一 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	暗褐色	石英	
073	第73図9	土師器壺	30	口徑 (20.2) 底径 4.9 器高 (31.0)	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
073	第73図10	土師器壺	30	口徑 — 底径 (6.2) 器高 (25.9)	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナダ	暗褐色	石英・長石・ スコリア	
073	第74図11	縫合器壺	10	口徑 (23.4) — 器高 (7.5)	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	灰褐色	石英・長石	
073	第74図12	縫合器壺	10	口徑 (26.0) 底径 — 器高 (12.6)	底部 ヘラケズリ 体部 タキナ・ナデ 内面 ヘラナダ	黒褐色	石英・長石・ 雲母	
073	第74図13	縫合器壺	10	口徑 — 底径 (23.5) 器高 —	底部 一 体部 タキナ・ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	灰褐色	石英・長石	
110	第75図1	縫合器杯	10	口徑 (13.0) 底径 — 器高 (3.2)	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
111	第75図2	土師器杯	80	口徑 12.4 底径 3.6 器高 7.0	底部 回転ヘラ切り・周縁手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	基褐色	石英・雲母・ スコリア	
112	第75図3	土師器杯	70	口徑 12.2 底径 6.5 器高 3.8	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	

土器観察表(17)

( ) 検定値 ( ) 現在値

番号	神戸番号	器種	遺存度(%)	計画値(cm)	調整	色調	胎土	備考
112	第75回4	土師器杯	20	口径(15.4) 底径(4.0)	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・スコリア	
112	第75回5	須恵器瓶	10	口径— 底径(16.2)	底部 — 体部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	長石・雲母・ スコリア	
117	第76回1	須恵器杯	40	口径(12.6) 底径(6.2) 器高4.5	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	灰色	石英・スコリア	
117	第76回2	土師器杯	20	口径(12.8) 底径(6.2) 器高4.5	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	石英・雲母	
117	第76回3	土師器杯	60	口径(12.9) 底径(6.3) 器高3.9	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
117	第76回4	土師器皿	50	口径(15.0) 底径(6.2) 器高2.7	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・ スコリア	
117	第76回5	須恵器甕	10	口径(22.0) 底径(7.1) 器高—	底部 — 体部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・ スコリア	
117	第76回6	土師器甕	20	口径— 底径(10.5)	底部 — 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黃褐色	石英・雲母・ スコリア	
118	第76回7	須恵器杯	80	口径(13.7) 底径(7.0) 器高4.1	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母	
118	第76回8	須恵器杯	20	口径(12.1) 底径(7.0) 器高3.7	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
118	第76回9	須恵器杯	20	口径(11.6) 底径(7.4) 器高3.4	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	明灰色	石英	
118	第76回10	須恵器杯	10	口径(11.6) 底径(6.2) 器高3.8	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母	
118	第76回11	須恵器甕	10	口径(14.8) 底径(2.7)	底部 — 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	褐褐色	石英・長石・ スコリア	底部に敷物圧痕 ヘラ記号
122	第77回1	土師器甕	40	口径(14.0) 底径(5.5) 器高1.7	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	褐色	石英・スコリア	
122	第77回2	土師器甕	60	口径(13.9) 底径(5.8) 器高2.1	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
122	第77回3	土師器杯	90	口径(12.2) 底径(7.0) 器高3.8	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	内面スズ付着
122	第77回4	土師器杯	80	口径(12.4) 底径(5.0) 器高3.9	底部 — 体部 全面手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	墨書「記号」
122	第77回5	土師器杯	70	口径(14.1) 底径(7.0) 器高5.2	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	褐褐色	石英	縁絵「方」
122	第77回6	土師器杯	10	口径— 底径(6.4) 器高(1.1)	底部 — 体部 同軸糸切り・周縁手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色	石英・スコリア	墨書「千刀」
122	第77回7	土師器杯	60	口径(17.2) 底径(5.6) 器高5.4	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	石英・雲母・ スコリア	
122	第77回8	須恵器瓶	10	口径(21.6) 底径— 器高(9.5)	底部 — 体部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英	
122	第77回9	土師器甕	20	口径(22.0) 底径— 器高(9.6)	底部 — 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・ 雲母	
123	第78回1	須恵器甕	90	口径(13.2) 底径— 器高(2.7)	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	明灰色	石英・スコリア	
123	第78回2	須恵器甕	30	口径(14.8) 底径— 器高(3.3)	底部 — 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	明灰色	石英・スコリア	

土器観察表(18)

( ) 検定値

( ) 現在値

遺物号	検査番号	器種	高さ(%)	計測値(cm)	測量	色調	胎土	備考
123	第78回3	須恵器 高台付杯	20	口径一 底径 9.4 器高 (1.0)	底部 輪縁へラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・スコリア	ヘラ記号
123	第78回4	須恵器杯	30	口径 (12.8) 底径 (5.8) 器高 3.7	底部 輪縁へラケズリ 体部 輪縁へラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・スコリア	
123	第78回5	須恵器杯	40	口径 (12.4) 底径 7.0 器高 3.9	底部 輪縁へラケズリ 体部 手持ちラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・スコリア	
123	第78回6	須恵器 長颈瓶	80	口径一 底径 7.5 器高 (11.9)	底部 輪縁へラケズリ 体部 輪縁へラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英	割れ欠損
123	第78回7	土師器壺	20	口径 (22.8) 底径 一 器高 (17.4)	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラナデ	暗褐色	石英・焼石・ 等々	
129	第79回1	須恵器杯	40	口径 (12.5) 底径 7.0 器高 3.5	底部 輪縁へラケズリ・ナデ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・スコリア	
129	第79回2	土師器壺	10	口径 (21.0) 底径 一 器高 (12.0)	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラナデ 内面	暗褐色	石英・焼石・ スコリア	

H-01	第85回1	須恵器杯	10	口径 (12.2) 底径 一 器高 (3.8)	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英	焼成堅版
H-09	第85回2	須恵器杯	20	口径 (13.2) 底径 (8.0) 器高 4.5	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・スコリア	
H-10	第85回3	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 (6.6) 器高 4.1	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・雲母	
H-01	第85回4	土師器壺	10	口径 (20.0) 底径 一 器高 (2.9)	底部 一 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・雲母	
H-01	第85回5	須恵器壺	10	口径 (29.0) 底径 一 器高 (3.7)	底部 タキ・ナデ 体部 内面 ナデ	暗褐色	石英	
H-01	第85回6	須恵器壺	10	口径 (32.0) 底径 一 器高 (3.2)	底部 一 体部 タキ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・焼石	
H-02	第85回7	須恵器壺	10	口径 一 孔径 (12.0) 器高 (3.8)	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・焼石・ スコリア	

052	第88回1	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 一 器高 (2.5)	底部 一 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・雲母	内外面黑色處理 全体に摩耗
052	第88回2	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 一 器高 (2.0)	底部 一 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・雲母	内外面黑色處理 全体に摩耗
056	第88回3	土師器杯	10	口径 (11.2) 底径 一 器高 (3.0)	底部 一 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・雲母	内外面赤影
056	第88回4	土師器杯	10	口径 (12.2) 底径 (3.8)	底部 一 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・雲母・ スコリア	全体に摩耗
056	第88回5	須恵器高杯	30	口径 一 底径 一 器高 (5.7)	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英	
P3	第88回6	土師器杯	10	口径 (11.0) 底径 一 器高 (3.7)	底部 一 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・スコリア	D3-03
P3	第88回7	上部器高杯	20	口径 (11.4) 底径 一 器高 (7.5)	底部 一 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・雲母・ スコリア	C2-39
P1	第88回8	土師器杯	10	口径 12.3 底径 6.4 器高 4.1	底部 全面開口へラケズリ 体部 輪縁へラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・雲母・ スコリア	C3-38

土器観察表(19)

( ) 推定値 ( ) 現存値

遺構番号	地図番号	器種	遺存度 (%)	計測値 (cm)	測量	色調	胎土	備考
P37	第88図9	須恵器杯	10	口径 (12.4) 底径 (7.0) 器高 4.2	底部 手持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰褐色	石英	D2-71
P32	第88図10	須恵器杯	30	口径 (13.6) 底径 (7.0) 器高 4.2	底部 下持ちハラケズリ 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒色	石英	C3-08
P15	第88図11	須恵器壺	10	口径 (19.6) 底径 一 器高 (5.9)	底部 一 体部 タタキ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	D2-31
P45	第88図12	土器器壺	10	口径 (20.6) 底径 一 器高 (6.5)	底部 一 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ハラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	D2-72

004	第92図1	土器器壺	10	口径 (12.6) 底径 (3.2) 器高 一	底部 一 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	内外面赤影
004	第92図2	土器器壺	10	口径 (12.8) 底径 一 器高 (4.8)	底部 一 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英	
004	第92図3	土器高台杯	40	口径 一 底径 9.8 器高 (5.6)	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	内外面赤影
004	第92図4	須恵器杯	10	口径 (12.0) 底径 一 器高 3.8	底部 下持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	
004	第92図5	須恵器杯	10	口径 (12.0) 底径 一 器高 (3.8)	底部 一 内面 ナデ	明灰色	石英	
004	第92図6	須恵器高台付杯	10	口径 一 底径 (8.0) 器高 (1.3)	底部 回転ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
006	第92図7	土器器高杯	10	口径 一 底径 (7.4) 器高 一	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・スコリア	外面赤影
006	第92図8	須恵器壺	10	口径 一 底径 (1.8) 器高 一	大井型 回転ハラケズリ 体部 一 内面 ナデ	灰色	石英	
006	第92図9	土器器杯	10	口径 (11.6) 底径 (6.8) 器高 3.7	底部 手持ちハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・雲母・スコリア	
109	第92図10	土器器杯	30	口径 (11.7) 底径 一 器高 3.5.	底部 ハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・白色針状物	
109	第92図11	土器器杯	20	口径 (14.3) 底径 (5.8) 器高 4.6	底部 回転糸切り 体部 手持ちハラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	
109	第92図12	手捏ね	30	口径 (5.8) 底径 (4.2) 器高 2.5	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英	
109	第92図13	手捏ね	60	口径 (7.0) 底径 一 器高 2.3	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英	

遺構外 D2-75	第94図1	土器器杯	完形	口径 12.8 底径 一 器高 4.2	底部 ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母	
遺構外 D2-75- 85	第94図2	土器器杯	完形	口径 12.7 底径 一 器高 4.2	底部 ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母・スコリア	
遺構外 D2-75	第94図3	土器器杯	90	口径 13.8 底径 一 器高 3.7	底部 ハラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・スコリア	内外面黒色處理 全体に摩耗
遺構外 D2-50	第94図4	土器器杯	30	口径 (15.0) 底径 (4.6) 器高 一	底部 ハラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・スコリア	内外面赤影 全体に摩耗
遺構外 D2-50	第94図5	土器器高杯	20	口径 一 底径 (9.1) 器高 (4.3)	底部 ハラケズリ・ヘラナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	内外面赤影

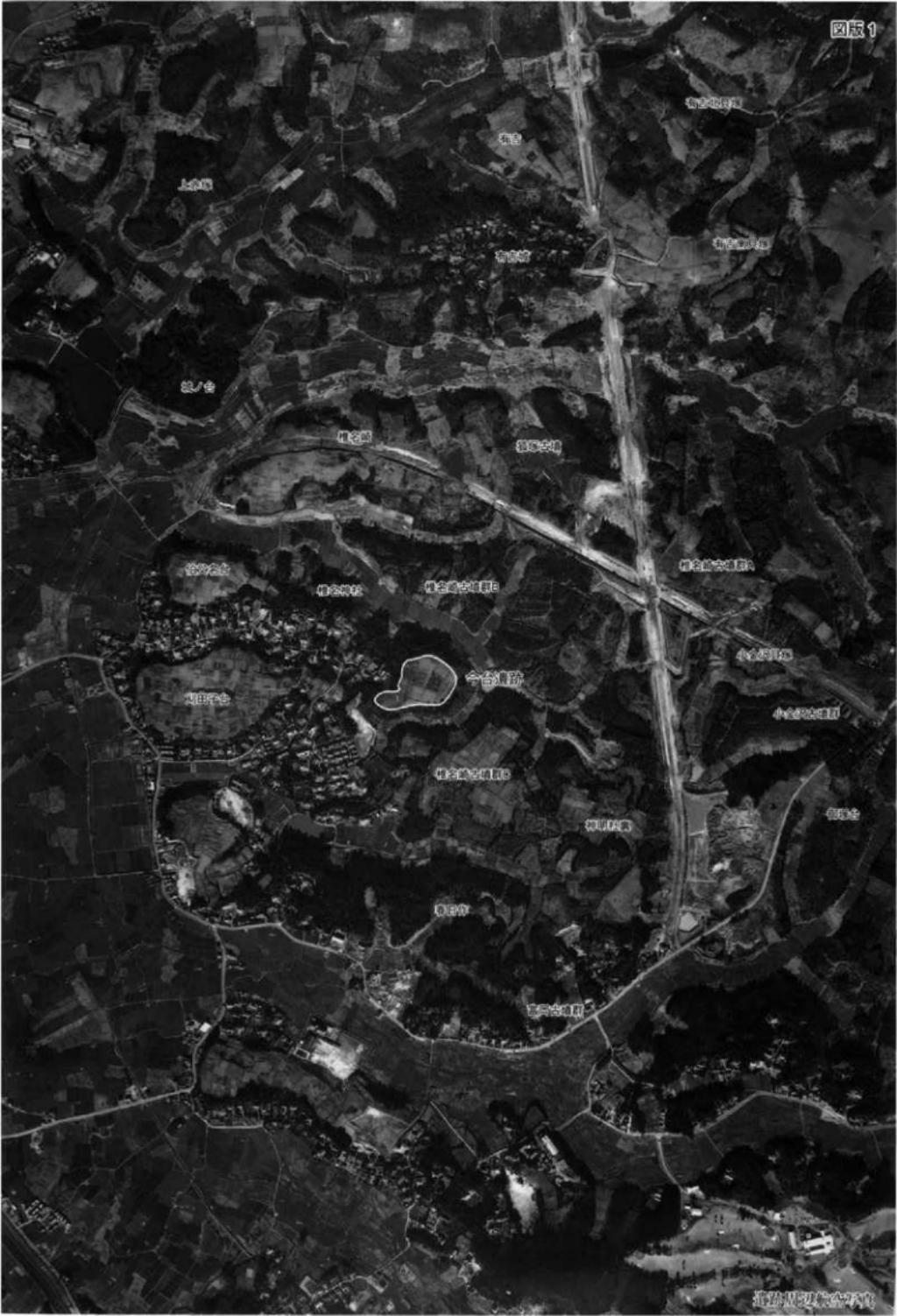
土器観察表(20)

( ) 基定値

( ) 現存値

造形号	持因番号	器種	遺存度 (%)	計測値 (cm)	調査	色調	胎土	備考
造形外 D2-20 -30	第94図 6	土師器杯	60	口径 12.3 底径 6.0 器高 4.2	底部 全周手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・雲母・ スコリア	
造形外 D2-65	第94図 7	土師器杯	80	口径 12.0 底径 — 器高 3.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
造形外 E2-45	第94図 8	土師器杯	20	口径 (12.6) 底径 (8.4) 器高 3.7	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英	
造形外 E4-00	第94図 9	土師器杯	60	口径 (12.7) 底径 7.0 器高 3.3	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	棕褐色	石英・スコリア	全体に摩耗
造形外 E2-50	第94図10	須恵器杯	20	口径 (12.6) 底径 — 器高 (4.3)	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・雲母・ スコリア	
造形外 C3-69	第94図11	手捏ね	50	口径 — 底径 — 器高 (5.1)	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・雲母	
造形外 E2-50	第94図12	土師器壺	20	口径 (8.0) 底径 (18.6)	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・ スコリア	
造形外 E2-85	第94図13	須恵器壺	10	口径 (25.0) 底径 — 器高 (4.1)	底部 — 体部 タキ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・ 雲母	

# 写 真 図 版





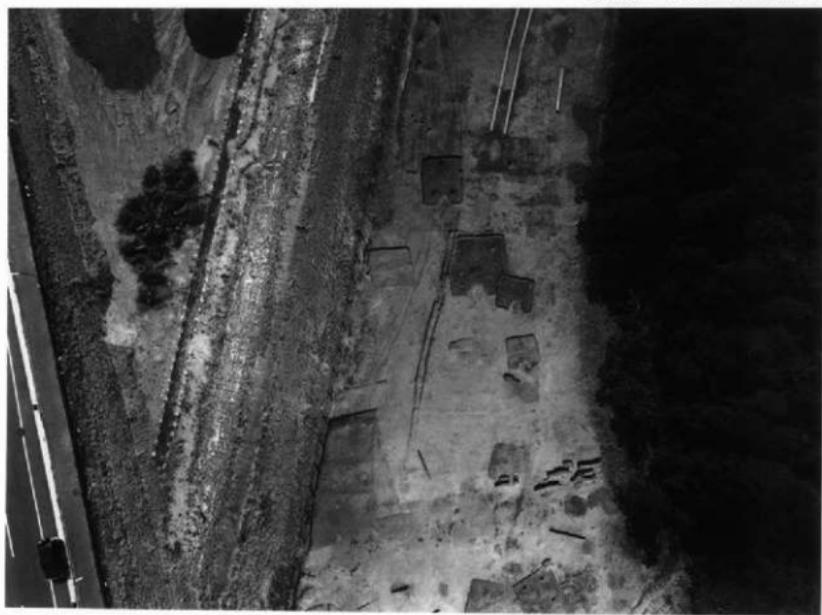
遺跡全景・平成 9 年度(南から)



遺跡全景・平成 9 年度(北東から)



遺跡北側・平成9年度(北から)



遺跡中央・平成9年度(北から)

図版 4







第1～第3ブロック遺物出土位置



第4ブロック遺物出土位置



第4ブロック遺物出土位置







018号化砾



019号化砾



020号化砾



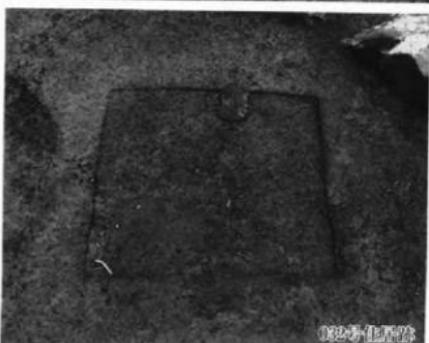
021号化砾



022号化砾



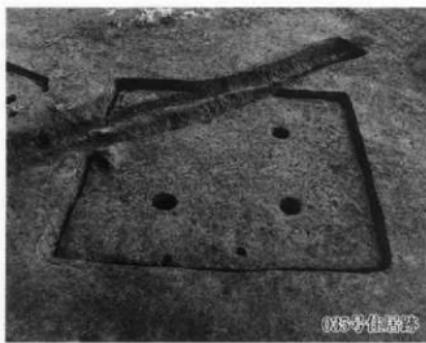
023号化砾



024号化砾



025号化砾



035号住居跡



036号住居跡



037号住居跡



038号住居跡



039号住居跡



040号住居跡



041号住居跡



042号住居跡



0452(11513)



045号(11513)



0453(11513)



0454(11513)



0455(11513)



0456(11513)



0457(11513)



0458(11513)

図版 12



056-2 住居跡



054-2 住居跡



055-2 住居跡



055-1 住居跡



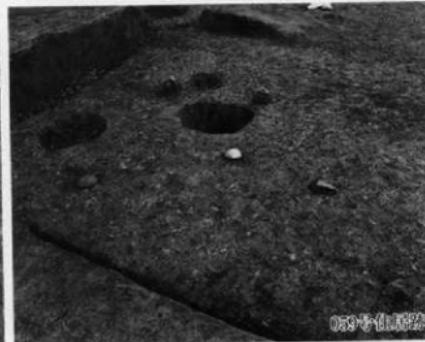
055-3 住居跡



055-4 住居跡



055-5 住居跡



059-1 住居跡



101号発掘跡



101号発掘跡



115号発掘跡



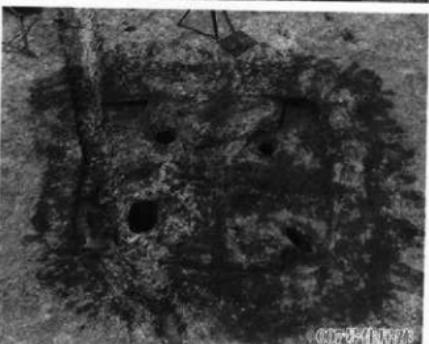
115号発掘跡



002号発掘跡



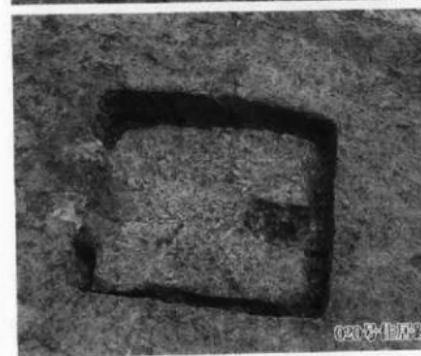
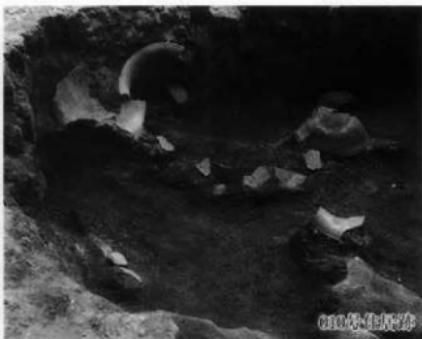
002号発掘跡

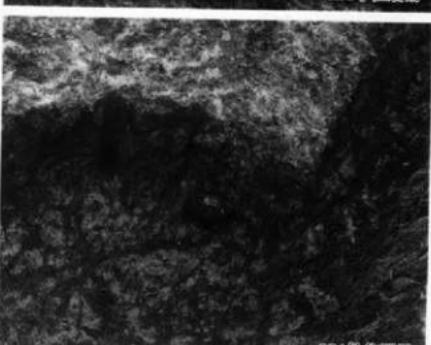
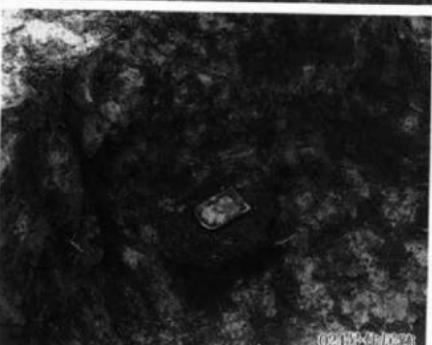
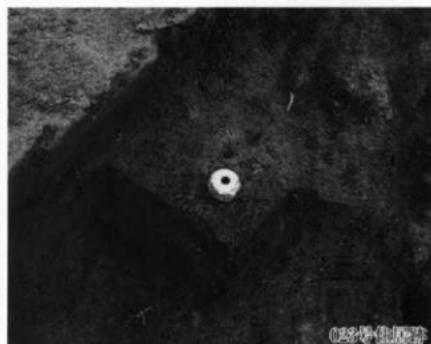


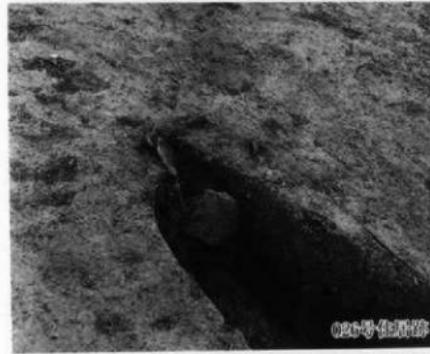
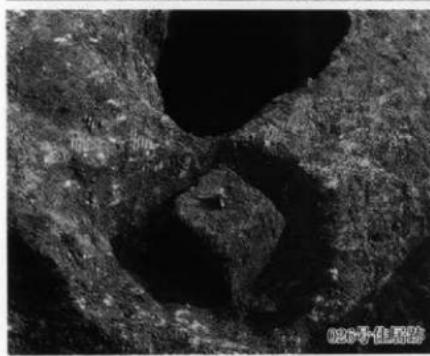
007号発掘跡



007号発掘跡

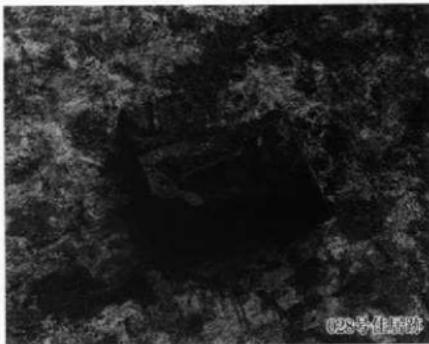








025号住居跡



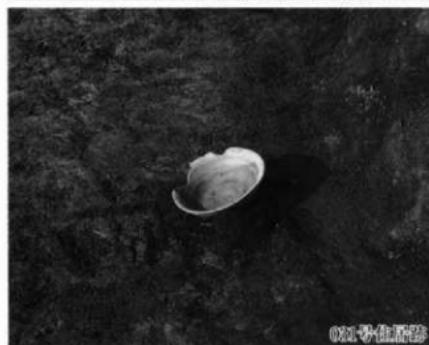
026号住居跡



027号住居跡



028号住居跡



029号住居跡



030号住居跡

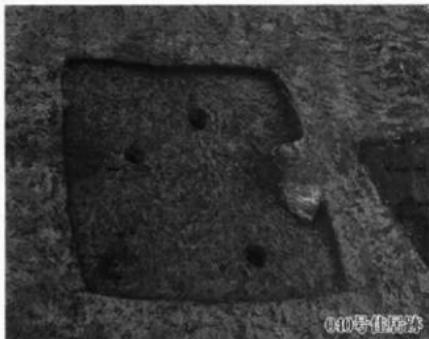


031号住居跡

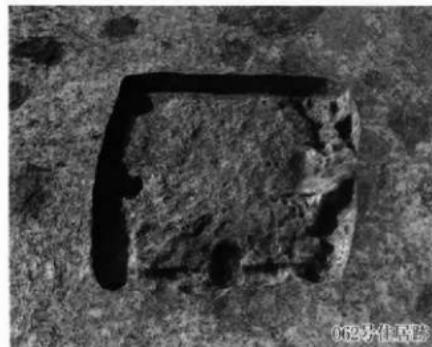


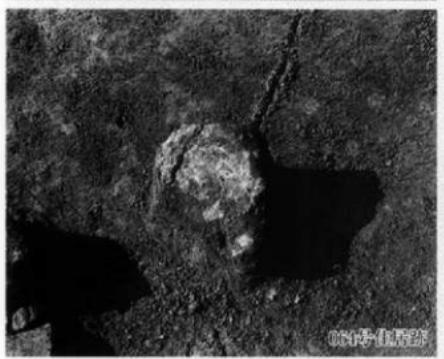
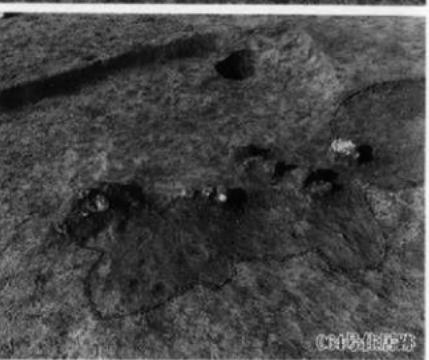
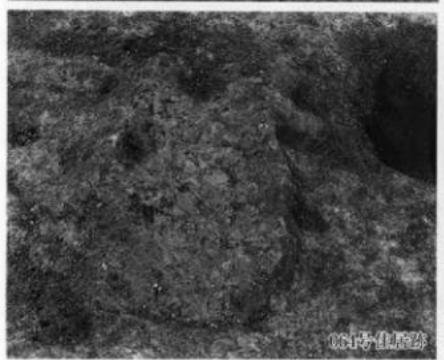
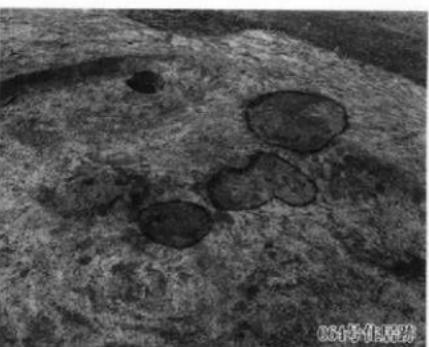
032号住居跡

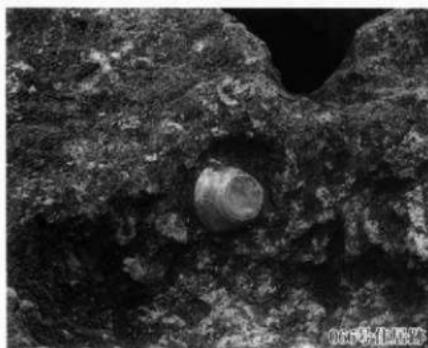
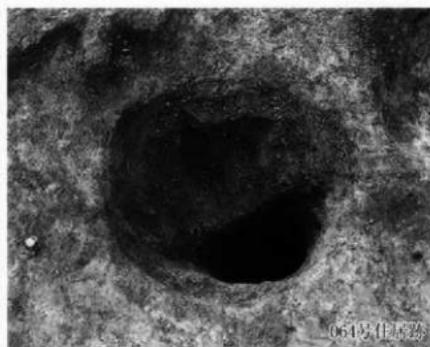














068号住居跡



069号住居跡



070号住居跡



071号住居跡



072号住居跡



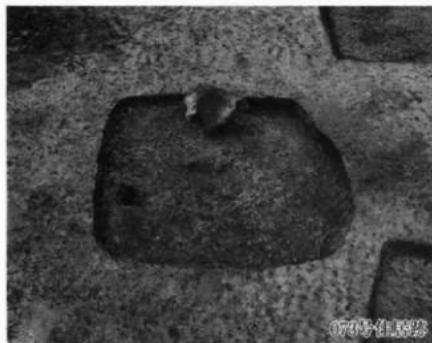
073号住居跡



074号住居跡



075号住居跡



070号住居跡



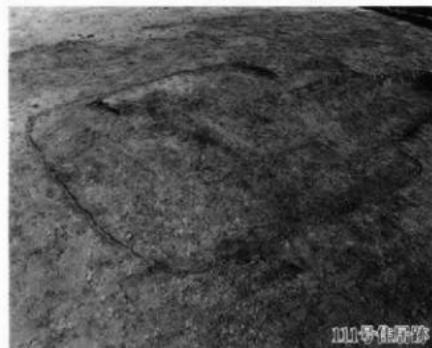
085号住居跡



097号住居跡



110号住居跡



111号住居跡



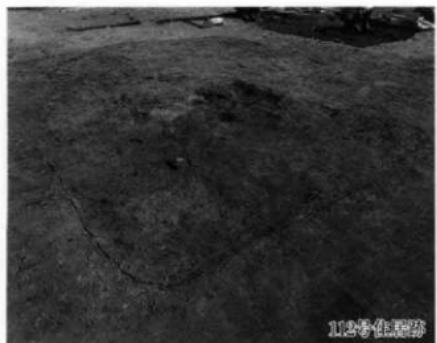
111号住居跡

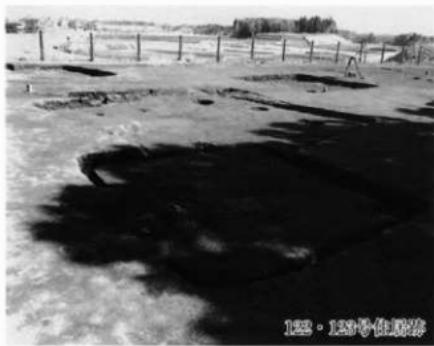


112号住居跡



112号住居跡





122・123号住居跡



125号住居跡



126号住居跡



128号住居跡



129号住居跡



130号住居跡

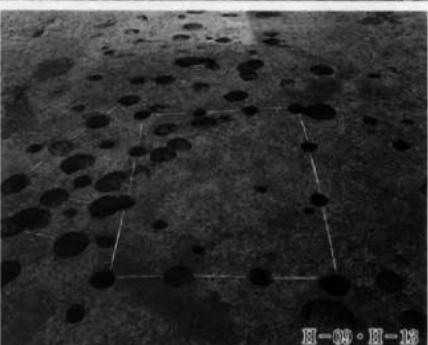
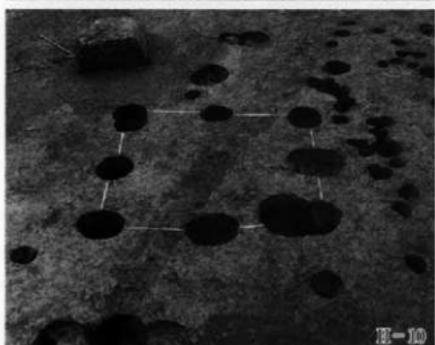
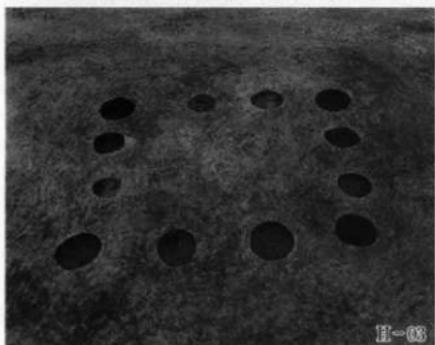
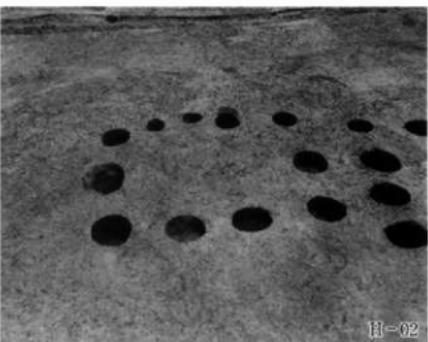


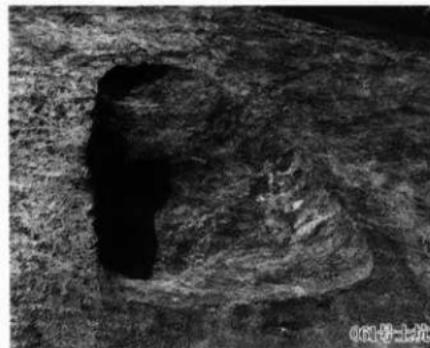
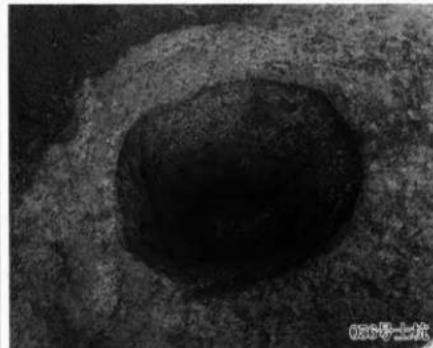
131号住居跡



132号住居跡

図版 28





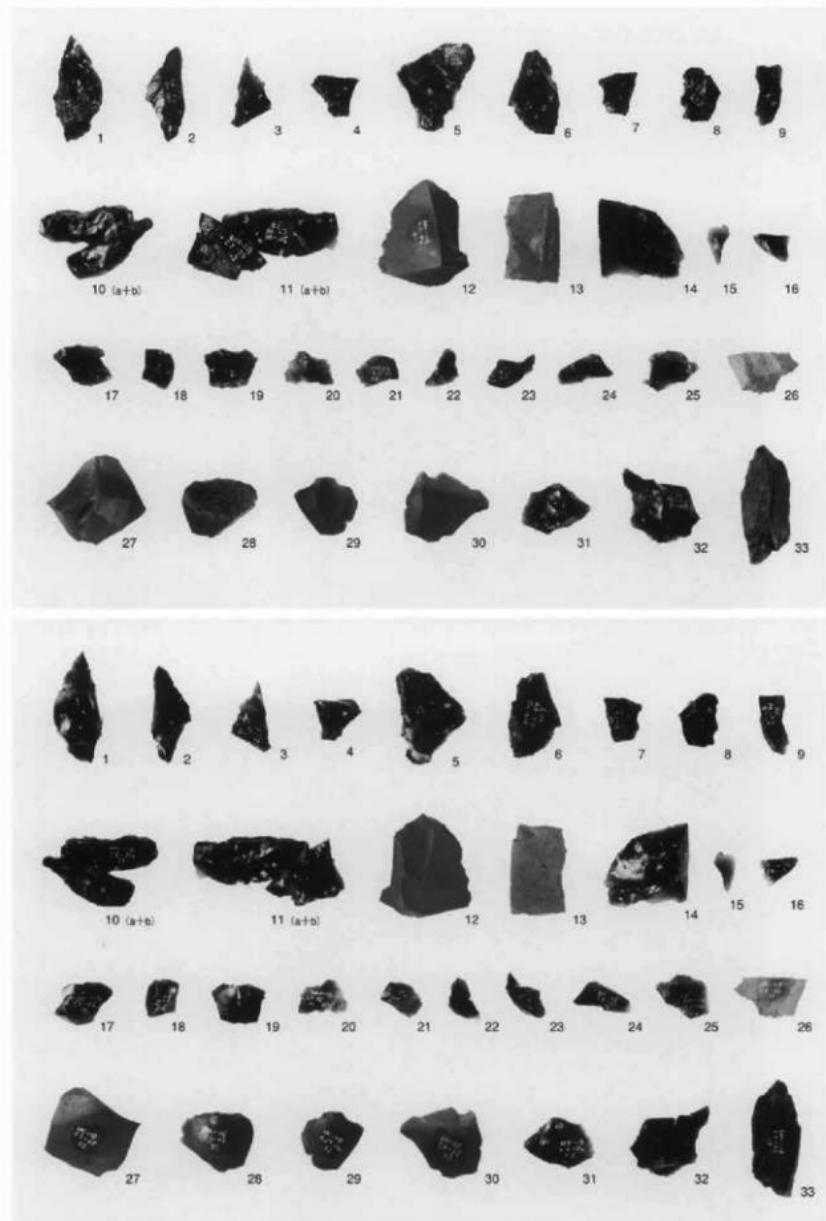




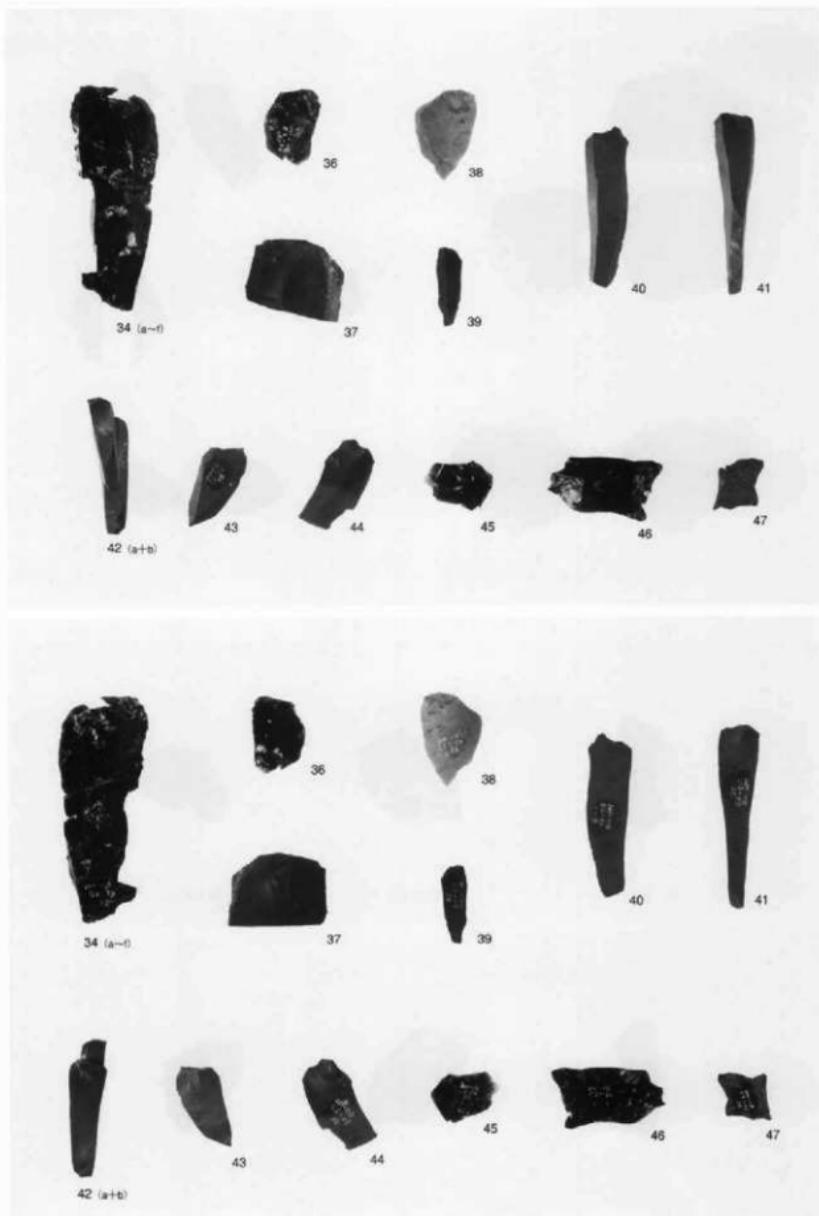
塚(調査前)



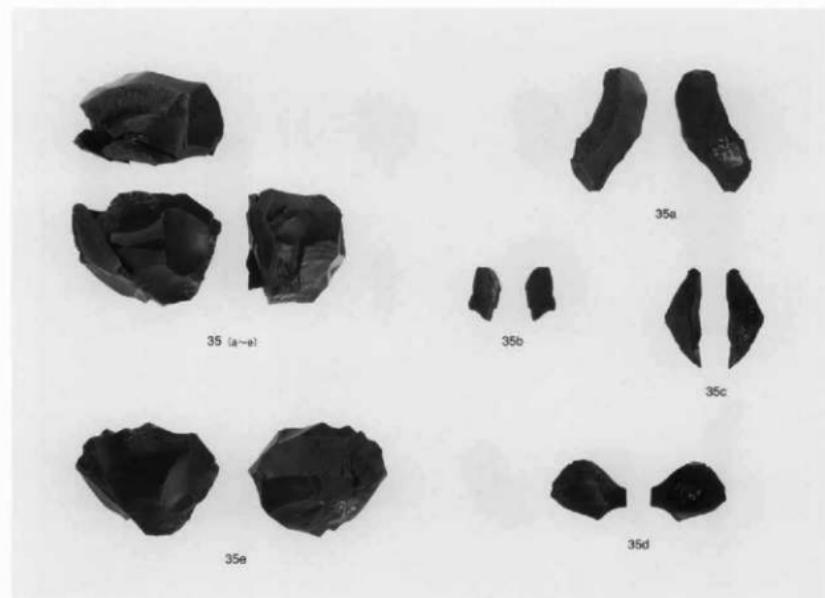
塚(調査後)



第2ブロック 出土石器(1)



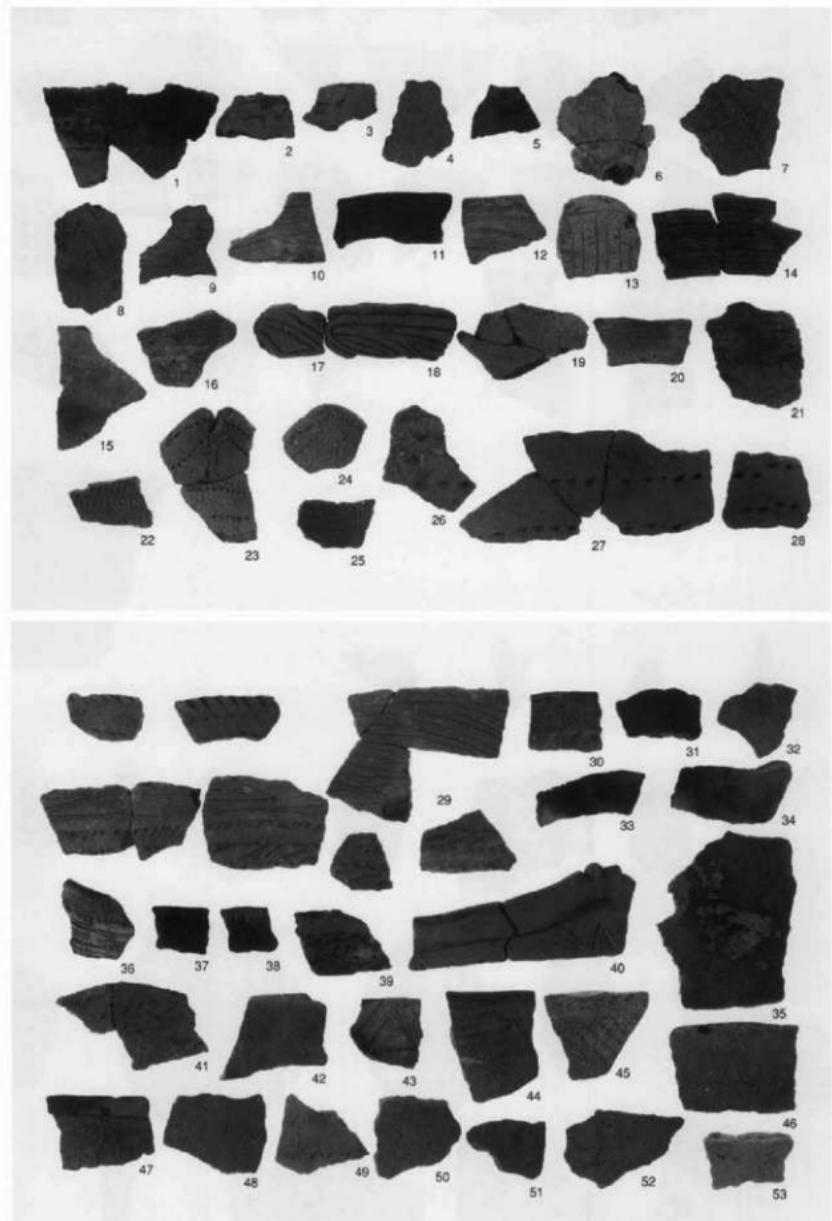
第2ブロック 出土石器(2)



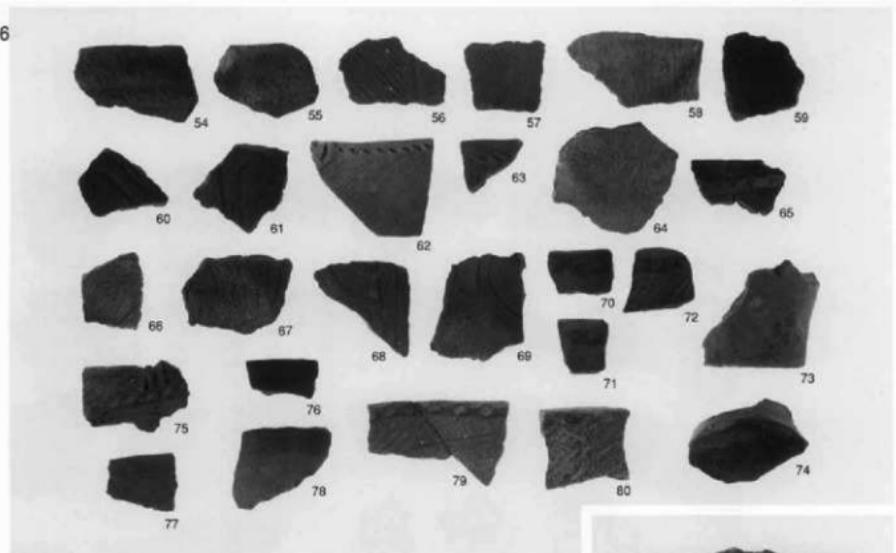
第2ブロック 出土石器(3)



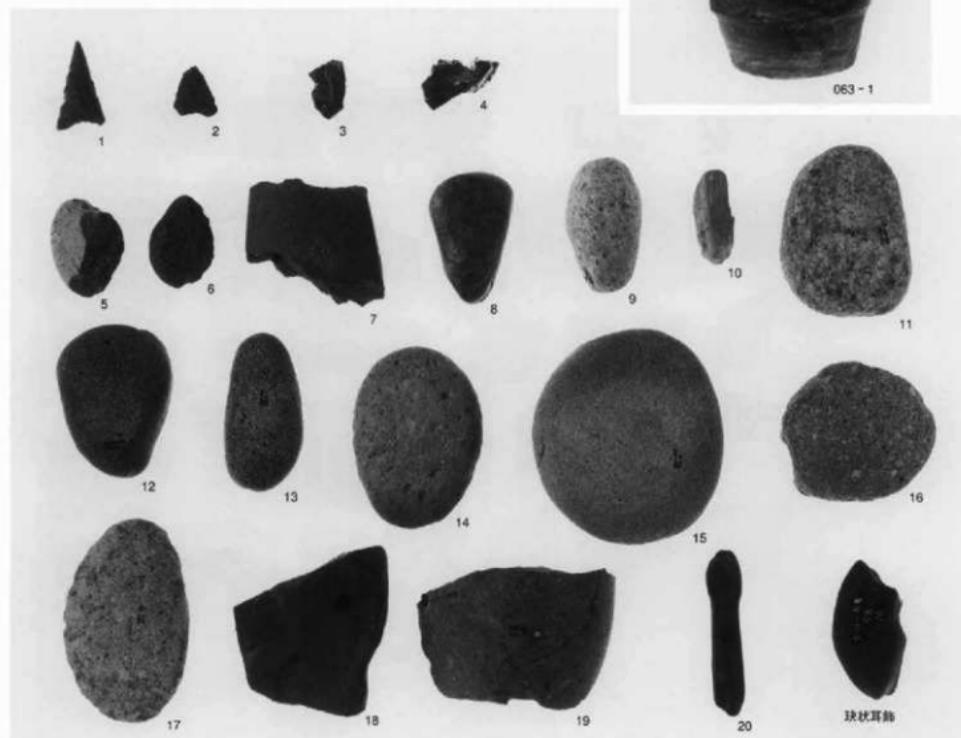
第1・第3・第4ブロック 出土石器



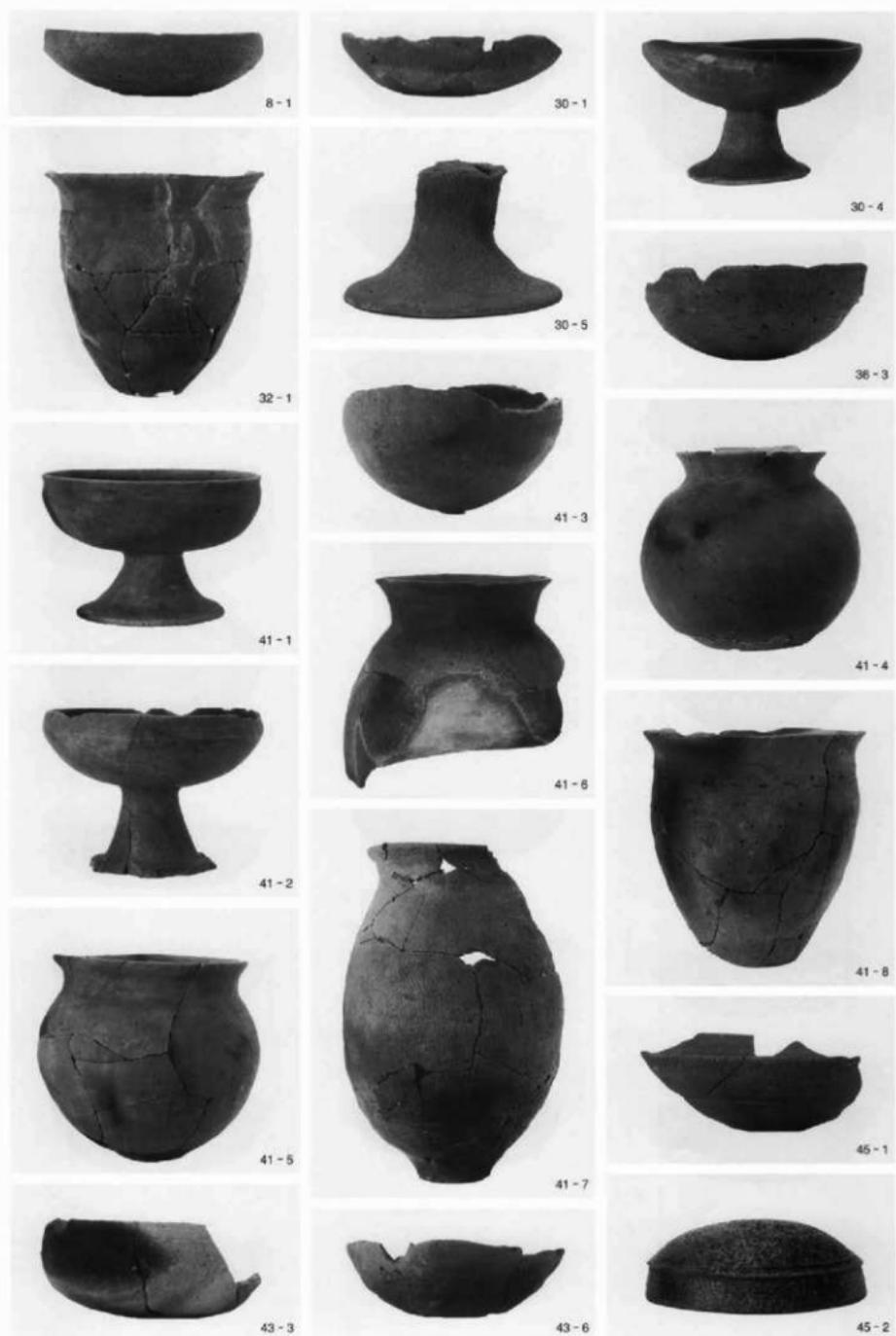
縄文土器(1)



縄文土器(2)



石 器



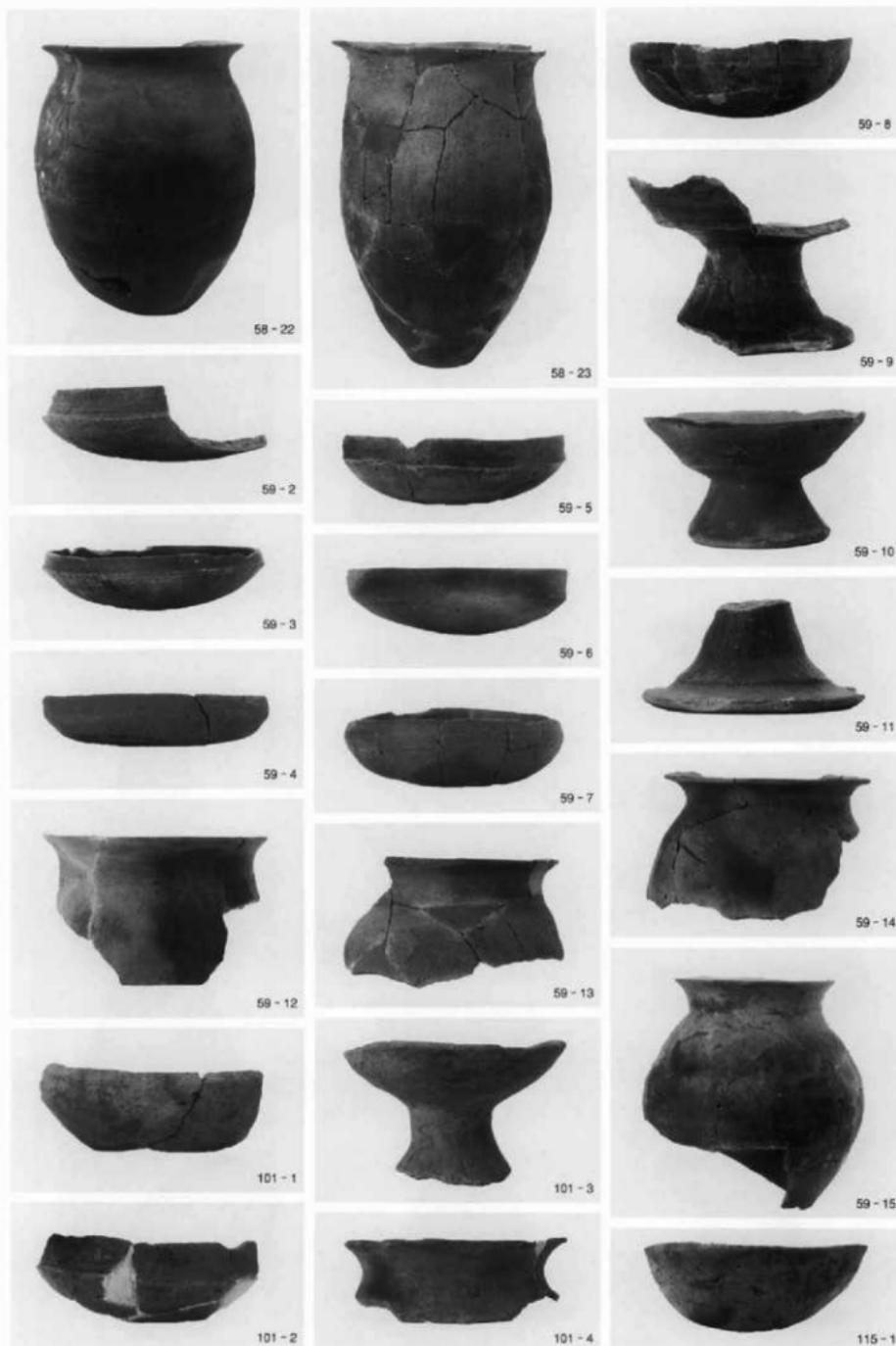
古墳時代出土土器(1)



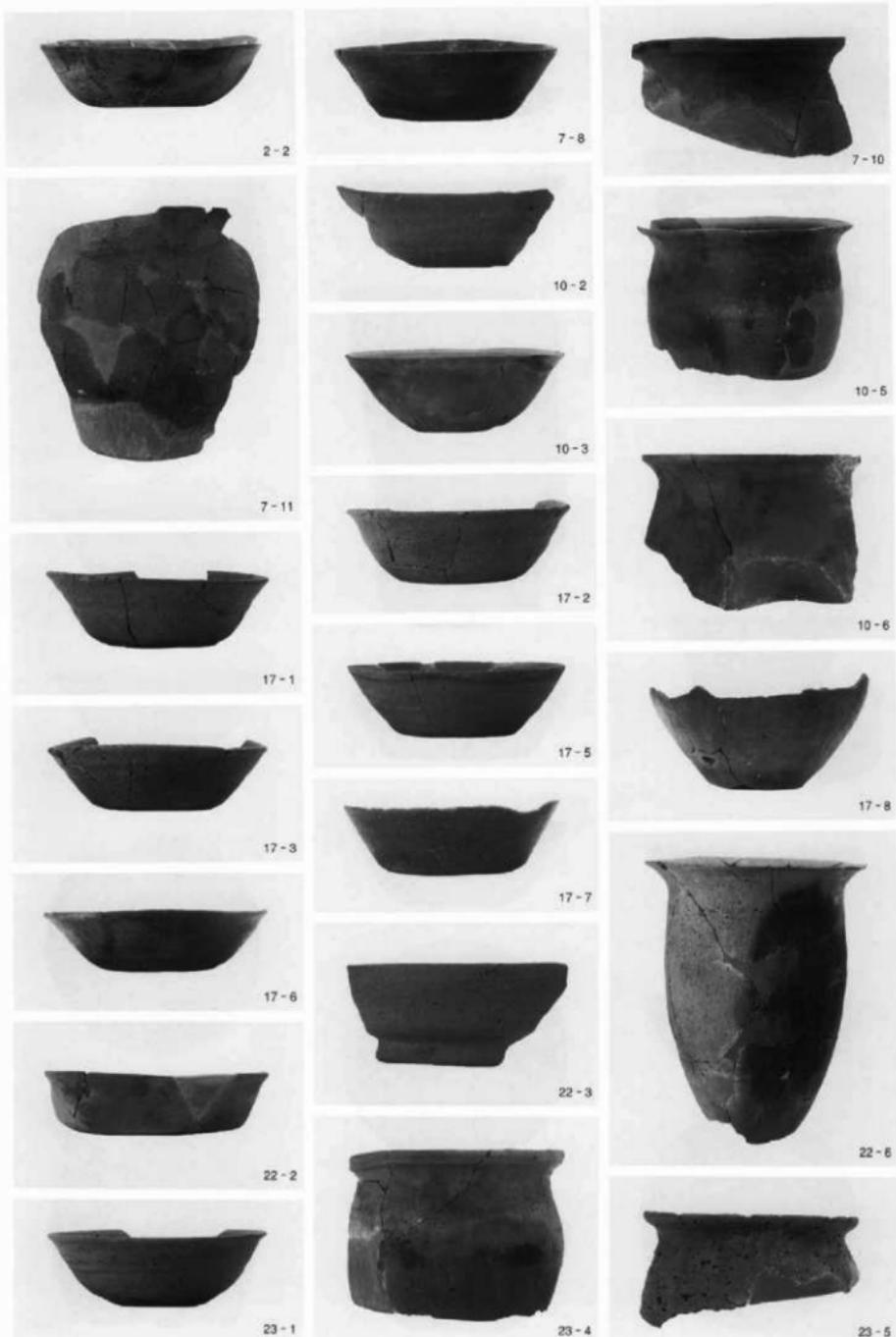
古墳時代出土土器(2)



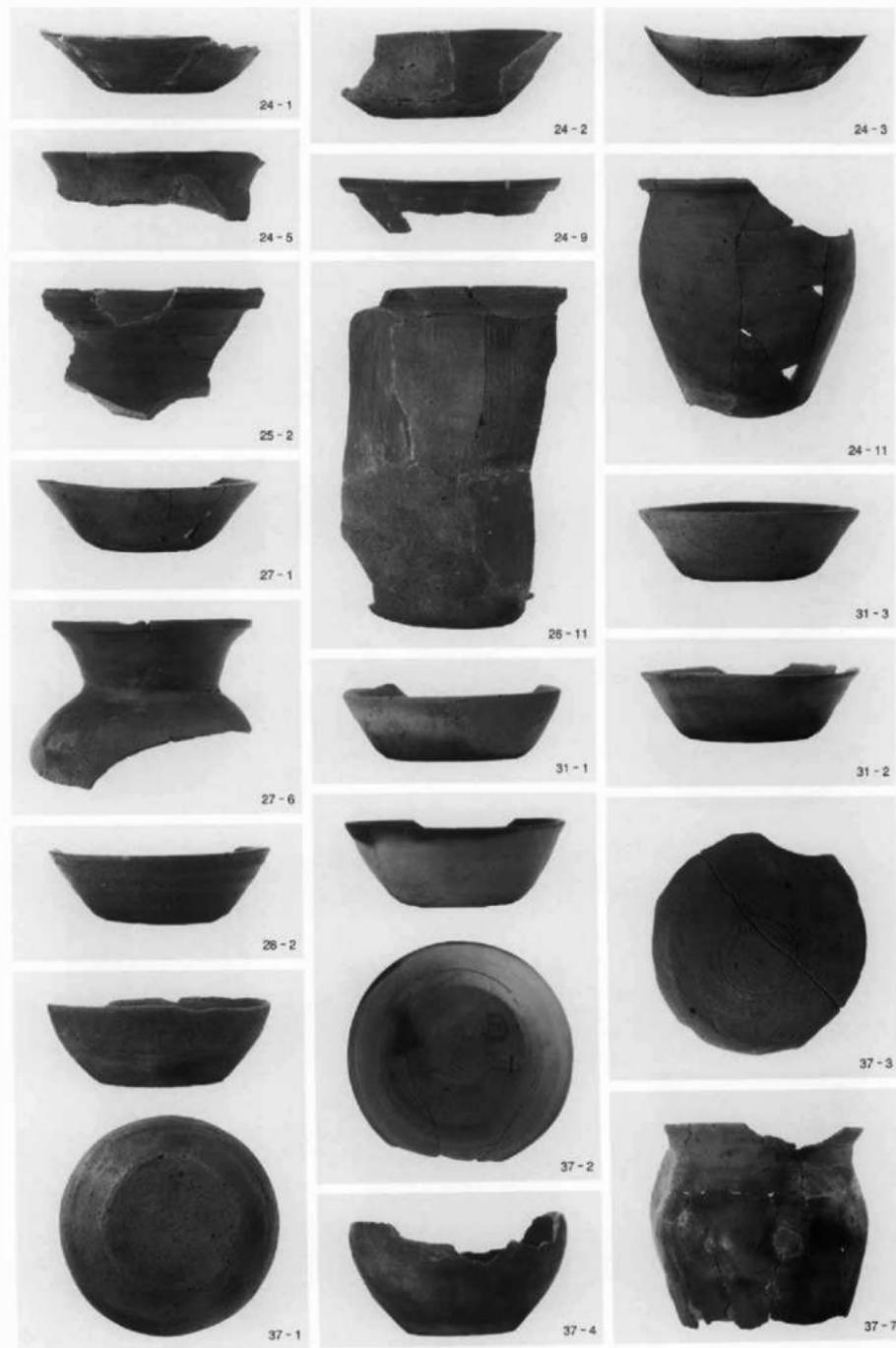
古墳時代出土土器(3)



古墳時代出土土器(4)



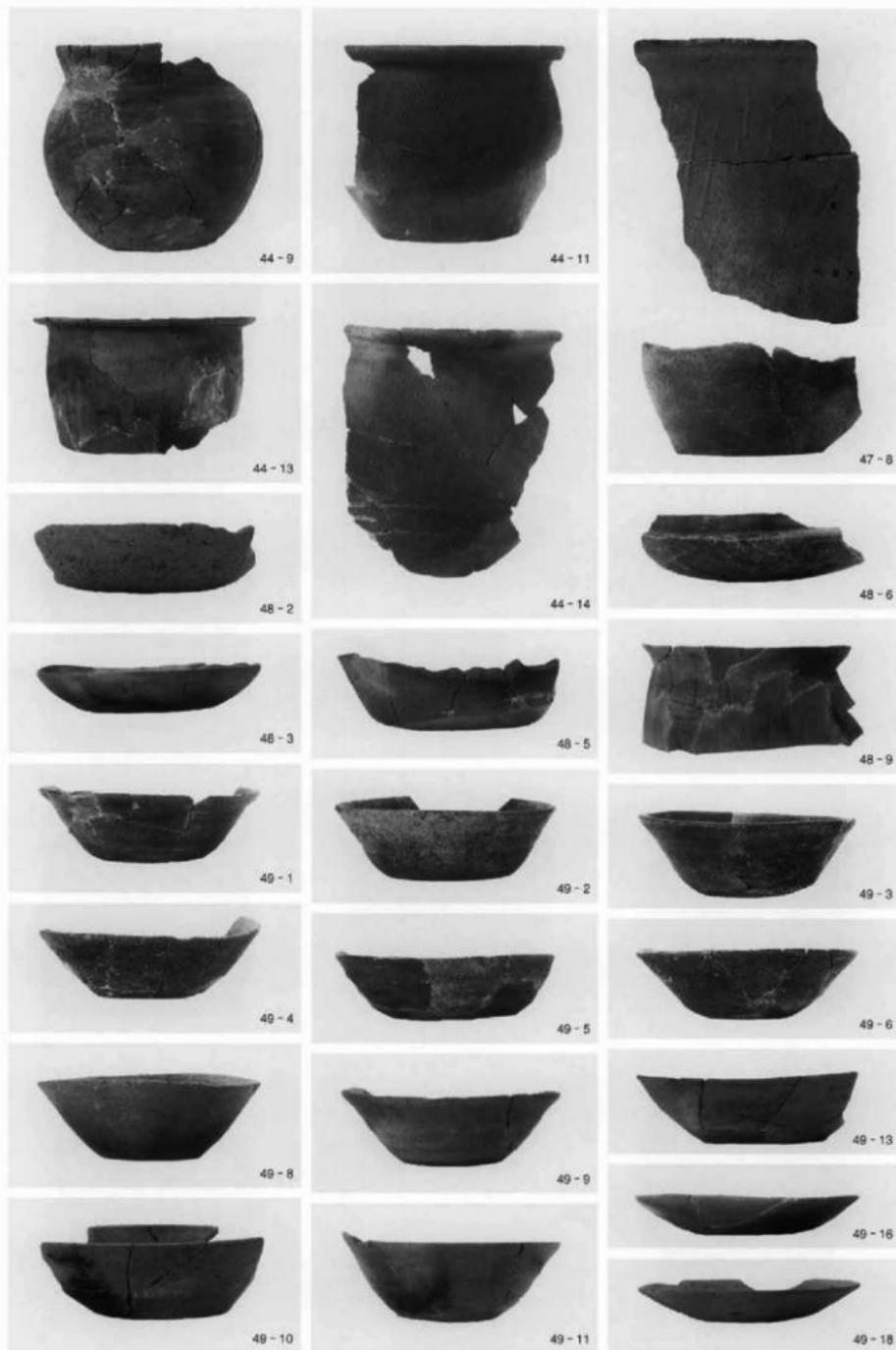
奈良・平安時代出土土器(1)



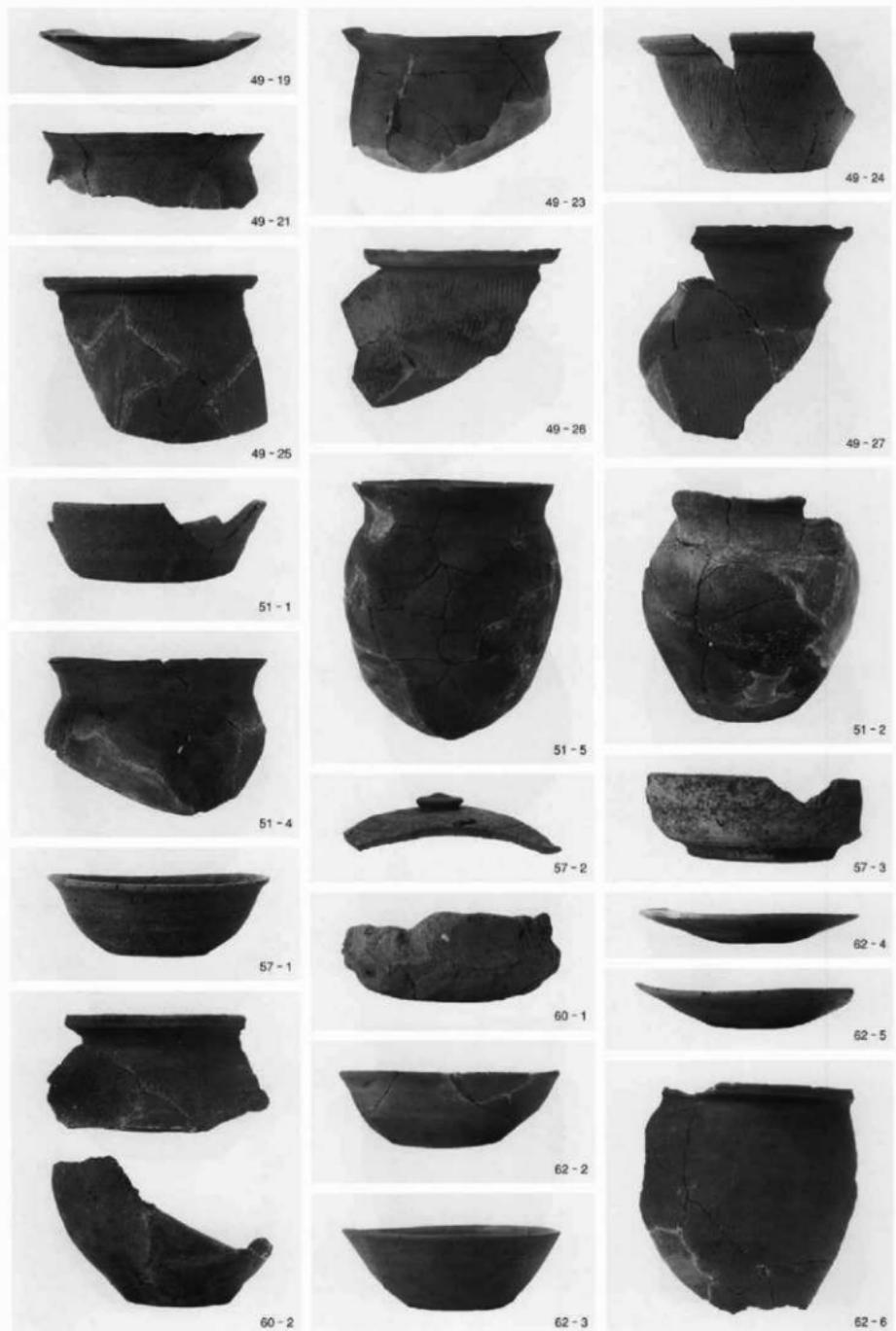
奈良・平安時代出土土器(2)



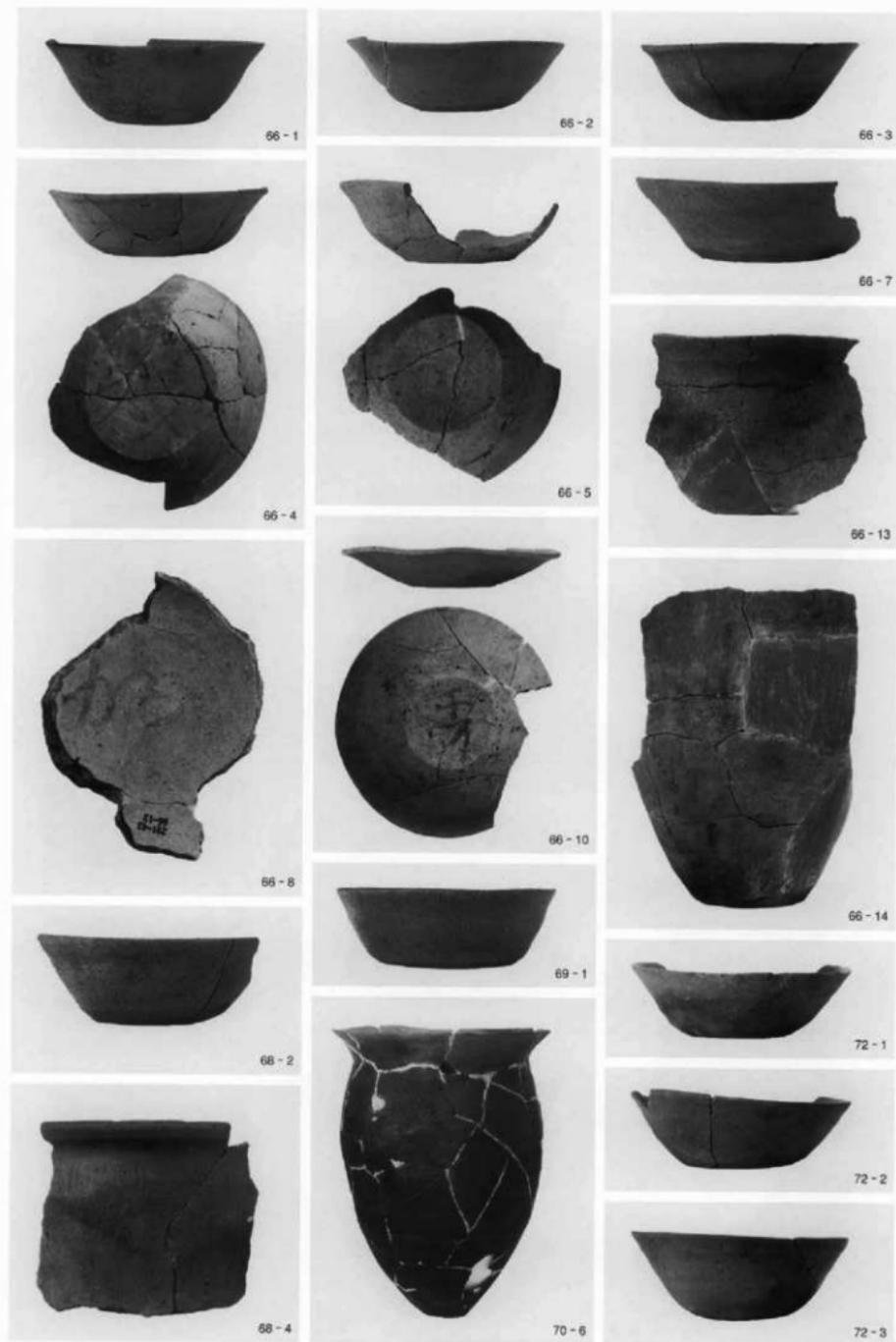
奈良・平安時代出土土器(3)



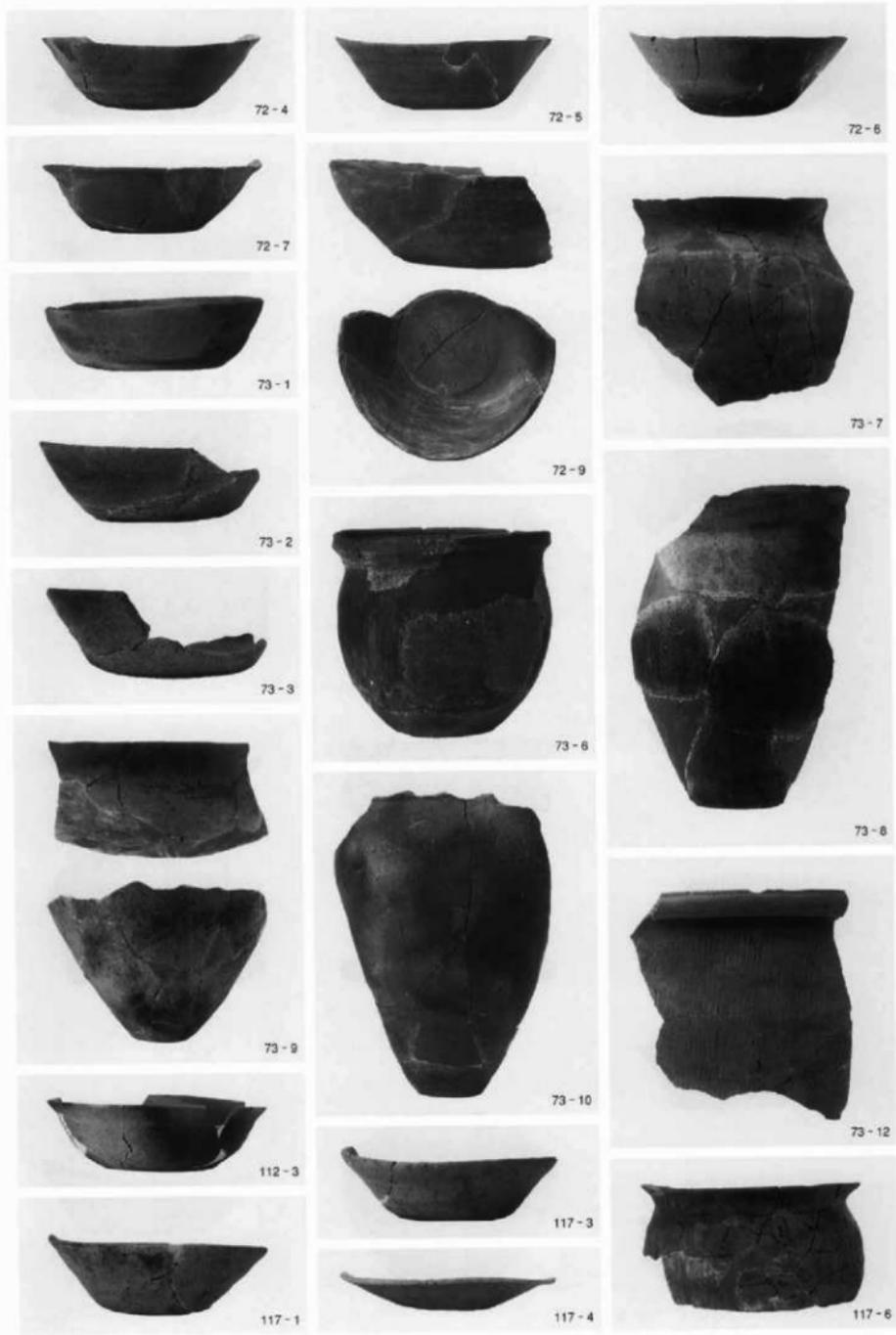
奈良・平安時代出土土器(4)



奈良・平安時代出土土器(5)



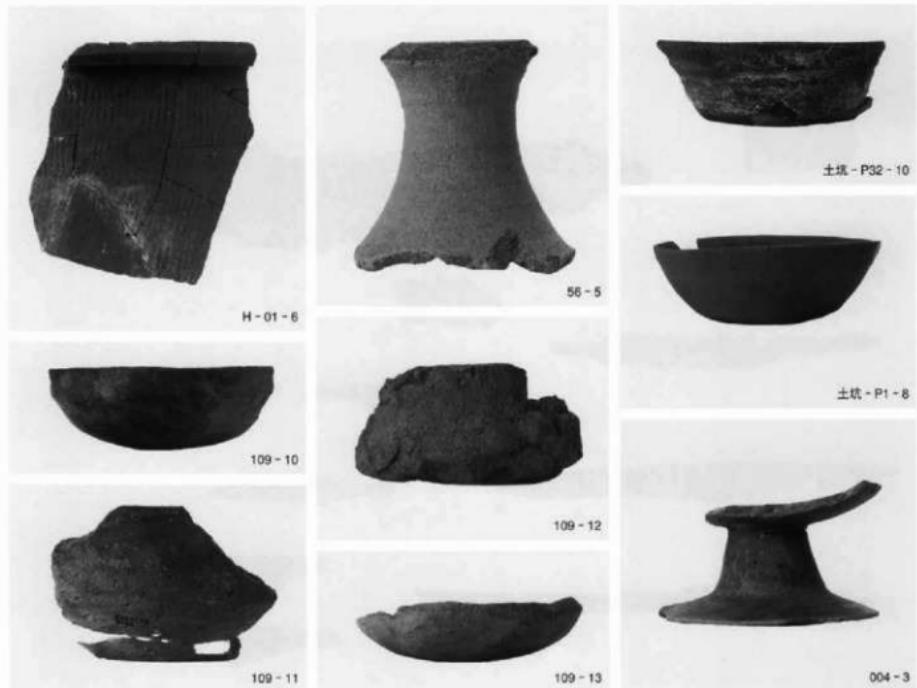
奈良・平安時代出土土器(6)



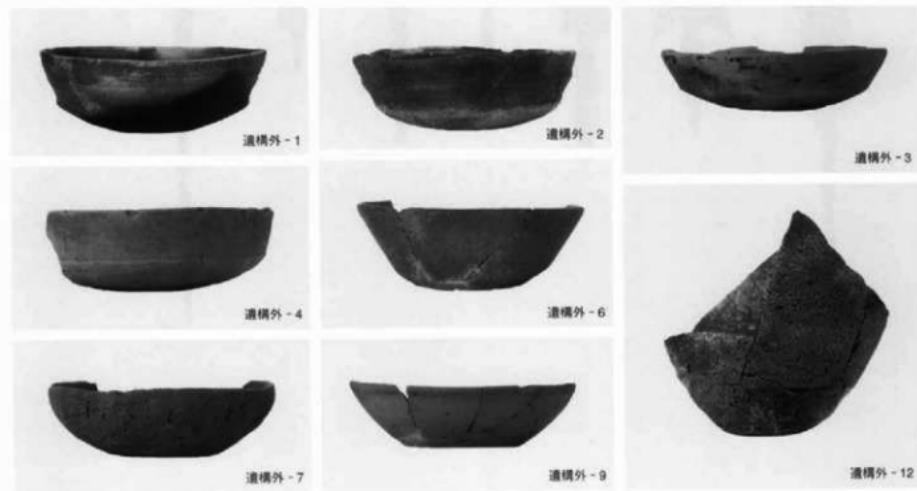
奈良・平安時代出土土器(7)



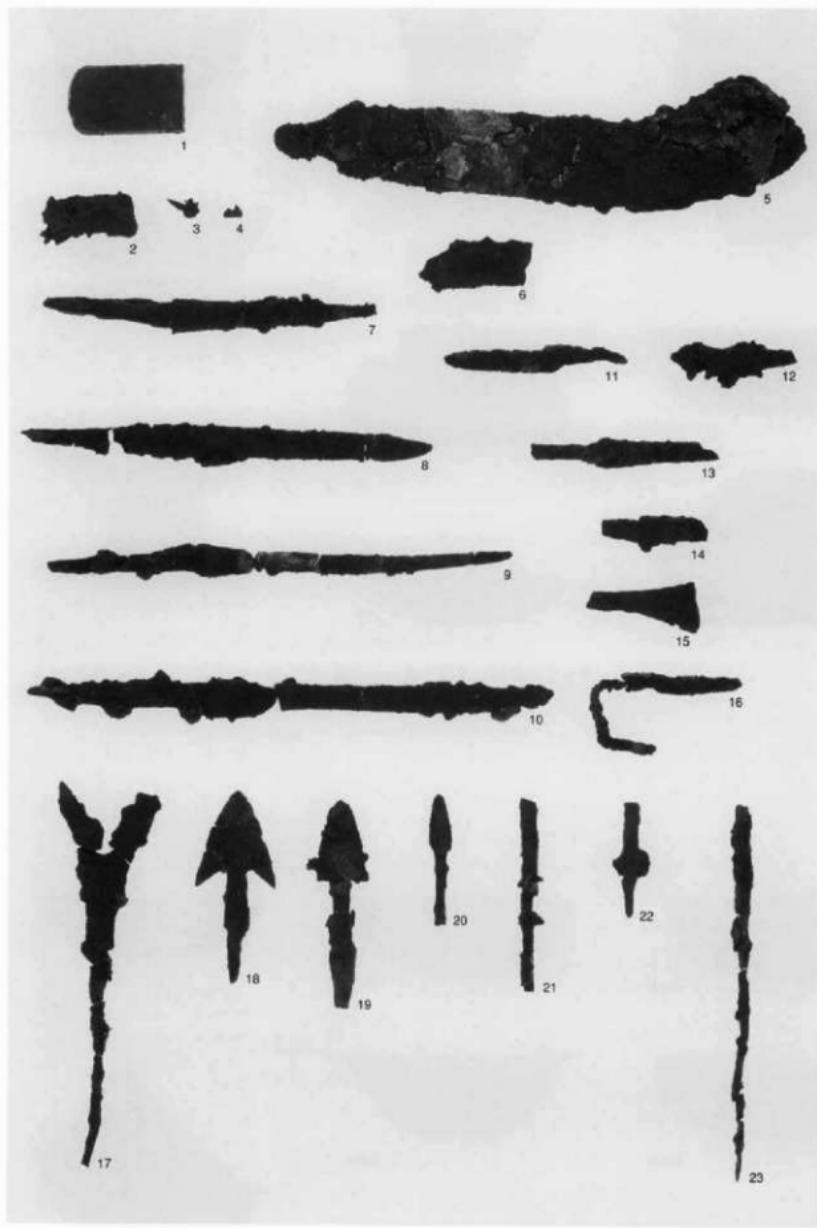
奈良・平安時代出土土器(8)



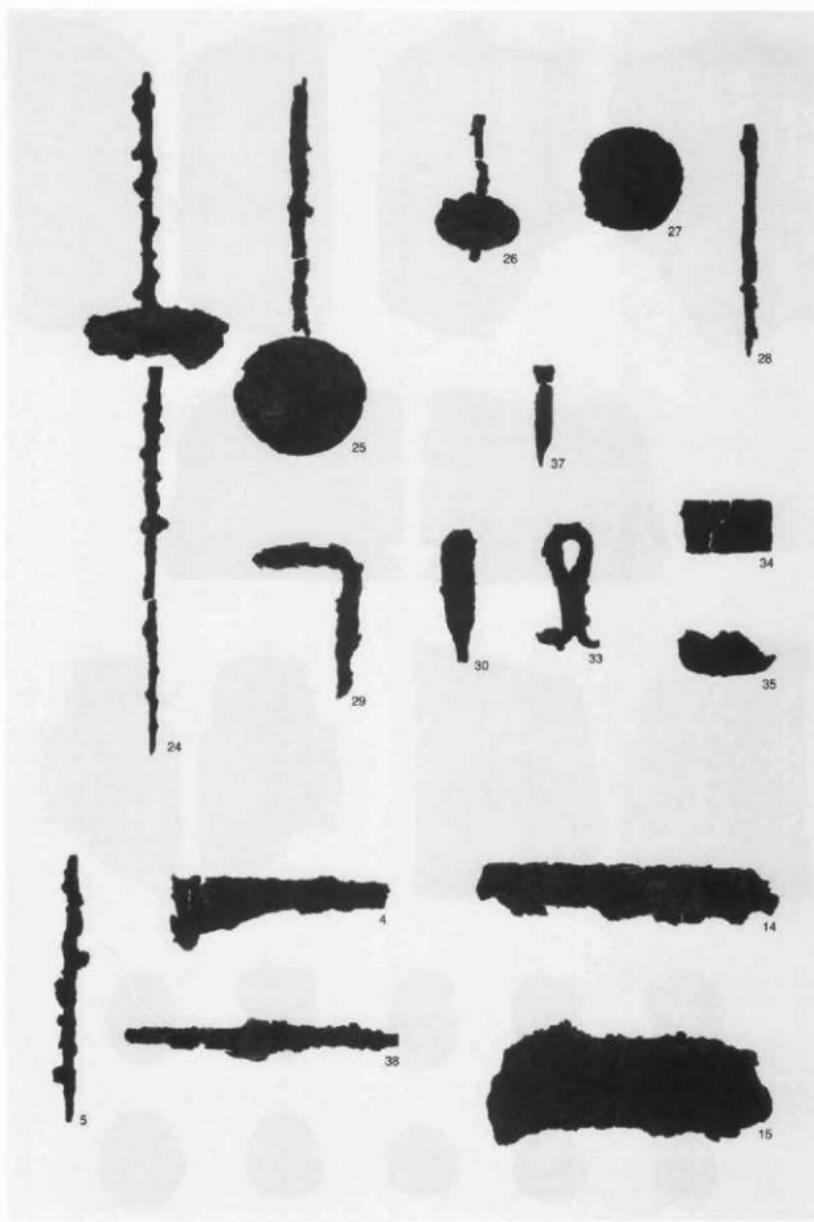
掘立柱建物跡・土坑・溝出土土器



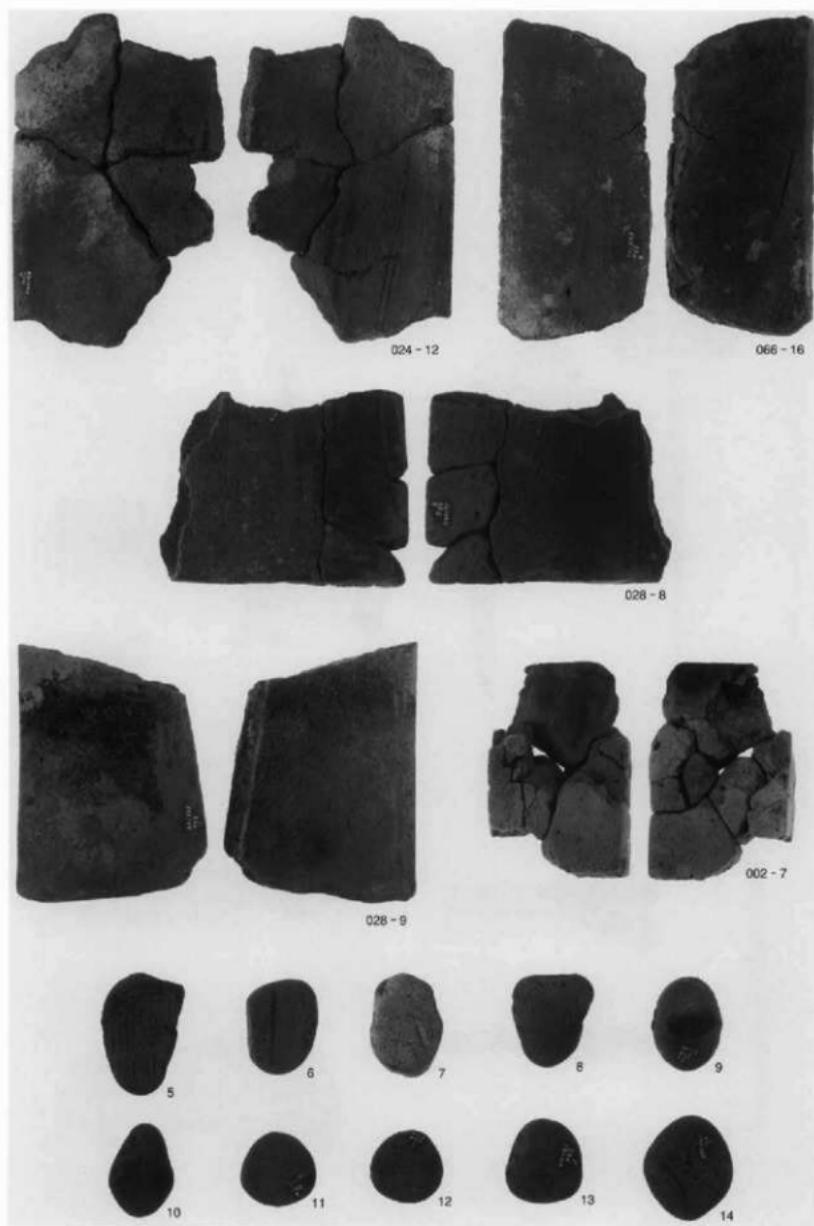
遺構外出土土器



金属製品(1)

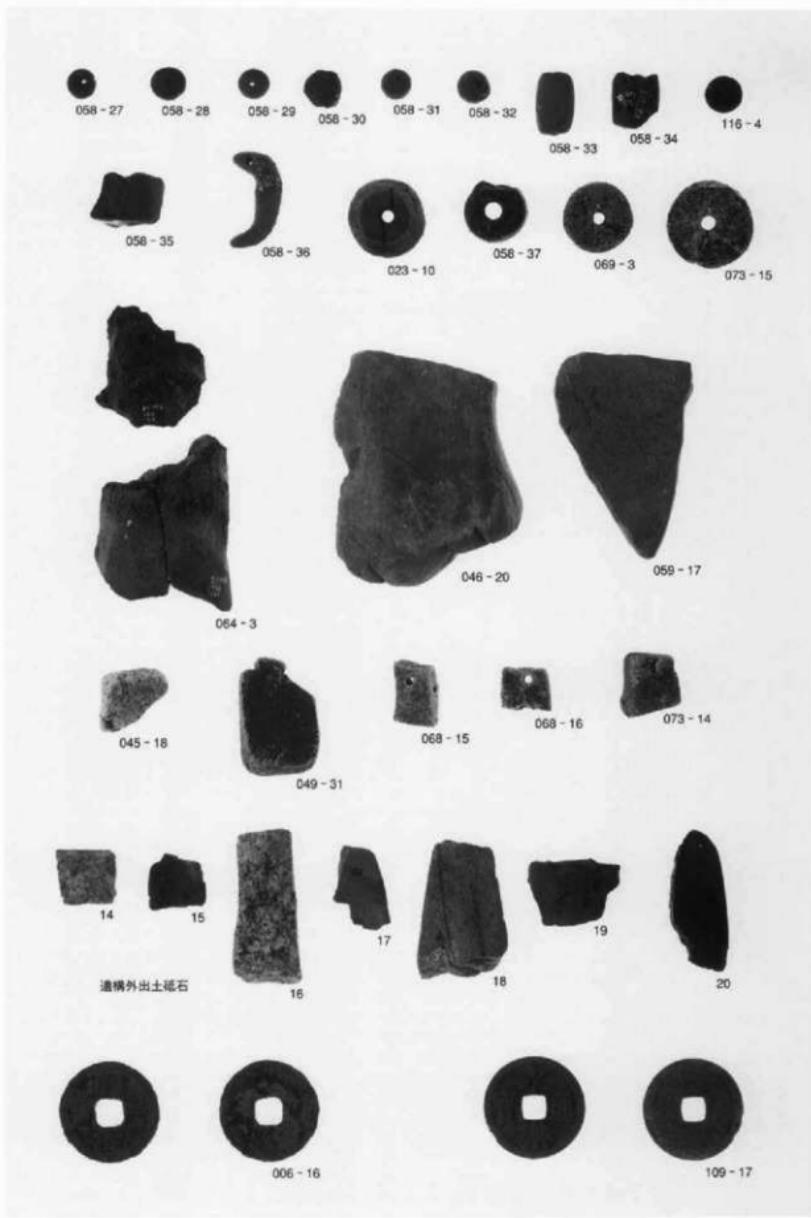


金属製品(2)



瓦·磚·瓦軸用品

068號跡



玉類・羽口・砥石・錢貨

## 報告書抄録

ふりがな	ちばとうなんぶにゅーたうん						
書名	千葉東南部ニュータウン						
副書名	千葉市今台遺跡						
卷次	28						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第466集						
編著者名	間口達彦、島立柱、西野雅人						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
今台遺跡	千葉県千葉市緑区 おゆみ野南3丁目24 番地他	201	043, 118	35度	140度	19910401~ 19920306	22.200m <sup>2</sup> 千葉東南部地区十 地区画整理事業に 伴う事前調査
				32分	10分	19970203~ 19970326	
				45秒	9秒	19970403~ 19970530	
				所収遺跡名	種別	主な時代	
今台遺跡	包蔵地	旧石器時代	4ブロック	ナイフ形石器、剥片	古墳時代後期から平安時 代の集落跡 平安時代の小鐵治を検出		
	包蔵地	縄文時代早期以降	竪穴13基、炉穴2基	縄文土器、石器、块状 耳飾			
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡17軒、土坑墓5 基、土坑6基	土師器、須恵器、玉類、 砥石、鐵製品(刀子・鐵 鏡)			
	集落跡	奈良・平安時代	住居跡49軒、掘立柱建物跡 7棟、小鐵治1基、有天井 土坑1基、土坑5基、溝8 条	土師器、須恵器、灰釉 陶器、墨書き土器、瓦、 埠、支脚、石製妨縫車、 砥石、銅鏡、鐵製品(鍔・ 刀子・釘・鉄鎌・紡錘車)			
	塚	近世					

千葉県文化財センター調査報告第466集  
千葉東南部ニュータウン28  
-千葉市今台遺跡-

---

平成16年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
発 行 都市基盤整備公社  
千葉地域支社  
千葉市美浜区中瀬1-3  
財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2  
印 刷 大和美術印刷株式会社  
木更津市潮浜2-1-10

---